

るときは駕籠屋がふつと間違へて三丁もつて来て不用の登下庭の隅へ預けていた彼四手へ控ひ込「くす平が計畧さ、妙く忘れてあつたねこんが上衣先刻万のがたしむとて下へ取ろしてあるのが幸ひといつをちよつとこう着てどかひ職が言葉にまたがひ寄てたかつて駕籠へへし込み「万のくと呼出しなこうくと正菴が叩やく言葉に万のはうなづき「万事私しが呑込んだが駕籠の者に知らせては後の口が喧ましい寄てたかつてかつき出しわアとこぞよい所へ余り近い所も悪しれし遠い少し遠けれせぬ田川といふ様な川の深みへさんふりと酔い倒れてうぬがてにのめり込んだにしてままへば後腹痛ぬ上分別と聞ておく助両手をうち「したり万のもよつ程すとい思人「悪い事ならもつてた出だ「そりやか互と打笑ひ五人で駕籠を宙につり正菴万のも引添て飛がとどくに走行けり人形廻の北峯親子九世戸の坂より戻り道せいで田川の橋打渡り人気がなる田圃道月の光ふとぼくと「これ杉のこの人か知ぬせもね氣の毒なは先刻の北方私しが晝から休んで居たあの荷賣屋へ出なされ最前借た萬歳の人形を破壊たかじりこのはぎくの下着の小袖とらせようどお仰るから何人形の損じは儘か氣がすますば少ばかり直し代を下さりませ此下着を召ませぬと貴殿に塞う御坐りませうとふし戻しても聞つしやらす譯があつてもうふれは着物もなんにも今日さぐりいらぬ此笠もあいて行とそれから何處へ御さつたやら逆も休んでゐる隙にと其方はれん飛見に行やつた後で今咄また通りそれゆゑにこの小袖と笠を妾しと持っている「そつといふ事で御さんしたが晝間とでもねまへや妾しに情深いた言葉をたけなされた貴殿なれい矢ッ張親子が身貧な暮しを不憫に思ふて下さんまたので外に之譯も御さんすまひあ、なんぢややら寒いそつおまへその貰ふた下着上に被つて行しやんせひよつと風邪でも冒しやんまては妾しはどんなに案じませう「晝日中この機なはでな小袖を着るならば狂氣の機な

れど暮る田圃道見てのないを幸ひにそんならちよと着て行かう然し其方も寒からう「なんの妾しがこの若さでさア着やしやんせと打着すれば「今日此頃此様な結構なもの着機どとはんに夢にも知らなんだもう一生のこれが思ひで我身の下着に明日からゆき丈直して着たがよい痛た「と道傍の石に腰を打かくれば杉は驚き走りより「母さんさうぞさしやんしたが「急に腹痛が痛んで來たわ、こりやなんぢやちと今日は女だてら先刻に酒を呑過してさつぱり飯を食ぬ所が此川の風にあたりその酔が醒たもゑに飢じうて痛むのじやつこれ茶漬をさらりと食ばこれ直に治るもう家へは五丁たらず田圃を過さると家續き我身はまア先へ行き茶でも沸かてこれてくりやこれや此處でちよつと休んで後ふらそろそろ歸りませう「それでもねまへハ露の降處にそうして御さんまては「ね、此笠をこう被つてれば夜露も苦みならぬ「そんなら妾しこれ先へと杉はどつかと急ぎゆく北六は久方屋にて轉寝たりし其隙にねこんを初免其餘の人々何地へ行けんかといくれ見へずばすべき機なく只一人り我隠れ家の一本木へ戻りかより田圃道彼處に休息人のあり若る小袖を月影になに心なく打見れば最前貴が若たりし小袖の色に似たればもしそれかと手拭にて面を隠しし足ぬき足近寄て見れば見るほゞ疑ひなきからかさ絞のがく仕立笠にて顔は見へぬも天の與へど心に笑みかくとも知らずうつかりと氣を休めぬる北六が後へそつと廻つて北六は抜刀もので拜みうち思ひもうけぬ事なれば何かはもつて耐るべき肩先ふかく切下られあつとばかりに倒れ伏す起しも立てず足下に踏へ「貰め思ひ知たかどつと返しめ身をもかくとづみにそれて大地へ四五寸笠紐ちぎれる顔打見やりこれや見と事もないと呼あこれ何かの因念づくいつその事にとつかくる白刃へ北六は睥睨はすがり付き「あれ人殺しと叫ぶる所へ雪駄の音向へちらく小挑灯見付られじと北六は睥睨傳い逃て行くと北六は苦しき

息の下「もし何處かは存せぬぞそれを通りなされる人何卒慈悲くといふ聲聞てくだんの男立止まつて挑灯さしつけ「譯は知れぬ女の身でア不憫なその深手よび止たのど定めてこれに頼みたい事であらう早う様子をしと問れて漸々顔を上げ「妾しれれ等とて辻へ出まする人形廻し様子も知れば相手も知れずなんやか此處で背から誑切にわいませしたその曲者が只一言貢思ひ知つたかど此方に知らぬ名をいひかけ止めをさそうとしたからは人違ひに相違ない今思ひあつたはこれ何處の何方か知らずまだ若ひ武士に此小袖をお貰ひ申上へ若てたりましたそれからの間違ひかなんでも仇は其貢といふ人に意趣ある奴それと兎もわれ妾しはこれからは遠からぬ吹上の町外れ裏家に住でたりする娘が家にたります程に何卒知らして下さりませと伏拜む顔打守り「そちやア元花城の足輕にて二木林平といふたものゝ女房ではないかいやい「それを何してゐなたまが「同家中にて近習役おれは藤岡主膳なるの「ほんにどうぞやれなつかしい御恩をうけた主膳さまどうした譯でこの伊勢へ「様子といへば長い事表面は花城の御家を浪人したる体にもてなし今では梅亭流流しといふ講談師と身をやつし今夜夜行の歸りがけそれいさし置仔細あつて勘當したる我悴貴といふを最前も古市にて見かけしが其方に小袖を與へしともしや彼悴めて彼奴に意趣のある奴の所爲めていあらざるか其曲者が其方を捕へ貢れもひ知つたかといひかけしお符合したりと聞てお等は打驚き「そんならそれお違ひの御ざりませまいこれと下着で上着と黒小袖しえんめいよく盛岡の御家の御紋そんなら貴殿が御幼時とき抱き申して歩るさました若様であつたかといふも苦しさ息遣い折もこそあれ娘の杉母の歸りの遇を氣遣い走りつぎつぎ駈來りこの体見るより氣も狂乱たりやまアどうしてくとどりますかれば目を開き「人違へにて手傷を負ひ既にもう殺されてしまふ所へ兼々其方にも御恩をうけた

委細の事は呷してれた主膳さまが御出なさつたばかりで止めとさす曲者が跡をくらまじ逃た故息ある内其方の顔見るも彼方の御蔭と貢が事まで詳細と杉に語る其際に主膳と其邊に落たる手紙拾ひとりて讀終りさては其方が娘子の安堵しめされ敵は知れたこれ今の曲者がどり落したる状の表書相澤北六殿とある曲奴は悴と兼てよりいひ替せしれこんといふ茶吸女に執心してたるよし豫て風説に聞くその意恨よりお等とば我悴と見たがへて誑しうつたに違ひはない譬へ其手て果たりとも此娘の後見して今に仇は打すると聞て手傷は打悦こび「わア今より廿四年の昔お夫林平とのさまの急の御飛脚大切の御用を禁むりながら道中にて筋なき喧嘩をしいだして日限ある御状をばどり落すやら傷はうけるいじやうなる落度にて既に首をも召るる所ろ妾しが貴殿さまに御奉公いたした縁で其後も御召使同様に御出入をる夫婦のものが身の破滅見捨かたしと貴殿さま種々お殿さまへ御歎なされて下されし其情けで命を助かり大和の國を御追放年経て夫は病死いたし斯様の体に零落ても片時忘れぬ命の御恩其御方の若旦那の御身替りになつて死ぬは願ふてもなき此身の本望これ杉なんにも欺く事はなほ悦こんで呉たがよい此上向卒主膳さまあれをくと娘を指さしがつくり倒て息絶けり○正直正巷初としてかれこれ合して七人の悪者ども四ッ手の駕籠息もつかずに駈來り「此邊が恰度よさそうな人の見ぬ間に此川へさんぶりとやらかせと密々和々むらむら分へ進よる向へぬつと藤岡貢「道を違してかくれても久方屋から付て來た駕籠の内におこんを渡せ「イヤ此内おそんなものを「なほといわせぬ其駕籠の垂を溢る、小褌の摸様それまで儘かに見認て來た互に面倒な地獄の先觸まアほい等から早く行けと扱手も見せずとべ六うだ八右を左へ切倒す命知ずのり花かひ財犬追怖でも時の用仇は一人り大勢でよい便だ儘でしまへど切てかれば打笑ひ小癩な奴とわたりあひ

二打三打切結後へ廻つてくす平が物をもいわず切付る刀の光に身を替し其ま、つけ入り大げさにすつぱり切れてのり藏は血に塗れて倒れ伏す返刀にかひ助は腕を落され尻餅をべつたり起得上らすこりや歎わぬと遁出すくす平右手に搦でさえ通之一息ついて空打仰ぎ一月明らかに星稀なり呀た〜といひながら打ふる刀に正菴が首は彼處へ飛たりけり貫は靜かに指をりかぞへまだ肝心の北六がといひつ、其邊を見廻し〜れ、わりやア萬のたなえ、何もその様にふるぶる震へる事はない可憐や腰が脱たのだな何時の間にかやら萬々歳くれて年でも寄たやらそんなら恰度約束通り御目にか、つて不足もあるまい見やる通りのまびどの山吹實のない客の刀の光りちつと氣味が悪からうが小判の代りに懸頭にやるこれから冥土の色茶屋で閻魔の鬚の塵とつて茶たりくみの女菩薩の貰ひひきでもまやれさど飽まで嘲しり高ばいに匍匐だを万のが弱腰をばらりすんどぶつばなし切先にて駕籠の垂押明て手をさまいれ胸倉とつて引出去「れこん覺悟と白刃をば胸先めがけつ、かくる此時群雲月をねほひ俄かに闇く物色も分らず毒にあてられ正体なき徳七が身の危うさは油つきたる燈火の風に向へる如くなり

貫い正菴万のを初先惡者數多切てすて切先にて駕籠の垂押明て手をさし入れ胸倉とつて引出し「れこん覺悟と白刃をつき付けやア〜これや男はて何やら見た様なれ〜それ〜」つぞや父上主膳さまがれれが事を頼まれた徳七とやら〜ふた男何故者はいれぬぞと川の水をそくひあび口に濯げは息をつき「あゝ恐怖しい目に逢まえたそんなら貴殿が貫さまと仰るのでござりましたか最前あの正菴がもつて出た酒を看と五体まひれて歩のれず諸は毒酒と氣がついても物以ふ事も叶わねば仕様摸機も更になく後は正氣を失ないて此駕籠に乗せられたのもなんにも知らず今漸く駕籠の内にて心付き聞ておれば私しを此川へ打込騒ぎそれから貴殿の御働さ〜んだ

此は人違〜といひたいも罷と出ず慈いに耳は聞へ聞てゐる其危うさ逃出したいにも足手こかなわすあ、これまでの壽命ぢやと覺悟極めておりましたと語るを買問終り「フウ借のれこんが歸る体ふ見せ貴様を殺す彼等が目的腹立まされ心は急くとんだ方へ大勢で駕籠を擔いで行れるが矢ッ張相澤北六の住家へ連れて行のかど一圖に心得實否も買さず危険事ではあつたれ〜今どなつてはそれが又「眞に貴殿が入らつてまやらぬとぞんぶりと遣れる所も私しの命の親又れこんさまの御運強さ最前我等を久方屋でれこんさまがれ呼なされ常明寺の里松屋で貫さまと二人りして隙見してゐたゆゑに此向の顔は覺へまいが其方の顔は知てゐるそれゆゑの頼みといふは其時に主膳さまから盜賊の手がしりどて下された扇に書た八景の詩の印は正菴が印じやといふ万のが言葉もすてなきがたく服紗に撥匂をかくせて捺せた印は體かそれと同然又北六に身を任せる風情に此頃見せかけて鼻紙袋を盗み出さ中を見れば彼茶入を百兩に預けし一札貫さまにわたしてくれとれこんさまの仰た酒宴さ中自分が立て貴殿をば探ねなされては目に立つといふ深い御思案御造いなされまをな主膳さまの豫ての御頼み吃度御世話をおたします又私しも主人へちつと意見をせねばならぬからとそこ〜れ分れ申しましたと一札渡せば手にとり上げ「最前れこん覺悟つかしにかこつけてあの服紗をさしつけしと正菴が印を見よとの事であつたかさうとは吐すあれ程に密事まで隠さず語りいひかまわた二人りが中今更心が變つてはと腹が立ば氣も逆上せ殺そうとしたれれが阿呆さといひつ、さつと押し開き「獅形付の茶入一ツ袋ども百兩に預りれさ中相澤北六の竹花屋鯉江と讀ば徳七近くより其鯉江は私し主人に尋ねなざる其品が主人の所に有うとは今まで思ひもよらず私しも最前に見て吃驚いたしました然し手に入るに外あるよりは手段が早も私しも歩かれまを人の見ぬ間にさア此所をと進めに

買はうなづきつし何ぞの証據と正老が懐中より落敷し手紙の類ひを一つにあつめ川水そ、き血
 刀を洗ふて打振其切先の雨や口に傳へけん腕を切られて氣を失なひ倒れしかひ助息ふき返る大
 勢の人殺し此由早く訴人して憂き目を見せてやるべいとよろめきなから立上るを「なにをてん
 はが小欄など右手差のべて徳七が襟褌摺で引寄せれば「止れもさすにこれは租忽又血を塗か
 非がなほとふり上ぐる刀の下にかひ助はさうと首二ツになつてまろびけり伊勢音頭「かの山崎
 のねもはくを覺へありとは白糸の昔しが今み咲花の蝶と菜種は君達の裾や袂にちらくど摸樣
 も春の野に香る」鼻でと唄ふなんどには鯉江が女房かなは獨り炬燵にもたれ飼猫のされるを
 伽に臂枕唐紙あけて入来るは徳七が妻のね玉「ね玉へさまには何時の間にかへた出なされま
 した今日ねよびわそばまたねこんと一緒で参つた唄ひ女ねしかどかふ太い女三大じんどやら
 の音頭旦那さまの傍らみでずんぞ昔しの歌さうながよう覺へてをりまする「さいのうこ、へも
 よう聞へたそれに逢せてこの猫をじやらしめてあそんでゐたハハの今日ハ内年忘れ正客はわたし
 の嫌なあの相澤の北六づらそしてまア我儘なこの家の女共の酌では酒が甘味香ねれこんどや
 らを呼でくれかしこまつたど旦那さまがあの花六の云まゝに成つてたいでなされるがさうも合
 点が行ぬゆるあれくくあのこまどした事が俄かに何處へか駈出して坐敷へいつていしから
 れるに玉見て来てたもいのだ案じる所へかけまもりの紐にそばへて啗へ来る猫諸共ねれこん
 ねらふた水に濯ぎし手をふきくもうねかへしヨといひながらしるの外に居まづき完爾笑ふ
 て入かねつ「あのまアこまの徒らな勿体ない侍をとれかないとつてね玉にわたし「ねこんさ
 んまアこちらへ相澤さんの無理じひでさぞいやでござんせう「ねまかさんが狸くゆる三味線片
 手で滅多のみわたしの代りまで香まやんす侍蔭で酒にもつふされずまアあの元氣じや聞しやん

せ唄とつと笑ひの大坐敷くるうに醉のまわり氣で千秋樂は大まんの引手數多し情を授け遊興
 樂は後朝の流れつきせぬ不老門それこそよけれへ「ね玉が一寸一吸とさし出す煙管をねこんは
 殿さ「小便に行とて脱した守ね猫さんがそばへたので却つてとんだ侍馳走ふ預かりますと手に
 とる守ねかなは目をつけ「ねこんさんね前に聞た事がある無禮ながらねまへの親御は近江で
 はゆざんせぬか「えおまへのね面がわたしの近付き去るれ方に生寫ま其娘子どと思へどもそれ
 では此邊に其様にしていやまやんす等もなしと思ふ矢先にその侍守錦蘭で摸樣と櫻花今近江の
 本店の亭主になつてゐる鯉七をさな名は鯉之助あの子を私しが生んだ時笑作の御家中で別して
 侍心安くする石倉慰之助さま此通りの錦蘭で矢張これも守袋こしらへて賜りし其時の仰せに
 此切は由緒ある上ツ方の調度の侍油篋それを寫して綴せたと先織八幡宮の侍戸帳と妻満月が
 信仰する出羽の國鳥海山の一王寺の神前の御簾の縁の料にねさめたその残りで綴せたから自然
 と神の恵みもあらうこちらの悴慰太郎弟子も出来たら對にしておかけさせようど二ツ三ツ序で調
 らへさせてねいたとね仰つた石倉さまに女なれども瓜二ツ其上此品持まやんすねまへがもしや
 貴殿方の血統の人といふような事なら嬉しいなつかしいと聞にねこんと涙くみ「この様な殿し
 い身の上名乗の親への不孝ゆゑ隠しに隠してゐるの御推量なされし通りその石倉の妾は娘
 一ト年殿さま知輝君當理御守護とやらの御役一ト年餘り京都に在まし父上も御供で御在番母さ
 んは岡崎で踊を教へて幽な暮し父さんに見染られ呼とられて妾やら留守番やらに側にゐて遂に
 妾を臆胎を生まやんして程ものふ父さんと近江へた歸り母さんには此方へ來と侍本妻にいふ
 てなれど何も往れぬ縁があつて此向のら身を退て又元の舞の指南それから續く不仕合せこの伊
 勢へ妾しをば十二の春賣渡し母さんも一昨年京都にもいやしやんせずね行衛とても知れぬ

よし現在親父とありながり會にも行れぬ今の身の上生れた時に下さんした此伊守を親機と大樹に懸た甲斐あつて伊心安うさまやんする貴郎のやまとい伊言葉を載つにつけや増に親御が戀しうささんすと歎けばたかなは腰懸り「それでからりと譯は知れたがなんじややら一層悲しい満月さまも私しが里に元はたまへに猶劣る賤之に勤めしてめても今では其邊も輝く出精それに縁故のたまへも又同じ様な苦しい世渡りされども氏も性質もよくことには蘇岡買さま今にも伊歸參叶いなば何事も心のま、さのりながらこれまで長長たんど苦勞をさしやんした私しも見かけは樂な様で人に優つた氣苦勞且那さまが此頃の伊放蕩ゆゑ萬事につけ十年ばかりも一度の年によつた心地がする「たれいへさまもそち四十若い年じやなければいも伊美麗ゆゑとんどふげぬ俄かに年がよつたか知らず最負目なしに四五」よしてもたれく憎らまいる玉じやのうと笑ひ顔今いふ通りの御放蕩意見をしても腹立てずそんなら聴といふでもなまこれにはちつと容子がある今に知れる目をながく見てはやどお仰て猶北六らと御入懇ふ考がへてもあんな人を近しく家へ寄たなら碌な事は出来まいと側ではら「思ふてれば終つかへが起るゆゑそつと除きて此炬燵氣のぼしを去ていた處どんだ事から此日頃心にか、つたれこんさんの素性が知れて一安塔急に一人り友達が増てなにより嬉まいと喜ぶあかなれ玉も共々「亭主の人も聞ましたら嘸嬉しう存じませうあれ、且那が大きな聲でたれこんさんをあよびなさん「そんなら後には立行かれたんひつちがへつ手代の鬼助ひよつくり運入て「もうし、若れ神さん伊約束の奉公人じやと直お荷と擔がせて引越せ参りませう「たれをそれは徳七が世話で極たれ杉とやら「はい左様で伊坐りませう徳七のものが講談を折節聞きに参られます其講談師流鶯の姪じやとやら申されました「たれそこへ行其杉杉に逢て様子ときませうとたれかなと起て次

の間へ立出れば初々しげに上り口に手をつがへ「妾して此方の伊手代徳七の、伊さしづで上りましてはざりませう杉と申不調法もの伊目けられて下さりませといふにたかなも打はし笑みても可愛らしいよい容貌の徳七の近付をうなその徳七の口入ゆゑ如才な事もあるまいと最見ぬ先より安堵して目見へなしの引越請狀且那さまは今客で奥にた出遊ばすはと伊近付きに之後でしよう落付たならお銀子のね通ひなりとしたがよいと教へる側に杉が顔鬼助が見惚て膝から下へからりと落す算盤の珠に優つた上等品一年三三が九十目の給金でこりや安いと心で手と打言葉も現金「イヤ最此方の伊家は結構な外にない夜い早し朝遅し晝寐いつでも勝手次第飯之五度でも六度でも魚は充分酒は自由皆備は伊心よし手代も男が好どの風説なんにも接する事はない足が汚れて氣味が悪くば銅壺の湯をとつてやらうかたれ、その荷も女の手では危ないやどにたれが悉な運んで遣ふと立かゝるを杉とちやりとれし止め「貴郎さまと大方此方の伊手代衆で伊ざりませう下女風情の荷を勿体ない矢ッ張連て参つた男に運せ下さりませへ「そんなら案内してやらう女部屋の藏の側なんだか葛籠が重そうな屏風の傍へ置たがよいと頼もせぬに世話やき顔たかなは花玉と顔見合沸とふさ出す口に袖笑ひ隠して立て行く奥にと御澤北六が盃ひかへ寛々と「先刻から申通り百兩の質物に預けた彼品を何卒御戻しなされて下され頼み申と下る手を鯉江とつて「あ、これ、まア伊手を上られいどの様にたれ仰ても御戻まは申されぬ質物といふではなければ拙者が方より一包御用立た其代に預けられたあの一品金ハ御戻しなされずに返せとは御難題「さ、そこでござるあの品をさし上げて板鼻のへありつければ五百石は儲かなもの其上では一倍の利足をつけて吃度返濟武士の言葉違いはないといへど鯉江はうけしかず「先達て其品を拙者に御預けなさん時貴殿はなんと御仰つた仔細あつて此品

は他見は素より口外へ出しても異なと誓言たてさせ儘かに預り置といふ私しの印形捺た一札を
 れどりなされ其一札もないとやら落したとやら証據のなほ百両金が調のりずはせめて其一札な
 りと持て御坐れと不興顔按に相違の北六と膝つきかけて目に角立て「今までの悪意を戻し打て
 かわつた其返答今の金も調はず其一札も落したゆゑ新し手をついて頼むのぢやとわ叫へたりや
 何處ぞよい口がわつたゆゑもろもろ買拂つてしまふたのだな「イヤそりや御推量が違ます家内へも
 見せぬ様にして三番藏の二階の成亥へきつと仕舞て置きましたと直な道には横車れしつけがた
 さ八ッ當り「たしかもうてまへは三味線を仕舞のか「あいなにか知らず六ッヶ敷御話しの邪魔
 にでもなつて悪いと思ふから「そしてこれんも何處へ行たかてまへ欠伸をするてまで彼奴を
 尋ねて運てこい「喧ましい北六さん今其所へ行わいなにかるぢやないが酔醒し風は吹れてゐた
 わいなとこれこんの入来てべつたり坐り「北六さんなんど妾しに「ね、大分に用がある手前いつ
 ぞや久方屋で逢た時はじやら〜と面白可笑話して置いてそれから度々油屋へいつても外から
 呼にやつても酢の昆弱のとうせられぬが何する氣ぢやとより添へばこれんは完爾打笑ひ「何て
 いふたらこしあんなさんが書しやんした發句の通りうつろひにけり乳母が宿移り變る心の慣い
 又たまへが嫌になつて元木に優るうら木なしで「あの者に「あい立返つたといふ様な大方事で
 ござんしようといへば相澤苦笑ひ「せい田川での人殺し一人ならず六七人買がわざとの世の
 どり沙汰可愛や今に彼奴は獄門「さア似た者は夫婦とやらで私しも誰ぞ憎らしい人を殺めて主
 と一緒に獄門臺に並んだら夫が本の比翼もん閻魔さまの前にある見る目とやらの夫婦の様で珍
 らまう御さんせうれしかさん仕度がよくば一緒にお出鯉江さま今晚はありがたう御坐りままた
 と北六にこそ酌もせずおこんばおしかを誘ひて歸る後にこいよ〜無者苦者「年忘れでいど

此北六を呼び立てよつてか、つて馬鹿にするか最此向も破れかぶれ茶人を渡さぬ其内は滅多に
 此家は動きとせぬと尻しんまぐつて大あぐら鯉江はぢろと打見やり「此にこれ出でなさらなくば
 いつまで、も御坐りませ「あ、ゐるなどいつても御神興をすへてこれから又お神酒ださア銚子
 を替てこい「そういつて参りませうと鯉江も此場を退ぞきぬ入りちがへて「私しにこれ酌をさせ
 て下さりませと銚子携立出るお杉「イヤコリヤ美事是从からいてまへが相手ださアもり殺せ〜
 といふお杉が身の吉瑞と心に嬉しく氣嫌とり〜暫らく時を移しける次の間にこれかなが
 聞耳「今までとは打て變り切つてはなれた旦那さまの御挨拶の仰りようこりや様子があゝ
 あらうと獨り言するひさいを隔て「お家さま夜も更ますれば私しともう暇申しませうと北玉
 が聲にふり返り「今夜はまア泊つておさや一晚ばかりと徳七にも淋まがらせておくがよいと笑
 へば北玉が「何のまア妾し獨りを近江に置いて来る様な人じやもの何時まで家へ戻らぬとて
 接してゐ呉られませぬとかし此方へ泊りまするとちとさし合な事もあり奥の客は杉が参つて
 もりつおきてしまふとて請合ておまされば心安くおまへさまも最お寐みなされませと起を
 かなが引止め「此の家へ其方が泊るとちとさし合の事があるとおゆるとさうも合点があかぬも
 し店の者の内に「いへいへさうでも御ざりませぬぞ「それでい猶更譯が知れぬとかなが念問
 お手をもぢ〜「いや其事は此鬼助がよう存じておりますと立出て聲をひそえ「貴殿さまに
 玉はまだ近頃の御近付き御遠慮もありませうしそでないにいた所が餘り出来た事でもなし自
 身にこいひ悪からうれれが替つて話そうとは弟平次が様なれども御大將の鯉江さまが此北玉に
 大きにいけづき一筆しめまわらせいと磨墨も面倒ゆゑ自身に馬を進められ一馬場せめるおぼ
 しめしといふを北玉が氣の毒顔「あ、もまそんな事を北家さま「エ、横合から腰をぬらすと

だまつて聞てゐたがよいも御神さま今の後のまアこうで御さります五七鈴川の楓観の歸りか
 けに久方屋で玉をば徳七の女房とは御存トなく私まが御止め申もかまわずにじやらくとな
 さつた所へ徳七が來それからが意見のなんもうくさつぱり思ひきつた口では立派に鯉江さ
 まが其時の仰つたれと兎角あかの一念かはなれかねて玉が泊るとればいかげ遊ばすげな
 れは玉も困り果近頃は女部屋へ還入て寐ても遙ばると海山越てお出ななされあの、もの、と
 いわれても元が旦那の事成ば横づ頬をびつちやりとやらかす事も出来から大生大切に夜着を押
 へて寐たふりしてゐるといふを徳七から聞かした今晚は旦那さまも余程御酔なされた様子例の
 事があらうのどこれなるに玉が尻をみの由來因念かくのどしと眞顔になつてぞ嘩りけるに
 かなは聞て吐息をつき「つねくかたい鯉江さまさうまた事か北六と近付きにならまやんし
 てそれからの御身持と打てかわつて情ない若いものかなんどの機にも玉のてまへも面目ない
 度々御意見申してもかもうてくれなとたつた一口仕様摸機はない事かどさまうつふけば聲をひ
 そめ「御坐りませう」旦那へ意見の仕様といへば鬼助が智恵の先がうぢやれ玉が着物貴方が
 めして女部屋に寐てござる又私は旦那さまの側へ行てそれとはなしに玉が泊てゐる事をち
 らくどにはわせるそこで旦那が例のごとく道かけてお出なさる部屋の燈りをうす闇くまてお
 ゐて貴方がうまく釣つけてお置さると旦那は矢つ張る玉ぢやと思ふて乗の來た所でなにをわそ
 ばす妾しぢやと初めて眞誠の聲を出したら流石の旦那も面目なくうぢく「なる其所へましくし
 かけまくしかけ御意見をあろばしたと聞そうなる者の様に私しは存じますといふにかないふわ
 とのり「こりや人も傷ずじよからうでいあるまいかのうれ玉」とい旦那さまの御身持がそれで
 お治りあそばせなら憚かりでは御坐りませう私しが此着物を「はやう貸してたも其内の妾し

の着物を其儘其方着てのやと帯引はさき編絆の上互に小袖ぬぎかへて玉のまやんと帯引べ
 思ひがけなく眞誠のゑ家さんなりました此なりで迂路くしてたれぞ見ては悪からう妾しの
 そつとあのね織の二階へ隠れてたりませうと様を傳ふも忍びあし見送るにかない低聲になり
 織のりも締つてゐるその小坐敷にぬたがよいと帯とり上げ鬼助は止め「アもしく「たまへま
 まの下べばかりで帯べるにこれよびませぬさアこれから寝間の在言まア此向へお出でなさ
 りませこれは先刻のね杉が葛籠そのまへあたりがちやうどよからうぢや」と寝道具とり出
 しさアお遣入りなされませこへ屏風をこうたて、燈火は此邊にゐてこれではどうやらお勤
 めを戴だいてへいお寝みなされませしとはひさうなイヤとんだ若衆だもしれかなさま旦那がなん
 とお仰つる先初には諸事無言寝たふりをしてござりませしとれかなを寝させて扱あしあし女
 部屋を遙かにどくのき「先一方はこれでよまヤイ小僧さもく徳七に今急用があるといふてよ
 んでこいエへこりや寝り倒れをつてきいづも役立ぬこれくど揺起す表の戸口ほど
 く音訪「これに急に用があるといふ聲の鬼助だちよつと此所をわけてくれ「チ、徳七かよ
 い所へさアく「這りやと門の戸をひきあくればすつと「今宵は例の流鶯が夜行を聞て戻り
 がけ彼處此處用があつてもう九ツでもあらうかおんまり遅うなつたれと今日の家年忘れで
 まだ起て御坐らうかと門口まで立ちよつて様子を聞けばひつとりかんとりやれ寝なすつたさう
 など歸らうとした時に徳七に急に用があるといふた貴機の聲用とそなんぢや夜がふける早う
 以ふて聞せてくれと問れて鬼助まらしく「お玉さのが癪がれこつてそれはくせつない様
 子今漸くおさまつてあの女部屋の片隅に寝かしてはいたれど可愛想に一人りでは心細からう
 と思ふたおゑ「なにあれがのはほんの持病すて、たいても治りますやそればかりなら真にこれ

からせぬ暇いたしませうと立つて鬼助が引き止めて「旦那方は寝る今これもつッふす所
 ぢやさう氣強いはすども何で寝る身體なら看病心で玉が側へ泊つて行がよいではないかとい
 入れて徳七うちうなづき」それもさうか旦那さまあちつとばかり咄し申す事もありそんなら
 泊て明日の事と羽織たしめば心に笑み「それがよい」さアあそこへいてねやまやれぢやがね
 玉どのがすやノと寝てゐる所を起さずとも我身の肌で温ためたらつかへも直に治るであらう
 向の屏風に黒獅子の帯をかけたが証據ぢやとつきやれば打笑ひ「なんの女房の寝てゐるに証據
 もなにもゐるものかと彼所の一室へ入にけり後に鬼助は獨り笑み「徳七めが久方屋でこれと思
 ひいれ弱らせた其意趣がへしどうがなしてと思ひ思ふた今夜の首尾へ、うまい」最一ツ返
 してイヤ味と徐々ど屏風の側窺ひよつて聞耳立て「ヤなんだかこそ」音がする最よか能らう
 かまだぢやらうかもうかまだかの邊さん逢たど見へて猶にこゝ家内も響く大聲あげ「やアだ
 いそれた人でなし徳七めとれいへさまれかなさまが寝てぼざる密男ぢや」ど屏風ぐわらりと
 引退ればかなにあらぬ立派な男徳七と何かひそひそ呟やいて見向もせねば鬼助は呆れて明た
 口閉ぎもやらすべつたりと尻居に倒れて目ばかりさよろ／＼鯉江はれかなを伴いて奥の間より
 出來り「けたしましい密男よばはり鬼助だれが密男したれかなはれれど一緒にいるといはれて
 吃驚ふりかへり「ふウ只た今まで此部屋に寝てござつたれいへさまがいつのまにア奥の間に
 そればかりぢやない屏風の内天がら降たか地から沸たか薄氣味わるい武士がといひつ、顔をさ
 し覗きやどりや儘か久方屋でちよつと見かけた誘岡真なんだらさつぱり譯が知ぬとうぢ／＼す
 るに目もつけず鯉江は形改たて「思ひがけなき實さまあなたは此處へいつの間」さア林中
 の娘のれ杉と貴殿の家へ奉公に入こますべき其手筈は徳七のより申通し承知の下されされ

ぞ何を中ヌも女の手腕心もなく存せしゆゑかれが荷物のこの葛籠の内に忍んで參つた宵から
 中で聞いていれば其鬼助とかいふ奴が何かちこすかいひくろめあかなさのにれ玉が衣類を着せか
 へさせて此處へ寝かす仔細があらうと存んじたゆゑそつと葛籠の中から出てうか／＼此に傍
 坐つては其身の爲になるまいとれかなさの心に心を添へ小窓より出しし尙も様子を見がへば按
 み違ひず徳七のにれ玉が病氣で寝てゐるとさ／＼と欺むいてと云に徳七言葉をつぎ「れ
 かなさまを玉ぢやと思ふて大方寝ておようど推諉の密男呼はり又危険めに逢ましたを事なく
 すんだも矢ッ張又貢さまのれ働さ親子とさまでと三度の大恩これ鬼助久方屋の意趣かへしに折
 角の企圖かさて氣の毒な骨折損と嘲弄されて言句も出さそり／＼と跡じさりれかなは鯉江が
 側へより「もし私しにはとんとまだとふも合点がまゐりませぬ貴殿が今れ仰る通り此處へ寝て
 ゐた其時に思ひがけない葛籠の蓋跳去これ／＼と起されて眞に吃驚立る口に手をあてなんに
 も驚く事はない此處に居ては悪い程に早う奥へ行がよい様子は後で鯉江のに會ていほうとれ
 仰つたとなんの事やら分らねぢや怖さ怖し此窓から顔ひ／＼逃出てねまへに問へばまア／＼此
 處に隠れてゐやとばつかりでとんと夢を見た様なまア貴殿はどなたで御ざりますると問へば鯉
 江の打うなづき「貴方は大和高市の御家中落岡主膳さまの御子息貢さまとれ仰る御方様子あつ
 て徳七と先頃よりの御知る人其後われが引合せでめれも目にかつたれき内へは一度も御
 ざらぬゆる手前は貴方を知らぬ等まア／＼それの後にしてあア其方に話すも面目なけれぢや
 酔て奥に寝てゐる北六を初めとし患者によい年した此鯉江が峻江かされ愁から釣込色の道あの正
 菴が家の仕方心の乱れる薬をば何時の間にか呑せられそれからの身持のふしだら幸ひにそれを
 また治す薬もえ二三服呑と其ま、酒の酔が醒た様にさらりつと心持がもう以前の通り

治つたコレ徳七に玉に今までひよんな氣を擦せたも藥もえまや詫まで安堵させてくれと語たるを聞てれかなが悦ひ「若し時さへ賢い貴郎がなんでも分のある事と思ふた不審がそれで晴たしたかもし又しやんせそれがあの正菴が仕業じやといふ事をどうして前は知らしやんしたと問へは買の膝を進め「されば〜せい田川にて正菴が懐中より落ちりしは北六が仲間の稱通其内に鯉江の心の乱る彼の秘薬を服せたる謝禮の金子を送りし事のありまゆる尙も其余の手帳の類ひ讀みればくだんの藥法事細委に書記し又それを治すべき薬も一々書とめあり此頃徳七媒始にて鯉江のにれ宛にか、りその治すべき薬を調のへ服せしめて早本心ちつとも氣つかいしめさるなと聞てれかなが氣もはれ〜共に快氣の心まていよ〜安堵したりけり鬼助の最早破れかふれ「ふうせ田川にて正菴が懐中の誓付をとつたといふと龍かな征據せんならいよ〜七人まで「切つて捨てたは此實徳七に毒を服せ殺そうとした大悪入みな沙婆ふさげのあばされもの七人こそろか百人でも切て捨るが世の誠しを今日から昔しに立歸高市舞臺の藤岡が刀の切味手前にもしようばんしたくば此所へ出ると完爾笑ふを鯉江は押止め「コレ鬼助正庵が落した手紙又主膳さまがね拾ひなされた北六への仲間の手紙それをもれ放蕩な者に仕こみて此の家をぬのれがどらう悪巧これこの機に書てあると貴方から下さつたれ〜はいふ程れが耻さあ何處へなりと出て行けど門へつき出し戸をびつと去り徳七意義をかいた「イヤ買さま花城さまの御持傳へ殊に將軍室町御所よりの御拜領の大切の御寶それをば盗み出したる事の筋も辨まへず主人鯉江が預かりれさま其谷めが御坐つた時に私しめを名代にといふを鯉江が打消て「それが怒から起つた過まり我身の知た事ではないといひかゝるを買はとめ「これはしたり先非を悔ひ其品を戻されなば後の氣遣ひ必ず無用其百兩の金子をも國元より返濟いたす

と話しの内にかける 北玉もうし〜北六がね隠からなにやら盗んであれ〜塙とし出て行まずと聞て驚く徳七もかな鯉江は騒がず買と打笑み「彼奴めを仕止るは今宵の内と兼ての手筈主膳の、計ひにて花城家の入夫を以て此家をとり巻いたれば所詮最網の魚はづれもは獲まれいと心静かに仕度を調のへ表を窺ひぬたりけり。竹花屋の小庭の板塀北六はなんなく乗越身づくろいして其邊を見廻し「其處にいるの鬼助ぢやないかと呼かけられてふりかへり「ふう相澤さまか何も彼も皆ばれ口私しもどうどう此の家を「チ、さ酒に酔ふた体に見せ何も聞てぬた三番藏のぬぬの隅と鯉江めが鯉口どころか大の阿呆でうつかりと口走つたかの茶入もう此方へどりかへしたこれから何處ぞへ帆かけて「ウ、私しも其心で旅費の手當に三十兩ちよろまかしてゐきましたと取り出したる鬼助が油断見すまして北六は抜手も見せず切て捨「ちと不足だが此金で旅仕度を調のへてちつとも早くふけるが一手そうだと獨りうちうなづき行先ふさで母さんの仇通さぬとつめ寄る女の顔を入方の月の光にすらし見て「わりや最前の小奴郎免たれを親の仇とは「さア九世戸の坂より歸り道買さまと見ちがへておのれに打れた人形廻しお岑といひし人の娘わたしは杉といふものじや此夜此へ奉公に來たもれに近付ため覺悟をしやと身構へなす後ろに扣へし一人りの老人「ヤア北六身は大和高方の家中露岡主膳といへるもの先年主君の寶藏へ忍び込で獅形付の茶入を盗み取りたるは汝が仕業と露顯の上は所詮もうのがれぬ命縛り首打れんよりい罷きよく其女の手にかゝつて早く死ねとはつたと睨めばせいら笑ひ「さてと豫〜鱒に明買が父の主膳めだな新なるからは破れかぶれたわいらがはしがるこの茶入眞向なしてと箱打壊し地に打つけんと見て吃驚「こりや茶入とは思ひの外久方屋の坐敷で仕ふ尾張焼の茶呑茶碗袋の様に包んだとね紺めが正庵に發句をたのんだ鹽瀧の服紗これはど

うたと呆れ顔な紺をつれてつかんと貢は立出で歩みより「真の茶入の鯉江殿より最前な紺う
 けとつてこれ此に持てゐるなんと腹が潰れようといふに主膳は傍より「その服紗に正徳が發句
 を樂りて書たるは今汝がみづから白狀茶入を盗みとつたる場所にてしれいたるこの屬子神都
 八景の詩を書たるは其發句と同筆同印さては其夜の盜賊は正庵が仲間の者と按に違はず論より
 証據鯉江に汝がこの茶入預けたいたる一札が此方の手にいりたればもう陳じても遁れぬといひ
 放てば又言葉をつぎ「此家の鯉江はこれのれらに交わりし先非をくひも先頃より日れわれが同
 腹中となつたるゆゑ今宵に杉に本望を透させんと豫ての契約かれが父之林平とて元之花城のい
 へにつかへ身は輕けれども同家中その妻はこの貢が命にかはつて不慮の非業の死傍もつて助
 太刀して打せねば義がすまぬとじりく」とつけまはす北六も眼を配「まぢくとい証據呼はり
 その茶入を花城の鼠敷で盗んだがなんどした元ぬれも高市の者小ばる組の頭役鬼神と人の怖し
 黒塚官六郎が一子綾七馬鹿もの千早之助片手打の仕置さた叛逆の企圖ありし鐘三を傍に失ひ
 し父が忠義のむになりて殺され損の其上に家を潰され東西も知ぬ内から追放され人となつて伯
 父の話し聞事毎に口惜く花城の家に仇をして此辭憤を晴さんと窃に便を求めし所内々案内する
 者あつて寶藏へ手引され將軍家より給いつて家にもかゝる大切の茶入味く盗んで所持なす内兼
 て花城と意恨あるよし聞れよびしこづくりのいた島は茶の湯ずき此茶入からどり入て新機く
 遣てかうしてと企の防害する奴輩其品渡して道を開き三拜なして通せばそのふん邪魔だてする
 と死人の山だ何人も彼奴も觀念ひろげ扱は汝は黒塚が倅なりしか親もろ共揃ひにそろひし悪人
 輩わが邪道を顧みず大恩うけし殿を譲り御家に仇なす人非人ひとらしく相撃の勝負さするを有
 がたう思ふてこそ事いひねらす尋常に立合へといひ捨それと貢の指揮に杉は心得切かくるどつ

こいそうとと扱合せ二打三打戦かひしが天の咎かばつたりと石につまみずき倒る、北六をたりと
 る杉が乗かゝり胸元ぐつと一ゑぐり七頭八倒虚空を掻みもがき死にぞ死んでける鯉江徳七夫婦
 の者も追くに出來り杉が敵を討恙がなかりしを悦びて此趣きを公へ詳細に訴たへたりけれ
 ば司人も杉が孝心感じられて賞與を賜ひ貢は茶入をとり返したる功によつて表はれ主膳も頓
 て勘氣を宥し寶を主君に参らせければ父子の働き賞美あつて以前の祿に倍して給はりれこんを
 ば妻として忠孝全く家富榮へた杉の買が妹としてまかるべき婿をどらせいつれも夫婦の中睦ま
 しく男女數多の子を儲けめでたき事のみ打つゝけるとなん

鄂郎諸國物語序

此遠江卷の原本は、其積諸國物語第二卷なり。其の甲斐國身延の事とす。夫木鈔の歌注に、風土記を引て甲斐國。鶴郡に菊花有。山の流水菊花を洗ふ。其水を飲人の。壽は鶴の如しと記してかた、甲斐に由縁あれば、そのまゝにしてかくてそよけれ。ここに道喜が奇術の傳授。又長條の合戦の顛末。補作は縦文は。拙くとも親かひあらんと。意見せし友もありしを。吾師と思ふよしありて。武田の家の事蹟としては。一生涯筆を執れず。か、れば其旨理なれども。いかゞはせんとて地方を改つ。承久の宗行卿。元弘の俊基朝臣。忠臣非業の死亡ありて。千歳の秋と名のみ流れし。菊河の復讐に仗武士の。遣刀害物語は。花ももん事もうたてく。金英などよふ異名を幸。こがね薬師の利生をまじへ。靈草の奇特を延たる壽命。慈童が七百歳はえらす。枕を擡て空言八百。しかも小菊の懐中紙。二十丁かきちらすものは

庚戌初春新刊

故柳亭門人
笠 亭 仙 果



古今集



都鄙語 遠江の巻

笠亭仙果著

二見の浦立石崎より八丁ばかり東南に朝音山大江寺といふ寺ありこの寺中に圓露軒と彫つて
 てかけたる板額も中ば虫食文字も消いと物ふりし菴室ありけり不破の關やといふべきひさしも
 流石に雨の漏さじとや新らえき板をさしませかたける柱にたてつけの隙間は風に任かせてもあ
 かり障子はさばかり煤けずあか棚奇麗に六具を洗ふ音もさやけく殊勝なり主の僧は厭樂とて六
 十路に近き老僧なり花瓶に楳水仙の花立てなごする處へ竹花屋の通ひ番頭徳七の入り來り「賈
 ま此方の主人の想ひのまゝに大法會も昨日までに首尾よくすみ何誰にも大悦び始終貴僧の骨
 折主人よりの中付け右の禮に参りました此からちよつと方丈さまへも御挨拶に参りませうと
 いへ之厭樂花立て終り持佛に備へて其處らを掃ひそれは近頃御念のいつた方丈にはれいの音ま
 だ死勤めがすまぬ様子一吹喫でござりませ其處之寒い窓の方が日があつて風が來ぬと待遇ふ
 りに火鉢をさしつけ「あゝ世の中に人の身の行衛と水の流れ知れぬといふ之虚言でなしいつか
 夢話し申した通り此愚僧も若い時といへうようなき悪人にて人の難義も難さも構はず只勝手
 企みごとく中にも出羽の横根山の溪へ獵師をつき落し其家諸式を押掠したる悪事は程なく露顯し
 て殺されねばならぬ所人の情けで助かりながらまだ邪道の業は直らず妻子を捨て諸所遍歴し
 づし根性よくなくなつても酒の上わくるて終には死ぬ程の手傷をうけて罰之觀面其時漸く發心
 して手傷を治すと直に剃髮大和國常門村の長方寺の弟子となり初免て經を讀習ひ十年ばかり彼
 所に住みはつち坊主の勞も積り俗の時より樂な暮し樂がしたい結構な身になりたいたの慾心で
 たれも心に苦が絶へず終惡心も出すもの出家遁世した上といよく樂を厭ひすて求むる念を忘

るべし自然と心が樂になり身も從がつて豊になると師の伊坊の伊推誨樂を厭へといふ心で名も厭樂と給はりしが厭樂を短かくいへば矢ッ張る蔵のゑらこれも不思議の因縁と思ふに今また住菴は團子によく似て團露斬凡人の目に見へぬ佛僧が斯様すれば斯なると初めから定めておかつまやるので伊坐らうなる程樂は身の毒と難行苦行のそのために一文もたすの六部と出かけ五年の間に大概は日本國中遍歴なし太神宮へ參詣のついでに湯治に逗留しこれも又定まる縁か方丈さまも止なさる愚僧も止る氣になつて暮すともなく最三年今年も例の寒念佛夜々廻る村々市々川崎の町へ来て敵討の眞最中通りかゝつて見ておれば顔お覺へはなれども打れる人も討人も同じ家中の子供達いかにとも見過しがたく勝負の濟を待てゐて我身の上から詳しく語り悪人なれども俗の時組頭したその人の息子さのに御坐りますればどりたさのだんにならば死骸を賞ひ葬りたいと乞申したが縁となり奇特の事と詰問せの、その主人も此上なき悦びお峯さのはいふも更なり北六鬼助其外の刃に果し十人が後世を助かる其ためと結構な追善供養の様な悪人でも成佛得脱いたしませう近江の國での仲間奉公それから旅俳優出羽へ歸つて暫くは獵師の似真もしたり大和へ行ての小ぼろ組それからいつち坊六部となつて諸國修行なれば昔しが俳優でも變ばかせる七變化さつばゑら蔵坊主となり黒塚の若旦那が身の成果のあふれ漢五体つかぬ死骸の葬埋せうとは見通しの姓名でも分るまいといへん徳七うちうなづき「私も今此邊で世帯せうとは思はぬ事生れは浪華大和町福原屋徳兵衛といふ商人の一人り息子徳之助として十三まで親の側で育たれど智恵づくためとして十四の春此竹花屋へ下積奉公せうやらこゝやら朋輩にも番頭にも憎まれず殊お旦那の伊氣に入り十九の年親共より家督相續させたいと伊暇を願ひし所に動てゐたい斗りに下る心の微塵もなく從弟を養子に定めさせ今でと伊勢

の山田の主人これも皆な定まる因縁あり縁々といふ内に様にあつた日の影も垣根の榎樹へ最早移る日短にあり時分から又來ませうと徳七とはうでうの方へ出行ける其日の黄昏厭樂と垣根づたいに敷蔭のあか井の水を吸に出で竹釣桶さし仰したる折しも颯と颯風海邊に響く波濤の音最と物凄さ空なりしが少時あつて風靜まり夕日はまき枝の松にのゑ名殘の瀟の荒磯を洗ふも清き詠なり「さても暴い風であつたこの庭の汚れた事はと落溢れたる木の枝家根板片寄る手に思はずも拾ひあげたる書付一通讀下して眉に皺「たれから誰へ遺手紙か文言とても早く分らぬ今の風で何からか吹飛して來たものと見へる其内返す先も知れう種々な事があるものぢや南無阿彌陀佛」

都吾妻の道つゝ遠江 榛原郡菊川の邊近く其菊を植へ集め賣りて世渡る鰥あり昔し金谷に厩をれかず此所に宿れば家居も繁く繁昌し菊の盛りと買人も觀る人も多ければ今日朝より雨降て人氣も跡絶徒然なり主人百代は四十路ばかり慕る花の色なくて殘る香もうつろひの盛りと心憎げなり娘に菊は年もまだ十五か六の乙女花色香それも及びなく母の手入れと思はる「お菊東の花壇の虫はもうよく取てしまやつたか葉裏へ藥が届かぬとせつてうした甲斐がない然し今日はおわが夫其方の父御の伊命菊すゑが來ようとも追てやつて殺まやんなぎのみ強い雨でもない誦訪の原の榎樹河岸へちよつと參詣して來ませうめろ作は年はとつても掃除はする其外にと何一ツ間に合おぬ阿呆其方随分氣をつけて留守まておやと吩咐て百代は寺へと出て行ぬ引違へて入來るは西嗟嗟野もち九郎「れれれ娘様端までそれを迎へに出ておたりあつア若しが親切者お袋の後姿角で見たれば吃度留守ても好機とこゝこれさ遣る事なかれ供をつれぬ一人旅でつれないぞやく「されば古歌にもある通り傘の骨おなつても通はにやにかぬこの様に雨天風吹

搦す毎日菊観に来るのも菊が手折たさこれ聞給へ拙者と高位貴人にあらねども無見山が近ひゆ
 る昔しの人が鐘つく度落溢れたを拾ひ集先先祖が貯てられたから金はたんともち九郎西睦
 峨の大庄屋の小旦那ともいわれたる者が色には愁じひつれも邪魔どもをも連れず只一騎戀には
 なんと庄が窪むろに腐つた沓掛やすべて南無三南無阿彌陀君が夜の泣石ならば嬉しからうと言
 問と佐夜ともいはず佐夜つ山袖は涙の飴の餅買ひなど呼は此腕がわれから堀た入黒子命なりけ
 りこれ君よいろいろ返辞菊坂登り下りも一里半八里半の丸焼でも美味ものは望み次第九里半の
 富士額娘嶺の白雪打解よとまなだりか、ればちやつと飛退「八里も九里も委しやいらぬまへ
 こそ七里けつばいとつとと行でくださんせといわれて猶も身を擦つけ「こいつめ強くふりつけ
 るな阿呆も罷らず容もなしこんなよい都合も稀な今日いなんでも宥さぬぢちよつとくど掻抱
 かれ「あんまりなぶつてくださん委しには主があるあい暗とした言名付があるから迎も罷
 前にはこれへんじが出来ませぬ「言名付こいつあひ言名付があるならば茶にはこれよませぬ
 ひゞれの入らぬ其茶碗でよい茶の出花をさんふどかけ茶づうせてたび給へと立すくめられ泣聲
 にもてあぐんだるもち九郎四五尺向へ頭顛倒と顛倒かへつて大地にへたばり顔をしつか免て起
 上り「いと咲の様な細い手でいや懼ろしい力ぢやな力量早備兵法の許可を取たおれさまを何し
 て投たかこりや不思議と見廻す目前に立派の若者ふウおれの投たはこれのれぢやないやわつぱし
 め何時の間に何處から湧て出て来たのだ無言でそれを何故なさないめにあわせた打といひれ
 らいで欺し打といひ卑怯な仕業名乗合ての勝負なうなんの汝儂に負ようぞ痛くすまぬくとね
 ちか、つたるもち九郎かの若者はちつとも騒かず「白晝に年若な女を捕へて無さはふ千萬殊に
 かれが言名付けありしとひしは我儂が事甲斐國武田家の浪人須濱浪次郎と名乗るもの猶は此

上にいひ暮らば養生ながら密男あつかい投られてすんだのを嬉しく思ふて早くゆけ「イヤ小粒
 な体として大東に出かけたな其しや面をど手をふり上じろりと見られてぐんにやりとそりうち
 かけし腕をなやし握拳のをさめばにまごつき「出行きけりお菊の裾かき合せ見れば見る
 ほど美麗さ苦業姿に氣も惚くうつかり立ていたりしが俄になにか羞ましく物いひ兼てさし低頭
 さすもやさしく男も見惚互に少時言葉なま「今あの男のいふた通り案内もなく庭へ通り失禮許
 して下さいとさしといひれてお菊も顔を上げ「何誰は存じませんがよい所へお出なされお蔭で手ご
 めの難儀を遁れもうく嬉しうぞんじますたんとお禮も申したし氣遣ひなものも罷らず緩くあ
 ちらでゆ一吸と顔赦らむれば「それはゆ馳走商賣がらとはいふ者の花檀をはまめ奇麗な事感心
 いたすと坐につけば「先の男のいふを聞ば母御と二人住るゝにやゆかまはとなげしのうち
 もの定めてよしある人達の世を忍ばるゝか心憎してまへ事はこの邊より少し隔てる里の者われ
 りひ名付の男なごし口お委せて申したを心にかけて給えるなわし輕はづな事なれど身身の様
 なよい娘媒妁たい人があるが今聞ばもう約束があるとの事で残念至極世界も厭になりませた
 なんの委しの様なものいひ約束は少ともなし彼奴をおどらかす間に合ひ言葉そまて何處へ世
 話やめて下さんすかは知らねども何處へも行氣はゆ坐せぬ一生嫁入せぬ心の「イヤ、エは心で
 定免た人がほざんを「今いひなづけは虚言といひそえて心で極めた人があるといなんだからさつ
 ぱり分らぬ「あなたも媒妁のしたい方があるけれど「イヤ、誰もほしうな今出来たて
 といふ所を急に一人り極ましたそりやまア何處の「それこそ「いややうそばかり「武士が虚
 言い申しませぬ「真にそうでござんすの「嘘言でない証據のこうとふりさらす掛物の書の唐人
 がこちらをじつと見ておます蓋かししいよと傍の小屏風を取て引廻すもち九郎の又も徐そると小

門の内へ入り覗きしげに一間の方、窺さまの見苦しき彼方の花壇の後より欠伸しつゝ立出るもろ侘の目をする。く「掃除する間につるどろくも一時から寝たらうが人の起すをまたすに起るは年のせい、か夜中のせい、か餘程目がかたうなつたやそこな奴、何奴だても嫌な身振をして坐敷を窺がう曲者め、晝がたうか但しは又夜鷹の手引じやないか」「ゑゝ八釜しい阿呆が「イヤ、おれまへと嫉もちくさ横盗賊らしう存じましたへ可笑しい物のいひ程だなる程おまへは阿呆だわへいや賢い、く腹立まいちつと内へ話しがあるかどの酒屋へ来てくれぬか」「湯豆腐に鍋ばかはれい、うにやちどさしわい酒は随分甘いのを」「焼酎く」「晝寐の目覚によい所、彦介になりませうどううちつれ表の方へ行、一間の二人りも立出てお菊は髪を乱をかきなで」「あの正面の遣り菊二見の浦の日の出の景色二人りが中も夫婦といひ堅い約束未かけて必ず違へて下さんすな男は頻りに吐息をつき」「おそろさいつた身身の素性餘義ない頼みも承知いたした今に母も歸りませう話したら私をどんなに譽てくれるでせうとお菊が悦び上もなし。遠江菊川の月菜園の娘お菊飛立つ嬉しさにこやのに一層まさる愛敬はなまめくならでしほらしく双のふり袖打ちがへ男の膝へ身をすりよせ」「母さんは女でも父さんに教へられ大概な手さ、には負る事ではないござんせぬが何を以うても女ばかり仇と聞ゆる武藝の達人同じ國にありながら手出しもせずにおる惜しさ方になる人はな、かど二人りよつてはいひ出して歎いてばかり暮した年つき最前参つたもち九郎桑術の上手兵法も知てるると人の噂なんぞのよう、に只うかと優しう物をいうておればよいかと思ふていやらしいものゝと五月蠅さに憎も耐へて柳にうけるはせつけれがつてあのでごめそれば迷か石なぞりするように可愛らしいこのお手で力もいれず投さそやんした身の備へる力はありかその術の世に勝れば出来ぬこと最今日からは千人力さうぞ仇を

おびさだま又は屋敷へ忍び入首尾よく本望遂るしかたを母さんとも相談し助太刀して下さんせと頼もしさうなれ方と見こみわたしら親子の素性をば詳しくうちあけおしつけかまし頼むを否ともお仰らずゑ、ありがたうござんする委しや生れてこれほどに氣の晴しした事もないといひつ、男の顔を見てもし涙さんなせうつむいておやまやんす氣の濟ぬお顔色と膝に手をかけさし覗きたあんなばいでもわるいのかど安ずるお菊をどこの完附「なんのぞつても悪うないそんならばお菊さん近い内に來ませうと屏風おかけし雨衣引るさんと立上る帯あすがつて「待たやんせもう母さんも歸ります其事も此事も談合するのぢやないかいなぞふでも澄ぬあなたのお素振お氣にさわつた事でもあらば斯様かうぢやと打なりと叱りなりとごふなとして機嫌をなほして下さんせ今の様おばかりいふてお助太刀が頼みたさに身を委せたといふ様でそれで腹でも立まやんしたか思ひあまつてつひうか、く帯解けて其上に親切な心根にほだされての出来心ろ親や主人の命令でも一生添と思はぬお方にまア此真似が出来やうか「あアこれそれお癖といふもの戀慕の情にあらずして親の仇が討たさの孝心ばかりでかうしたとてそれをなんの悪くい思はん返つて感じいる道理ののみち一旦武士の口から請合ふた事變換して浪次郎が顔が立うか命を捨て助太刀する「いよ、くさうでござんすかあ、ぢやらうかうぢやらうと思ひ過して獨りでいつても氣を揉がいたしの僻も、う眞實に落付たこれでさつはり委しが氣も炭を直してうさんな手まへ一ふく上うとお菊はいそ、く水屋へいらんとするをりから百代は年頃四十にあまり立派なる武士を連れ立て歸り來り「菊の旦那がいらつたおやつた娘の何處にぢや茶をいれそれお煙草益やくちとりと侍遇ふりにくたんの武士様は腰かけ庭うち見やり「さて奇麗によく咲いた見事く、と餘念なし浪次郎は屏風の蔭へあひてかけ入隠れるかの武士は悠、くと此所彼所を

門の内へ入り候まじけに一間の芥子、さまの見苦しき彼方の花壇の後より欠伸しつゝ立出るめ
 ろ作の目をするく「掃除する間につるどろくも一時から寝たらうが人の起すをまたすに
 起るは年のせいかな夜中のせいかな餘程目がかたうなつたやそこな奴の何奴だても嫌な身振をして
 坐敷を覗かう曲者め晝がんだうか但しは又夜鷹の手引じやないか「あゝ八釜しい阿呆だが「い
 やたまたへと候もちくさ機監賊らしう存じましたへ可笑しい物のいひ程だかなる程おまへは阿呆
 だわへいや賢いく腹立まいちつと内へ話しがあるかどの酒屋へ来てくれぬか「湯豆腐に
 鍋ばかばかいうにやちどさしあい酒は随分甘いのを「焼酎く「晝寐のれ目覺によい所彦介
 になりませうどううちつれ表の方へ行一間の二人りも立出てれ菊は鬢の乱をかきなで「あの正面
 の遣り菊二見の浦の日の出の景色二人りが中も夫婦といひ堅い約束未かけて必ず違へて下さん
 すな男は頻りに吐息をつき「おさろさいつた伊身の素性餘義ない頼みも承知いたした今に母も
 歸りませう話したら私をさんなに娶てくれるでせうとれ菊が悦び上もなし。遠江菊川の月染
 園の娘に菊飛立つ嬉しさにこやのに一層まさる愛敬はなまめくならでしほらしく双のふり袖打
 ちがへ男の膝へ身をすりよせ「母さんは女でも父さんに教へられ大概な手さ、には負る事では
 ござんせぬが何を以うても女ばかり仇と聞ゆる武藝の達人同じ國にありながら手出しもせず
 ぬる惜しさ力になる人はなまかど二人りよつてはいひ出して歎いてばかり暮した年つさ最前參
 つたもち九郎桑術の上手兵法も知てるると人の噂さんどのようにつうかど優しう物をいうて
 むればよいかと思ふていやらしいものごと五月蠅さに憎も耐へて柳にうけるはさつかけ
 がつてゐるのてごめそれとば巻か石なごりするよりに可愛らしいこのれ手で力もいれず投さまや
 んした身の備へる力ばかりかその術の世に勝れば出来ぬこと最今日は千人力さうぞ仇を

れびさだま又は屋敷へ忍び入首尾よく本望遂るしかたを母さんとも相談し助太刀して下さんせ
 ど頼もしさうなれ方と見とみわたら親子の素性をば詳しくうちあけたしつけかましまし頼を
 否とも仰らずえ、ありがたうござんする委しや生れてこれほきは氣の時もした事もないと
 いひつ、男の顔を見てもし涙さんなせうつむいておやまやんす氣の濟ぬれ顔色と膝に手をかけ
 さし覗きたあんなばいでもわるいのかど安ずるれ菊をこの完備「なんのさつこも思うはないそ
 んならばれ菊さん近い内に來ませうと屏風あかけし雨衣引るさんと立上る帯あすがつて「待
 ちやんせもう母さんも歸りませう其事も此事も談合するのぢやないかいなごふでも澄ぬあなたの
 素振れ氣にさわつた事でもあらば斯様かうぢやと打なりと叱りなりとごふなとして機嫌をなほ
 して下さんせ今の様あばかりいふてと助太刀が頼みたさ身を委せたといふ様でそれで腹でも
 立まやんしたか思ひあまつてつひうか「帯紐解て其上に親切なれ心根にはだされての出來心
 ろ親や主人の命令でも一生添と思はぬれ方にまア此真似が出来やうか「あアこれそれと辯とい
 ふもの戀慕の情にあらずして親の仇が討たさの孝心ばかりでかうしたとてそれをなんの悪く
 思はん返つて感じている道理とのみち一旦武士の口から請合ふた事變換して浪次郎が顔が立うか
 命を捨て助太刀する「いよくさうでござんすかあぢやらうかうぢやらうと思ひ過して獨り
 でいつでも氣を揉がれたしの僻もう眞實に落付たこれでさつはり委しが氣も炭を直してうさん
 な手まへ一ふく上うとお判はいそく「水屋へいらんとするをりから百代は年頃四十にあまり立
 派なる武士を連れ立て歸り來り「菊の旦那がいらつまやつた娘の何處にぢや茶をいれそれ
 れ煙草盆をくちどりと侍遇ふりにくたんの武士様は腰かけ庭うち見やり「さて奇麗によく咲いた
 見事く「と餘念なし浪次郎は屏風の蔭へあててかけ入隠れるかの武士は悠々と此所彼所を

見廻つし「黄菊白菊其外はといひしはさびを言とする俳僧師の見識にて此所の花にハ杓子定規
 菊は花の韻逸といふのも野菊の造ろぬ所を愛せし唐の人の情けを此所には引がたし宇多天皇
 の侍時の皇后の宮の菊合せまつた上東門院にも全備をつくす菊のすまそもく菊は天性の能
 は十に一ツも少し造る人の賢さと愚なるにて天地の差別ありとはこれも唐の季漁が書に
 記したり三宅氏の金藤天利平が雲龍角平に一文三無双二百年の昔より名もことく賞
 感ももろもろの花ふ勝れ珍らしきくさやうの多きも菊の外には先ッ覺へず薄紅は中輪紫
 足柄の雪磯千鳥面白くといへば百代も傍より「佛さまへは大盤若上には神樂の旭獅牡丹咲櫻
 咲中にやさしいこの糸咲伊勢より近頃参つた種「今日になりて菊造らうと思ひけりとはまめ
 すれ方さまの即坐の御間に合するがわたくしが渡世の種をれなりと御氣にいらばれ求めなされ
 て下さりませと主が言葉に眞を借はじ「いづれもく皆なよい花素人には自らうつりまてとんと
 心が定まらぬあのせき皇の小輪の白大星とまるしたるは我らが化名に同七花の名それを一本異
 やるまにか「なんと仰るこの菊の天つ星が旦那さまの「名氏の天津名は圃四郎「をりや當國
 引馬の城主今川離之介さまの御家來伊勢の國二見の郷に暫く住みし軍學者加賀野樟齊と友朋た
 りし圃四郎さものであつたまなそれを知つたは加賀野氏の「親戚の者といふ様な親戚どころか樟
 齊の後妻の石此百代御身と夫は久しき朋輩血を分ち兄弟より勝りて中より暮したと亡夫の
 日頃の話し何ばかりの意趣あつて伊勢國まで来るも「來り三年前以前師走の下句樟齊と打果され
 し理非はともあれ角もあれ若しがたさ夫の仇これく「娘早うたじやこの武士が仇じやいの其方
 もちやと身をしらへなげしの長刀腰の物これ狼狽すとまつかとしや「先がら後で聞ていたも
 う仕度も出来ましたとれ菊は燃たつ朱の頭巻細身造の刀をさしかけ出来つて手に持長刀母に與

へて其邊を見廻し「涙次郎さまく「まア何處へ行しやんした涙さんのうと呼つても圃四郎の右
 手へ回り仇遣ぬとつめかけたりさアあらがふとも言辭あるまじ其時死骸の傍にありし鼻紙拵に
 姓名を詳しく書きし名札を入まも自然遁れぬ天の綱金入に小判で十兩を捨て立退しはよ
 くよく狼狽して擧動と歎の中にも笑ひしぞや然し失ては音譯なしと今に櫛に預りれくは菊は其方
 は小筆筒の引出上から二番目の紙拵持てれじやまう「忙しい仇討めがまふようなど騒ぎ立て
 百代を見やりて打笑ひ「樟齊を殺さぬといふにこそ證據もいれいわる、通り身共が殺した騒が
 つしやるな圃四郎の逃もせぬ隠れもせぬ元樟齊は此國の山花村に住みし者南朝の浪人楠の左衛
 門某のやしとご母方の姓氏をわかし初め加賀野左平と名乗り孔明が八陣孫吳の秘書楠家に傳
 へ去軍兵法前原筑前が月ざりの日どり小笠原源與齊が八方がりの口傳これらの奥旨を殘ら
 ず傳授し決して人ふは免許せずわれを用ゐる大將は今當代に決してなまと諸所方より祿を
 與へ招きも辞して往かず近頃世に死去給ひし大坂左京大夫さま我領分に住む浪人いや應なしに
 うけひかんと幾度も召れしを士に降る禮儀をさへ知らぬはな旗下に從がふ様なまを答へて
 それがまさまく「諫めしかども片意地をたてどはし終ひにどのも怒にふれ此國を追ひ拂はれそ
 れより久しく音信なく近頃伊勢へ移られしと只今身がいふことま又山花に居られし時先妻お
 露といひし女女の子婉ねとしもそでどか名付けられし其女子三ツか四ツの年を露どのの血の道
 の再々おこりて終に病死氷子の養育男の手あて常惑されし其れり柄夫婦つれの浪華の旅人駿河
 國府へ下る途中休ませ茶屋が媒妁不思議の縁して其者に娘を不通養女にやる相談のひつれ
 行し今より十年あまの二年三年にならんずらんこれの息女はこの袖かはいよ「加賀野の
 妻子ならは女中に似合ぬけなげさ孝なり貞なりわが命惜みて勝負せざらんや去ながら樟

齊どの此國を出られて後は何處に住われまやらん伊勢に住居のありし次第また身たちの身の顛末われかつてこれを知らず其由語つて聞さるべしわれも又いふ事ありと更に強ける色もなく落付圃四郎いらだつ胸百代はしいてれし止めれ菊が持て來し鼻紙さし手に渡さ指さし示し「此品を預り資金さえ返そわれ」を嘘り者も覺すまいが語れといふを言ぬは我儘大概語るを聞われぬ袖を養ひとりし者の塔八として新町の玉柏屋の寮預りかの家の仲居の光といふを妻となし堀江の住居差しながら妾は傾城其玉柏の抱への柏木生れは志摩の鳥羽のもの親兄弟も皆死に亡せ一生夫と頼みにする客もあらねば年明てもさし當り行べき方なく先兎も角もと塔八夫婦がいふに委せて此家に愛身を寄て月を送りともく其子を育つる内三年ばかり何事なく暮せし内に主夫婦は劇しき傷感枕も並べ一月もたぬ間に二人とも亡り去後には妾と娘ばかり塔八も光も他國の者親裁もなければ心に適ふ夫を入れて跡の事呉く頼むと伺し遺言慈ひな婿とあうよりは鯉養しが氣樂ぞと插花などを指南きて又一年も経る頃夫稗齊今川どの、召に應せす追拂はれしと兵庫に縁のありしを訪ね此大坂にも四五日逗留夫も武藝は稻瀬流後には近江の稗が辻に住れし一有齊といふも元此浪華の三ッ村に居れしかば若年の頃は夫も其處に寄宿警古の際に門人仲間の交際で一度妾もいまだ振袖の店へ出物に縁を結び假の情をうけたるが深く思ふ中にもあらねば別れし後は忘れ果一度の噂もせざりしが盡せぬ縁か其時は此子もまだ八つばかり踊の警古に行だ婦り扇子を門に落したを通りか、つて拾ひ上げさし入れられし顔見れば何こやら覺のある人見れば妾の顔を見つてたれ、玉柏の拍木かそうれ仰るはこれくの一坐でお出たれ方かとそれから問ひつ問れもして互に過じ物語りそんなら此子は主の子かほんの父御でありしかと娘も悦び妾も嬉しく頑固な生れなれと子に目のくれぬ者もなく自然と此處に足を

止め此邊人を煤灼に頼んで眞の夫婦となり其後續る事ありて堀江の家を人に譲り妾の在所へ誘い申し伊勢の國松下村に一ッ家ありまへ移り住又夢の間に六七十年なにもなれ暮せし所ろ板島知輝さん國向の勢つよくまなりやうそでも押領也也分分にが程の軍師住にこそ武家の面目なれ召出さんと使者を以て屢々申越るれども例の一徹承諾せず却て使者の無禮を咎め退ひ歸されしも一度ならず果して殿にも腹立主人の差圖か我が計ひか家老加藤兼左衛門妾親子が物参りの道に待うけ理不盡に擲免て屋敷へつれ行き坐敷に敷しく押込夫に迫つて奉公を辭すば二人の命をどらんと無理無法なる往生づくめ左様な非道の家に住へ腰履る所存はなけれを義を重んじて頑固しき中にも情は深き生れわが夫日が子といふもの娘の不遇の約束にて塔八に呉たれば實の子にて子にあらざる養家跡式立つるもの我存念を立んとて人手にかけて死去し夫婦のいひ譯なまわ、今更思へば今川氏にありつかば斯様にてごめの難義はあらじと悔むに甲斐なら口惜さと口惜さに鳴しぼるようなれども是非もなければ承諾して當家へ任官の密にせしと二人りの者へも手紙で知せ住居をもとりかたづけいつく其方へ引移らんと使者の者へ返答あつても尙ほ其日までは人質は返されぬととめをかれ樟齊どの、胸の内勿体なはやういといやうで一層二人りが自害して死で退ふと叫やき合ひ及物がはまきも番に替つけて木竹の切さへ渡さず是非なく生らへ其日にれよび樟齊どのを向ひの武士松下へ行き馳送歸り何者の仕業にか樟齊は背中肩先いく所も切りつけられ刀は持たなり伏臥て身之水所の者を呼て聞ども隣も遠き離家にて何事も存せぬよし死骸の傍りに落たりしと此紙入を拾ひどり其儘に歸りしと聞て驚く菱左衛門殿にも其由申し上直様妾も娘も伴ひ加藤の下役松下へ行て死骸の檢使も濟み意殺しか何かは知らず當人不慮の最期の上は止て詮なき二人りの女實は不憫の事なとて資金銀米何くれと殿

より賜ひて漸く自由素より少しの時へわれれば法のとく葬式も佛事も済して此上は俱に天をば戴かれぬ仇を討よりきやうやうはあらむと愁の内よりも心を勵し殘されし名札は兼々死夫の話しによく知る御自分さま互に顔を知らぬも幸ひ二人りは名を變此宿に訪に來りて植木屋の明家ありしを買取つて最前御身もいはれし通り先祖を祀せば楠氏紋も菊水所も菊川住むも不思議の縁なりと先當分の世渡りに職人雇ふて菊を造らせ又は二見の建石の風景を造らへしも昔を慕心ゆかし又天津星と名付けしこの菊昨日の夕方菊造りのもて來しに早其時仇の名氏に同じ名の菊の我手に入るといふは本望を達する時節こそ來るならぬと心の悦び夫の忌日の寺參り歸りに思はず同道せし之昨日の知らせ空しからず佛の利益に此所に導き給ふならん察する所る家に傳へし傳授の巻物残らず紛失それを目がけて盗みに來り見つけられたるの欺し討年ハ寄てもれ身たちに負る様な樟齋ならず心憎氣小器付て騒がぬ顔でぬらるれども斯時ひまといひあてられ一言半句の答へもあらぬ軟弱き女の拙き手のうち返り討は兼ての覺悟死で魂覗毒蛇となり孫子の世まで祟りをなさんいざ立合へと罵詈雑言たり圃四郎は只聞毎に吐息をついて涙だぐみ「ふ身も以前は浮れ女の武士の妻となりて貞烈武士の子でもれよばず感ずべし」樟齋が舉動に不審事どもありまが今其許の物語りに不審は晴れて彌ましにかの人奇代の義者たる事知れて殊更惜けれど歎て歸らぬ夢のむかし黄金は少しの吊命人を殺して逃隠れず名札を殘すも武士の意氣地其場の様子も變らず語らば千に一ツの道理予と思ひ知る事もあらんかあはて、所持の品どもを忘れ置きしものなりと推量するも無理ならず何をいふも體かなる証據なければ語りて詮なし實に主君へ忠義のため秘術口傳の巻物を奪ひとつて殺害した「さてこそ」日頃の話しと打て變りし人でなし千万石の祿にもかへぬ家傳の秘術のみならず金にかこらぬ人の命口ふたげ

の吊金うけて悦ぶ日れ「と思れしこそ口借けれ穢らばしやと金入を地に投捨て小長刀ひらめかして切つくるを煙管あつとりとれさへはづしてか、れば身をじづめ兩足なげば跳り越左りへまはれば右に遊行手よりゆけば右手へかくれ眞眼目がけてひらめき來る刃を斜にすいとつけ入柄の直正をばつしと打ば思はず長刀からりと落しとらんとするを煙管の血にてちつとも動かさずれ菊は耐らず細身の刀抜く手も見せず横間より切込光に圃四郎は踞づきしま、身を捻り左も柔に小腕どり「かくいへば時をのばし命を惜むに似たれども腹立召るな誓古も熟し心がけは神妙なれどちと某しとは立合ひの勝負は何とも六ツテ敷かろん同しくはよき助太刀かたらひ入れてむかはれれば手堅く本意は遂らるべし先それまでとはいはせもあへず「ア私しども其助太刀なくてとどうかと思ふあま母さん叱つて下さんぞなれ留守に菊見の客さまふいざ事からいひ交し一生變らぬ夫定め身の上素性も打明し助太刀頼んで置ましたといひつゝに菊の其方此方見廻して「浪さんはいづくにぞ早う」と呼べども來ず坐敷へ駈行き小屏風を退れば隠るし隠もななくおづ／＼坐敷を這わりの最前の若者を圃四郎見返り大ひに驚き「ヤ、其方ハ息子幸助そもいつの間此處へ來て聞けば息女と縁を結び助太刀を請あふたは汝が事かど呆れ顔「エ、ろんならば浪さんとは刀持手もゆるみ顔見つめて茫然たり旅先といひふものゝ供をも運れぬ忍の菊親理不盡ものゝ手ごめの難義見かねてちつと仲裁に以り眞實の名を名乗るも如何と武田の浪人某しなぞ口に任し名を名乗りそゝるに息女に身を穢させいはふ様なさ我落度かばかりの周章ものを何とて頼みに思はれけん一伍一什の昔物語助太刀せよと餘義なき頼と疎て親より聞たよふさては加賀野の娘かといはんとせしが仇と敵思ひつめた女氣の狭い心でもしも又ひよんな事でもあつてこそ表而に承知の体をなせしも此場を過ぎば又外に仕儀もあらんと一寸

延し思へば因果の奇合が折もありとて父上がたはして此處に仇討とせつば迫なる此場の主義を
 ころに仇の娘と馴染とても捨りしわが武士道先立不孝は免われといひつゝ刃の間へ分け入
 百代どの某して圃四郎息同名幸助親子は一体息女に身身の仇父の替り此首をいざ討れよと坐
 をまひればお菊いわつと泣出し「見かけは優く強い方方になつて貰ふたらなんぼか嬉しから
 う二世三世も嫁らぬ夫と心で誓た其方方が親の仇の片われと知ての上は憎い苦矢ッ張いとしい
 殺しはせぬと男をたしのけりし隔つ流石お百代もたえらかて思案に暮れば幸助は立上つて刃に
 手を引をくしたるか二人の女反り討が怖なら仇討の念を絶尼法師とも容をかへ錢とらうの
 が上分別と恥しめられて「ね、そう、娘が愛にひかされて敵を見通す百代ぢやない幹の替り
 に殺害をきりそれですましておくものか親の助太刀なさせ一念こつたる我一太刀うけて見
 よやと拾ひし長力水車にふり廻しをたひてかゝるを幸助と刃の表に立ふざがり同よ、どさし
 つくるあらぬふなしと圃四郎幸助を遠くへつきかけ「汝がさし出る所にあらず退れど此つけ
 手早に合羽を脱捨て是非におよばぬ反り討とつか、よつて百代が長刀向の苦もなく奪ひとり
 胸倉とつて引よればはつどばかりにた菊は悲しく南無阿彌陀佛と我刀咽喉にあつるを最前よ
 り立戻つたるもち九郎つか、かけ入りた止む幸助もさし添振さ持「仇を討ても討れても重
 ね、の仇と仇よまなき契を結びしもお菊のには孝のため親もわしくは思ふまじ言譯なきは
 此幸助雨天の徒然忍びの遊山浮れ心に人の娘身を穢させまも重き落度親の替りになられぬ
 愛身の果の犬死に長生あに之優るべし各々さらばと腹をさし下け直立るをめろ作は垣根の隅よ
 り倒出でりも二手にすがりつき「何故死ぬのかこのおまにはとんと譯はしらぬが死なずに
 濟なら死は招待しやりませと止むるを圃四郎は打見やり「其方は去頃召仕ひし阿呆のわく職で

はないか「はいそんな名で御坐りましたちよいとてもあつて泣顔をするからと此所での
 名は別ちえろ作成程も、んかこれらと怖つてならぬでも一年でも半年でも武士のものさう
 食ふた御陰及物のそれと怖くもないなれば馬鹿でも阿呆でも御主が切腹じやいやるをわんけ
 らけんぞ見てありやうよかといふは賢く聞へけり圃四郎は聲あらし「や、幸助の不所存者親
 の許さぬ不義いたづら仇の子なりと知る止は反り討にもまき善に馬前にて捨てん命女と共に
 死んとは見下りてたる大阿呆者れく親よりは百倍まし親子といふんは我耻辱勘當した詫言聞ぬ
 親子でなければ義理はなしづれの女と一ツにならうと又死たうば死なりと自分の勝手にす
 るがよい目ざはりぢや疾ど、行けうらたへ者先を馬鹿も親の晴と百代も合点まだ胸倉をとられ
 ながら抑ひもやらす身を拾むけ「た菊其方も勘當したまじ助太刀を頼まうとも身分も質さず若
 い身そらで我儘な男狂ひ殊に子といひ親といへど素より腹もわさぬ委し樽齋どのも親子の縁
 切て養子に遣た其方孤子となりやつた故二人りで世話して親子と互にいふはいふもの、分れ
 て見れば情實のなし氣にいらぬ娘の世話最委しも厭々した何處へなりと早ふいにや夫の篋渡し
 ちやわかぬ此方へた渡しやと圃四郎突退立かれば母さん何卒堪忍をこまでもりしや親子ぢ
 やと泣く脊を撫てもち九郎「そうだ、だ尤もど刃をもぎどり傍へに置き「あの男さへ思ひ切
 いふ事聞くなら弟子々分大勢引連れ助太刀して美事仇とこれが討せるそれこそ袋大悦びなん
 の勘當するのぞと泣入るお菊に耳をすり死なれず始終を安立かねる幸助を圃四郎叱て「早く
 行け此になぬぞと追立れば心残りさすぞ、と詫もしかねて出行幸助断奇れ菊をさはさせぬと
 止むるもち九郎をゆる作突のけ「先刻は刺身に甘ひ酒味淋積つて山々の歩馳走千萬れかたは
 あれればかたて引て戸締りをする、とせお菊を空み出さうとてんた虫の能人だもした

延し思へば因果の都合が折もかりとて父上が救はして此處に仇討とせつば迫なる此場の主を
 百代きの某しと圖四郎息同名幸助親子は一体息女には身の仇父の替り此首をいざ討れよと坐
 をまねればお菊いわつと泣出し「見かけは優く強い方方になつて貰ふたらまんばか婿しから
 う二世三世も嫁らぬ夫と心で抱た其方が親の仇の片われと知ての上は憎い言夫ッ張いとし
 殺しはてぬと男をたしのけふし隔つ流石小百代もた然らうて思案に暮れば幸助は立上つて刀に
 手を添をくしたるか二人の女反り討が情心なら仇討の念を佛尼法師も容をかへ驚とらうの
 が上り別と恥しめられて「ね、そうく娘が愛にひかされて敵を見通す百代おやまの替り
 に替りてさきりそれですましておくものか親の助太刀なさばなせ一念こつたる我一太刀うけて見
 よやと合はし長方水車にふり廻したるひてか、るを幸助と刃の表に立ふさがり同よくどさし
 つくるあふふななしと圖四郎幸助を遠くへつきかけ「汝がさし出る所にあらすまれと叱つけ
 手は返るを贈給て是非におよばぬ反り討とつかくよつて百代が長月向の苦もなく恋ひとり
 助とつて引よればはつどばかりに紅菊はあきく南無阿彌陀佛と我刀無暗にあつるを幸助よ
 り立上つたるもち九郎つかくかけ入りたし止む幸助もさし返振持「仇を討ても討れども重
 ぬくしの仇と仇よまなき契を結びしもお菊のには孝のため親もあしくは思ふまじ言譯なきは
 此世の天の徒忍びの遊山浮れ心に人の娘身を極させまも重き落度親の替りにならぬせぬ
 一身の罪の代償に長生ぬにと優るべし各々さらばと腹あし下け直立るをめろ作は垣根の隅よ
 り側出で目も手につきがりつき「何故死ぬのかこのおまにはとんと譯はしらぬが死なすに
 罪なら死は損待しやりませと止むるを圖四郎の打見やり「其方は去頃召仕ひし阿呆のれく助で

はないか「はいそんな名で御坐りましたちよいとしてもめろめろと泣顔をするからと此所での
 名は則ち先ろ作成程狐やも、んがこれらと怖つてならぬせも一年でも半年でも武士のもつそ
 食ふた御蔭及物のそれぞ怖くこないなんば馬鹿でも阿呆でも御主が切腹しやしやるをあんけ
 らけんぞ見てのりやりよかといふは賢く聞へけり圖四郎は聲あらし「ヤイ幸助の不所存者親
 の許さぬ不義いたづら仇の子なりぞ知る上は反り討にもすべき善哉馬前にて捨てん命女と共に
 死んとは見下りてたる大阿呆者れく藏よりは百倍まし親子といへんは我耻辱勘當した詫言聞ぬ
 親子でなければ義理はなしいづれの女と一ツにならうと又死たれば死なりと自分の勝手にす
 るがよい目ざはりぢや疾と、行けうろたへ者先と罵詈も親の晴と百代も合点まだ胸倉をどられ
 ながら拂ひもやらす身を揺むけ「紅菊其方も勘當したよし助太刀を頼まうとも身分も質さず若
 い身そらで我儘な男狂ひ殊に子といひ親といへど素より腹もかさぬ委し樟齋のの親子の縁
 切で養子に遣た其方孤子となりやつた故二人りで世話して親よ子と互にいふはいふものし分れ
 て見れば情實のなし氣にいらぬ娘の世話最委しも厭々した何處へなりと早ふいにや夫の筐渡し
 ちやあかぬ此方へ紅菊しやと圖四郎突退立かれば母さん何卒堪忍ごこまでもよしや親子ぢ
 やと泣く脊を撫てもち九郎「そうだくだ尤もど及をもぎどり傍へに置き「あの男さへ思ひ切
 いふ事聞くなら弟子々分大勢引連れ助太刀して美事仇とこれが討せるそれこそ袋大悦びなん
 の勘當するのぞと泣入る紅菊に耳をすり死なれず始終を安じ立かねる幸助を圖四郎叱て「早く
 行け此にならぬぞと迫立れば心残りぞすく「と詫もしかねて出行幸助断寄紅菊をさばさせぬと
 止むるもち九郎をめろ作突のけ「先刻は刺身に甘ひ酒味淋積つて山々の勢馳走千萬れかたじけ
 われればばかりたて引て戸締りをするく、させお菊様を盗み出さうとくんだ虫の能人だもしね

神さまこの悪怖い企圖をいたしますそれより怖いはその眼玉私しも仇の以前家来連も此家にはおかしやるまいこれから私しは二人りを連れて在所へ歸りませう斯いふ所と其ように捨て白痴ではござんすまい伊二人り共に必ならず死のふなどは思おしやるなれ前達死だてて誰が賢と譽ませうこゝを篤くり聞譯て私しが在所へ一先来てイヤ斯様と産神祭りの村狂言おかるの様ださア〜一緒にござんせやと二人りの手を引き立出る。忙はしげに入来る仲間「此旦那これにござりまするに藥師さまから菊が淵方々尋ねて参りませした伊同役から急の伊状と差出す文箱圖四郎とり上げ窺かに讀みて懐中し「使ひの者の待てゐるかへ伊状を置くと歸りませたそして旦那はまだ此處に「少し残りし用もあれば其方へ先へ行け「左様ならばと仲間周章として出ゆきけり百代は再び身繕い「互に邪魔を拂ひし上は勝負せん伊用意がよくばいで参ろうと詰よすれば圖四郎飛退き「知るゝ通り同役よりとり延がたき火急の大事大方ならぬ主人の密用通くて七日早くて五日事済のするまでは「日延せよとかそりやならぬ立合ぬのが情か知らずそれは反つて無体といふものさ、さもあらん〜最一日も延しおせぬされば此由詳細記し大事の御用の伊答へ筆に言せて奉つらん他見は如何にも憚りあれば奥の間を少時かり静かに認めたし其隙ばかりと用捨われと刀脇差百代に渡し「武士の魂ひ預くるからは捨てられぬとも白晝に逃もせし走りもせし此間に所の人なりと誰にもわれ數多の助太刀頼んで一度きに切でかり我首をとる所存となしや我書置の封の儘屋敷へ届けくたさらば我い主人へ忠もたち伊身の望とも遂るといふもの聞分給へと手を下れば流石に百代も争ひ兼「妾とてもそれ程の隙を彼れこれやしはせしわの茶座敷は人も来ずと料紙硯を圖四郎に渡し奥へ案内すれば手持ぶさたのち九郎尻目にかけて圖四郎は一問へ入りけり「義理も情も辨別ぬ武士とは見へぬぞ夫の仇敵

傷でも負せねば冥途へ行て言譯なしとあつて眞誠の立合なれば逆も勝れぬあの手利承知で負てくれる氣かそれも本意な老兎も角も妾は此處にて最期の念佛後生善所を願はん所持佛の位牌にさし向ひ禮拜なして打鳴す鐘鈴の聲も澄わたり南無阿彌陀佛〜お菊いさうしてゐるやられ程の孝行者勘當うけたを幸ひに男について行やつたは何をいふのも年若ゆゑ性根のないのか但しは又矢ッ張様子のある事かどの道助けて行く方が樟齊さのにも嬉しからうと獨り噫く此方には相手なければもち九郎「でこ〜打れて肝心の娘も若衆にまき上られまけには刺身と味淋阿呆めにいたふられさて引合ぬ役まわり此邊でけしては作者も立まいこれに袋助太刀して進上かい大勢ありで向へいつた指指が口が面憎ひ遠相流の手の内があつア見しらせたいなど腕撫さすり吐けども願みず百代は念佛に餘念なし折柄百姓の娘が此處へかけ来り「裏手の田圃で休んでゐたら胡散臭い男が一人り垣根を破つて逃てもつた變つた事でもありやせぬか氣を付さんせしども終ひ仕事で忙しいといひ捨て女は歸り行く百代はとつと心付き立上つて茶道口開きて見れば圖四郎は影も形もなかりけりもしやと物の隅々をもち九郎も共々探せや更に行衛の知れざるも糸竹垣と押破り人の跡たる跡あれば百代は呆る、のまならじ「人品といひ手練といひ卑怯未練とあながちに定められぬと眞晝中大小預けて腰をあげ逃失しこそ不審けれといへハ頭を左右に掉「そうでない〜ないなる程一人り一人なら女中のたまへに負もせま

いが遠江では屈指のもち九郎が居合せて異なる所へ出かけたを見て彼の男も危険なり分別を急にかへ手紙を替のは遣仕度垣根を四ッ旬旬犬武士義理も法も知らぬ奴矢ッ張息子といひ合せ娘をうま〜たらしてみありや人質にとつたのだ先も偽ばかりで廻しものかも知はせぬ油斷をしてハ身の破滅心をかけた娘もふらつ顔みもせぬ事ながら住れ付ての伏客で人の弱みは見捨

てられぬ今日からは獨りもの心細い事であらう萬事にわしが氣をつけようと最願もまげにいひ
 なして最前百代が打捨し紙さし金など取片付働さふりも五月蠅けれを胸の屈托心の惑ひ假に
 も語ふ人なきをりふますげなくのみも言ひ兼つ、少しは力にれもうも女氣夕養なをもてなまけ
 ればもち九郎と大きに悦び尙は何にくれと語らひて其夜は此處に宿りけり
 二見江村の大江寺圓露軒厭樂は佛の諭しなごやありけん今年は頻りに秩父板東觀世音の靈場に
 詣でまほしく彌生の頃紀の國より近江美濃と先西國うち修しが道より心害ねいて夏の未輕じ
 て一先伊勢に立歸り二月ばかり打臥たりしが八月中旬意り果ぬ思ひ立たる事なれば九月末より
 吾妻跡み赴かんとて杖と笠頭陀の外に之身に付ぬ道心法師の旅粧心安げに見れども捨ても此世
 の内なれば擅那講中などいふもの六七人もあんなればあそこやこの暇乞ひまた病らひし其折
 に療治を請ひし松下の藥師豐橋宗民の藥りの料もまだ送らば豆金四五兩紙に包みて持て行き
 禮を述べ吾妻へ赴ふくよしを語れば宗民暫し打傾むき少し語らふ事ありとて娘をさるに茶を運
 はせ菓子なき出してさていふやう「御存じもあるまいが此れさいの實の母は五年前に死去して
 今の女房れふすは後妻繼しき中の上からぬはなべて浮世の定りながたふすほき繼子あくみす
 る者も又ござるまいてまへと元信濃國下諏訪の在のもの元が山家の數醫者で數多の病人手がけ
 ねば實に療治は未熟なれど幼少時から和田の山で藥をどるが日毎の商賣慣るれば慣て本造の本
 は小づつ分りますすそれに付き此尼も此向へ來てから共く近所の山や谷くで藥りをさがし
 れのづから草や木の名を少とかり覺へてゐる其外は藝もしつけず行義も教へずよい事とては知
 らねども標致も人並氣立といふては真にやさしい生れつきあれらば塵ほども粗末にするのぢ
 やござらねど失ッ張ればよい様に叱やら振るやら可愛體は生傷だらけそれ見て黙つてゐる

でもなければ一口いへば百口も喋り散して手當り次第投擲するやら破壞やら道具にも傷のない
 物は一ツもござりませぬ退出してやらうにも里は其昔につぶれてしまひ親戚はあれ共よからぬ
 浪人離縁など、いひだしたらなにやうな事をするかそれを安じて黙て暮るも力は弱くとまよ
 りけんさもぬけた情弱もの胸の苦しさを推量あれあらう事か此頃も天王の森の池の主大蛇かな
 にかは知らずれふすはれさいに弟のさち松れ負せて池の傍に遊ばせさち松に出精して大宮司の
 婿子なれぬさいは此の池の主大蛇の嫁にとらしてやる大蛇よ早く連れて行けと戯れなれども幾度
 もれなじ事のみいふ程に小供心に恐怖がりそれからあやにく吾妻から貰た繪本にある姫君犬の
 見いれし事のあるを讀で一層辯さづめ此四五は食事も進まず若や病氣が出るかも知れじよし
 左なくとも何處で打殺されて親も子も憂目を見うと安じにくれ兎角内にはれかぬがよい樟
 齊といふ兵法者此の邊に住れしが人手にか、つて不慮の最期それが娘とれさいとは年頃もれな
 じほご中睦暮して遊び朋輩後この里に住とびて吾妻の方へ漂よいしが今と遠州菊川の宿に住
 ひて植木商賣夏の頃も便して憂年月をくらんよりと此方へれはせれよばすながらお世話をし
 うと世事といふ物かは知らず實ある文体此方のごとくこの親子もなさぬ中でも天地雲泥繼母繼
 子のわれこそ手本遠ても彼處ならばゆきたい者ぢやとれさいいへどつれて行くにもてまへは
 病身足腰もさかぬとしより貴僧と同老老人ながら病後でもその健かさ又幸ひに當國行脚法師が
 若い女を連れてはいかゞしい様おもあり初旅なりしたともなひ小供で定免て修迷惑氣の毒之山
 々なから人を救ふは出家の役遠州までこの娘連れていつてと下さるまいか今日と女房もさち松を
 つび伊神さまへ參宮し日が暮れば歸らぬゆゑ緩々咄しも出来ました俄思案のれ頼となれど承諾
 して下されぬかと餘義なき体に打點頭「戯れを真とし池の主鯉ありて害をなすとも母の繼母實

の親のもるさぬ娘道理をいわば害もあらじ砂石集といふ本に恰度なな玄咄まがあり昔も今も
 母の繼子を憎むは因果の奇合ひ罪を滅すためならず菊川に止るとも未順禮をする氣なら何處
 でも運て行く愚僧は最早實の木竹色めかまひ心のないは先生の承知の事仕度がよくは朝早う
 まで運て來給へと厭樂異義なく諾ひければ宗民大さに悦びて心の限り侍遇つそれより厭樂寺に
 歸りて次の日にさいを伴ないて遙けき旅に立出けり父に名残は惜けれと一ツにゐる程母の胸
 火の燃に衝もなくひどやりならぬ旅の空布巾は白き笈摺の皆紅に染ばかり袂の時雨ふ見過し
 て二見の立石伏拜み片田の社淺間山それよりうちの大宮へ暇乞の幣奉まつり歸り來て一宮川
 の岸の杉叢杉が今に思ひ亂る、心の糸とけて寐れぬ旅の宿串田に今夜之杖を休めこれより其處
 此處名高き寺尊き社參詣しつ、十月の十日ばかり三河の赤坂打越て國府の町に來か、りしが近
 年遠江濱名の郡の海岸は明應の頃地震に崩れ湖と海一ツになり名にたふ橋も架るによしなく舟
 路となりて往來の旅人便なき事の歎きしに又此傍の山よりして近き頃螺の貝ぬけ出し事ありて
 山は崩け川は埋れ前鯛の原邊も深淵となりければ大方の人は通はず險き山ひろき野の道さへ
 遠きは知つ、も或は秋葉の山にかしり又本坂といふを通り今功の渡りを行ねば厭樂も野口に
 、り豊川と左りに見本の河原を横切て須瀬山本坂打越つ、三ヶ日大谷けがひろ岡山より山をわ
 けゆく程に三方が原といふに至りぬ四里もあるべき野原にて見渡すかぎり家もなく芒淺茅の生
 繁り大方裏葉は枯わたり風寒く空さへ曇り心細さは限りもあらずれさいと山家に生長て後海邊
 お人となり物淋さには慣れたれども旅せし事はあらざる上にもつれなく國は出しものから父上は
 如何にして在ならんと夜となく日となく其事のみ心にかしり一層足の疲も強く昨日今日の險
 まき山路に疲れて歩みも涉さらず今宵は必ず引馬まで行では野邊にて日や暮さんと厭樂は焦立

てどわれさへ感胃の心地まで頭重く身も弱りぬ此時年も若ならず人品よげなる男子二人、旗人
 を乗する竹の駕籠擔て此處へ來か、りけるが強進むるにあらねども我等は引馬へ隨る人足婦
 さまは疲た様子に供をまたらいかにといふふ女渡得舟の心地してれさいを乗すればこりや輕い
 草臥だすと笠も邪魔重そうな頭陀袋こ、へつけんど家根に結へ「秋の日は最短かし急ぎませう
 と前に立ち宙を飛して駈出つ厭樂も遅れじと杖を力に引添ゆく程にいつしかに日も入りて足下
 開くなれと尙里ある所へ出ばこそ險しき山路になりけり厭樂諸國を廻りしが此道は今日初め
 駕籠擔者に任せしが此時忽ち心付く此は騙畧の類ひにてさもなき所へ連れ行ならずや最々
 怪しと呼びかくれと答へなすで坂を登り坂を下りて駈行お又や、廣平坦地ありこは曲事と胸ふ
 たがり十足を一足飛かたり止むれば駕籠を下にふき先棒はせしら笑ひ「この可愛らしい辨天を
 布信和尚の大黒にはちと杉林の澤山ある光明山の山奥に御殿を立て御在ます遍照丸といふ大王
 その妾にするのだけは十二一重で樂の仕厭れ娘は眞に仕合せもの「左様だ〜と坊主は道く放
 捨して道中するが身分相應衣服だけは許して遣止だてして争がふと打殺すそと息杖を二人り
 振上れば「小癩な盜賊後悔するな出家はすれと昔しは武士痛め見ぬ間に詫まつて道まで送ら
 ば許して遣んと罵詈すれば「シャア而倒なと打てか、るをさしめる竹杖一打二打戦ふは後棒は
 息杖打捨てわななくれさいの小腕どり用意の早繩引まごさす足を押まげくる〜縛しめ肩に引
 撥行ばそれ遣てはどあがけども隙なく打込む息杖に竹杖は早や打破れ身之疲れ心地を勝れず
 打負大地に厭樂は倒れて起も得上らず命をどらんも無益なりと盜人は頭陀袋包なんどを手に下
 げて其儘此處を立去りぬ厭樂不慮の災難に預りの女を失ひいはん方なき過りなれば打身の痛も
 思はれず追んとすれと腰立す無念無念と狂ひ舞り更に正体なかりけりいかにも詮やうなく今

宵此處に野宿きて夜すがら大悲の御名を唱へたさい危難を免かれて恙なく命をたもち再び回
 會ひぬべく不思議の利益あらまめ給へと一心こらして夜を明し身は痛めども名も知ぬ此處にか
 べきならねば足の行に任せつゝ南東をはるくゆけば以前の野原に出にけりそれより有玉小池
 方島敷の山里越てかやんばとふ村ありてぬこれ東海の大路なり又觀音の御園をどるに東
 へ行との論しなれば其夜は引馬の宿に宿り又の日夕方佐夜の中山の峠にいたり世に子育の觀音
 とよふ辻堂にたちいつて佛を拜し經を讀つゝ今も早や菊川の宿に少かの道なれども植樹賣る某
 しの元へ行ばなほどかいんいかで少々の利益も得ていひわけの種にせまほしどのままいか
 音訪やるべき愚僧を憐れとばほしめし目前奇特と見せしめ給へと更に心を一にして普門梵を讀
 びに思はず疲れて睡るぬ
 却説幸助と菊と共にめろ作に連れられて門までは出たりしが此場のゑさまりはかならんと立退
 ん心地もせねば忍びて様子を窺ふに前に記し、こどくなればもち九郎のさかしらは最憎けれ
 すべき様なく先鬼も角もめろ作が言葉にしたがいた菊と共に母の獨り住む無見山の麓な
 る西山村の茅屋に其夜は一夜明しけるが思ひ合たる中なれば歎慕も限りなく親の情の勘當に
 さとりなきには似たれども棒齊の亡靈の恨のほさを思ひまはせば互ひに心澄やらす此處に貧
 山家なれば夜の物も一ツ二ツこれを二人りに着せ被つゝめろ作は母と共に圍爐理に蘆葉を焚く
 べて霜夜の寒さを堪ゆるさま見ては一夜もゐる空なく破れ屏風の際番となれく二人りは伏
 して夢も結ばず明したりしが斯て果べき事にもあらねば幸助は口任せ「引馬の城にの斯様の
 心安き家あれば今日いそれへ行くべしとれ菊をも伴ひて西坂の方へと立出るおろろ作は何處
 までもと送り來るを幸助止めて「そちは百代に詫事して元の通りお勤むるが矢張二人りへ忠義

なり此處より歸りて菊川へ疾行くべしとすかして退避兼て菊と語りあひ悲極めし上なりけ
 れば其日は西坂の家に隠れ居黄昏頃より二人りは立出中山の方へと起さける
 幸助は菊を伴ひ引馬の城へ行といひなしめろ作を欺むきつ分れて歸るを見届け西坂に身と置
 し黄昏頃より坂道の險きをも厭ひなく佐夜の中山下り登りこれも子育觀音に現世の罪は重くと
 も後主善所と祈念して我死せんと定めたる親が淵へ急ぎつゝ大鹿村へ横折て程なく彼所へい
 たり着ぬ昔し白菊姫といふが繼母に憎まれて此淵に沈み果しといふ古き物語りあり又龜と呼ぶ
 石もわり龜の萬世白菊の千年の秋も徒らは短かき齡は十六菊母の根分のたなれ草枯はれしと幸
 助いふ憐「幼少けれども甫之助とて弟ぐさもわれとあり一本菊にもあらざれば血統は残る笹草
 其方は長へ會我菊の仇討首尾よく遂給へと聞てれ菊と恨顔に前と死で妾しのと残りぐさとは
 うよくな二人り一統と契りぐさ瓦よもぎや變らじのとの葉つるも滯てはす山路の菊の露の間に
 最早妾しを厭なくさ千万菊の物思ひするより先へ妾しからと川邊の小石を執りいれ南無阿彌陀
 佛と水岸をさしつかく行を止むる幸助今の儀にいふたのは矢ッ張此方の愚痴なるぞや仇同士
 の死情に一ツのなりで死ならば矢張親への不孝ぞと某しは腹を切り其方と身をば沈る約束我切
 腹を見た上で死ねば此所へ一緒に來た甲斐がないといふ者心殘のない様お長の分れじやまア此
 所へと招かれければれ菊の氣も弱りそんならば一門へ行ても此ては下さんせぬかゝる嬉し
 ど寄添へば幸助と打歎き「思ひもよらぬ某しゆる蕾の花を散すかと顔打守り男泣きれ菊も涙に
 暮けるび暫くあつて左右へ分れ互に經文讀誦し終り幸助は襟をしくつろげさし添すらりと引振
 けばれ菊は腕に足つま立互に顔を見合せて又潜々と泣きあたり「いつまで泣いても同じ事嗚呼去
 ながら外々の情死とて事變り親々によりは情けの勘當忌く者もなく金銀ふつまつて死といふに

もわらず只さこまでも仇同士此世の縁は薄くとも未来で添ふと約束をなさば一度は死ぬ體頓て
 あちらで會といふ樂しみもあるなれど二人りが中は冥途でも矢ッ張添へば其方は不幸われはい
 よく道知らず義理といふ物世になくばこんな愛目もあるまい者と愚痴も無理とい思はれず
 菊はわつと泣出し「おんにさうでござんした妾しは冥途で會を樂しみに死ぬ心といふて現世に
 長らへていたとでも添れぬ中まアどうしたらよからうと身を振わして歎きけるば此愛き思ひを
 せんよりも兎も角も妾しは死ぬれぬれくれたさア一緒お南無阿彌陀佛「まア〜」待たま
 つたど傍なる尾花芽の草影より走り出たる一人りの旅僧二人りの中へずいといり「事の仔細と
 ありげなるがわたら若者身殺に何してならうか二人りとも死を止りて一ト通り隠匿さつしやる
 大事か知らずいふて苦まうない事なら講を語たつて聞されよ死んでかなわぬことならば無理に
 は止めぬ其時は後吊らふが出家の役間にあふまいが膝ども談合寛と死でも死ぬさうな者じやと
 いはれて二人りも死かぬ最前よりの在園を見しかと思へば最取しかの法師又いへらく「人の上
 を聞く時之先づ我が上をいふが定まり愚僧は伊勢の二見に住んで厭樂といふ道心坊主坂東順禮
 思ひ立この東路へ赴むく途中ふいの炎難さし起り死てもせねば言譯の出来ぬ所を佛の力頼みに
 生てゐる其仔細まづかく〜とありし次第語りて其後中山の觀世音へ祈誓をかけたんまへに伏
 むたるに思はず知らず居睡つと見れば我身は谷川の淵に望みて立るたり此時空お響ありて大鹿
 村の櫻が淵へ早く行けど三度まで宣まふと夢は覺ぬこれぞ菩薩の示現ならんと三拜しあへず身
 を起し處の人に道を問ひ夕月の光りを力にこの所へたどりつき彼方此方と見居たるに二人り
 は覺悟の体には知らぬと此通り止め申したといひければ菊は伊勢にて朋輩同士にさいが事
 ども聞につけ餘所の人とも思はれず幸助と交る〜ありし事ども詳細に語れば歴樂は聞毎に以

たくらどろき歎きしが打身の痛み旅勞れ一ツに重なり山川の夜氣に打れまゆまなるか俄に吐し
 氣を失なひ日れかの景色に見えければ幸助は腰さげの藥を與へた菊と共に介抱なすにからく去
 て蘇生りしが掛々しくと物もいはれず其上にて足とも動かされと是を見捨て死なれもせず詮
 方盡て幸助と肩に引掛けられ海を洋なひ菊川の宿に行物徐かなる旅籠屋を頼みて其處に宿りつ、
 懇切に勞はりければ次の日の晝頃は大概病も愈りけり。是よりは菊川の百代がを記すべしも
 ち九郎は夜に入てもなほ歸るべきけまもなく用心の折柄なれば女の一人の氣すかはし西坂へ
 歸るも逆し今夜は此處に一宿せん萬一の時の爲にもならんと動かねは術もなく言に任せて坐敷
 に臥せつもち九郎のそむりもせず深切らしく言ふ儼ハ「仇討とは言ふもの、昔の兎もあれ今は
 問住居植木屋ふせひて打々發失及物三味實不敵夫の仇ならば誘領主儘く訴て誘指揮にまかせ
 るはづ然も眞書で言へと道端誰知らぬ者もあるまい我等ハ西坂庄が窪村三村の村長の束をす
 るは元來にて嚴密から内々の隠目付を云いつけられ力は強し手は達て俠氣とあり金もありそこ
 で自然と人が敬まい頭を上るものはなしそこで以て物事を律義に隠した事はならねば今日の次
 弟も其筋へ内々いはいはねば濟す言が最期其許も又勘當したなと〜いつても内端の事も可愛い
 れむすも先づ詮義の濟まではよかれ懇かれ縛られて聞い所へ行かねばなるまい苦々しい犬武士
 の仕方此方も腹が立助太刀せうとは思つたがよく老がへれば無分別怖ひ事〜とはいふもの
 、火にも入り水にも入つて強に又挫いでやるのが彼の俠氣なんど物は相談づ〜惚たといふでは
 なけれども憎ふはな此向の娘たれが嫁に貰ひませうさうすれば何處からもいらぬ手のない
 眞の仇眞書の及物騒ぎもそりやなんとでもいひくるめ道理のつけ機幾らもありそれも縁なき他
 人にいらぬ骨折身が六切縁組いよ〜承知ならば人質にとられた娘明日までにはうけあつて盗

みだして運て歸ると力もなければ金もなく隠れ目付の素よりせず又誰一人り尊敬す只村長の二子ばかりは偽わりならねむれ一人り智慧も富有も勝れし様に百代を怖えこりすまふめろ作をも欺むきて花菊を奪へん計略見へまぐばかりの拙ななれば百代之大概それとは悟れどあまりすげなくいひ放たば跡なき事をもいひふらし我身のためにもなるま志とよきやど答つこの日はずかしこしらへて西坂へ返したりしが屢々来りて最五月蠅し其後二日はかりへてめろ作れづ／＼入来りぬ「花菊さまと幸助さのわしが在所へ連れゆき」は全くの出来心此れもうけずしてこちらから暇を呉た様な仕方いこれまでない粗忽そこで何卒昔しの通りには遣ひなされて下さりませとこの様にいつては二人りさまが花仰りつけ忘れぬやうに思て来まえたみなさまが伊無事な様にと黄金薬師へ参りました所で花庭の草の中にこんな菊が咲てゐて此向にも未見ぬ花珍しさに根からほつて土産にいたしましたこれは誰もいひつけぬ私しの地金ぢやとさしたせば百代は詠笑「これの似ても菊ではあるまい香もなく葉も尖り何といふ草か知す今までのまゝ見かけぬ物植てゐて職人に見せたらなんどか名が知れよう後悔したら留守もなし以前のように使ふてやらうと不審の咄ぬ圃四郎親子我子の事も聞たさに詫を幸ひ止めれきつ又三日ばかり日を送るに大井川の水増りてこの菊川の底にも逗留の旅人多く徒然にまかせ遊びを招き打連立て菊見に群きて酒の謠ひ舞なごして夜まで人のひき切す心ろならずもあひしらひ百代も覺えず酒を過ぎ夜更て寐床に入りけるが身も疲れ酔もいで前後もまらず眠ろみしを朝も遅く起出て見れば雨戸一枚明き箆等手箱の錠も損じ袋戸など開放ち盗人入りしさまなれば失し物を改むるに圃 郎より預かりし刀脇差紙差黄金この品のみ紛失して例の裏の竹垣に出入りせし跡しるく見ゆことも九郎がなせし口さなり逆ても怖しもさかぬ女此体では行がたまぬ

の品盗めば暫らくは暖まるのみならずその盗人の大方斯と火をたきつけて腹立たせ天津が方へのりださすると大なり小なり事になる其機に乗て計略をめぐらせばあの娘過せらせて手に入るうまし／＼ともち九郎例の浅き智慧をふるひあるまじき心を起し前に一夜宿りし時かの品々をたさめし所又戸締なご覺へたり日この邊りへ遊びに来り酔て臥たる事さへ知り忍び入りて盗み出さして何気なく訪音信つめろ作より聞たりとて其品々を盗みしと圃四郎がわざならんかれ道だて去て金をも取らず又腰のものを捨てたを借しく思ひて盗み人を頼みしか自から来てとり出したるかの二ッは出さ返そがへすも人でなしとさもあるべくいひなすに百代も女の心淺く實にさもこそと怒に堪えず聞かはずればこの宿を疾引き拂ひ去様子なりさらばいつを限りとして待てゐるべき事にもわらねば彼方より手を出さぬ先彼邸第へ此方より踏こんで兎も角もなるべしと胸を定め家の内もよく片付明日は引馬へ行へまど大方用意も調ひけるれりふし馬に打跨りめせき笠に顔を匿し供人三人四人連たる武士来りて案内をさせ聞まはしといひいるに客をうくべき心もなければさばかりあるよしめろ作にはせて奥へ入れざれば本意なげに出行ぬとばかりありて門の戸より又人音して乗物を垂興をかきつら繰て案内もなく入来りぬめろ作とちやつとかけ出で「さつこい通すまい今日は賣切申し明日来り／＼此許は大どりこみ一緒に盆も正月も来た様で亂騒ぎそこでかの盆歌の兩國橋や長い兩國橋や長い馬もいやよお駕籠もいやよさアお歸りどまやべりつゞけこりや大變／＼己が理解を以ひ聞す其間に入は一人もなくなり残つたは駕籠二丁もした神さん／＼ごこの奴が大そうな捨ものをして行ました呼原そのの安けれぬ菊を見せて呉るといふと又前倒だかどうしませうもしへ／＼とよび立てられ百代も忙てたち出れば乗物の戸を内より開きやをち刀を携へて立上るは天津圃四郎見るより百代は打驚

乃此方よりと思ひ去所此所へ来るは佛の導びき神の利か嬉しやと傍ら放さぬ夫の篋刀と
 り上げずらりと抜其ま、様より飛下りて覺へたるは王國四郎が有先さつくと切りこんだりやれ
 早まるなふ事ありと痛傷に屈せず圃四郎とわれも刀を抜持て又切つくるをどうけひづはす
 えてさらぬかすを左右へ避けてのりこそく、勢ひ鋭き百代が刀筋うけ指じて圃四郎と又三四が
 處も傷ひ負ひぬされども軟弱き女の掌かすり傷あて浅ければ猶切れくといはぬばかり戦かふ
 様にさし寄る五体にも又々數多の傷負流石に處りて尻尾に刺れ止免を刺んと乗かゝるを腕首と
 つて遠くへ突退「百代どの斯まで多く傷を負せ能切たでかされと最早望達せし自然息あるう
 ちにいひ置たき仔細ありといふのも聞ず「態と殺めて道だてをしたやうに見せた黄金俄かにほ
 しうなつたのか又まるごして逃ながら預けし刀か惜いのか矢尻をさつて盗み出し今に始めぬ事
 なから夫ども猫ども畜生ともいほう様なき人非人夫の篋の刀を穢すは勿体なけれと是非がない
 畜生の遺言は聞ても分らぬ獄つて死ねど罵詈言樂を聞とがめ「腰の物を預けしまゝ、身を穩せし
 は武士の名を捨てても君を重する忠義に却つて耻とい思はず但し黄金と原の物盗みまどの某まに
 併し覺へぬ冤罪の濡衣其明りを立ぬうち痛傷は負ては滅多にや死れぬ我盗しといふ証據詳
 しくいと去やれぬれぬ又いふ事ありと百代が白刃をなんの苦もなく打ると腕首つかんで働ら
 かさず惜しなから其夜の事ども又もち九郎がいひし事語れ圃四郎打笑ひ「疑のはる、も無理
 ならぬぞ今わが語る逐一を聞て惑を解るべし近頃常陸豊田郡光明山の奥山に衆を築きどり籠る
 盜賊の張本あり通照丸と名をまびて元津の國の浄土宗某寺の所化のよし小盗人を數多從へ駿
 遠三の三國の富貴の家に押入て財寶を奪ひとり又容貌女といへば住家へ連れゆき姦淫なし
 火を放ち人を殺し漸々に勢ひ勝り引馬の城へも押寄て城をなさんず結構なりと民の騒ぎ大方な

らず櫛の齒をひく日毎の訴へ殿にも安き御心なくわれに捕手を命せられ窺かお地方詮義のたえ
 此處へ出張し旅宿をさして同家中より内意の使ひ初めて菊見に來りしあり持來りし書狀こそ殿
 の仰せの密事の御用期極くくと打明て勝負を述よといふども許すまじき身の色素より他
 言はせられぬ大事傍く、耻を耻とせず油断をさせて逃れ出其ま、引馬へ馳せ歸り次の日の曉さ
 より光明山へと打立て軍慮に睡む隙もなしわれなにの隙ありて此處まで盗みに來るべきか黄
 金の惜さるものならば初をより殺しもせ今日しも態くこの處へ勝負をせんとて來りしにても
 自然と和らげばさるこそあらめと手を寛免負傷に弱るさまもなく「さてかの賊主通照丸之手に
 餘る大敵なれども多くの軍勢出すおれよば玄奇計を施こし味方を損せずたゞ一戦ふ賊塞を洗が
 如く亡ぼし盡しかれかためた奪はれし民の妻子黄金器物種々の寶も主あるは皆其許へ歸し與
 へ僅か七日を過さぬまに事落もなく落着きたるは君への忠勤身の本懐此上の思ひでなしかし
 ながら輝齊の秘傳を傳へこれ一得其思は須彌滄海ぞや早や一十日も世に長らへ身は物と思ひ
 せじと殿へ其由中し上げ二男甫の助に家督の願ひ聞濟わつて今は早や心残り少まもなし光明山
 より歸りの御風お胃され心地勝れず病重りて萬一病症にて相果なば互お意恨の恨りならんぞ病
 をおして乗物ながら來りし所ろ物をもいはず切つけられしと盗みさへしたりし無法の武士と
 腹立のあまりならん其疑ひも大方に解しと見ゆれば何れより大慶今い死すとも悔まはなけれと
 猶ほいひぬく事これかれありたん身が弟に源藏といふものゝあらざりしかと問へば百代は打登
 ろき「それをどうして其許が御存じあるかと不審は「さらば其よしかたるべしわれ日頃藥師如
 來を信ずるをもて去頃も常宿にあり去程黄金藥師へ時折節參詣なせまがある朝其容子非人のこ

どくにてわが懐中へ手を入れ物を取らんとするものあり其ま捕て顔を見れば若き時妾方にて遣しものなれば憎くもわり不憫にも思ひて其儘宿りへ引連れ懇切に意見を加へ少しの金をかれに與へ其後善らぬ棄なせどと威しく叱て追遣をかもの之立去らず涙を流して恩を謝した家奉公せし後は一人りの姉の縁につれ浪華へゆきて元服なしそれより身持散く悪く後盗人の計に似り近き頃まで光朝山の通照丸の手下となり大日冠者といはれたり最愛の妾の女に戯れしと明証の証言をとり用ゐる眞偽も糾さず通照丸死ばかりに責難既に命もなかりし所からして逃れ出で此や彼處漂泊しが身節も不自由ねば乞食して命をつなぐも食や食す斯程の恥をうけながらまだ一思必は止まする顔も忘れ手ざしをして申し譯はなれどもかく情にあづかれば少しは伊恩も送りたく胸の内もわかしたし恨みある通照丸もし伊領主より捕手も参らば計しく知つたる山の案内近道抜道悉くく報道申していびきをなしかれらにした、か愛目をみせわが身の打身も晴したく國のたためをなすなれば罪咎も又軽くならんと思ひながら今日の仕業なにいふても採用も下さるまゝと述懐らまゝいふのは矢張開謀の其手にはのるまじと思へば悲と悦とふさまにて計り事の裏をかば用ゐる所なきにもあらじと其ま宿りに止れきて山々溪々／＼の地理要害幾度もとひ糾すに其答へいづも變らずかゝる折しも殿よりの嚴命はこれ幸ひと大日冠者を先に立て又手勢には別に又計略を詳しくさとし彼奴が言葉は實にても偽わりにてもそれに付き勝利を得べき自由の軍略皆棒齊の傳授奇術それに怖しか素よりして眞實を語りまものなるか大日冠者がいふに違はず近道抜道切ふさぎ賊徒一人りも討洩さすこれかもの効なれば首とねらるべき罪と宥され鯨島へ流罪に處せられ今日は船出の日なるべしかれが浪華の姉といふは新町の玉柏へ遊女に賣れて柏木とよんだるまゝを聞しといへりそれは伊身

が事ならんぞ其姉もやと遠からぬ菊川に住めりといへばいよくかれは耻入りながらついでもあらば我身の上傳へ給へといひ去事あり名は源藏といひしといへり烈女の姉に似ぬ惡徒功はあれども某しと感心せざるかれが行狀御身に告るも氣の毒ながらいはで死るも心が、りど事の大略語りぬといふ聲もやしく涙を流して弱りゆくこそ是非なけれ間に百代之面目なくさしうつふいて言葉な去固四郎は苦まき息をつぎ「この上に又仔細を語り伊身に渡すものこそあれ賊黨に捕われし女の中に儼れて容貌よき年尚ほ若き娘あり病ひに悩む休なれば殊に悼わり親元を問糾すくたんの女は伊勢の二見松下にてしかく／＼の着のよし當國に知智ありて厭樂といふ願禮の僧にしたがひ此國まで来りし道にて賊に捕られかしにある事五日に過ぎずかれ若れを思慮あるものにて志さず尋常ならず盗人のた先身を穢さば生長らへても甲斐なまど命を捨て語かはす責難難ハ即坐に死へく軟柔生れに遍照丸も荒くもあたらす一間に入れ置恐迫しつ嫌しつ口説やまらずかの女思ふ様人目を忍び此山を遁去らんにも道之知らず去迎此所にうかく暮さば終にはかれらが耻かしめうけなん事も口惜ければ兎角に死こそまなめどかれはくすまの娘にて草木の能毒よく知つたり窓の摺端の岩のいざまに八重に花咲く萱草ありこれを食は人の死よし唐の交に記してあればこれ幸ひと取て食ふに暫らくあつて目障き足なへて胸若しく物も覺ぬほごなれど去とて死べきまではあらず最せつなげにうめきて臥に遍照丸も病に悩む女をれかすべきにもあらねば最懇切に介抱させ其病の平癒をまてりさありし條どに某し忍び道より二ツに打出て残らず誅讞したりしかば娘は恙がなき事をえたりかくて引馬へ連れ歸りて藥を與たへしのは今は之や本腹したり薬師の娘のゆゑなるかかれも常に薬師を信じくたんの山にありし日もこの伊佛を祈りしよしかの毒藥のそこにありて死べき程に之中もせず病て危難を遁れまど運強きの

とくにてわが懐中へ手をとらし入れ物を取らんとするものあり其ま捕て顔を見れば若き時妾方にて遣しものなれば憎くもあり不憫にも思ひて其儘宿りへ引連れ懇切に慰めを加へ少しの金をかれに與へ其後善らぬ業なせど感しく叱て追遣をかのもの之立去らず涙を流して恩を謝した家本公せし後は一人りの姉の縁につれ浪華へゆきて元服なしそれより身持散らゝ悪く後盗人の料に似り近き頃まで光明山の遍照丸の手下となり大日冠者といはれたり最愛の妾の女に感れしと朋輩の讒言をとり用ゐる眞偽も糺さず遍照丸死ばかりに責難既命もなかりし所からくして逃れ出で此や彼處漂泊しが身節も不自由ねば乞食して命をつなぐも食や食す斯程の恥をうけながらまた一悪必は止まず顔も忘れ手さしをして中し譯はなれどもかく情にあづかれば少しは思も送りたく胸の内もあかしたし恨みある遍照丸もし領主より捕手も参らば詳しく知つたる山の案内近道抜道悉くく報道中して、ひききなむかれらにした、か愛目もみせわが身の打身も晴したく國のたためをなすなれば罪咎も又輕くならんと思ひながら今日の仕業なをいふても採用も下さるまゝと逃、懐らまゝいふのは矢張間諜もの其手にはのるまじと思へば態と悦ぶまゝにて計り事の裏をか、は用ゐる所なきにもあらじと其ま宿りに止れさて山々溪々一の地理要害幾度もとひ糺すに其答へいづも變らずかゝる折しも殿よりの嚴命はこれ幸ひと大日冠者を先に立て又手勢には別に又計略を詳しくさとし彼奴が言葉は實に不も偽わりにてもそれに付き勝利を得べき自由の軍略者傳授奇術をこれに怖しか素よりして眞實を語りまものなるか大日冠者がいふに違はず近道抜道切なき賊徒一人りも討洩さずこれかのもの、効なれば首こねらるべき罪と若され飯島、流罪に處せられ今日は船出の日なるべしかれが浪華の姉といふは新町の玉柏へ遊女に賣れて柏木とよんたるまゝを聞きといへりそれは身

が事ならんぞ其姉も不ぞ遠からぬ菊川に住めりといへばいよくかれは耻入りながらついでもあらば我身の上傳へ給へといひま事あり名は源藏といひしといへり烈女の姉に似ぬ悪徒功はあれども某しと感心せざるかれが行狀御身に告るも氣の毒ながらいはで死るも心が、りど事の大略語りれくといふ聲もや、く濡て弱りゆくこそ是非なけれ聞に百代之面目なくさしうづついて言葉な玄圃四郎は苦まき息をつぎ「この上に又仔細を語り身身に渡さるものこそわれ賊塞に捕われし女の中に優れて容貌よき年尙ほ若き娘あり病ひに悩む休なれば殊に悼わり親元を問糺すくだんの女は伊勢の二見松下にてしか、の者のよし當國に知智ありて厭棄といふ順禮の僧にしたがひ此國まで来りし道にて賊に捕れかしにある事五日に過ずかれ若れと思慮あるものにて志ま尋常ならず盗人のた免身を穢さば生長らへても甲斐なまど命を捨て諾かはす賢難難ハ即坐に死へく軟柔生れに遍照丸も荒くもあたらす一間に入れ置恐迫しつ嫌しつ口説やますかの女思ふ様人目を忍び此山を遁去らんにも道之知らず去迎此所にうかく暮さば終にはかれらが耻かしめうけなん事も口惜ければ兎角に死こそまならめどかれはくすまの娘にて草木の能毒よく知つたり窓の擔端の岩のいさまに八重に花咲く萱草ありこれを食は人の死よし唐の文に記してあればこれ幸ひと取て食ふに暫らくあつて目暈き足なへて胸若しく物も覺ぬほごなれど去とて死べきままでにはあらず最せつなげにうめきて臥に遍照丸も病に悩む女をれかすべきにもあらねば最懇切に介抱させ其病の平癒をまてりさありし條に某しら忍び道より二ツに打出て残らず誅滅したりしかば娘は恙がなき事をえたりかくて引馬へ連れ歸りて藥を與たへしのは今はとや本腹したり薬師の娘のゆゑなるかかれも常に薬師を信じくだんの山にありし日もこの佛を祈りしよしかの毒藥のそこにありて死べき程に中もせず病て危難を遁れまど運強きの

とにあらす佛の利益と最と尊とをましてもかれが尋ねるものは外にもあらで身ら親子に昔々親しくなせしよしまかしの仔細ありて住所をあくがれ出しどぞ今その女も運來れりと後を見ればたれ怨籠と疾に這出で後ろあつて最前よりのこの場の在機夢覺る心地にはらりと氣を揉めたりまが百代の側へ進みより「伯父様さいでござんするた菊さんは何處にぞなにかの事と殿さまが今これ咄しをなされた通り便りないわたしの身の上御不憫がつて下さりませ厭樂さまといふゆ出家尋ねて出ではなさらぬかアそれよりはたばさまは意趣か意恨かどのさまに數多の手傷をたはせましなんの事かは知らねどもわたしは悲しい淺ましいとふるく泣ば百代もしをれ「これにはだんく深い睡ついで一口には語られずそれはたつてやもアよくとるく尋ねてようこそこれいでゆ出家さまは今日までもまだほざらぬぞ肝心のたまへが來のが向よりも嬉しいものゝとひひさせば「厭樂とかいふ所の法師の頭陀袋もそのまゝにとりかへして持参せり尋ね來らば渡すれよ今はいひふく事もなし早く止めを刺れよと胸板あらわしさしよすれば百代は頭を左右へふり「天津氏の物語り嘘言とはさらく思はれず萬事につけて真情ある心で盗み騙なごさつしやらう善はなませきこんたのは女の愚鈍さお耻かしうござります今更止めか刺れうかゆ自害なされて下されといふも涙はに鼻つまらせ「おさいさん娘も今での内にも天津氏と夫の仇義を重んじて殺されに日さくござつてこの始末本望遂し上からはわたしも生てとるぬ覺悟折角逢てまた直に別れるのとかれたへはさぞ心細くなるまいと氣の毒なれども是非がないといへばおさいははろく涙「厭樂さまの行衛之知すまへが死で下さんしてはわたしは誰を力にせうと百代にとりつき位出す圃四郎の吐息をつき「逆も止めは刺れまじ疑がひとでも晴れたらばわが悦びはこの上なま然ば自害し相果んと落散か刀をとり上げば暫くまでと聲をか

け坐敷の障子左右へ開放正面に坐したる今川籬之助長秋綾の胸服錦の袴數多の家來を後に從が「袂寛に播合せ「義なるかな天津圃四郎覺悟の上とはいひながら悼まじきその負傷と歎かるれば拾りより「とのには何とて輕くしく此處ら邊へ來給ひしか勿体なまと思上ればうなづきて此方に向ひ「加賀の樟齋杖の後家百代とは其方なるは元と賤じきもの、よし武士の種にもまさりし貞烈感するに余りありわが家來天津圃四郎その方が心底に賞で、いふべき事をいはず甘んぢて命を捨るこれ又義者の鑑といふべしかれわがためには莫大の忠義は數へもつくさへたこせしなれどあどに残りてゐる空なく最期のやうも見届けん早馬にて先へ駆ぬけ最前此處へ來りまに辞みて内へ入れざるは不審ながら一旦歸り再度せごより忍び入り與へ廻れば早この在様圃四郎が生あるうち樟齋が最期の始末詳細百代にわれ語らんさらば一層圃四郎も意恨をのこさず常佛せんあゝ應仁の兵亂より此處治まれば彼所亂れ文龜永正引繼ぎ縁内は殊に騒がしく義晴公も近江あつてよの靜謐なる年は稀なりされば諸國の大名小名互ひ小武をとり威をまめし合戦の用意に心を碎く然るにわが父左衛門殿奇代の軍師樟齋を短慮に任せ追放はれしは一生の過まりわれ前髪の前よりして歎きうれいて片時忘れず折ふし合戦の暇まなればこの時こそと三年前師走の雪をものどもせず太神宮へ参詣でといひなしてたく忍び武士ふんは圃四郎一人僕僅かにひきくしてよし田より船を走らせ彼所に着て参宮しそれより下賤の衣服を着し素浪人の形やつしあらぬ名をいひ只だ一人樟齋が菫をどひ軍學の弟子となり夜も晝も傍ら離れずあるべさかぎりの事を學び一人住の様子ゆゑ弟子たるものは師に仕へ斯こそすれど釋尊の昔に習ひて茶つみ水扱みまつけぬ業も寒氣も厭はず心をつくしまめやかに働らさしかば樟齋

も尋常ならずわれを愛し急場の古術軍師の禮義作法は指南せりかくてあるとき樟齋曰さらし心は進めぬと法がたき仔細ありて國司板島知輝とのに扶持せられ明日は彼方へ引移れば汝も彼所へ共に來れといはれて某し打撥らささてはこの程ひそかの使ひ何處よりか履く來し其事なりしか知る事のれそかりしこそ愚かなれと心一ツに思慮定まらず其は歸りて圃四郎み其由語り次の日は二人り彼所へ赴むきて真情を明し且が父の非道の計らひありしを詳板島之區が家に憾みさへあるものなれば殊に彼所の軍師にせんと世に口惜く其由なき詳細語りて彼方を辭し我味方にと頭を地に付交る言葉をつくし二人りと手を操み血の涙流まて請ば樟齋も氣の毒にや思ひけん履く吐息を繼たりしがものをいそぎ奥へ入り稱久しくして出來りあらぬ名を慮わりて師匠を欺むく表裏の武士客分にもあれざるもの、隠れし扶持之望ましからず愚で捕いたる親子主從重なる無禮ゆるされず首級おして板島へ初對面の土産にする刀を扱て切りかけた圃四郎二人りの中を隔て且がともだちなり軍法に優れしゆゑに推舉して伊文君のそこつを償ひ禮を厚し祿數多與へてまさかの川意にとあらぬ事まで言にせせ心の底を示せしにそれうれしども思ひいせで仕へぬならば仕へぬまで切害せんとは狂亂せしが忠義の切先さうけて見よ此方も乃うちふつて二打三打戦のひしが樟齋の物につまづき倒るる所を切りつけ既止むを刺にいたり樟齋苦痛を忍びていふやうわれ義によつて其許達の刃をかりて命を捨ぬ家傳の秘啓之殿へ進上讀みて軍慮の工風あれといひも終らず終に落命さて他家へも仕へぬ所存恩義に感じて允可をせしませわれに授けて人手にかゝり死失たるかとかつ歎きかつ悦びていふまに卷物切紙残らずとり出しなきがら之佛壇の前に直して播磨ひ親戚の者もある様子歸らば嘸々歎くべし仇を尋ぬる事あらばわれこそ討れて死べけれと圃四郎は持合せの黄金と姓名記したる

手札を入れて紙さしを死骸の枕にさし入れ骨を回向をなさんと立よれば佛壇に遺し文と書たる書狀一通あり今のほごにや書つらまいで見はやとてふりほごき椽端へ立出れば御而俄かに播磨り忽ち劇しき風起り書狀を吹卷空にひるあなやと叫へ甲斐もなく其ま、其處を立去りしがいかなる事をするまづらんか、れば實の圃四郎を仇とすべさやうはなけれを其證據とせんものもなく畢竟はわが身替りにわたら家來を非業に殺す心の内を察せよと語り給へは百代はこれかれ思ひ合せて感ひて晴れ面目なげにさまうつむけば圃四郎之完爾打笑と「樟齋の妻子の手に掛つて死んけ隠ての念願詳し殿の伊物語りに後室の疑ひも彌く晴れまど見れども風は巻れしかの遺書又わが腰物黄金と紙さし盗み去賊のあり所ろ知れぬは意恨なれと迎も長くはたまたぬ此身彼不所存な息子めり何處にとばのりいひさしてみなくさらばとわが刀とり直せば百代はまがり「なんば氣強ひ武士でも子に引されぬ者いなし幸助どのか見た仇討だに首尾よく濟は妾も其場で死ぬ覺悟ならう事なら今一度娘がそこらへ來て呉れて牌でも聞せてくれよかまど歎く心の通じてや幸助も菊之厭樂伴ひ此所へ入來り幸助は先殿を拜し斯様の場所がう萬事は伊免とせし折柄此法師に止められ始め終を詳しく語るをりしも法師と病ひ起り容易く治る様にもあらねばそこより歸りて常宿なる旅籠やをかり介抱せまか三日ほどにて全快しそれより其身の物語り伊勢より同道せし娘略取されしが其時にわが所持の品までも乗たる駕籠につけおきて奪はれまの眞に残念は身等二人りの頼々たち仇同士とはいはれるれよく思ふにさふはあらず奪はれませさすまじ觀世音へ祈願を籠不審の夢の告もあれば行末とても最頼もま死期を延して共く

に佛の利益を祈るへしといわれて二人も心變り今日まで旅籠屋にうかくと逗留して月桑園
になにやらん騒がえき事あるやうす尋常事ならずと告るに驚ろき何も思はず三ノ人かけ來り
しふこの有様驚ろさいつていはいへばねさいを見て悦ふ事大方ならずねさいも遍照丸に捕れて
死ぬべき命を圃四郎に助けられて厭樂の所持の品もとり散されず歸りしよしを告ければ厭樂は
頭陀袋受取て掻さぐり一通の書状をとりだせ殿の前にはさしたきつ「愚僧だに早く參らば新様
のまぎにもれよふまじ今詮なきものながら殿にも伊覽なされし上後室にも見せしめ給へ愚僧
この地へ參りし仔細と兩人既に申されければ再度は聞ゆまじさて今年より三ノ年以前師走の廿
日あまりのほごあかの水を吸に出しねりから東し南より怪まき風の吹來り落ちつたるは此一通
樂枝と名乗ばかり上には二人りへ書き遺す事とありて此通り先御覽じて下されといへば長秋手
にとり上げ讀ながさる其文言

わが存念を立んとして兩人を苦しむる事悼ましさのみにあらず娘に不慮の事あらば養ない
親の遺跡を相續させんものもなく後見せし甲斐更になし依てわが心ざし押曲て心に進まぬ主
さりと世に口惜く思ふ折柄遠江の今川の殿長秋ぬし身をやつしてわれへ入門扶持せんと心ざ
しことも切なる真情に感念傍々の約束を變換せんとし思ふといへどもさては二人りの命危
ふしこれわが進退谷まる所の家傳の秘書は數も盡し今川殿へ傳授して嘘言をかまへ怒りを引
出し今川どのに殺されんとすさらば後日に至りても秘書を盗まれ切害されしと誰れも思ふ
べければねことらに難義もかいらし殺せし人は今川氏とよまや知るとも思こそあれ必らず仇
と思ふべからずよつて遺書くだんの如き

「さア此通りの文段ゆゑを定めてさるべき浪人の義を立て通す武士堅氣ありがたの心根やと愚僧

もそゝろに涙くもその由縁をば尋ねだし手渡しせんと思ふほど年の暮とて本寺のてつた以間合
すべき隙もなくその後人の物語りに大方其人なるべしと思ひあたりて尋ね行は早其家は明家と
なり何をすすも後の祭りねさいの菊川の斯様くいふ所へゆくといゆるのでもしそれが
愚僧が尋ねる人人なら眺らへてもなきよい序でと推量に少しも違はず幸助のね菊の仇同士
でない証據といふたのこれ御ざりたといふに彌々樟齊の心の底も明らか其手の跡も疑がい
なく亡夫現に顯われて今物語りするに等し百代はいと々歎き感ひ「わたしの粗忽の過ちから
痛くしいこの負傷迎もあなたは助かるまい息ある内に幸助の勘當ゆるして娘と好禮表これ
てする様に申しとのさまこの人にお仰りつけて下さりませ罪なき人を殺したわたくし彌く生て
と少時もわられず二人りが悦ぶ顔を見てならう事なら死たいと伏をがめば離之助「それはいと
より易い事圃四郎その意に任せて遣はせ昔は溪間の菊の水流れをくみて歸をのべ今は悦やの
菊川の岸に宿りて命をはると中の御門の中納言最期に望みて辭世を殘され其後に後基朝臣も同
じ流れに身を沈めんと詠てゆかれしこの菊川昔しも今も忠臣義士のよこさまに死ぬ所に定まり
けるかど吐息をつぎわく去るにても負傷を助くる能き藥もなき事か叶はぬまでも療治をさせ
んとて醫者を招て診察するに深傷ならね急所にかかれる傷と見ていらへばと頭をかけばお
さいは這出て年若な女のさいで小癩な奴と叱りも御りませうがわたくし父の木曾山のねく
に生れ藥りをとりて世渡りいたした者にていへば妾しも平生見なれ聞なれ伊勢へ移りて住ひの
後も其事にのみうち掛り少しは本草の名も覺へ聞た事も御ざりますか偶然見ますれば彼鉢植菊
の様に菊にあらす花といひ葉のすがた三七といふ草なれ常のとは何こやらが違様に見へず
する三七ならばさんさうにはなによりも長く切腹藥製法をしたのより生のまゝが殊によいぞ

も常々申し申すに醫者さまには詳しい事ようござんしてござりませうといはれて顔を赤
 なし指喰へしは薬やにまかせて麥と豆をさへ見分ぬ敷醫と知れたり百代は鉢植持出し「めろ作
 と申下男黄金藥師の御堂近く花の咲てありしとて菊の積りで堀出し土産に持参なしたる品天津
 ざのは黄金藥師信仰ありしと最前開りもしや不思議の靈現ありて斯様の藥草庭に生じ奇特を
 らはし功ありて信ある人の命を救ふ事なからずともいひがたし先試みて見給はずやちつとも早
 ふといらだてば實にさもあらん傷は淺し急所なりとも速やかに愈なば命に別條あらじと離之助
 はかの醫者に療治を命じ給にぞれさいと共にくだんの草の葉を揉多の傷におす此方には百代
 親子幸助も信をこたへ藥師の利益を祈るはぎに不思議や即坐に痛み去り見る「傷口ふたがり
 て更に苦痛の体はなし信義の人を救ひ給ふ佛の慈悲の廣大無遍わ、尊とやとあり合ふ人「等
 しく其方を禮拜し悦び上もなかりけり其後幸助いひけるは此場に例なる上下の人「忠あり功
 あり貞あり義あり其中に某がしのみそ、ろに人の娘に藏れいほうやうなき阿呆もの塵ばかりの
 功もなく面を上ん心地もせず殿の仕置待のみなり去りながら只一言申し置たき仔細あり父が
 刀黄金の盜賊大方それと手掛りを思はず今朝見付たりそと某しらが宿る家に昨晚より遊女を集
 め舞ひ諸ふ客のあり窺かに見れば西坂のもち九郎にいへば見付けられじと隠れるに今朝しも
 此家の亭主來り二階の客が此腰物預かつて金貸よと建ての頼みにいらうがいかがばかりの價直か
 わ、といひつ、見せしは擬もなも父此家に殘せし差料いかにしてもち九郎此品持ると不審く
 とも角も望の雇金を渡して預り置と申置ていかに此にて様子どうけ給れば必定彼奴が盗みしな
 るべし捕へて詮議いふよびなば事分明にいらはんと告れば長秋うなづき給ひ宿かの宿にゐるか
 も知す欺詐て擲よと近習に叩き給へば兩三人人立上りりろ作を先へいれ「お菊さまが歸らし

やれそれに付て後室が急川あつて門までぼさつたちよつと下へ呼び出させ其ま、繩かけ引立
 てつし主にも其由告げくだんの腰ものとり上て近習の武士ども歸り來り責め打にもち九郎白
 狀にれよびければ黄金は遣ひすて、なく紙さしは袂にあり宿屋にて借し黄金はいまだ遣ふに
 よばね慌て主に歸しあたへもち九郎は繩付のまゝ宿の長が元に預け後に引馬の獄屋に繋ぎ死罪
 にも所すべきを宥されて駿遠三三ヶ國に入ることなかれと追放はれて果なき旅に流漂行て行衛
 知れずされば不思議の靈藥にて圃四郎危うき命をのべ刀の盜賊見付ければそれを一つの功に
 去て幸助の勘氣ももるし共に主人の御供して引馬の城へ歸りしは最もめでたき事どもなり
 圃四郎家督は圃之助に譲りたれども幼少なければ一ツに住て後見し幸助はお菊を嫁り離之助の
 指押にて禪齊の家を興し百代は元の菊川に樂隱居の身となりて頭を剃佛に仕へゆる作も目を
 かけておさいをも此に養ひさるべき婿を取んとせしが離之助戀慕の余り若林の下屋敷へ召れ
 て寵愛並びなま
 さて圃露軒厭樂は菊川に逗留去棹齋の墓提のため三ツ日三ツ夜の勤をなし今川家より布施
 多給はりけれも身につけず道のまに「かゝぬちのた、すみなきを見ると其ま、惜まず與て
 東の園々鹽物鹽者残りなく拜み回るを役として二年三年旅にありて以前の二見へ立歸り念佛三
 昧慮たらず長壽を採ちけるとなん

邯鄲諸國物語序

何曾我にも對面あり忠臣蔵のとう作ても勘平必腹を切腹が敷か七が大鼓もん切形の破れ
れず此津國の譚話ハ文化年中遠江なる鬼卯翁の新案にて懸塚とて榮し演戯にも其
儘用ゐし世界を借用したるなり彼書よ其文章こそ花美を好まぬ却色ハ殆絶妙なる中にも
長者ハ乞食の聲入長上下で竹杖此一節を省く則黃鸝墳の名のみになり初音の鼓を靜に
持せずお七が叩かぬ矢倉の大鼓ドンなものと思ふにつけ去春金水先生にも等類の作われ
ば又も乞食の聲入か古いの承知で同取組三峽目に書付たれど勘平ならで些許自れを切
て苦しい案ハ珍しくもなき物から初對面の人物より昔ながらの讀本にてお熟染の
ある源之助梅枝幾代櫻木に當年も彫て編數にハ長者が甥の十三郎が傳是も追々洩さす書
入引續て販出せらば氣も長柄に涉覽じまして橋柱のはしぐまで涉評判よと

嘉永四年亥開春

笠亭仙果謹白







花鳥のあつらひ
しきりては

邯鄲諸國物語 攝津卷

笠亭仙果著

攝津國に鷺埴とよぶ荒塚西成郡南長柄村と川邊郡猪名寺村とに二所ありそれにつきて一ツの物語りあり

往昔の猪名寺村に笹原某しとてかう武士の様に黄金に富たる者あり文正應仁の頃の主を箱右衛門朝時といひけり男子もありけるがおと娘におまかといへるを事更に寵愛して衣類手道具玩弄心のまゝに調のへさせ又其好む物といへる善も悪くも誠め止めずさればおまかへ心驕腰元はした下仕へを塵芥と舁めて人仕ひいとくあしく些か心に適ねば打歐責さいなみて身に傷つけねば機嫌直らず見ても聞ても父も叱らず母も益く手にするて其我儘を助くるのみ人の親たるものとして斯まで教ふる事を知らねる實子を愛すといふべからず其誠や此霜右衛門の妻の食満の者にておけまといふべし偕このおけまの飼鳥を好みて鷓鴣般古文鳥金黃鳥唐のも大和のも數多飼る中に若類ひなき初草といふ鷓鴣ありある正月の十日ばかり霜右衛門の所の領主伊丹御酒之頭の京の屋敷へ年始の禮を述にゆき廿日ばかり逗留せし其旅留守の事なりしが腰元の六手といへるがかの初草に餌を飼とていかにしてか過失て其鷓鴣を逃しやうつ鷓鴣あわて跡を追に飼馴たる鳥なれば遠くへ去るべき様はあらじと思へと庭もとより廣く冬木多く植込たる老木混りの木立に隠れていかにしても形も見へず窺に人によしを告げ残る隅なく共に探せと鷓鴣にやかけられけん尋ぬる甲斐もなき歎き生たる心地もなき所へおまかは何の心もなく表庭で追羽根つくから六手も来いと坐敷へ入テ、初草の餌の飼たかと籠を

覗きて鶯の居ぬに驚き早や血眼いかにせしとせきにせかれて包むべきやうなれば泣く
 ありのまゝを告げてこれより能鳥を今朝のへて参らせん何卒御免下されて鳥屋を尋ねて参る内
 暫時の暇を給へかし思へぬ粗忽是非もなしと詫る言葉も果さずおまかひ六手が襟がみ引
 寄大羽子板にて滅多打「粗忽といふてすまうと思ふかせんたいか年若なりしを平生侮むつて
 ゐるからこんなことも出来そんなら替りがあらばこそこれよりよいのが有たとてそれい少と
 もはしうない元の初草探し出し只た今この籠へ戻しや返しやと泣わめく聲を聞つけ母おけま
 立出れいおまかひ泣聲「大切のく初草此の六手でめが逃しおつてこれよりよい替りをば
 買て上げうといふ憎さなんでもかでも彼黨連て来ねばわたしの死ぬといふを聞きくおけま
 ほうなづき「それい其方のいふのが道理六手く此處へ来やれ藝喰も好くとしてまへの様
 な艶しい舌足いみやみな小女もよいとこがあるかしてこちの旦那に居ると煙草の火がな
 いそれ六手肩を擦れ灸すゑる其上にも大膽た浮用も勤めて居るとやらなげなしの鼻ひこつか
 せ霜右衛門さまばかり旦那さまと思つてゐるがおれい第一氣にくはぬ其根生からわれく親
 子いどうでもよいものにしてゐるからこんな粗忽も出来るあの鶯の天王寺の孔雀屋で無理所
 望十五両の小判を出したあれの上です鶯があつたとてこれ程の金をてまへの持てゐまい今買
 との口廣な一年勤めて二両も取れぬ小女奴のなりをして金があるなら盗みもの其詮義もせに
 や置ぬよいのを買て返そうと此口で言したかと火鉢に思はずさしいれて焼たる煙草管の厂
 首を口先へしうくさしつけ叫ぶを捕へて喧ましいちつと性根をつけてやるこれでもさかぬ
 かさかぬかと顔も頭も容赦なく力に任せて打はさし煙管の管も打折つ此時下奴の鶯の死骸を
 扇子に乗「お庭のお亭の前のつくばいの手洗鉢へ落てこんなになつて居ました定めて鶯がか

けたのでござりませうとさし出せば「もう叶ぬくこのむごたらしい死やうのとおまかひ
 泣くく氣付を含ませ出入醫者を呼て見すれど生かへるべき様なければおまかひ更に聲を上
 げ或は泣き又罵詈雑言こんな者も最いらぬと鳥籠を踏破し鳥の仇の六手なれば打殺さねば腹い愈
 すと最前よりの打擲に傷痛身筋もさかぬでうめきゐる六手をば猶ほ散々にさいなむをまアま
 ア待ちやれのとおけまは止め「責殺しても厭たらねど鳥の替りに下死人をとつてうちつとの
 んとからう夫よりわしが仕方がある腹散々苦しませて夫で機嫌を直すがい明日はよい鳥籠
 てやる外にもなんなと取るがよい良い子ぢや泣なと嫌し慰め六手の衣類を剝とりて肌着一重
 へ値かに宥し睡の立木に嚴く縛め「斯して一夜打捨ておいてはおまか何であらう此やうに着
 込でも春の寒さの堪へ悪い其等ぢや散く「とあれ雪が降て来た悦びよく「虫目鏡で雪を見
 れば種々と變れども皆六角の形と見ゆるそれゆゑ雪の替名を六出の花といふとやらあ六
 手でも初めの名は小雪とよんで丹波の生れ親類にさし合ひの名があつてこちの旦那が六手と
 かへて遣しやつた名が雪なれば湖着でも雪の共食苦にもなるまいそれともあまり寒いならな
 んぞ着て遣がよい先刻壞したあの鳥籠あれがよいあれがよいと腰元にいひつけて頭より充分
 かぶせ「こりや面白可笑みなもの見て笑やれ鳥を殺した鳥討で生ながら鳥になつた食せ
 ものも生餌が相應どりやわねが餌飼をせうと餌摺鉢を右手に持喰しはる櫛を摺木にてこじわ
 け生餌をつぎこみく泣叫ぶを打見やり「おまかどうじや胸はすいたか其方もいつて賣てや
 りや旦那どのもあの吠づら見たらちつと「戀もさめよう誰も氣をつけるがよい旦那どのい
 ふ事を聞てもわしが氣に背けばどなたさまでもあの通りもしおれが見ぬ内にいたわり立をす
 るが最期同じ様に責めさすぞとおまかを連れて立上れば六手は聲もうらがれて「どこまでも

わたくしの悪いゆゑ責殺されても恨みに存じませぬと云うこれは心になされたら宿して
 解いて下されませ皆さんぞ詫してとさむ悲げに泣叫べと傍邊にありける腰元らも二人り
 の勢ひ強ければ人々心に歎のみ不憫と見れど手も出さずあゝ喧しいと手拭ひを食せて聲をも
 立たせず一倍寒い風が吹て雪混りに徹る酒でも温めさせ鳴でも焼せうさしあぢや
 とおまかを誘引ひわが居室の尻風の内に籠居りいと暖かたのみ食し驚ハ猪名寺の門の外なる
 梅の木古木の根を掘て埋させ法華経讀せ吊ひつ其夜ハ益々雪降て六手は最く凍に凍無惨や
 程なく息絶ぬ夜更ておけまハ釣と立出此まゝに捨おかば後の始末六ツテ敷からんと素より節
 き事と知すあらくましき女なれば練しめ引き解六手が死骸引捨て路次の戸押明外へ出して
 縛りし繩をひつしごきて首引ハ驚を葬りし猪名寺の梅の木の中の枝に釣下げおき纏れて死だ
 るさまにこしらへ何氣なく立歸りしが次の朝起出て六手がぬねとて騒ぎ立ち繩を解し者あら
 んど人々を責問ても知るよしなけれど心の鬼に怖れてさのみ深く咎めず兎角するはど里人ら
 六手が纏れてゐるよしを告來るにさればこそおのが罪の償がたきをしりて追しものならめ
 かくなる上ハ叱りもせぬとなまなかに繩を解死なせしこそ氣の毒なれとて公けへハ物狂き病
 ひありしといひこしらへやがてそこに葬ひらせしが親類のものもありければ行衛なくなりし
 かハ出てあふごふ者もなく後霜右衛門も歸りしが事よしを大概推しさて不憫の最期や
 と思へば今さら詮義だてなさは容易き騒ぎにあらじと心に歎け口には出さず鈴かに跡吊ひ
 やれども亡霊いかで浮むべき六手が親着離るゝ間なく末期の苦しみ死後の恨みおのづから報
 ひきて其秋六手が初盆に夫婦ハ頻に夢見の悪さ流石におけまも快よかち霜右衛門は折ふし
 機交せし中なれば殊更にいとほしく去師にハ經讀せ非人には物を施しをさく盆の祭をなせ

ささばかりの功職も見ぬす十五日の夜夫婦して茶をたてつゝ喫けるが夜中にいたり二人り
 齊く空を擡で悶苦しみ二刻ばかりくるひまはり身青くふくれあがり終に敢果なくなりけ
 りこは今日しも日暮のはど水屋のはめに家部の二ツ傳ひおしがかれが涎水指にや入たりけん
 家部の腕に大毒ある事秋燈叢話に物語りあり鳥の生餌の青を食せし報に青汁をすゝり即死せ
 しが遁れぬ應報毒虫の手をかりて恨を晴せし六手が魂魄猶も娘のおきかに纏ひ又其身さへよ
 からぬ最期させしよしハ後に詳細あり
 かゝる興なき物語り書綴らんも懶けれど情を知ぬわがまゝもの誠めにはなりぬべし六手と
 いひて雲に死せし魂や残けんかの古木の梅翌年よりハ花辨六ツに開くるのみか夏又秋も雨
 夜にハ塚の邊に驚鳴て青き火の燃る事ありされバ誰がいふともなく齋塚とよにいひふらしぬ
 又此邊に食塚とて今もあるハかのおけまを葬し所ならんおまかハ程なく外へ縁付き兄の子
 家督を相續けるが寄にさはるに悪事重なり幾程なく家衰へ十年斗に跡もなく荒屋敷となり果
 て今ハ姓氏の笹原のみ霜に枯ふし残りけり
 其後數多の年を経遠江引馬の城今川籬之助長秋の老人に佐々木現太左衛門といふものあり勝
 手力の締役にて人の用ゐるも輕からず武士の道も拙なからねど心さま風流にて常に植木本草の
 花を多く集めて樂しみどせり遠江の巻に出たる忠臣天津園四郎が妹の雲井とよぶを迎へて先
 つ年男子を生せ現之助と名乗せおひつぎ生る子もなけれバ一層大切にかけて育て武藝ハさら
 なり學文遊藝なにつ欠事なく師匠を撰みて教へさするに一を聞て十を知る才智尋常ならざ
 る上にも性質いと清に郎にハ稀なる若者なれば親の悦び上もなし一儲も此現之助七ツの年に
 母雲井重き風にて空しくなりぬ現太左衛門深く歎けとさてもあるべき事ならぬハ進むる人の

あるにまかせ先祖の六角の分れなれば近江にへかの突作の家の家老石倉慰之助と元縁者ま
 温和なる生れなれば身を傾しみて夫に仕へ現之助をいとほしむ事少か眞實の母に違す現太左
 衛門大きに悦び一層二人の中睦ましく現之助もありがたき事に思ひて孝を盡しぬされば今
 年都なる館の留守居事繁くをりをりの兵火にて破損所なともいと多ければ大概はたてかふべ
 く其入用の事なんぞ此方へ中出ければ殿の佐々木をめし出され万里の小路の留守居の加番並
 に修繕の奉行の役目しかく勤よと命せられて近々に上京せよとの事なれば人も多きに重
 たいしき役目をしも蒙むるは身の面目と悦びて其用意頻なり此に四年五年前より天神町に家
 を求めて屋敷も町家も願くある貴人のた先に調法がらる諷訪洞仙といふ醫者あり診察よく
 療治に念いれ薬の法に詳しくのみならず物よく知りて人交よく高慢す阿諛す萬事につきな
 らぬのみか本草の一道なりとて花をよく養い開せ木をもよくつぎければ佐々木へまたなき
 友と隙だにあれば往來して其かたの物語りに日を暮し夜を更して何よりの樂みとせりこの洞
 仙を懇切に侍遇バ夫の機嫌必ずよければ落も又人よりこゝかなく親しくして留守といへども
 しひて止め馳走をなさでい空く歸さず今日も例の洞仙と佐々木の多さ花といへば霜の花去年の
 色變り余程早く咲ました底白のあの長春小さい木でも花の多さ花といへば霜の花去年の
 も鐵葉にからして置ばまだ喫る今に新茶のくる時分我慢しておれと清水のひねり焼より玉堂
 半次が南京うつしについて並べて進めつゝかうばかりでもあるまいとそれから酒となりわ
 びてはゆかぬ鯉魚の刺身茶よりは俗なといひながら主人はいつしか微醉機嫌「先生一つ相談
 をせねばならぬ事がある他言は決して御無用と固くいはれて諷訪洞仙「醫者の習言禁聽ハ銀

の七と水晶の文鎮でも丁と合せませうか神農さまの御爵をうけ草を食で血を吐とも「なに
 言にへおよばぬが知での通り今度の上京それに付て昔しの事から一度いはねば分り悪い今年
 で大かた十三年前の昔し殿様の御在京の御供の時持病の痼によいと開き一ツハ保養で津の
 國の右馬へ湯治をお願ひ申し角の坊に逗留の折ふし矢張あの津の國長柄の長者といふ富有の
 高武士音川出羽客分の侍遇にするとやら其人も保養の湯治其時も恰今頃三月末から四月一
 ばい長々の逗留に何時の間にかやらくだんの左門と懇意なるのみかいふ事なす事氣が合て兄弟
 の心持京へ歸へりし其後一兩度は互に音信或時に長者のいふにへわれらの娘梅枝事まだ今
 年で漸々四ツ開ば貴殿の御子息は一人り子で十一にならしやるといつかもお咄し梅枝も年頃
 になつたら其方へ嫁に送り親類の親しみを重ねてはさうであらうわが先祖も遠江名氏の濱名
 も在所の系かたに由縁ありと言れたが長者の娘われ風情貧乏人とい提灯に釣鐘と笑
 ふ長者頭を振心さへ釣合へばと上るにも語るぢやないか提灯へおろかな事にあんどうの燈
 心はど燈身でも此方へいとぬ是非にといへれて碎するも無益と其時直に結名付たのみの證
 據へ朝日丸とて家重代の短刀を遺す筈に定めて彼向からいひ約束の證據まで梅櫻のわり等
 かたしを分與て呉たのを其後倅に渡しておいて今に肌身を放させず去年今年こそ平穩なれ其
 後續く幾内の戦争津の國とこの遠江余り遠く隔たれど便あしくて音信も久しうせねと倅も
 生長化度の隙を見て長柄へ赴む婚約のとり結びもしたそのそれへまアそれにして有馬に
 居た内かの左門外國にへあるまいと自慢された松原の部生田の川添ひ布の引の瀧へ行道の村
 隅内とかに深見氏これも醫者で法庵とかいふ人の庭の牡丹態く見せに連れられしがるはど
 其木もかれこれ一丈花の輪も一尺四五寸實に臆もつふれたが其時も氣のつかぬぢやないこの

遠江秋葉の山奥京まるの溪の牡丹はこれよりはまた優れて大きなとは咄したるが實は見
 ず其内に其花辨手に入たら進上せうといふたままで終それなり險しくもあり知れ悪いところ
 か知らず今回は恰好時四月なり主君へは濟ねども發足がけに山を回り二日や三日は遅れて
 もそれは如何とも言譯あり只困るのは道の案内所で貴老はあの邊も慥かに詳しい様子と聞た
 が送りがてら京丸を教へては給へるまいか人に知せず筋かにといふを洞仙聞合へずそれは
 なによりお安いことふねいも近頃殿さまの御寵愛薄からぬおさいさまの伊勢の親子宋民とは
 同じ生れ同じ様に山中を年久しく歩いた者信濃の國から此國の青峰風いらす旭ヶ嶽高根山、
 山住の權現などは幾度も參詣してあの邊は小みち近道大概存じて居まする何も貴方口止をな
 さるにはおよびませぬ火防のために秋葉山へ參詣して出立したいとお仰れば表面一氣がつか
 なんだなるほゞそんならそれに極ようとしてそれより用意も調のひければ黄金數多殿より預
 かり盗人多き世の中なれば慈しみに正儀く非常を警誡め人多く連たらんは災禍を招く原因と
 洞仙が意見に従がひ用心の体を見せず供人僅かに五人ばかりさて長柄への頼みのしるしに朝
 日丸へ携さへけり又若黨の源五平は必らず供をすべき所出立の其朝哉かに脚氣を病ひけれ
 ば二日三日療治を加へ怠たりなべ東海道涉油の宿をさして來れといひ置て現太左衛門四月十
 日に門出し其夜は二侯の家に宿り次の日秋葉の山に上りぬ「佐々木現太左衛門は秋葉山に參
 詣しそれより深く山に入る事既に大略三里あまり雲を分峯に登り溪に下りがけちを廻るに聞
 き馴ぬ鳥の聲猿の聲く梢に叫びて岩堰水の音凄く杉林のいと聞きおのづからに心細し樵夫
 石きる山がつも此あたりへ通ぬにや人氣絶てけうとげなりされども山に馴たる洞山今暫
 しくと主従を勵まして下り上りするはどに一軒二軒もあるべき巖の負ひ重なり嶮だつた

る其隙くを水漲り沸て落る所へいたるに向ひの高さ五十丈もあるべき巖真直に立ち四方よ
 り茂り合ふ梢に空もよくも見ぬぞかの切立たる中段に二丈もあるべき牡丹の古木岩根にか
 りて雪より白き花いくらとなく咲乱れ眺望よき山にあらぬ處の容体唐めきて仙人などの
 住居おぼけて心膽を洗が如くかの三尺もあるべき花の爪に風に香ひきて袖に染るもいはんか
 たなしこれこそは京丸の溪間にて京丸の里とすへまだ山奥往昔平家の落人の彼處に隠れて住
 家となしそれより里となりしとす岸に案内いたしすさん先涉用意の酒肴をばと秋葉の麓の
 旅籠屋にて調へさせし酒肴とり出させて毛氈しかせ柴をりくべて酒温めさせおのく溪の
 水に望み杯澄しが大きくて直口が紛失しさうななぞと思ひの外酔をもよほし此勢はひに
 間く散たる花瓣拾ひ來れど五人の供らをこゝかしこへ追ひ遣て二人りは發句歌なんを誦し
 て時の移るを知らず洞仙は懷中より練香めくものとり出し「よき花の香ひをさしつゝ此に香
 を焚んこと心なき業には似たれど心を籠たる手製の秘法一焚燻し御目覺し仕まつらんと野風
 呂を引寄火中にやをら打込ば忽ち竹の破壤音して黄なる煙り立上り中より四方へ電光の形を
 發して紅ないの光り虚空へ散乱すればこの事に驚く佐々木谷間に響く鬨の聲貝の音鐘の
 音谷間く現れし異狀の曲者十人余り供の下奴を各々に引卒來つて刃をさしつけ波よく
 並べば洞仙の「合圖を違へず太義くいやなに佐々木現太どの定めて膽が潰れよう時問半分
 面白さうな醫者と見せた御訪洞仙實の光明 遍照丸の股肢と頼みし洞九郎醫者の悍い嘘でな
 い先年亡びし近江の盜賊藥王兄弟が末の弟と小供の時に信濃へ還ゆき宋民と相弟子で人とな
 つて數醫者渡世でも澤山人へ殺した光明山へ後に加へり引馬のころよりあの近邊見かけに
 よらぬ寶の有無又た容貌美麗女ども見出すために假住なし萬事の事を遍照丸に告知らせし

われなれと流石に天津圃四郎めも其事の露知らず大日冠者も中よき者ゆゑおれが事隠した様子遍照九亡びて後いさしあたり立寄方なく心ならず其日を消れど討洩されて彼山に忍びる小盗人集めてこんな少々な仕事と思へが牡丹を見たがつたが此方の不運是非がない飢ての食を選まずとかちつども金がほしく此までつり出し此次第大概知た御身が武藝不知案内の此山中とてもかなぬ尋常になにもかも残らず渡し死に給へと嘲弄され現太左衛門呆れはて暫らく言葉もなかりしが忽ち顔色血を溜き「飼犬に手を噛れしより尙ほ口惜き汝が悪計おめく」と落いつたか去とて此まゝ手を束ね汝が及をうくべきか假令手下の多くとも刀の刃のあらへ恨り塵しだ観念しろといひもあへずするりと扱へ洞仙四五尺後へ飛ものとも出合へ呼立れば又も盗人七八人現れ出て佐々木を一人りおつとり巻いて切込を右に支左に拂ひ秘術を盡して働らけども早供人らへなくも刺殺されて助けなくわれは次第に痛傷を負ひ無念くといひ死に堪に躍り打倒れ遂に果敢なく息絶たり洞九郎の徐々ど伏風たる死骸を蹴やり願で致へて懐中探させ懐中の品残らず奪ひとり死骸は谷へ投こませ山口にさし置し駕籠に打乗具足櫃箱も野風呂も元の儘撥せ負がせ近道より三河へ打こし海道へ出て都へ赴けりかゝる事とは夢にも知らず源五平は足の痛み五日ばかりに愈ければそこへに仕度調へ引馬の城を立出しが三河の國沼油の宿にて佐々木といふ人の通らざりしやと問にげに其名の人行きありしが早三日ばかりになりぬといふにいよ／＼足を早めつゝゆけゆけどもあふべともあらす兎角して都にいたりまづ萬里の小路なる館に行き尋ねれば佐々木はいまだ到着せず日限もされたるにいかせしと彼方にて不審に答れば現五平胸おどりて道にて見はづす様もなしこの尋常事にあらずとてそれより姉の小路なる今川さのいでりの懸屋賣井梓衛門が元へ

行さし主人の事につき聞かよればし事ありやと問ければ見世の者「佐々木さまには疾にお着一昨日もお出なされ沼館の修建替お近ぢかに始まるよし別段に金千両先とりあへず沼入用とお仰に任せ殿さまの沼判物と引替に金もお渡し申しました何時沼家督あつたか知らず以前お登りなされた旦那の沼舎湯さまとす沼一族とす内にも今川さまの外へより堅い沼家の沼風浴たつた一つの沼印判つひぞ見馴ぬ沼方にてもお金を渡して上すすにまされなき沼判鑑それもそれ只今の佐々木さまは兄沼さまよりまた一倍沼發明御人相の其よさと問す語りに源五平膽をつぶして呆れにあされそりやア大變もう千両なんでも騙に違はないお旦那は兄弟なし若旦那はお若年お館にも沙汰はなし沼普請金は飽まで御持參當分かけやによろはないとお仰つたも知てる總して見れば殿様の沼道中で悪者がと云かけて口を閉いふまじとは思ひしが隠しても隠されずと主人の行衛知ぬよし語りて其奴は大騙の大盗人に極まつたり最早遠くへあけてこの邊には居るまい捕へて厳しく詮議せねば何の事やらちつとも知れぬといふを聞いて見世の者に大事をあるじに告げば梓衛門のけぞり返りだしぬかれしを惜むといへどもかのばん物の偽ならぬ心を静めて此よしを萬里の小路へ注進す此時小奴鑑六といふもの清水寺へ月詣すまして歸り来りしが此頃御坐た佐々木さま今日と道で見かけしが藝妓舞子を七八人つれお供と四五人づれなんでも大駭丸山といらぬ事に跡をつけ正綱へ這入た所を踏と見て来たがそんならあれは盜賊かつけて往たもまん更にいらぬ事でもなかつたといふを聞より源五平東山へかけ行て正綱が庭へ忍び入り家の様子を窺ふに實に舞姫に似せ舞せ興酣におよひしさ旦那と尊敬主人をバ物蔭よりよく見れば總髪の前髪剃とり月代の跡いと背く立派なる武士なれどまされなき諏訪洞仙さては彼奴曲者にて旦那を害して入

替り大膽不敵の大騙欺此場へ踏込引捕へ拷問せんと思ひしがわれは一人り彼らは大勢最早夕暮館へ馳行き注進をする隙には何處へか歸へつて手のびにならん仕様こそあるらめと胸を鎮めて此を立出て此寺の門前なる水茶屋が立寄かけたる蔭の蔭に身を秘め夕間なれば忍ぶにもたよりよしと洞仙らが歸りのほを待居たり祇園町で呑直せと洞九郎の人心いらずに巻散し藝妓舞妓に手を引れよるめきく石段を下る所を現五平刀ひらりと拔出し切てかれば女ばらわいやと叫んで遁感ふさしたたりと洞九郎抜合せしが早事の破たるかと心に怖れ後陣のはとも氣遣しく逃るこそまじならめと隙を見合せ馳出せば逃さじやらじと追かくるを手下の奴原かけへだつるなかに貉と字をおひし手下へ少しお覺もあれバ相向て戦かふは必に殘の者へ言甲斐なしと一人りに任せて逃去れり現五平は洞九郎逃せし事の口惜しさに勢ひ初めに十倍して切込く二三所切つけてや弱る所を刀の下げ緒ひつしとき嚴重く縛しめ萬里の小路の館へ引立て委細の譯言上におよびしかばかし此誰彼立合ひていたらく拷問するは必に貉は苦痛に堪えずして洞九郎が身の始末牡丹谷へ佐々木を引寄てだてをもつて殺せし上腹中なるはんもつにてかけ屋を騙し事共をおちす白狀したりければ先獄屋に籠ひきて後に死罪に行へぬ源五平にも暇を賜ひ此よし國へも注進われ殿をはじめ一家中其驚き大方ならず佐々木の家の落着をとりく評義ありけるが現太左衛門大切の仰せを其身にかゝり無理ながら私しに御山へ分入り擅まゝに遊びしより其事を滅ぼし下僕を失ひ彼賊の業なれどもかけやの鐘をも騙らせなごおん名も出る事引出せし其罪尤も輕からず妻子の知りたる事ならぬご其まゝにのさしおきがたし賤しき地行めし放し領内追放たるべきなりとその筋へ仰せ下され其よしを後家落現之助うけ給り其無念の遺かたなく意恨の涙あつくり淵いで賜しごご愁歎

情拙なき筆にへ書とりかたし抑く現太左衛門の物惜みせぬ氣質なれば金銀とてもあるに任せ人に與へ物をも買ひ精貯へねば見かけより内實の寛ならず今此國を立出て余所に住ひをなさんにも沙ぐしき用意へなしまして天をも諸共に戴だかれぬ仇を捨て懲に月日を送らず高麗唐しのはてまでも洞九郎の行衛を尋ね夫の敵親の仇討とらんとのみ心を定め重代の腰の物緊要の書物ばかり残してありとあらゆる家財手元の品ども捨賣に賣り年久しく召使し男女は大方とらせ暇をやる其中に源五平へ何處までも二人りの沙先途見届けて主人の仇を討たしといひはれば其意に任せ其注進を深く感じ杖柱よと力にし人に分し殘の金へ分持て懐中し今回の大變も知せて暇を告ぐため先づ近江の築作なる石倉が屋敷へゆき此よしを語り出るに久秋夫婦の親子を慰さめ何處をさしていつをごと定めたる旅ならねば焦立ちて心の疲て病も發るべし先緩くと此方にゐて世の風聞をも聞べしと放ちやるべき景色もなきに今日明日と止められ主従三人近江にて百日ばかり空暮しぬ斯てをつかね時節を待も不孝のいたりと現之助秋風も稍吹そめて冷しき頃にもなりければ實に足手まどひゆる母へ此に殘しおき立出んとしたりけるを落は更に聞いれず去ばとて諸共に築作の城を立出て卜占を問ひ聞に坤の方をさしてゆかば利ありといふに任せ先都に杖を止め宮寺のある所へを拜廻り見物しさらば津の國長柄の長者も尋ねなばわれらがため懇くはあらしと源五平が進むるも道理なれどすべて黄金に富人の大方心の穢なきものかの惜して悲戀うすく時をぬたるもの敬まひ零落たるの憐れまで貧しきもの出入するを不外聞に思ふが多いかるはづみの約束して後悔するもまゝある習ひ昔し的好誼を力に便耻かしめられ災難をうけしためし嘘言にもせよ近頃の物の本則草紙にも書き記せりなまじひ尋ねて無理のあつかひされなばよしなき罪造事にたのみの

じるしにと約束ありし朝日九洞九郎に奪し萬一や情さに慮るかと疑がはれんも斗られず
 兎も角も先長柄へは立寄ぬにしくはなしと母のいへば子も従ひ津の國へ移りても外目して過
 けるが有馬は湯治場多き中にも古より諸の病によく験湯なりければ山深ければも繁昌して常
 に諸國の人群集へり仇の手か、り聞出す便なからずやとて養生かてら月見の頃よりこの山に
 いたり夫も宿りし宿なりとてすみの坊の座敷をかりつ抑くこの有馬山は浪華を去る事九里に
 過す都よりも僅かに二日路道の序も面白ければ隙ある人と見たる人京詣で大和廻りの道ゆき
 ぶりに五七日たちよらぬ旅人なければ二十坊はさて置ぬ八十余軒の旅籠屋の坐敷に客の絶
 間なし皷の灘の有明櫻散は咲つゞ字津木に吸路の小の秋の月落葉山の楓紅葉四時の眺もあろ
 かならず山水の清らかなる眺ばかりか琴三味線に酒宴の興を添替將基謠舞に徒然をなぐさめ
 山家には珍らしきこゆながめ元の塩湯にあたりて腰をぬかすも保養の一つあるまじき事なが
 ら忠孝に心をつくし勝れて賢き人といへども迷やすきは女の色にて源五平のまめやかに佐々
 木の家に若黨をつとめて三十路を越るまで女くるひなせもせず今回もわきから望みて主人の
 落目を余所に見ず實意を盡て仕へしが此坊の越名おつたとて十八ばかりの品もの、愛くろし
 き笑竊にはまり人目を忍ひて口説よるに心に五月蠅思へる柳にうけて侍遇も人をそらさぬ
 越名のならひとのさとらずして源五平漸々にてづよく迫るにおつたもはや戯れにもとりなじ
 兼ねて或時いふやう「そなたさまのお心さし嬉しさの山々なれどなまじなまな加帯解て明日
 の鴉の泣分と諸通りな旅の御方それゆゑつれなくいたしたれどわたしの在所、此近所御主人
 さまの暇をとり婿になつて下さんせぬかそれにして此坊へ年季で賣れわたしの身体わがま
 くに身はふれぬなれども大体五十兩も金を出したら身請も出来さうなればわたしが身はどう

なされうとおまへのまへんくつすきる様なれど内密事は大嫌いまアさふ思ふて下さんせと
 滯はりなくいひ放つ言葉に艶言ところはなれど物いふ口元最やさしく眞面目になるは愛
 敬儀は源五平の心を蕩し「其片意前が懇望最三十から上の身ども娘盛りのおつたさん賜も
 れるのか知らぬども眞請にするは田舎頑固暇もとつて金整のへ身請したなら否應なしに「婿
 にせいでなんとせう「眞實さうか「ヲ、くどと少しひでられ源五平これより忠義を勵みし心
 うつてかはつて主人の持る黄金をまさわけ身を隠しおつたをのが物にせんと世の目も更に
 隠れず千々に心を廻すに曉さがたに漸々一ツ計略胸に浮み次の日の朝いひけるは夕邊夢に洞
 九郎浪華津にて召捕れ首はねられしと在々見ました夢は逆夢大方は何の役にも立ねども何も
 心に懸りまされすバ只今から浪華津までいつて仇の手が、りでもなきかを探つて参りませうと
 朝餐もそこ、かきこんで浪華の方へ行きたりしが翌の日の晝過ぎ頃浪華近き大仁村の爲樂
 寺に近頃より都浪華の上中下生佛と敬尊む大仁比丘といふ名僧衆生結縁濟度のためこのゆ
 の山の町へおはしぬ因を説き果を示し十念をさづけ五戒を誡め又過去りし事をさしてあてら
 るるに怪しく合へば未來の幸福災禍を論ずに總て違ふ事なく治りかたき病をおさめのみがた
 き人の懸付物をも容易退ぞけ折節目前不思議を現し愚なる民を導佛の道に入らしめらるれば
 釋迦牟尼佛の再來と思へぬ人へなかりけり角の坊にも主も客も十念をうけかじを乞身の善惡
 と問なんぞしてそれ、に布施を贈り進せぬもの一人もなし落親子もそれとなく夫の菩提の
 ためにもと座敷へ請いれ布施を厚し十念讀經の其ついでわれ、のゆゑありて人を尋に出た
 るもの生佛の神通にて其者に速かに逢や會じや豫かじめ示し給へど乞ければ大仁比丘の觀念
 のぢやうにいりしが目を開き「本望は逢すべし但し尋ぬる人に猶は五年を経、逢かたから

んよし逢とも急ぐ時へ過まぢおらんと諭されて親子へ少し待久しき心地して黙然たる其間に比丘へ立出てられつ其夜源五平歸り來りお悦びなされませ夢へ逆夢仇奴へ首にもならずすんど全な健んでも天満か堂島の邊にゐると見ぬまする天神橋ですりちがひ振返つた横顔が擬れもない洞九郎氣が付いたら上げこさうと顔を隠して一さん走り早うお知らせ申したき取前す歸りましたと語れば悦ぶ現之助日頃信する神佛伏拜みく明日へ此地を發足してと夜の敢るを待わぬれば渚は塵々打歎き「仇の所在知れたりと聞べわたしも嬉しいが生佛と人の敬ふ大仁比丘のおん諭し思へばそらに早るの危なし仇も運命つきぬはは悪事をしても無事で暮しよき人もそれはその時節を待たずしひた事して反つて害を招き必らず後に悔ものわたりとてこのほごは身筋病で働られず先々心を落はてゆめく急り給なといへども聞ず現の助「お言葉一々御無理もなく仰を背くは不孝なれせ仇の所有知りながら傍觀していられませうか最もあなたはお痛みしよ御全快の上へ思へば父が無念の最期を思へばへんしも延てはおかれませぬ本意ない事におぼしめさうが源五平も残しますあなたへ此で御養生吉報まつてお出でなさいませ伯父圃四郎に學びたる手練を廻するの今此時進んで善か退ぞきて善かを下なひ日取の善惡撰み定むる秘傳も残らずかの人よりうけ得たれば氣遣ひはすといふに渚か止め兼ね「さういやれば是非がない病人へ足手纏ひ殘念ながら得行まいくごひ様なば理のお諭無理な勝負へせぬがよい源五平も連行やれ一人り遣て猶更苦勞あゝ氣の痛む事ではあるとつかぬ押おし懸けるが現之助は夜の明るを待ちさらばとて源五平供に從かへ身軀に粉粧今に本望遂ませうと勇み立てもしかすかに余所に忍ぶめせき傘管の岡部やしぐるらん紅葉戀るゝ舟坂や四十八風折曲り直には立ぬ屏風岩眺げなごか越ざらん勇む心たれに又讓

り葉の嶽右手に見て生細の醜や六軒茶屋米谷小濱安倉村嵐陽の宿を過行まで多願塚あたりなる松林に立よりつゝ暫らく疲れを休めしが源五平は頭を掻く物いひたげに口を動かして幾度も歎きしが思ひ切つて若旦那ゆめされて下さりませといひさ差添振より早く取直して襟裾廣げ既に腹へ突立つるを現之助腕首つかみ「物に狂ふか氣がふれたか本性ならば深き仔細なくては叶はぬなにはどの過まりにもせい善惡とも隠さず語りて死なば死ね黙つて死なば狼狽ものど叱つて刃をもぎとり投遺膝下へ引寄せて放さねば詮方なく源五平のどつかと坐り「すまじとは強たれば死ぬ内口より外へは洩されぬとも下郎の悲しさ氣おくれして死損なひ今更是非がござりませぬ某がしが身におゐて不義も不自由もいたさねと淺間しいは後室さま余り思ひもかけぬ事眞實とも思へねとも多自分から仰しやるゆゑ何とも是非におよびませぬあらう事かなきささまは三年此方洞九郎と只でも多坐らぬ中どやらさゝお驚きは尤ともわたくしも呆れました去とて大殿を殺させようとするまでの悪心でいなかつた様子其くせ女の氣の弱さ夫を割れて無念なにも思へつしやつたも當座ばかり今でも矢張洞九郎にお心が残るかして貴殿の手まへ世間の思はくよん所なく長の旅なさるも實は多迷惑夕部夜更て明坐敷へ召れて下郎に言立させ此事竊かにお仰り出したらう事ならいつ迄も仇に廻り合はぬのか始めから我願ひ止めても聞ぬ悻の一徹いよく明日にも會たなら助太刀のふりをして洞九郎の逃らるゝ風に妨げして呉いそれは早怪からぬ見下げ果たお心やと泣み怒み強意見後室さまも赤面して面目ないこんな心になるといふはよくくな因果もの死より外の事はないと刃物三味なされても直さうとはお仰らずわたくしも興が醒見下げはてしもお主様見殺しになりもせず既に誓言立てた上はと是非なく承知いたしたれぞ浮木の龜の仇討目を睡つて他見てゐる事

が出来ませうか況て何して妨たげがなるものか胸の當感仇討させては母御へ濟す進退窮り
 一命を捨るの外にござりませぬ何卒死せて下さりませといふに呆れて現之助無念の涙はらは
 ら貌に傳ふをふり拂い「繼母の鑑と此方の母と人にもいはれわれも悦び暮せしがそりや
 某しは繼しき中なを不足で父上のお目を掠めてあの仇とゑ配偶者を殺されても腹の立ぬ
 ひなに事ぞうとましの心や羨めしの母上やと拳を握り齒を噛て思はず知らず罵詈が「最
 いふまい思ふまい父々たらでも子は子たりよくも悪くも母上のおん事を申すは不孝されども
 父の御敵とらねば人にて人にあらずおん腹立もあらばあれ見付け次第に洞九郎殺して我も切
 腹せん担し汝の死は無益矢ッ張母を御介抱申て呉ればわれも安堵斯と知つては先暫らく有馬
 へは歸る女は母上には何なりとにつこらしうてくれ「いやどうあつてもわたくしは此で
 死たうござりませぬ貴殿さまなり後室さま斯してゐては何方へも濟す今まで延した旦那のおひ
 腹何卒切せて下さりませ「さほごまで死たくばおれと別れた後で死ぬるは昨日母上が法
 師の言葉信仰なされて本望遂る時節が来ぬはやるな急な滂意見も心あつてお仰つたのぢや
 お思へば「夢の様な頼みなき身の上やといひつゝ東しをさして行ば「そんならいよくこ
 の所でお別れ申さばやならぬぢやまて今に死で潔白な心を御目にかけてますといひ「急ぐ現
 之助が跡見送り見送りつゝ装束の塵を打拂ひにつたり笑て點頭以前來し道へ引返す「太息
 のみつがれつゝ現之助は愛ひ悶へ心更に穩かならず此世彼世と双方の親へと盡す孝行の全た
 からぬを歎にもいかいせん養育の大恩あれども母上へ繼しき中にて邪心ある上へ従がひが
 たしかの唐土に密夫の元にかよふ母のために川に橋を架たるが不孝になりためしむあれば
 なまじいなる孝行だてしたらんより打捨ておくこそよけれと思ひ絶へ一圖に敵を討取のみ

を子たるの道と胸を定めたゆみし心引起し尼が崎に其日の宿り次の日早く浪華にいたり長町
 に宿り求め人立多き所々見廻り歩に洞九郎に似たる人さへ見當らで天満宮を信せしかば天満
 より北の天神の今日長月の廿日にて年に一度の祭禮として此邊りの社の外まで人立繁く往來
 して思ふまゝに歩かれず押み押れみゆくはどに青樓などのつみたるへんにて火打袋の紐さ
 れてまろび落しを拾へんと腰を屈むる其途端差添の短かき刀鞘がしつて刀彼方より來かゝる
 女の最襟に觸れ「さても粗忽のいたり怪我でももしありせぬかといひつゝ拔身を手
 早くおさめ袋の紐を引纏へばかの女の供をせし男も驚き「幾夜さんごつこも切りなされぬ
 かイヤ足先から血が流れるこりや大變と騒ぎ立女へ屈みて一折の鼻紙男に投やりければ男の
 血を壓へて手拭を引さき傷をまく此方に現之助へ行過ぎ兼ね「どなたか存せぬがやし譯な
 き拙者が過失傷へ深へ見ねどもお痛嘸と察している金瘡の薬もあればと懐中探す顔打守り点頭
 きて供に向ひ「もう今宵は狂言も此傷で勤められ替り役で間に合様にと早ういつて左様い
 はしやんせわたしの角の寢覺屋でこの傍方に傷うけた譯を立て貰ひますと供を追ひやりかの
 女現之助の笑に手をかけ優い顔を溢面つくり「最前から詫てなれどお武家さんともあらうも
 のが脇差を鞘ばしらせ余り粗忽でござんせうわたしの此新地の藝妓浄祭禮に雇はれて地内の
 舞臺で踊の役目ひきうけてゆく所人の詠になる体傷をうけてそれでよいかまいせんとはい
 はれません親方へも言譯なしわたくしが速てゆく所まで連れていつて存分にせぬおかぬとよろ
 く酒の機嫌か六々敷いはれて流石に振も切れずわが過まりに現之助詫ても「聞ばこそ立
 現之助はおもいざる過失ゆゑにをめぐと知らぬ女にひきつれられ曾根崎の寢覺屋の二階座

敷へいざなはれ頭をかき手を擦りてわぶるこなたへ仲居もばら／＼きたり茶をはこび煙草
 盆まだ明るきに燭臺をおしすへればかの女は耳に口なかいとも打点頭きもしお授りと挨拶
 し梯子とん／＼ありてゆくかの女は面をしかめ「いましがたもいはしやんした好齋薬がある
 とやらまづそれをちどばかり」そんなら付て下さるか添けない／＼漢手ならば五寸六寸きつ
 たのでも纏ずに癒る伯父君やくしの靈験にてみづから製する奇代の薬、印籠はづしてなかの
 ぢゆう油薬を拜にすくひとればはかりながらトまさしてぬぐひそつとどりさしたすあしの
 きす口に紙に展べてうちきすれば手拭まきつはじめてにつこり「もう痛みが去つたやうな
 元來わざとへされぬお粗忽是れしきの傷をうけ女の在に六ヶ敷いふて此處までお伴したを
 や女でをりながら悪態ものどおさげすみお腹が立たでござんせう「何をいふのも身共の粗忽
 如何様になされたとして立腹いたす筈のなしこの儘ゆるして下さらば身に取て大慶至極「いか
 様にせられたとして腹たつて下さんせぬかそんならかうと身をすりよせじつとしむればちや
 と飛びのき一座興かしらすこれは不作法さしかる用事もあらばあらためて今日の詫に近日
 かさねて参るでござらう「なんの近日そりやうそ／＼左様いやがつて居るくせに何國いつく
 のお方やらしらねを多面はけふで二度目前の月の廿五日難波橋のつゝみをば旅としらへで三
 人連よい後家さまと最一人はりやうがけかついで大方にお伴たばをのんでおいでのところ
 彼の時わたしは屋根舟で客に伴られ天満のかへり「さう聞けば悲ひだした他にも二人か三人
 の中に目に立つすきやちいみ須磨の關屋の大模様ちどりが袖までたちあがり「さうでござん
 すさうでござんす「ても美しい女中やと「ゑ／＼にらしい身にしみる／＼と戀風がまアこんな
 事しらはけに云ふの勤めの女ゆゑ歌妓や娼妓といふものは相してなりと容をひくかと興がさ

めたでござんせうがわたしの新地の北濱屋の幾代とて名もなき歌妓お氣にも入るまいお面に
 もかゝるぢや有らうが醜いものに眞底から見染められた粗忽でも飛んだ事したのも遁れぬ
 悪縁とおもうてたつた一夜なりとわたしを呼んで下さんせぬか御祭禮の狂言を断つたのも
 これ程の着に左のみ困らねとこがれ／＼た舟での初戀こんな營業しているものは眞の
 總路の迂いもの實／＼人にははれるといふ／＼こんなものかと氣で氣が分らず晝夜男子あくまで
 みて野路の梅すいたらしいのすかぬの口へ出次第こゝろにひいままで知らぬ積のたね時
 初たのがぬしの不運出懸に人に強られた酒の元氣で耻かしさおして先からにくまれ口引ばつ
 て来たこの寢覺屋のちよとした揚屋でうちかたのおほなかよしの兄弟分さつきに使遣へ耳こ
 すりわたしの朝まで仕舞ふた身いやでもこの儘歸しへせぬとべつたり謂れて呆れ果て「それ
 がし田舎漢はづかしながらこの様な場所へ一度も踏でへ見すなにいへれてもとき／＼と夢
 のやうで分らねと虚にも身共をにくからす思ふてくださる心ざし一世の思ひで此上なしさり
 ながら口外へ出しかたき願望ありて然も今審のさしかる心の急用事それゆゑにこそ
 つか／＼と人中あるきてあの粗忽何卒今審のこのまゝに歸してはやくりやるまいか旅浪人の
 手うすながら物の入費をおしむにあらす只今もいふ通り近日にかならず来るべしそれまで
 の金子預け置く能様にはからひ下されおまり些少にござれどもトうちがへ金のしきさいだ
 し幾何か知らず紙に包み差しおきて立上るを幾代にわけて抱き留め「事を譯ていはてやんす
 様なか矢張道口上さやうならばとお金を預つてなんにせうなんぼ細がい鯉川ながれの末の
 わたしらでも金が欲しさに戀ひはせぬ「それ／＼ひがみぢや大切の金あづくるのがちがへぬ證
 據「いゑ／＼矢張いやなのぢや幾何有るか知らねども棄て主には厄はらひこれぎりになし

やんしたとて尋ねて往う目的な、何處の誰となのらんしても虚かまことかたのみにやなら
 にならず「そんならまた何すれば其元へ承引する」どうといふたら兎も角も今宵此所に
 泊らんしてわたしが云ふこと篤とき、浮逗留の中なりと客がいやなら色になり色がいやなら
 客になり「いやもう今日は思ひ寄りぬこゝろづかひやなにやかや元來大事をかくし身の上
 女に戯れ居るやうな優長らしい隙はござらぬ」「まうしそれいあんまりな貪欲でござんするそ
 の浮氣強さをみては猶些とも思ひ切れません何でもいやなら存命へて詮なき浮身の浮き動め
 いつそ殺して往しやんせそれもならずはわたしがと差添とりあげすらりと抜き南無阿彌陀佛
 と喉に當ればるゝあふないと「利腕とり」「實にそれは思ひ詰て居らるゝのを辞むも無法な
 れども身共も重なる心痛斯して居間も不孝の不孝さりとて他人をわれゆるに見殺しにせされ
 もせず兎ても武運に尽たる身の上こゝやかしこの言譯にわれこそ腹をかつさばき死ぬこそよ
 けれど刀をとれば幾代はあわてとめせず「わたしも主が死なしやんすれば一途に死ぬと差
 添を再とりあぐる後の障子さりと開てかけでる女兩人の間にすつといり「幾代さんこりや
 何ごとと貴方も何處のお方か知らずめつたに死んで下されてはやさぢゆうさいで困却ますわ
 くしは此家の花車お秋と申してござんさいもの唐突ながら浮腰のものは斯なされてと袖ぐるみ
 両手をかけて推されば「姉さん主のお氣強さはづかしながらお前には兼く「打明はなした戀
 人せつかく廻り逢ふはどの縁はあつても嫌がられ「いやさ全くいやがるのなと「すす譯では
 なけれど「無れどならばどうぞ今宵はあれは思ひ詰てなればなアもうし旦那さまトお秋も
 とも「勤るに現之助もこゝろ弱るといさをしばく「次の間より「幾代さん」「小ちよか
 「ハイちよいと耳をと障子をほそめ「善よ此方へと呼び入れて小聲に告れば投首し「姉さん

まア聞てもおくれ最前から案龍町の松さんが大醉でうちかたからやの使一寸一遍面だして
 れずは自家でも迷惑とおいへさんの別ての依頼かういふお方が出来る上はいよく「勤を大切
 にせねば立派に口もきかれす往てくるのに隙へ入らぬせぬしの意が定まらねば一寸も動れぬ
 「實折悪でわしは「當惑何なるものか往しやんせぬしの確り預つたそんならば些の間あゝ苦
 海で「あるいなと言ひつゝ手早に差添の鯉口くつろげ小指をすつばり懐中紙と共に差出し
 「暫くの間の名代にしておいて下さんせ血せめにもう一度印籠かしてあの藥わたしもぬし
 に離れぬ心もつて幾代は痛さうな面もせずしてつゞとたちそんなら姉さんぬしをバ急度あづ
 けておくよトこづま引上げ小松を伴ひ下りてゆく現之助の幾代が振舞たいおそろしきやうに
 覺へ今又指を切りすて「痛き顔せぬ強氣のふるまひ毛穴ぞつと疎氣だち物をも言はず居たり
 しが背より水を瀝ぐがごとく五体俄にふるへて止まらずお秋の面をさし覗き後にをさし酒肴
 どりいだして勤めつゝ「どうやら俄にお色が悪く夜寒で冷て來たゆへか上へちよいと引掛る
 お伴天でも進ませう「なにそのやうにも浮座らねどもへ「彼の女思ひ切た事をして何
 共はやト嘆きつゝいよくさむげにがちく「振へ「幾代さんのお客の羽織とつておいたを彼
 儘であづかつて簞笥にあつた浮定紋でもありませう浮印籠のと一ッ四ッ目はれも亦一の縁氣
 味わろくともめしませと取り寄て打被すれば現之助右看左看るにあやしむべし鏡色のしほせ
 に四ッ目の五ッ紋裏のぞんすもわが帯の同じ地合のさゝづるうつし紛れもあらぬ父の羽織り
 やうかけに入置て皆洞九郎に盗られし品されば敵の幾代に相馴れ今も通ふか通はぬか探らば
 何の道敵の手がかりこれ減多に歸らぬあら嬉しやとおもふにつけてもいよく「身体ひきし
 まり座にも得堪へぬ寒病おこりか風邪かとお秋もおどろき浮病身がたいでない最前から彼

方の座敷にお味もとつて伊座りませすあの妓の歸るまでお休みなされでそれから酒と致しませ
 ういやこれの大變じやおきやくらしうござりませす下手を曳き寝所に導ひいれ夜着に布團に幾
 つも重ねなでつさすりつお秋の介抱一時あまり苦しむ程に熱氣發りてやくがごとく夜半の頃
 幾代は歸り憂ひ悲み側を離れず醫師をよび藥をわたへ意を盡して看病するに曉き方に熱治
 り夢の覺めたるごとくに治りぬ是のわらやみなりければ兩人の少し心おちいつ現之助は昨
 夕に引替此家に足を留べしとおもへばわざと枕もいたけず今朝も心地のすぐれずとて物す
 すむれども暫もどらねとお秋が強て働るまゝに少し斗の食めつ折節一代が抱へ来る布呂敷包
 を傍におかせ幾代の結び目引解けバ眞八丈のがくつき二枚上衣へじみな縮緬縮緬よりした
 たるを袖綿に細くふかせしはな色龍門からはなごもんの羽重に是も四ツ目の三所紋「染地
 に好いのはござんせねば羽織のなはさらはんの間に合まア平常着のこの様な物で我慢をしや
 しやんせといひつしつつけを扱を見て「はやい手廻り肝心ぢや」大丸へ矢の使者それでもま
 へりの若衆がわたしをひいきにして呉るそれゆゑわづか三時か四時に仕立たればぞんざいで
 身巾がうまく合はよいが下いふ面まもりて現之助「此の小袖の身共の領に拵へて下さつたか
 どらも」泉れかへつて「なんのいなア箇程斗も不自由のあるまいが族先といひさし當りも
 たせておいででもないゆゑにいさすぎたををして印籠をばもんほんにしたもわたしが悪いか知
 らず歌妓ふせいのしんぢゆうの斯んなものと勘忍さんせをして先日のだしづいのお女中やお
 供さん泊宿屋にでも居やさんすか「女」則我等の母人ちと譯あつて當分の別れねばなら
 ぬ義理供の者も母に告げ遣し置きて有馬から来てながまちに只一夜あゝ狐にでも誑されたか
 夢で無かの意持てんない目に逢ふといふのどう考へても合点がゆかね狐穴城とかいふ所

へ迷入て馳走にあひ遂に生血を絞れしとむかしはなしの小耳に残りあやしき醫者に身の油
 とられしなんどといふたぐひ此處もそんなとせよ折悪ひぎやくの病介抱のみか種々の心配
 お身の實意にはたされて身共が素姓名乗り申さんをうそれがじ「三河國吉良殿の御内にあの
 姓氏はさつさにて現次郎とていまで浪人故あつてひとにかくれ幼き時に別れし兄の行衛を
 たづねに出でたる者少し心に屈托の差掛りて昨日のさん親切に背きし言分腹もたてず
 に衣類まで調べて下さるゝ實にあまへていふやうなれ此の邊の諸國の者の寄集ふ繁華の土
 地もしや兄に逢ふまじきものにもあらずと被せられし羽織の紋のひとしきにおもひよつて心
 にたのもし二疊敷でも雨踏を凌ぐまでの空家あらば借請てくたさるまじやさらば病も心措
 ず養生なして何角の様子聞きたくもあり二人へも澤山禮がいひたさに「夫れが眞でござんす
 かお秋さん「幾代さん嬉しひか「うれしうなうてなんとせうおいまつさんの後合せ前月まで
 中の島の何どか屋の隠居さんが居たのが奇麗でちんまりと伊一人おほきやすすに「丁度よい
 く世帯道具も疊も建具も其中でつひ世話もなし「わたしが仕送りするから鍋釜やおへッ
 つひへ入らぬものぢやがあれもかざり「それは好所が有つて最早家の出来たも同前身共がぎ
 やくへ一年に是非一度へ病へど四ツ五ツでおちるが定り全快たら何程も報恩しは急度いたさ
 う不束かな田舎漢太鼓持にはならぬまいが兄をたづぬる其の爲にちと揚屋とか茶屋とかの客
 を外所から覗ひたし難波津はじやうるりの流行る所で上手ばかりと聞及んだが下手も亦笑ひ
 草になりもせう武士だてら遊藝が好で先般藝古して阿彌陀のむねわり十二殿職屋島くだり屋
 嶋聞て呉る人があつて賑ひして語るやうな譯にならば又一層「それはどうともなりませうじ
 やうるりはわたしは大好お病氣が快なつたら第一番に聞かねばならずなア幾代さんゆふしと

へ打て變つて現さまは氣輕でおかしいお方「一度も枕はとらねども千年も馴染んだやうで
 どんと女房の心持氣が晴くどしたわいな「じやうるり語りが老松の社の側に住むならそ
 の名も竹本白太夫と名札でも掛ませう「老人らしうてわたしはいや「そのじやうるりと思ひ
 出した今宵もたしかまだ狂言が「さいな祭禮のあとさわぎ昨夜出ぬので今宵は何卒一段や
 つて見度も日頃の願も叶ふたればこの勢ひでしやりんになつてびつくりさせてやりやんせ
 う頼兼さまと兄弟ぢやと同轍に誑されてそれから俄に愛想づかしさげざりになるどきの苦み
 があゝではないと一昨日叱られたが意茲にあらすとやらでいや／＼で勤めたゆる今宵は心こ
 いにあり昨日は指や足を切り痛い時のころもちよく分つてきた上にも家かたへ書人が来て
 大あんどんを嵩どつたときせんじすはうがのこつて居れば油紙の辨當ぶくる喜助さんの持
 て居るのを貰ふてそつといれて行き身を投うとはにつく女めそれほどに死たくば此の世の
 いとま取らして遣ふ觀念せいとひきつれられ一太刀切られてのけぞる途端おもひ切てしるむ
 くへだら／＼とこぼしかけたら赤綿よりひつたつてどうか情が移りさうな白むく一ツすてる
 のがわたしの仕打の大和屋と聲が一遍掛させたい「おまへへ余程さまへもの若しへ現さんあ
 の通りはすな所は男の様ながあれで貴方に身をつくし難波の事も手に付すそこへ往てはとん
 と生娘奥さまもあるかは知らず何處へおいでなさるにせい行未ながく不憐がつて何卒揚て下
 さんせト執成すお秋現之助はよろこぶに付け又呆れてみちのもの心根はまた格別と心に感
 じみめかたちはもとよりなれ尋常の娘子供のおよひがたき清らさは形づくるを業とする流
 れの女の常なれど此の年まで浴しらす箇様のまじらひせし事なき現之助には幾代が粧ひ楊姫
 妃とも小町とも看られてそゝろに嬉しきにもあわせておもへば父の羽織預けし洞九郎と推

量すれば此の幾代若しや深き情交ならば妨げんか其時は戀の懸義理は義理孝行に替へがた
 し諸共に撃より外仕様もなしと心中に嘆き此の座にて羽織の主の身の上の聞たけれなまじ
 ひに言ひだして怪まれんも諸事の邪魔と何心なきさまして居たり斯て幾代はお秋を談合ひ老
 松町の裏屋を借り現之助を移り住ませ一代の外に二代といふ吾が使ふ二人の使童かはる／＼
 に附置て自らも間がな隙がな側へに來りて介抱し四ツ斗なやみてのち世に尊き護符またな
 んてんの黒焼野に枯れ残るあぢさいの葉を煎じて與へなぞすれど頼にも落す半月余り隔日に
 なやみて弱氣になればお秋もしバ／＼尋ね來て幾代と面を見合せて頻りに愛ひ嘆きけり○
 是より前に復り再び有馬の物語り現之助源五平難波へたちしその迹は獨り落の物案じゆぶ
 れを聞いても立出ん心もなくて斯るときたのむの神や佛の利益諫を聞かではやるのもさら／＼
 無理と思ひぬに付ても彼の子に怪我もなく時節の來すは問際よく敵にいでもあへぬやう護
 らせたまへとこ／＼かしこふしおがみても落着す癪をおさへて秋の日の短きはとも暮しかね湯
 女が夕食をすゝめても習とる手さへものうきには有馬名物しば魚麥わら細工や箱づくし女中の
 かいみ蓋へ可愛らし笹渡しのあんころ餅よし／＼向ふ坐敷に菓子賣の女が客の肩もみながら
 だみたる聲の謡唱歌も耳いとしくうちひそむ廊下より面を出しお蔭の御免と會釋してすい
 とはいつて「御隠居さまスヤわたしたとが茶せんでいらしつてもお若いお方を隠居さ
 まとト氣の毒顔に落はにつこり「四十となればもう老年夫のなき身ハ猶更隠居それ／＼い
 只た一人遣されて寂しうござる「鼠でも引きませう侈氣分もすくれぬ御様子聞いて居ながら
 忙しさにかまけて今日はさつぱり御無沙汰あんころ餅がよし／＼とあんまりよくも御座んす
 まい虎屋のおまんを大坂のお方に最前貰ひましたぶしつけながら御茶うけにと煎茶もいれて

四ツまへ急いで髪もこわれ次第ちよと束ねさせて参りませう呼んでも早くは兎ても来まいト
 さかやきのあとなで見る頂の黒ひ泥坊主人の恩は忘れても口には忠とよろこび啼きとつ
 かはとしてその座を起ち出逢がしらに廊下の隅お蔭にはつたりこりやよいとこで道ならぬと
 ながら他に金子の都合も出来ず難波へ俄然に用が出来ちよつと行れた若旦那おくつてかへつ
 て後家子をだまし若旦那と言交したと執り成して何でも角でも身請して遣ねばならぬ道理す
 くめに説伏て置たれば十に九は今の間にそもじは身儘をこで後家子の前ばかりは若旦那のこ
 ざる所へ連れてゆくとして此家を出てそれからはそもじの里で芽出度祝ふ三ッ盃さんくくせう
 いふにも及ばず汚恩の深い汚主人を見棄て不忠のゑをとるも此の笑くばにはまつた故萬一氣
 違つて身請をバ嫌とあればやふれかふれ手箱の金子を盗みだしても「ゑいやは是はんの戯談
 賊して縛れるしばられて先祝言の盃からして手に持たぬなんのく利口見へても
 おむくでだまし安の運の開た花婿さまをとこ振でも作つて来よう一人しやべつていでゆき
 ぬお蔭ハすでに最前より立聞しつ大方ならず源五平が善からぬ巧計すておきがたくその儘に
 落の座敷へひそかにゆき偽り隠す人の悪事洩す罪とおもへども佛の様な汚隠居さまもし
 汚意がつかぬとき自分勝手ながらもこの蔭も困却る上にもおもへぬ襦衣まア能聞てくたさ
 りませ「顔色かへて氣遣しひ今まで矢張お前の事で源五平が兎や角やと「わたしも其の事申
 したさもうく彼の源五平さんハ律義のやうで大膽者すまぬとじやが立聞して驚きもしつ又
 直にいふのを聞いてわたくしはぞつと身の毛がたちました最前からわたしが身請おたのみぢや
 といふ若旦那ちつとも汚存ないのみかわたくしハ耻かしながら長柄から来やさんした十三
 さまといふお人と四年以前言交し別れし後ハ信もなければ堅く約束せし上ハ今にもしやと

樂んで他へ心散らしませぬそれにまアあの年齢で嫌しひ源五平さん間がな隙がなわたしを
 とらへ始めは座敷にとりなした段々との手詰ゆへ虚言といふても濟さぬ顔色兎てもできる
 事ではないと斯々の金子なくてハ身儘に成らぬと虚言ついたを眞受になつてあの様な棘しひ
 悪計おかねをだして下さりますとわたしハ今更嫌といはれず虚言であつたと云ふたなら殺
 しかねぬあのこり性あんな男に肌觸て立た探を破りては義理も立ねバ身も立すあなれ僕に
 金子かたられ置遣げせられもなさらばト告れば落ハ肝を消し「大勢の召使の中に残りて一人
 の骨折あの正直な實貞ものなんでそんな淺ましひ心になつたか眞とも思れぬぞも虚言ついで
 なんにもならぬお前の口から謂ふのは虚言の筈はないそれがぢやうなら難波へ遣たあの悴も
 ぞんな虚言ついでだましてどうした事やら知れずあゝ案じられるく思へばく悪い奴どう
 したら善からうト腹立落をお蔭はなだめ「あゝいふも人のこるとさハ何をするかも知れませ
 ぬ何卒だまして此場を延し若旦那さへお歸りなさらばどうとも仕置は出来ませう先荒立ぬが
 第一とわたくしハ存じます何にしても不圖したと云い出したわたしが過失「何の彼奴が不所
 存ゆゑいやもう何か仕様も有らう歸て来ぬ間にお前はあちらへ「随分と汚油断なく「ようこ
 を報へて下さんした「別る程なく源五平「もう髪も結やつたかト腹立胸を落は抑へて「彼
 のこともそなたの留守に亭主に掛あひ埒あけて金子もわたしハ置たれば明日ハ早くお蔭をば
 難波へ伴れて往てたもさてもう四ツもうつたらうが手前も知る日頃から信心するぎやうじや
 さまついみのたきにあるゆゑにどきく参詣するにつけ俸が無事を祈るためこゝでは汚百度
 せぬばかり絶へず信心疑して居れ昨日今日ハ未詣で山路なれと僅八丁有り明櫻も落葉し
 てさびしひ所でも月は爽ある好い景色を看たならば心が晴くするで有らう疲足で氣の毒な

から提灯点て彼處まで「お供をするのでござりまするかおやすい事でもござれども深更の風で
 痛所が「留主にめきく癒なつて案じてたもんな大丈夫なれども山の降上りそのときにおん
 ぶして「いよくお出でなさりませぬば茲からおんぶ致しませう」それならば猶嬉ひと身造
 して脊に負れおなた今頃何處へ「チ、お蔭さんおそがけながらぎやうじやさまへひちよづと
 「そりやごたいぎでござります源五平さんへ氣を付けておんぶの火を提灯へうつして滑の
 手に渡しハイそんならと門おくり二人は有馬の町を離れ程なく彼處へ至り着ぬ○此の時月早
 や空高く六甲山の峯をはなれつゝのたきの透りなる紅葉の梢明るく看へ瀧の音沓々と有馬
 川へ漲り落ち物凄けれども秋の夜のあはれ身に染みかりがねのどわたる聲も最と清く看る物
 聞もの意を澄せり折しも近きおちば山妻戀ふ鹿の一聲にびつくりして源五平「畜生め肝玉を
 潰させおつたと看廻す油断見すまして脊におかれたる滑は提灯うちすて懐劍逆手に源五平
 が頸にとりつきかゝんとする手先狂ひて肩骨へ外れて薄手を負ければおつと叫んで手を放す
 滑へ下へとうと落ちみふしの痛も打忘れ直にとび起き突掛るを源五平は身を反しひぢりつ
 かねでよせつけす「下郎には何料あつて名乗りもかけず刃物ざんまい危いのと突放され再
 も突入る刃先「あまり多無法その譯へト言さま短刀もぎとられ引付られて齒をかみ鳴らし「
 ゑんのぎやうじやへ參詣の汝を釣出す爲のみならぬ日頃の忠義に引反へて湯女のお蔭に
 幕のあまりわらへ親子を欺きて詐偽をせんとせし汝お蔭の十三といふものと去頃夫婦の契約
 し二人の男へ重ねぬ娘に迫れ是非もなく偽り謂ひしを實と心得汝がわらへを欺きしは
 めをへりを立聞し互の爲と何にも角もさらりとわらへに告しゆゑはじめて知つた汝が計元來
 一轍の心から善人反て悪人と爲たるから片時も油断ならずと心も轉倒の席にて手撃に

と思へど暴の騒ぎもうたてて欺き出して後から突うくと問を見る間にはやこの山中絶体絶
 命はやまつて打そんじかくとらわれて運のつき殺さばころせ我が一念目前へ憂目を見する
 ぞト且の語り且の嘆き「おのれがそんな心から現之助もどうか又爲へせぬかとのやうに手
 籠に成た身へ思へすあの子の事が案じられる南無ぎやうじやさまやうじやさま薬師さま權
 現さま目前利益を見へし玉ひ此奴に罰を與へてたべまうしくと泣叫ぶ源五平の怒の顔色そ
 んならお蔭の夫が有つて面白くあしらつたはながとくおれをわそんだのか其上に何にも
 角もまき出したので計の露たな色も戀もさめはてた此方に罪の無いやうなれどもおちめをみつ
 ぐ親切づく有馬さんがい濡わらじつかんでいとばす盡した忠義可愛さうだと思ふならそれ
 悪了見違ひだまされて居るのだと聞ぬまでも意見して叱てくれるが人の情みふしも利かぬ女
 のひりきで理非も聞ず油断させ害さうと邪見非道その根性を見るからいもう善人になる
 氣はないお化になるならなるがよい汝が刃物でおのれが息の根留て死骸のどんぶらすもの
 種より柿の皮濼いかたきや誰がした皆な貴方の意から恨を云なら自分に云へト懐劍拾つて
 突込む刃先彼方へすかし此方へ外し遁ても遁さず危き所へ息つきあへず馳來るお蔭「出立
 の後を見送て家へ入つても胸さわぎぢつとして居るそらもなく一人で後から來て見れば悪計
 のその上に御主に刃向ふ人非人さア殺すならわたくしを殺しや貴方に些ともどがはないと刃を
 恐れず執付を拂ひも除けずにつこと笑ひ「さて物好きな夏の虫招かぬに來て火にくがりその身
 を焦す色紅葉蔭に巻れて寝てござる昔のおふぢいさ知らずはれたも道理美ひこの後家を片
 付てそれから手前の手足を縛りさまづい承知で思を晴しそれから遠へかつさらひぶち賣て賣
 を拵へ堅商賣はじめねば年老てから樂がならぬ此奴をたぐんでしまふ間そこにくんで居や

アがれと立蹴に蹴つて脾腹を一當「あゝ慘らしひお蔭をトたちよるたぶさをぐつとつかみ胸板目がけつきつくるを力限りに身をねぢても遁れかたなき狩場の雉「はるりと泣いて呉人もない此の山中へ病人だてらおれを釣出す痴婦ものよく腐つた命だ」と嘲笑てまた振上る懐劍の手を禽れ左右の腕首自然としびれこれの不思議と源五平おどろく間もなく後へ倒され起上らんともがけども些とも働く事あたはず次第に息きれ死ぬべく覺へさても不思議と我身を看れば巾三尺もあるべき石の五尺に余るをわのけに倒れし上に戴られたるなりいではねのけんと力を尽しあせるを上よりわつとおさへいかにも優しき女の聲「身動きしやらば一ト潰し命をしく堪へて居よトさも艶しく聞ゆれば眼をさはめてよく見るに件の女は十六ばかり肩上したる小躰の娘 渚を援けお蔭を呼生け「危い所でござんしたわたくしは此のぎやうじやさまの御堂にお通夜をして居たものうつら」と眠る中怪き物音耳に入り目を開けば貴所方悪らしひ彼奴が手込譯の知らぬと御女中方の難義を他に「見て居られず此通り石段を一個こわして重石に爲たれば活すも殺すも意まかせト云ふ顔渚は打守り「お年もゆかぬ娘御の此山中に通夜するとおつしやるのさへ合点のゆかぬに男子は五人七人しても動し難きあの石をまアいつの間にあの様に持出して彼奴にしよへせ危き所をお助けなされ下されたののぎやうじやさま神佛のお姿を顯し玉ふか有難やト伏拜め打笑ひ何のわたくし近所のもの勿体ない神様や佛さまでいゆさんせぬ然してこちらの姉さん貴方の最前おつしやつた浮詞といひ恐漢もおつた」と云たを思へばだめて有馬の角の坊の「あい其小湯女でござんす」とそれれへもうよい所で態くも逢にゆき咄さねば成らぬ事ほんに澤山ござんするト二人を堂の前に連れ行き「若し十三さんくお蔭さんに會ましたまア早うこゝまでト呼れて堂を立出る男

子の面をおつたの打見て浮加冠はなされてもわたしも些とも見違へぬあなたも長柄の十三さんもあひたかつたく何處に何して居やしやんしたかせの便も聞ばこそ毎日く戀ひこがれトいひつゝ此方の娘の素振看やつて不圖こもるづきをしてまア十三さんあの浮美しひ娘子さんト問へども男の口籠る「アいわたしも去年の冬頃から十三さんと言交し國元を駈落しすこしの縁を尋ねて此の邊りに身を寄せて春から隠れて居ります四年以前當地に來てお前も言交し淺からぬ交で有たといふとも漸此頃益にも立ぬ争しその時ぬしが言出してそれでわたしも始て知り遠く隔て居るでばなしそんなとなら二人とて交よく殿御を大切に爲たらぬ更婚からう親同胞の有りながら我が意から使もならず面も見られぬ力なさ左様いふお方を姉さんにして暮されぬとかとて主をせたくて居たわいなト言れてお蔭の夢見し心地面目なげに十三郎おつたさん勘忍して腹立て下さるな其時いふた通りわしの長柄の濱名の悴まだそのときの前髪立切角堅く言交しやがて迎をよこさうといふたもの歸りし後心に忘るゝ問はなけれと我儘もいひ兼ねてひなし月日を送るほどにおもぬ人の讒言にて父上の勘氣を受け是非なく近江の箕作殿の御家來の石藏氏へ孝公して足かけ三年此女の主人の息女櫻木とて未やうく十六で此通りかばをいうへにもたか女まアの様な力の有る天狗ならずは神佛の顯れたやうなれど母方の大力の代々續く奇特ある五代關右衛門といふ武士にて其娘の満月殿が此櫻木の則母御血縁引て奇代の大力此所より打見しにそれゆゑ今宵も彼の始末をいよいよ櫻木と三味の上の戯れが實となりて引くにも退かれず人目を忍びて語合しかそのうちに播磨國浮島殿の御家來淺賀二代の一之進といふへ縁組さだまりしかば我も勤めこしらへても一圖に思ひ詰てなれば難面いは命にも及ぶ可きかと當惑しそなたの事を片時もわするゝまに

あらねども連立ち近江を逐電し此有馬の東に當り名摺村の紙職人松原左衛門といふ元石藏の家に仕へて浪人したものとやらそれを使いて寄食人ぞうぞ此身の濡衣の乾くやうにと一月に一度づゝ此行者堂に通夜して祈念を凝すにも有馬の町を通るに付なつかしき山々なれど面目なさにかさをふせ又裏通りを廻り道したのも矢張悪かつたもうかうなつての從來のみづくさゝの勘忍し櫻木と交よくしてたもるか何より親切ぞと謂へばおつたも氣前の「わたしは元より賤い身の上姉のおとへは新町へ小供の時から賣れて往くわたしの有馬で湯女奉公おやゑといふはんの名は十三さんの他人の知らず通り名のおつたですまして居るはどな果ない身の上御武家さんの御息女とはりあふ意のなけれども思ひ切られぬ十三さんわたしにも半分愛しからせて下さんせ御兩人で次落をさしやんせす今日此頃十三さんにいま逢れぬ其上にも今宵の難義櫻木さんが御居でが無と何れは悲し聴しひ目にあふやら知れぬところ恩の海山恨みならず嬉しひわいなと悦べば落も顔を差出し外の事かと聞て居れば十三殿は長柄の長者濱名氏の令息か又神佛と思ふた女中の石藏の娘とをんなならわたしが遠江へ嫁たわどで生れたそなたなつかしかつた七月までそなたの邸に悴と一所に泊りて居たわしの叔母の滞で御座る手紙も時々取交し又先頃も櫻木へ何しやつたど問たれば大和のたかちへ奉公に遣たなぞ隠されしそなたの耻を言ひとも無き矢張親の悲慈なれど煙りにも見せなんだ満月殿も氣強ひ女それではわたしの身の上も櫻木は知りやるまいと夫を失ひ家つぶれ此處に漂へ居るとなり源五平の變心今宵の始末をあら〜語れば櫻木はなげきになげき又我身の上面目なく然れども叔母に會合ひ力づよしと悦べばおつたのおや〜事の末末詳くわかりてわれも亦十三が縁に繋れば他の事とは思はれず十三郎も遠州の佐々木と知ては櫻木の事

はなくても離れぬなと息をつきて「諸さまあゝ前の身であるなちば是より長柄へお伴して惨不自由は爲せませぬと勘當の身の上にもあり加之ならず申すにも申されぬ内輪の不締りお越でがあつて善いか悪いか何共はや分りませぬ又差當り氣遣はしひ現之助殿の身上彼奴に白状させませうと源五平が側にさしよりて聲高く難波へ往れし現之助殿いよ〜無事で別れしかつ〜みかくさず詳しくいへ源五平〜といへども更に返答せず謂ぬとて謂せいで石をゆさ〜搦せども叫びもせぬ能く見るに何時の間にか息絶て顔も手足も冷たれば石のおもりに堪兼しかこれはしたりと驚けどその甲斐なれば各々面見合せて打嘆き櫻木は輕々と石取除れば平た蜘蛛此儘置ては後六ヶ敷しと十三が指圖に櫻木は源五平の首筋を氣味惡さうにそつとつまみ逆捲早瀬に投込つ「それでよし〜然ばそれがし明朝早く難波津の方へ起き現之助殿の安否を問ひ聞くとあらば及ずながら少し力となり申さん先兎も角も角の坊へ今宵の往て一夜を明さん死人のゆきぶれ汚れあれは行者尊へはあらためて又の日參籠申すべし「十三殿の曰しやる通り茲から拜んで置きませうゑ有難や姪には逢ふ若年なれど頼母しう十三殿云て呉る惡漢は目前天罰此様子では悴が事もよもや案じは有まいが善様に頼みますト打連立てゆやまの町へハッラつ頃に歸りけり曾根崎に潜み居る現之助がわらはやみ猶息るべくも有らず今宵も寒氣を催して襖幾重もち被られ身体縮まる枕元使童の一夜は甲斐々しげに藥暖め口取の菓子取り出して近く差置き「晝間から松さんが居間に居て歸らしやんせす幾代さんが切らしやんした指が遂〜あらはれてその揉がすみさらすそれで今宵は一過もまだ見舞には來やしやんせす嫌ひの〜客なれど取留ねばつがふちがふそれでも弱ひ顔をして謝つては猶爲にくいと大分苦勞をしてなれどこんなもめが有なぞと決していふなこれしきは

此士の習俗でよく有事なれぬお方は苦勞にして氣合に障るとよくないと口止を爲しやんした
 「よしなき己に實を尽し可愛や重なる心勞辛苦定めて幾代はちやうちやくされ「何のく其
 程な騒ではござんせぬまアそれよりは送さんしたくるめさまの傍符でも明日とも謂す今直に
 頂いて着やしやんせ庭の井戸は車ゆゑわたしにもらくに汲れます水バつはを汲でさて上るは
 いと起てゆく「そなたまでが其様に親切にして呉るといふは何した縁ト涙ぐむ「折悪覺の
 お秋さんも傍十夜歸りがおぢやつて上も下も大騒ぎみにもゆかねといふていあつた主も寂う
 ござんせう水を汲んで上てから島渡歸て様子も見たし成らう事なら島渡など連て來るから案
 じすと待しやんせやトませきつて一代は車を軌せつたぐりあげたるつるべのかた「井筒
 のふちにそつとのせ湯香洗ひて水を移しその儀傍符を水にかざせば現之助は推いたゞき一口
 飲干て神を疑して物言す一代はそんなら往て來ますと出行く後はしんノノと夜は更ねども植
 込の柏の枯葉初霜にから「鳴るも物壑し現之助は猶うめき苦みおこりに惱む其折柄くより
 をがらりのさく「と土足で踏込む一人の癖物あんどろの火で煙草を吸付け「とつより己様
 が傍見舞申さう「と思ふたがこつそりとねらう度々人が居てだん「とおそくなつた現之
 助おれさまの傍面相も忘れたかお笑止やその強病で眼も眩み分るまいが近う寄り傍拜を遂
 よト突出す顔「や、汝めは洞仙が伴をして居た下男の箱助逢たかつた「親人を奥山へ入れ
 てだまして殺した逆賊洞九郎は何處に居る早く日へそれ聞う案内もなく深更に忍び入りし
 察する所洞九郎が指圖を受け我を害せん爲ならん病中なれど汝等に負て居る我にはあらず縛
 うけよト襖を跳のけ衣絞さはなる幾代が巻帯とらんとすれども懸立すこへ口惜と枕邊の刀
 杖に突ながら五体すくみて動れずゑ、口惜や幾増や時も時此強病トわせるを看遣て打笑ひ

「もがきををるはもがきををるは「まひでは些と勝手が悪し時も時ゆゑ來たのだけは成程「親
 方の洞殿のござる所も知らいで何んとせう添合聞たくば聞せもせうがわりや幾代めが色に成
 つてとんだ甘い目に逢ふ奴だおれも幾代が客の一人細く永く通へとておびたいじんとあれが
 つけた祭りの日にも來合せて廻しの與吉が咄すを聞き意にかへれば忍ぶは得手物覺屋の裏
 楷子そつとのぞけばお秋めかおのれに被せたは悪止の揚句に幾代にとられた羽織おのれが父
 の御睛であらう親方から呉れるのだそこで手前を活して置ては親方は兎も角も己が戀のきつ
 ひ邪魔付て仕舞ときは親方へもゑらい忠義汝に負るおれでは無が立合が面倒ゆゑ動けぬ所
 を付込で來た何と利口者ではないかあゝ親方は去國の去大名へ去人の推擧で召抱へられ去に
 ても立派な立身もう仇討は兎ても叶はぬ手前も同じ猿なれど躰も手足も動かさざるさやつさや
 つと吠て居ると飽まで嘲り腰刀をろく「拔出し斬掛れば現之助もはひまはり刀は持てども振
 れもせず苦む様を見て打笑ひ「芝居か何かの本で見た此通りなおこりふるひ切り殺さうとし
 た刀が何とか丸の寶劍でその威徳でおこりがおち當が違つてでんだうおれも亦投られてはめ
 んくが悪いと撰に撰さして此鈍刀もの然もさびたりあかいわし今佛になるしやうじんがため
 食せて遣うと付廻る現之助は彼方へ轉び此方へ轉げて刀を避しが追詰られて障子へバつたり
 外れて庭へとうと落箱助ついで靜に下立ち現之助を土足に掛け三尺あまり蹴散らせ庭の
 井筒にうちつけらる、響に井筒ふちなるつるべがつたり落て汲置の冷水ざつと頭より現之助
 が總身にかかり其冷かさ五体に染み忽ち精神にぎやく病忽ち本腹し思わす衝立ち斬付る
 箱助を遣過し足を拂つて大地へどつさり「あら有難や冷水を思はずあびておこりを忘れ仇の
 かたわれ手に入れしは正しく久留米の神の御利益まつた平日信仰する神佛の冥助ならんゑ、

嬉しや心地よやトうごめきく運んとする箱助を宙に引立て練り寄せたる車井のつるべひき
 きりもて縛め「さア洞九郎はなんといふ武士に成つて何處に居る白状せずば急所を除けなま
 すにきざんで愛目をみせう病氣見舞のあかいわし貰へば此方のこれから御馳走帯よりましの
 つるべ細細く長く苦ませ根こそげ白せた其上では芽出度此の世をさるまはしあの世へころり
 とこかして遣うなんにも知らざるなんどとは謂せはせぬト目前へ及先差突られてひとちみ
 「あゝまうします申しますするが節分の鬼のやうにあかいわしが目へはひつて恐くて物がいは
 れませぬ名作ものは持ても来すよもやと思ひしおこりは忽ち彼の村正にあらねども神や佛の
 かごつるべ水もたまらずおちるといふは罰アあらそはれぬ奇特ぢやよなア「ええやかましい
 云ふ事は云ひ居らいでと刀の胸打折しもやうくみどりやより幾代は此所へ馳來り現さんぬ
 しは何時の間にお健な身のとりなりをしてまアどうした事でおびさんは縛られて「不審はも
 つとも此者は荷ならぬひさしき盜賊「羽織の紋が同一ゆゑ若しや尋ねて居やしやんす兄弟
 衆でも有うかど「思はれたのも無理にあらす日増に心体打明て實を盡して呉らるゝそなたに
 猶もかくしたも恨みても恨むに若はなしとの我遠慮最早秘さんやうはなし某は遠江今川殿
 に仕へしもの佐々木現之助父の現太左衛門殿を盜賊洞九郎に敢なく撃せ祿に離れ國を追れ親
 の仇を報せん爲國々を遍歴する折しも御身に思はれて嬉きものゝ心のはだし仇討の故障と思
 へば難面くふりさるその折柄ぎやくを病ひ其上に父の最後に奪はれし羽織を見付て此邊にい
 よく「仇や引廻ると僥幸足を留しところそれより益上なき親切心も弱り今は早や此方より
 所望でも夫婦になり生を變ても離れぬ心それは差措き此おびとか云ふのは仇の召使我が病氣
 をしも付込で害せん爲に忍び入り危き折神の利益つるべの水を総身にあびおち難かりしお

こりには全快やがて此奴を縛めて今拷問を爲る所そなたが愛する客はもせよ是非なき次第と勘
 忍われ「知らぬ事とて穢しひ盜賊でござんしたか勘のかなしき枕を交し耻しひやら悔ひやら
 それでなくても始より些ども好た所はなしゑゝこゝな盜賊面思ひ切り責めさんせをして主は
 今川さまの滲家で佐々木の滲子息なら私の親の家來筋お世話の仕度バツかりで滲主人さんに
 もよいところに滲恩の滲主の若旦那と云たがほんに成たのでこんな嬉ひことはないト悦ぶ幾代
 現之助もしてまたそなたその親父はと問ひ掛る時しもあれ次の間の隔の障子手荒く引開け駈
 入るは安龍町の松とかいふ客戀の仇の浪人奴おもひ知れやと現之助目掛て振廻す
 宵に晴し大空の雨雲頻りに敵ひ重り時雨かあられかあらしく風に雜りて降出す折しも
 己に書せるごとく安龍町の松といふ客酒に乱れて前後おぼへず現之助が棲家を誰に聞しか能
 く知りて仲居に預けし腰物を取り出して彼處を駈出で此家へ踏込み荒廻るに現之助もてあぐ
 み罪なき者に怪我させてはとあしらふ程にあんどうを先いやさきに踏倒せば燈消て眞時更
 にあいろも分らばこそ松へ忽ち踏外し椽より落て井戸端にいましめられたる箱助がそびらへ
 したゝか身をうちつけ「さては素早い現之助もう茲にかくれて居るなト斬かけられて箱助ハ
 縛れながら身をねち向け「是ハ堪らぬ是でない人達だと云ふのも聞すよるめきながら斬付
 る刃ハ機よく手首の細目ふつと断れば一二寸薄手の負を痛も覺へず天の與へと箱助ハ松を突
 やり遁んとすれと目前も見へねばかささぐる両手に思はず植込のねすもちの木を抱へ込足も
 てさぐれハ堀際なり仕て遣たりと駈登り外面へひと飛ひにげされ現之助ハ心も注す猶目當
 もなく振廻す松が刃の光を目あてに近づき寄て組伏んとするを幾代ハ危なかり棄て遁たがよ
 いハいなト口にいへと東も西も知る由なけれハ冷汁を流してあせるばかりなり此時門邊に

嬉しや心地よやうとめさく運んとする箱助を宙に引立て練り寄せたる車井のつるべひき
 さりもて縛め「さア洞九郎はなんといふ武士に成つて何處に居る白状せずば急所を除けなま
 すにきざんで寝目をみせう病氣見舞のあかいわし賢へば此方のこれから御馳走帯よりましの
 つるべ細細く長く苦ませ根こそげ白せられた其上では芽出度此の世をさるまはしあの世へころり
 とこかして遣うなんにも知らざるなんとは謂せはせぬト目前へ刃先差突られてひとちいみ
 「あゝまうします申しまするが節分の鬼のやうにあかいわしが目へはひつて恐くて物がいは
 れませぬ名作ものは持ても来すよもやと思ひしおこりは忽ち彼の村正にあらねども神や佛の
 かごつるべ水もたまらずおちるといふは罰アあらそはれぬ奇特ぢやよなア「あゝやかましい
 云ふ事は云ひ居らいでと刀の胸打折しもやうくみどりやより幾代は此所へ駈来り現さんぬ
 しは何時の間にお健な身のとりなりそしてまアさうした事でおびさんは縛られて「不審はも
 つとも此者は苟ならぬひさしき盜賊「羽織の紋が同一ゆゑ若しや尋ねて居やしやんす兄弟
 衆でも有うかど「思はれたのも無理にあらず日増に心体打明て實を盡して呉らるゝそなたに
 猶もかくしたる慎みても慎むに者はなしとの我遠慮最早秘さんやうはなし某は遠江今川殿
 に仕へしもの佐々木現之助父の現太左衛門殿を盜賊洞九郎に敢なく撃せ祿に離れ國を追れ親
 の仇を報せん爲國々を遍歴する折しも御身に思はれて嬉きものゝ心のはだし仇討の故障と思
 へば難面くふりさるその折柄さやくを病ひ其上に父の最後に奪はれし羽織を見付て此邊にい
 よく仇や川徊すると僥幸足を留しところそれより益上なき親切心も弱り今は早や此方より
 所望でも夫婦になり生を變ても離れぬ心それは差惜き此おびとか云ふのは仇の召使我が病氣
 をしも付込で害せん爲に忍び入り危き折神の利益つるべの水を隠身にあびおち難かりしか

どりは全快やがて此奴を縛めて今拷問を爲る所そなたが變する客はもせよ是非なき次第と勘
 忍われ「知らぬ事として穢しひ盜賊でござんしたか勘のかなしき枕を交し耻ぢひやら悔ひやら
 それでなくとも始より些ども好た所はなしさうこゝな盜賊面思ひ切り責めさんせをして主は
 今川さまの湯家で佐々木の傍子息なら私の親の家來筋お世話の仕度バウかりで傍主人さんに
 もよいころに湯恩の傍主の若旦那と云たがほんに成たのでこんな嬉ひことはないト悦ぶ幾代
 現之助もしてまたそなたその親父はと問ひ掛る時しもあれ次の間の障子手荒く引開け駈
 入るは安龍町の松とかいふ客戀の仇の浪人奴おもひ知れやと現之助目掛けて振廻す
 宵に晴し大空の雨雲頻りに蔽ひ重り時雨かあられかあらしく風に雜りて降出す折しも
 己に書せるごとく安龍町の松といふ客酒に乱れて前後おぼへず現之助が棲家を誰に聞しか能
 く知りて仲居に預けし腰物を取り出して彼處を駈出で此家へ踏込み荒廻るに現之助もてあぐ
 み罪なき者に怪我させていとあしらふ程にあんどうを先いやさきに踏倒せば燈消て眞時更
 にあいろも分らばこそ松の忽ち踏外し椽より落て井戸端にいましめられたる箱助がそびらへ
 したくか身をうちつけ「さては素早い現之助もう茲にかくれて居るなト斬かけられて箱助ハ
 縛れながら身をねぢ向け「是ハ堪らぬ是でいな人達だと云ふのも聞すよるめきながら斬付
 る刃の機よく手首の細目ふつと断れば一二寸薄手の負と痛も覺へず天の與へと箱助ハ松を突
 やり遁んとすれと目前も見へねばかささぐる両手に思はず植込のねずもちの木を抱へ込足も
 てさぐれば堀際なり仕て遣たりと駈登り外面へひと飛ひにげされと現之助ハ心も注す猶目當
 るもなく振廻す松が刃の光を目わてに近づき寄て組伏んとするを幾代ハ危なかり棄て遁たがよ
 いいなト口にいへと東も西も知る由なけれバ冷汗を流してあせるばかりなり此時門邊に

許多の人音燈照して入來る松が遊びし千鳥屋の仲居女に若者松の何處へゆきたるかと思ふ尋ねしあげ句若もや茲と立寄て此有様にびつくり驚天宵から旦那の大機嫌果してこんな大騒ぎ「こりやまア何で汚座ります汚静に爲れませと立寄まよに現之助早く刃をもぎ取て鞘に納めて遠へやるこなたに座敷を空し幾代を知つて仲居共引立て出れば松のなほ聲荒らかに六ヶ敷いへども勢ひはじめに似す後で何ともなりません只何事も私共へ汚任せなされあつさりとは機嫌直しの仕様のさま／＼お腹の立へ尤もつともごかしに松を誘ひ現之助にいしか／＼と物をいひはで出てゆく現之助の傍を片付見やれば庭に縛め置きし箱助の影もなし走らせたるその残念千萬然とて未遠へ行まじ堀の外も老松殿未境内に彷徨て居るかも知れぬと門の戸引たて駈出る向へ高かに念佛唱へて來かゝる修行者現之助の衝當り氣の急儘に眞平御免「佐々木氏でい汚座らぬか」はんに貴方の有馬の湯でせけふげうけし大仁様「さてそこ許の御住居へ此の所で御座つたか愚僧も此頃寺に歸り十夜の中毎夜／＼暮廻りして有縁無縁法界の殊香を致致すでござるして其許はあわたりしく「お聞下され其節も御咄し申した探物其手掛りになるべき癖物不意に捕へて問ひ聞程に故障出來て捕遁し其迹追んと目前も見へず慮ぬ失禮致したりさやうならバト言葉て行を大仁呼留め「急ぐ悪しと論したるをもはや失念召れたの時節を待て早まらばわざはひを招くの端遁るを追ふん決して無益それより猶目前によき手掛りのあるを見て我言を信じ召れさらばといひて大仁の南無阿彌陀南無阿彌陀梅田を指して別れ行く現之助の目の前に手掛りありとは何事なるかと門のあたり庭の隅々残りなく探し廻る所へ入來る若者「只今の飛んだ大騒動お怪我も無御目出度現さんの御前だが我儘を立通しても点の撃れぬ幾代さん此様な快樂をこしらへて置きやつても親方も

黙つて居れと宵からつれたいきさつのあるのに他でもない松さん六ヶ敷のを知りながら此處へ來たのは彼奴にのちと出來ぬかと思へれす一いやもう他人の兎も角も身共が一番面目ないなになさうでも御座りませぬそこでさつきの彼の腰のもの未彼儘に大方此家に「成程彼處にしまつて置たト取寄て能く／＼ながめ「思ひもよらぬ美事な作へ何の心も付ざりしが彼裂織といひ此短刀序に身をも一見とすらりと扱持ち燈を近づけ「いよく／＼確にこりや旭といひかけて鞘に納め「成程比丘の活佛ト感する面を若者いふかしさうにのぞき見「現さまお前んとさ／＼と何だか變な目付をして佛と何の事段の降たが雪は降ぬいくら更てもまだ八ツまへ朝日の出には余程だとりや行ませうト脇差をとりあぐるをば否とも謂れず何氣なく歸しやり獨つ／＼首を傾け「あれこそ正しく父上の長柄の長者へ結納に遣す約束なされし短刀其光り眼を射て正面には向ひがたしと朝日丸と是を名付乱れ鳥を目標とす松といふは彼奴が絆名安龍町の薬屋九べいの店の者實の名の作兵衛と去し頃幾代が咄し彼の箱助の類にて矢張彼奴も洞九郎が身寄のものにはあらざるかさ／＼とて獵に手込にし責問る者にもあらす幾代を深く慕ふが傍伴此由篤と言合め彼奴だに其身を打任せハ素性も包す明すべしわゝ然ながら全盛に暮すためぞと容ぎらひせぬ彼の幾代がよく／＼に嫌なればこそ振とほす松に今更靡けといへ儘過といはれもせまい我女房とひふでもなく今宵こそ我名を聞て家來の娘と始て知れ是れ迄で凡そ小一月見染たとか慕ふとかいふばかりにて縁も無く由縁も無きに身を尽し物の入費もいとほいこそ親身も及ばぬ彼奴が親切實意に引れて何時しかになつかしくなりかへゆくなり彼奴が他には世の中に女へ無かと思ふまで引れて居る間も目先にちら／＼飽まで承知をして居ながら馴じみの容の來たといふ其夜の自然と小腹も立ち二日もつゞきで隙なりと聞

ば肩身がすばまうかと案ずる程な愚痴になり彼の悪々しひ松とやらの自由にするの口惜く
 われも定めて嫌であらう引入れられて今宵まで引續きてのわらの病荷の枕も交さずして斯ま
 で深くなるといふはさて珍しひ二人が中變た事もあるものと思ひつゝけて居る折柄「現さん
 まだ浮伏ませんかお瘡が落たと聞たのでそれは何より嬉ひが笑止もない今宵はお使一代や提
 灯お消なすいひつゝ上てべつたりするは覺屋の女房お秋「深更に來らるゝのみか平日に變
 て元氣もなし何の用事か氣遣しひ今晩の初更から種々の騒ぎの紛に神の涉利益は落たが疲
 れたゆゑがつかかりとしてものぐさく寝さへいやな心持「今宵の二度まで危ない事あら〜彼
 奴で聞ましたちつと余義ない用事に付千鳥屋へ往て居ると松さんとやらの座敷から呼に來て
 其席で幾代さん平日にない酒機嫌のどろ〜目今一代をば現さんの所へ遣ふとした所是か
 らおまへ歸るなら此處までよいと現さんの來るやうにいふて欲い他事でもないがかう〜
 の事で酔ての上なれと松さんも此體で歸られぬ皆の物へ祝儀でも出さねばならぬといふ所
 持合せた爲換の金子宵に預けて置たのを手付に渡してわたしの身請をれ〜まア有難い思召ぢ
 やと家でのよるこびわたし〜是迄現さんに戀の意氣地を立てぬいて思ふ存分貧いだけれと勤
 する身で長とくいさら〜世話がなりもせず不思議に今宵おこりも落ち最早達者にならしや
 んす此處が善い別れぎぬ松さんに乘させたお金子の冥利が恐くもあり思うしたのを腹立てず
 氣長に通ふて下さんした心ざしも悪からず情夫と名乗つ現さんに松さんの前で斷で見せずば
 氣が濟ぬ呼んでも此家へ來なさんせずは兩人手をひき押掛ると左様いふて下さんせ返事は
 一代に吞込せ歸しておこせで下さんせと眞面目とさつて平氣な顔わたしも呆れて物が言れず若
 しや様子もあるとかと廊下へよんでも顔も出ず勿論親方姉ぢよる寄てたかつてきびしひ意見

した様子にこぢよくが咄しその手前でも有うけれと請出されて何にもならずまアあんまり
 心變りわたしは無暗に腹が立いま〜しさにどうと起ちわい其通りといけませう何とも勝手
 にしやアがれと小聲で叱つて歸つた所ありやまア何した譯になつて彼様な愛想づかし何もわ
 たしの合点がゆかぬお心當りもございませんか「お秋さんさへ分らぬ心底此現之助に知れや
 うとあの女ゆゑ身をうりしきやくの果といふにもあらず怪我をさせて引張られそれから今日
 迄たて過し食物衣服する〜の些細な事まで心を付一生運命ふ女房たりとも及ぶまじき實意
 にほだされ兎や角おふい我過失わが全盛に担任せ善も悪くもあの幾代只我儘を立通し意地
 より起る親切にて尋常の戀路にくらべ道理を以て推難しあきらめられたりとして腹を立恨みを含む
 交にはあらず秘す事をも漫に明し肌ゆるしたわが失錯猶一大事を頼んと思ひしとも水の泡
 實に〜時節の至らぬゆゑ九分成就して一分にて事調ぬものならん來いなら何處へも往ま
 せうそんなら一代案内しやれ暫く留主を頼みませう一度も出ねば鏡も未無のに開ても置るま
 しく千鳥の火鉢の引出二ッ目何にか有つたに羨茶でもこしらへて待て居てだにもらふならそ
 れこそ恩にさるいやわれきり火もおこさぬすみとりの屏風のすみにあゝ其疊は油だらけ
 裾を引てはたまらぬ〜とどりや往て來ませうといひつゝ衣服改めて大小たばさみ履物をさが
 せばお秋もかりたつて「留主は一代を置てもすむ待しやんせわたしとも〜お伴をせねば
 落着れぬ現さんのあきらめやうも余り奇麗で腹におちぬ矢張人に油断させ松さんのこんどは
 うらはらだしぬきにつるさのまひ「是はしたり年若な愚な身共おさしかへもないこしものを
 畜生の爲にはいつかなすてやさぬいや畜生といふでもないいやもう大事を抱へた身共女の意
 の變りしは弓矢神の矢張お護り氣遣ひ無用と足早に出で行く後より燈を照して追付使童の

一代お秋は提灯受取ておまへに彼方へと歸しやり入りぬを現之助辭ひを聞す後に付千鳥
 が許をさしてゆく歌妓の三味線帯間の歌酒びたりなる其處へわろびれもせず現之助入來れば
 見返る幾代お松のわさく、齋寧に手を付て一禮し「先刻は失禮千萬幾重にも珍免われさて此
 幾代は其許と深く交したとやら此度拙者亭主に請うけ家の妻に致すからは指もおさし申
 しませぬぞ「現さんへ旦那さんのいふての通りわたしが身請の相談も最早さつぱり住吉の枝
 葉榮ゆる松さんと幾代易らぬ夫婦の盃さんくくさすともお秋さんにいふた通りお
 かしひ夢をお互ひにみたと思ふて下さんせ「さて「念の入れた挨拶未練の些とも遣りいせぬ
 望まれて書た起證反古にならず返して貰う其許の持参した守袋の口を開き取出して投
 やれば「わたしもお前の起證文手渡しせねば意がかりかみくさまのお名も入り入らぬ物と
 てうちやらす又女子でも出来た時間に合せたが善いはいなト同じく投出す封じ文口惜ながら
 も現之助胸をさすつて手に取上げ上書讀んで目を看合せ裏懐へ納れば「はんに重荷を下し
 たやうなそこに緩々居さしやんせ松さん早う腰やんせう「まア待やれ今日亥の日と爐をあ
 けてさつきに少し火を入れた巨燵がいまだに暖かさうちとわたつてから其上でつめたきや何
 處でもこれからわたしが澤山わたしめる手前實々其意が「知れた事をと寄添ひ戸屏風一枚
 開くをもてお秋は堪らすつとで「現さんが温うして居さしやんすりや善いかと思ふて
 義理も法も知らぬ女姉で無れば妹でなし交際のみ現さんと代りてわしが一騒動入れねば此儘
 引込れぬ金持面の襟に付く安白粉の厚化粧千枚張の其横顔はりぐちかいでは置うか下寄んと
 するを現之助「よせといふのに付て來て人に意見を述べたものが女だてらに「それ
 も余り「まアよい」打てよいなら己が打つ兎も角彼方で何事も咄せべ分ると押隅て手を取

りあぐる其後には二人がひとしく脱ぐ上衣投るをこぢよくが受取てた「むななたに吸付て差
 出す長煙管煙草の煙り雲となる巫山の夢を結んと昨夜の雨の濡かゝる折しも側の巨燵のやぐ
 ら搖ぎ出ると見る程に中より布團引巻り顔れ出たる一人の老女松は見るよりびつくり驚天遁
 もゑやらす頭は疊疊をよつ立て被らんとする布團をもひきめくられ「よなほし「まんざい
 らくト叫べが老女は苦笑ひ「幾代殿とはそなたちやの能うも「作兵衛をだまして齋果にし
 てたもつた私は住吉安龍町此作兵衛が主人で浮座る九ばい次殿が亡なられ今年で丁度十三年
 後家をたてた此お癩此奴が甘い口前にうつかりのりの歸りばなゑうさかへりの料理屋でつひ
 した譯に成田屋も及びやせまいと愛うなりあまの目を忍ぶ鳥や脊やお腹や大腹にならぬ藥
 の月ながし、嬉涙の水せき入れて田もやろ畑もやらうとの新参なれど引撃て蔵の鍵さへ預け
 した皆な此方が悪けれを善い事にして我儘氣儘あつ物のと老人を嫌うて後は寄付す悪所狂
 ひに外を内客氣をしても叱ても蛙の面に水遊び鯉川より住吉の隅に置れぬすはまぐり味はす
 ぐれて居ようもの嫌れながら浮々と金を費うた其上で町人の及物扱ひの果へ身請の相談とい
 己の呆れて物が言れぬ疾より戀は覺め果てたが借な所を見た上で今日も今日とて身をやつ
 し此邊の奉公人世話するもの知つたのがあるのを幸ひかうくと咄して此家へ日暮から借
 お針の目見へ勤め就中今宵は客達の多くて誰も忙しく物いふ人さへ無いも天の與へ
 と此處に立彼處に隠れて己が仕打残らず見れば思ふたに百層倍の不埒もの最早泣ても笑ふて
 も家へは急度寄付ぬ主でない家來でないそしてあの何んでもない往度方へ行をらう唐山揃も
 誰衣せた袖も羽織も持てゆく補半は呉て遣る程に琉球袖のどうぬきさ「ア「脱だりく
 といやをういはせず剝取られ極へふる「「寒と夜着ひつかつきてつ伏ば幾代は思はず

吹出す不埒者の勘當するそなたをばはじめ氣の毒ながら勿論身請はさつぱり破談手付の金と彼奴が脇差此處へ持て来る様に家方へいふておくれ彼奴が爲には一文きなる費も管は無れども虚いふて来て隠れて居たわしが今宵の挨拶も場所がらゆゑ思ひ切り一分一厘は渡しますトをし返す法に無しと六ヶ敷いひかけても争ひ負ぬお瘤か強情遂には金と脇差も受取て「是でよしト松が衣類を包んで脊負ひ脇差を腰にさし「そんなら大にお世話で有た些とも早う歸りせう廣田や今宮の邊へ往と整しくなれと身の守刃物があれバ大丈夫唯で籠にも乗れぬ斗かなまじひに脇道へかきこまれて金よりも姫御前の身は不用心トつぶやき立出れと挨拶を爲るものもなし「悪所の者の義理知らず提灯貸せうといひもせぬハイ借ぬとて困却らぬのさ月さまがあの通り心を切る世話はなく懐中手のなる丈が矢張徳ぢやト減らす口南を指してとばくどかすあまたなる橋を渡り難波の町も出離れ猶行く程に廣田の社の松の林に差懸る早や「曉の風寒く虫の聲さへ枯果て寒しと言ん方もなし此時後に聲高く嬰アめ待と呼ぶより早く背負ひし包に手を掛へ失脚に後へのけぞりかへらせ足踏掛る癖者ありお瘤は悲しき聲を揚げ「あれ悪者が殺します誰ぞ助けて下さりませ人殺し」と叫べと應るものとは唯松風の音ばかり「やかましい黙つて居ろ「や」汝めは作兵衛ぢやな「ア、己たが某が何した留立するのが而倒さ千鳥屋では爲る儘になつて耻面かいて居たが能く酷い目に逢はせアがつたな彼處の奴等もいたげんさあると色は旦那さま此身になれば二階にはもうたいててもをさををらす己が見立てた有て流石に幾代も分つた奴は是まで思つたを悔み眞實愛うなつたかして下着の小袖と此巻帯貸たばかりか近ひ中是非寢覺屋まで来て呉れる是限にさしやんして「現さんへ

も耻かしからう他人のあちめを他に見て居られぬわしが性分お前の恥を雪にや置ぬと實の涙を落し居た此方もたてひき出直して身請をせねバ男がたぬ金も小袖も脇差も返した上で明日から薬師屋の跡敷を譲らば命は助けでやるいやたと吐さは踏殺すぞうだくとゆすぶれ「あゝせつないトお瘤は肩息「まづ足を寛めて呉れ是非がない望みの通り叶へて遣うといひさ少し寛まる足を両手に抱へて押倒し起上つて腰なる脇差振んとするを寝ながらに足もて蹴やり立上り「さても小瘤な死にぞこなひ其根性では助けられぬ御題目でも唱へて居ろト又乗掛けて脇差振もち胸板目懸てぐつさぐさなお瘤は手足を頻りにもがき「主殺しの極悪人罰が當らでなんどせうあゝ苦しひあゝせつないどうでも己は死ぬるか「ア、死ぬのだそれから三途の川で履お針おバアさんの手傳して京かたびらの洗濯しろ最前に己が衣服を剝た時の意氣込では好給金が取れさうだオヤもう些とも動かね息が絶たか貰ひ物だ去年の會式が新枕今年の十やが北枕南無明法蓮華經南無阿彌陀佛に袖に血が付ねばよいがト死骸を起し脊負し布呂敷解んとする時來懸る人影見付られては叶へじと松の木蔭に駈込て見れば獸の皮を提げついでれの袖もいふせげに餌鳥とおぼしき若者なりお瘤が死骸をとほくより見付て立寄り点頭々々血もいとわす金財布外して己が首に懸布呂敷包腰に付短刀の身を取上つし鞘を捜せと見當ねば獸皮にて身を包み猶くまぐををかき探るそのさまの唯物ならぬに作兵衛の氣後れし面をも出さず潜み居る折形又も此所へ急ぎ來るの現之助茲彼處に眼を配りゆくつまさきに觸れる物取上て是りや脇差の鞘でハ無かトいふ聲に愕く非人は足早に去んとするを現之助見つけてつかく歩みより腰邊に手を掛るを軽くひねつて振解き通るを通さず引戻す互ひにむどうの挑合暫時時間を移す折しも數多の人音近付き來てはいはるくと呼はりつし鎗狹

吹出す不埒者の勘當するそなたをばはじめ氣の毒ながら勿論身請はさつぱり破談手付の金と彼奴が脇差此處へ持て来る様に家方へいふておくれ彼奴が爲には一文きなる費も管は無れども虚いふて来て隠れて居たわしが今宵の挨拶も場所がらゆる思ひ切り一分一厘は渡しますし返す法は無しと六ヶ敷いひかけても争ひ負ぬお瘤が強情遂には金と脇差も受取て「是でよしト松が衣類を包んで脊負ひ脇差を腰にさし「そんなら大にお世話で有た些とも早う歸りせう廣田や今宮の邊へ往と寒しくなれど身の守及物があれバ大丈夫唯でハ籠にも乗れぬ斗かなまじひに脇道へかきこまれてハ金よりも姫御前の身は不用心トつぶやき「立出れと挨拶を爲るものもなし「悪所の者の義理知らず提灯貸せうといひもせぬハイ借ぬとて困却らぬのさ月さまがあゝの通り心を切る世話はなく懐中手のなる杖が矢張徳ぢやト減らす口南を指してとばくどかすあまたなる橋を渡り難波の町も出離れ猶行く程に廣田の社の松の林に差懸る早や曉の風寒く虫の聲さ「枯果て寒しと言ん方もなし此時後に聲高く婆アめ待と呼ぶより早く背負ひし包に手を掛へ矢廻に後へのけぞりかへらせ足踏掛る癖者ありお瘤は悲しき聲を揚げ「あれ悪者が殺します誰ぞ助けて下さりませ人殺しと叫べと應るものどては唯松風の音ばかり「やかましい黙つて居ろ「や、汝めは作兵衛ぢやな「ア、己たが某が何した留立するのが面倒さ千鳥屋では爲る儘になつて耻面かいて居たが能く酷ひ目に逢はせアがつたな彼處の奴等もいたげんさんあるときは旦那さま此身になれば二階にはもうたうせてもをさをらす己が見立てた女有て流石に幾代に分つた奴はまで悪うしたを悔み眞實愛うなつたかして下着の小袖と此巻帯貸たばかりか近ひ中是非寢覺屋まで来て呉れる是限にさしやんしてハ現さんへ

も耻かしからう他人のおちめを他に居て居られぬわたしが性分お前の恥を雪にや置ぬと實の涙を落し居た此方もたてひき出直して身請をせぬバ男がたゝぬ金も小袖も脇差も返した上で明日から薬師屋の跡敷を譲らば命は助けてやるいやだと吐さば踏殺すぞうだくとゆすぶれバ「あゝせつないトお瘤は肩息「まづ足を寬めて呉れ是非がない望みの通り叶へて遣うといひささ少し寛まる足を両手に抱へて押倒し起上つて腰なる脇差振んとするを寢ながらに足もて蹴やり立上り「さてお小瘤な死にぞこなひ其根性では助けられぬ御題目でも唱へて居ろト又乗掛けて脇差振もち胸板目懸てぐつさぐさなお瘤は手足を頻りにもがき「主殺しの極悪人罰が當らでなんとせうあゝ苦しひあゝせつないぞうでも己は死ぬとか「ア、死ぬのだそれから三途の川で履お針おバアさんの手傳して京かたびらの洗濯しろ最前に己が衣服を剝た時の意氣込では好給金が取れさうだオヤもう些とも動かね、息が絶たか貰ひ物だ去年の會式が新枕今年の十やが北枕南無明法蓮華經南無阿彌陀佛に袖に血が付ねばよいがト死骸を起し脊負し布呂敷解んとする時來懸る人影見付られては叶へじと松の木蔭に駈込て見れば獸の皮を提げつゝれの袖もいふせげに餌鳥とおぼしき若者なりお瘤が死骸をとほくより見付て立寄り點頭々々血もいとわす金財布外して己が首に懸布呂敷包腰に付短刀の身を取上つゝ鞘を捜せど見當ねば獸皮にて身を包み猶くまゝををかき探るそのさまの唯物ならぬに作兵衛ハ氣後れし面をも出さず潜み居る折れ又も此所へ急ぎ来るハ現之助茲彼處に眼を配りゆくつまさきに觸れる物取上て是りや脇差の鞘でハ無かトいふ聲に愕く非人は足早に去んとするを現之助見つけてつかつか歩みより腰邊に手を掛るを軽くひねつて振解き遁るを遁さず引戻す互ひにむとりの挑合暫時時間を移す折しも數多の人音近付き來てはいはろくと呼はりつゝ鎗撃

箱従士若黨三間棒の橋を中にかしせてうたせれば是非なく非人と現之助左右へ別れて躊躇ふ程に橋より面を差出し現之助の顔打見れば此方も急度見反せど流石に月夜たしかに分らず又差覗けは隙をばつたり橋急げばこの間に非人の逸足いだし小路へ折て遁去をなほ現之助は追掛る作兵衛の除々と松林より立出つゝ一切角ばアを殺したか何にもかも横取せられ死といふの聞たが是こそはんに犬殺しうか／＼として又人が来ては逃るも逃られぬ此間にさうだト断出しかけいやこれといふ的のなし何處へ行ラト手を組む折納華表にはたぐ社の鶏とつけいこう一口真似をしやアがる○浪花の津より遠からぬ長柄川を横にうけ高く築ける瓦ふき又土藏もて押廻し木立物ふる一構への濱名左門が先祖より持傳へたる家居にて二代になしとの俚言に違ひて既に七八代榮へて家名をおどさぬは實にも長柄の長者なるべし金銀寶庫に充ち何一ツとして足はぬ事なく快しき限りあるまじきに心に任せぬ塵世とて妻のお大は面もよく萬事に拙らぬさもねたみ心の最とく深く左門がまへは年若き下女は面さへ出させず引續きて二人の子を産み兄十三郎妹梅ヶ枝諸共成長してはや春情つく程なるに孰も玉をのべたるごとく美しき子供にてこきんびいなをもるがごとしさて其二人の交のよさ十四や十五になりながら種腹變らぬ兄弟なればさしあひくらす耻かしと思ふ心へ更になく伏にも共に枕をならべ起れば一ツにむつれあひ他には友達伴をも求めず人交もせず嬉しげに遊ぶを見るに母お大我子ながらも妬ましく別れて居よと叱ても猶目を忍び一所になればさて悪らしや嫌らしや彼奴等ハ犬猫の行するに極りぬ棄て置て家の瑕追出すより外ハ無しと夫にさま／＼譏言し確に見たる事ありと畜生に執成して尾跡を付たる口の針に忽ち懸りし夫の左門元來敏き性ならで唯お大のみ我佛と尊み居れば彼がいふ詞ハ善悪疑はず一さて嘆ハしき子供が行跡

世間に廣く知れぬ中兎も角も計らん梅ヶ枝ハ遠江の佐々木氏へ嫁に遣る約束したりし事あれば能く問合て否應いばせず近き内に遣すべしそれまでとて二人の者一所には置難く毎々親を理話して利口ぶる十三郎相續なれどうるさい忤家に置ぬに若ハ無しと折も折とて十三郎三光と名号たる茶碗をおとし環付けしを科にとりなし詫ても聞す些少ばかりの路用を興へ情なくも追出す十三郎は其科の他に忌るゆゑを知れば最口惜くくちおかしく其儘死なんとしたりしが實の親の事なれば後に至りて想ひ反し呼戻し玉ふ事ありもやせんと命もおししく聊の知人を心當に近江へ往て箕作の邸に奉公したりしなり梅ヶ枝も別辨なき双親の恨しくいよく兄を慕しく思へどこれも兎や角といふ程無き名を立られんとはじめより物言はず心の裏に絶間なく兄の身の上案じ暮し袖を濡さぬ日とて無し其翌年春十日斗の事なるにお大ハつねに拜みもせぬぢぶつだぐにかうをくうじだいはばんを高くに讀終て禮拜し飼鳥にゑがひする侍女供に餅菓子取らせ梅ヶ枝が秘藏する玉事といふ驚をつく／＼どうちまもり物思わしき体なりしが何を見て驚きけんあつと叫んで打倒れ人心地も付ざるを人々ハあわてふためき種々に介抱せしかば辛うじて氣息出たれど數多の名醫も名を付得ぬ奇しの病に問されて目も當られず苦みけり其苦みを何にといふに餘寒の頃とはいひながら總身を雪に埋る如く氷の底に閉らるゝかと寒さ冷たさ骨を徹し衾を山と積重ねても床の周に數知らず炭火を起し暖めても些少も功驗あらばこそ五臓を縮めてくるしむ塵世に苦々しう物凄く次第に瘦る顔の鬼も角やと恐ろしく人々近付ものも無し食事といへば薬も通らず唯飼鳥の摺餅をば自分好みて調へさせ甘し／＼と嘗けるが七日七夜絶まで苦み躰ハ石の如くになり遂に墓なく死入りけり此ハ只事にあるべがらす前世に惡を作り今かく苦痛を受しならん後生の程も不便ぞと禮を越へ

て此上なき佛事を數日執行ひ佛いつくをやくとしてしばし日月を送りしが去者日々に
 疎く死に別れの涙は乾き安きもの無し左門へお大が百か日の日數も立ぬに念さびしく近
 き頃茶をいひたて奉公望みて住込みし玉木といへるに夜話しの媒入らぬころびあひ濃茶の
 いろにひびくさへ又の逢瀬をまつがさね其夜を千夜の口切にて深くはまればしほげの底のし
 むらぬ体もさやうさやき堀出しものと賞斷しぶんぶく茶釜の化物と心の付ぬぞ愚なるもと
 より利口賢き玉木主人の情を受るといへども更に誇れる面もせねば傍輩にも恐れすいよく
 身持を慎めばさてく奇特のものなりとて引擧て妾どなし押續けて後妻に直し梅ヶ枝にも母
 と呼ばせれいのとくに此玉木にも我佛と敬ひけり玉木へとりわき梅ヶ枝を大切に遇ひつゝ十
 三郎をも呼返したまへかしと勸るに左門も亦其心になり近江國を探ねければ其行備たしかな
 らず梅ヶ枝は殊更に本意なく思へど情ある繼母の仕向を悦びすこしは心のなくさむも墓なし
 次年はお大が一周忌藏開きより引續き大藏の經文開かせ許多の僧を一七日家に集めて大法會
 十七日は決願にて日暮はどにとはて法師は布施をになわせて我寺々へ歸りし後は我然にし
 んと静に鳴物の塞しげにそぼくと雨さへ折懸降いでけり梅ヶ枝はぢぶつに向ひ懇に伏拜
 み部屋に退き氣に入りのお袖お留に物の本草双紙ふるものがたり繪巻物等取出させそれは土
 蜘蛛つくも神化物ばなしで其くせに恐くも無れば興もなしそれ其上下二巻あるてくまが懺れ
 でよいそろくと賣んで聞しや「をやく」是はちつさい書で可愛らしいが下手らしい「寫し
 の悪いにまた寫し初の方も切て居て讀ぬ處もたんと有れどまだよいのがあるといふて本屋が
 未だ持て來ぬ上の巻は猪狩や戦争ばかりでわしは嫌ひ下の巻のてくまの責にあふ處からあ
 りもちつと開くのぢや「まだ一遍も見ませぬが全体何を書ましててくまとは何の事」笑止掲

題でござりますな「今言通り娘の名」いつかなとでも「それに美人で孝行者むかし九州
 に山家の太郎といふ大名其弟介田の兵衛といふ悪者に亡され十三になる山家の姫君家老牧野
 太夫にかくまひれてお在たを介田へ聞出し使者を立て姫を捕んとする時に彼てくまは牧野
 が娘親の言付些しも辞す君の姿になり介田が邸へ捕れてゆき責殺さるゝいぢらしさ偕て姫
 君へ肥後の國阿曾の四郎の嫁となり後に本領安堵しててくまの跡ねんごろに吊ひ玉ふがいち
 ぶの終り岡部の與市といふ忠臣軍を起し介田を擒り牧野太夫が介田をば銀引にするところ
 讀む度に氣味がよいまづそこらから讀んで見や「それへ定めて面白うござりませうと二人の
 侍女かへるゝに讀む文言「介田實にもと思ひ汝へ牧野が娘のてくまにては無きか急ぎ歸
 りて山家の姫を出すべしててくまうち聞て婿の今の仰やな牧野が娘のてくまにては無きか急ぎ歸
 け玉はん事こそ身の悦びにて候ぞ伯父のうと申ければ介田此由聞き彼へ計へといひければ
 無慘やなててくまをさんぐにさいなみけり一番の問ひじやうに十の指をかしをり痛くば
 おちよと問ひけれ共物言はず二の問ひじやうには二十の爪をはなさるゝ思ひ切りぬる其上は
 おつるをこそ無りけれ或者申けるは牧野が娘と思召さば牧野夫婦を召れて夫婦の者の目の前
 にて痛く問せ玉ひなば其身こそ健氣にておちすと實にや親子のよならは夫婦がおちぬ事あ
 らじ然らば牧野を召とて夫婦のものゝ目の前にて炭火をおこしたてゝみやうくわ盛りのその
 時無慘やなててくまを彼方へは非ませ此方へはひきとほす衣のつまの春の野邊みやう火とな
 つて燃上る眼眩れ心も消果て倒れ伏す所をなさけも知らぬ武士ども双の腕を引張て歩めく
 り責にけり牧野此由見るよりも母がをしむ娘なれば此處にて母がおつるかど母がをる方を一
 らめ見る母此よしを見るよりも父がをしむ娘なれば早や父がおつるかど父が方を急度見

る牧野あまりの物愛に居たる處をずんと立ち介田の前に畏りのう何に介田殿姪の子にて在
 まさずや伯父の親にて傍座無か余りに痛くとはすればあまのよその見る目まで見奉つればい
 たのしやと申ければてこくま打聞て兎も消べき露の身をすはや父があつるかど両眼を少し
 開けさうがにの糸より細き聲をあげ其處退け牧野の尾籠など汝左程に思ひなば一昨Fの暮は
 ぞに肥後へ落して呉よとて萬事頼みて候へば然り無くして決句敵に渡しつゝ火水になれと責
 さすれば思へば伯父の介田より牧野の殊に恨めしや介田此よし承り山家の姫に疑ひなし只責
 めこそせと言ひければかまさし繩にて綱を結びかゝりの前に引懸て上つ下しつ責にけりさら
 ば其儘消もせでつれなの今の命かな七十四度の拷問に度重なればてこくまも年十三と申に朝
 の露も消にけり傳へ聞く人々憐れと思わぬものなし袖の鼻をつまらして「もうく後ば讀
 ますまいト涙拭へばお留の目をむき「ても思らしひ介田奴ぢやト 拜ぬいて書の面を衝んと
 せしが手を止めお大切な繪巻物なゆるしなされて下さりませそれでも思へば腹が立とこい
 目をして白眼を見て梅ヶ枝のまなぶたをおさへつゝ打笑ひ「突やぶつても大事のない何時見
 ても惨うてならぬ實か虚かは知らぬぞもわしも物好きでこくまの菩提のため朝夕の線香を
 立てやるそしてそれのもう止て福富の草紙にしや氣が變つて善らうト何くれと讀せつゝつ
 く聞て居たりしが眠むけを催ふし鏡臺に寄懸りし儘まどろみつ折しも庭にさらく物落
 る音のすれば不圖目を覺し見いだすに何時の間に降りたりけん雪いたう深く積り音のせし
 植込の雪を夜風の拂ひしなり月光雪にはえて白晝の如く明なるに庭のくまぐ細に見ら
 れわがものながら珍しき心地せられて眺め居れば垣根の下の雪うごめきて最くるしげにうめ
 く聲あり近づき見るに見も知らぬ若き女をさびしく縛め雪に埋みて置たるなり恐ろしくもあ

り酷くもわり繩引解きてそのよしをも問んとすれど聲たえず手もしびれて足も動ずたちす
 みになつたるに件の女の益くるしみ遂に墓なく息絶たりかゝりし程に我母のお大に能く似
 て眼さし鏡さが切戸を開てするくと入來り死たる女の繩断はどき死骸を抱きあげ小脇に搦
 込み外面の方へ出行くを歩むともなく梅ヶ枝も後に從ひゆくほどに猪名寺と刻付たる建石の
 ある寺の前の梅の古木の下蔭にてかゝへ帯のやうなるものにて死骸の首を堅く結へ木枝に釣
 下げつ首をくゝつて死たるやうにこしらへをきて何處へか母に似たる女へ去りぬ借ておそろ
 しきわざをする女も有ればあるものと呆れて立る後の方申しくと呼ぶ聲すれば誰なるらん
 ど見反る目さきにふらめく死骸の眼を動し口を開ても言ふさま其面のおそろしさにあなや
 と叫び梅ヶ枝の頭を土に打伏は「それ程人のこわがるやうな形にしたも誰が行爲妾のむつで
 といふ侍女身身の母身とその又母を秘藏の驚逃したどかに容氣嫉妬をとりわつめ目口も別
 ず打破り雪に埋みしその揚句是れこの通り死に耻をもする斗かこゝろから縊れて死せしと人
 も思ひ責殺したるその身は安隱のれ崇らでおかうかどまづにいほんに當の仇執殺しても恨
 みは晴れず浮みも遣らぬ冥途の苦難ふん身の母身も引續き愛目を見せんと思ひしが前世の果
 報著しく近寄る事の難かりしに幼きよりの我儘氣儘よしなき嫉妬に心を憫す其虚に乗んとす
 る折しも去年の廿二回忌言譯斗の回向に預たれど罪を消すさんげをすべき心はなく妾を
 雪にて責殺し縊て棄てたるをなんぞ色にも出さぬ其思さはつかん地獄の苦みをもせて殺した
 心地よき又身達同胞も鳥獸の行をさせて耻辱を與へんとや其心を發せられど性得行跡
 正しきゆゑ如何ともなしがたしなかにも身身の慈悲心ふかく古物語りのてこくまさへ菩提を
 助くる心ざし惡を作りし其大へ大法會のとひとむらひ無實に命を失ひしこの身しきみ一本

を手向る人も荒墳となり果し身の恨みをば隣と思わば 悲に亡跡訪て玉へやトあへぎにあへ
 ぎ物語る聲の虫より細けれと息の焰と立上り冥途の苦難まのあたり梅ヶ枝生たる心地もせぬ
 を胸を落着面を揚げ詳しき譯は知らぬとも母上へやばいさまの聞ばさかなき御振舞其許の恨
 みは皆尤も知らぬ内は是非もなし此事父御へ物語らばよもなほざりにへ爲玉へ思へば私
 因果者かういふ事を發心の 媒として遠からず姿を變へて其許をはじめ罪を作りて先立玉ひ
 し皆様の後世の爲佛の道に入程に恨みを晴して成佛われ尼法師になることを急にゆゆるした
 まへずとも男に肌を觸まじけれ親人さまにも兄上にも 必たつて下さるなトいへば死骸
 はにつこと笑ひ「其御心が變らぬならなんの執念く祟りませう南無妙法蓮華經ト唱ふる聲と
 諸共にはほいほけさやうと玉事がよるともいぬもさへづり梅ヶ枝おどろきかしらをもたげ
 見れば今猶鶯の一聲二聲鳴くにあやしおそでめ梅ヶ枝の脊撫探り「あなたはまア恐い
 夢でも御覽じましたか「おそろしいうなされやう「おとめさんおだいの「ほんにお白湯を
 進ませうト介抱せられ梅ヶ枝へと息つきつ傍を見ればこれ一睡の夢にして寺と見へし掛
 地の山水はながめの梅しきりに香り床の間の小壁のふちに忘れて置しけづりかけふらめく体
 に縊られし死骸のおもかげもゆるもうとましてごくまの責らるゝ處を夢にみたりしと侍女に
 へまづ言はずやがて父の前に至り夢様子を詳しく語れば左門も喚りに打歎き「左様の事のあ
 りもすべしお大のはじめおまると呼び其許も知て居やるであらう其猪名寺の郷土笹原霜右衛
 門が妹娘十五の年父母はやもりの霧に當て死亡其次我方へ縁付たれど其頃より家は次第
 におとろへて三年も立ぬに相續のなりかぬ程貧しくなり跡を取りし兄息は公の法度を犯し
 所を追れて家断絶女房の里なれば再興すべく思へども故障多くて成就せず是も死靈の祟なら

ん尤思ひも寄ぬ事夢にみるも尋常なれどお大が去年の病氣を思へば棄置さ難きとなりとて
 次の日は菩提所へ法會の事を談合んと手紙など書するを玉木は見てしはしと留め「女のさし
 でた事なれど旦那寺の法事もよいが洛浪華には隠れなく活佛と世に尊む大仁村の大仁尼丘お
 頼み申さば目の前に迷のものも浮むのも大方たしかに見へまして一倍尊ぶござりませう「成
 程燈臺下暗し十里廿里遠から遙々ど加持祈禱受る者は數知れずと聞て居ながら未今日までお
 面も知らぬはほんに不覺旦那寺へ後にしてさう仕様々々二里にも足らぬ大仁村今から往うト
 伴人引連れ左門は其儘爲樂寺へ赴きて住持に會ひ此由くはしく語りまたの日に我郎へ招待し
 て法會を修せしむ大仁の 懸に亡靈のあとをとひ又梅ヶ枝も邪氣に觸れ顔の色もたゞならず
 煩ふまぢきものにもあらずと祈り加持して守を興へ響應すれども若をも取らず敷多の布施を
 引けれどもそれも十が三ツを受け門前の乞食に施し後見ずして歸り行くを見るもの涙を流
 して感じ敬心を起さぬはなし菩提所にても大施飢引續きて行せけれ梅ヶ枝は猶此上彼
 爲名寺へも参詣し彼處にても佛を供養し其日にやがて尼となり能を結び住ま欲しく左は言は
 ぬと爲名寺へ参詣したしと頼りに乞へば我も共に彼處へ往き笹原の邸跡をも見すべしとて玉
 木を殘しきさらぎの初めつ方梅ヶ枝伴れて立出ぬ後に玉木の意をつけ夫と娘の陰膳も人に任
 せず自ら調へ其夜は早く門をも閉ぢさせ主人の居らねばたしなむ酒も今宵は飲まずに聞に入
 り「参しひ時は夜も長いまた四ツそうなと打歎き側へゆきて手を清め眠むる庭に怪しの人影
 近づくを見て驚きしが心を定めにつこと打笑み何處から忍んで來たのじややらまア此方へと
 手を取て障子閉切り入りけり
 長柄の長者濱名左門娘梅ヶ枝を伴て爲名寺へ往し留主に乘じ玉木が閨に丑滿る忍び入たる

怪の男子馴々しげに羽織を脱ぎ棄て布團の上に大座頭巾を取りて差出す煙草のつけざし一服吸ひ「琉球絨に大綿の羽織も着せても此姦夫を大仁坊と知る人も有らうか知らず光妙山にて亡びたる暹照丸の手下の一人鯨島に流された大日觀者といふ盜賊とはよもや誰も氣が付まい化ればどうでも化られるが化物の己斗でもない二股村の待人の娘が長者の奥方とハ流石の大仁びつくりしたト左のみ四邊に遠慮もせず落着かへれる大膽に玉木ハ胸を躍らして「別れてからの物語り咄し度にも聞度にも木竹も眠る夜中でも油断のならぬに私ハ只氷の上に居る心地「そこハたしかだ大丈夫だかうらの生た盗むるしハ人の目を明さぬまじなひ知らぬものハ一人もない其上にも奇々妙々な守があれは平氣々々「それが眞ならわたしも嬉しひ「あんまり嬉しひ事もあるまい鏡瓶の湯ハたぎつて居る此の南京の土瓶ハ茶だナト茶腕に注で一口飲み「香が上物流石ハ長者共白髪と己ハ飲た菓子筆筒ハ干菓子斗か玉つばきに幾代の友あり此方ばかりで共白髪と今迄も思へど其時から他ハ幾代の玉つばき人のことハ忘れる等下のちゆらにハみやうがもち「なんの忘れてよいものか忘れぬ者が長者の後妻になつて珊瑚の玉の興血の涙の流れる程打歌れて山を追れた難澁ハ誰がさせた成程心も二股村其始かきハかしたも此大日が惚たゆゑだ其を己にハ手もつけさせず暹照丸が我物顔にのろけて居るのが胸悪く「いやみまじりに口説れて元來いやでもないお前「密通したは悪けれと己斗をこッひとひめにあはせて手前ハ其体忌々しくて悔しくて今川家の撃手で引込み山寨をぶッつぶさせた其功ありながら褒美どころか殺されて死なねハのがめッけもの「其頃人の噂にハ鯨島へ出した舟難風で碎れ水手まで残らず死んだといふハ矢張虚であつたのか「いや虚でないまア聞やれ噂の通り海中で風が變つて天氣ハ大じけ鍋煤をぬッたやうな雲がかッぶて眞暗やみ帆柱も折て

しまう山のやうな波の中を彼方へ揺れ此方へ揺れ其中に三河國の伊良子の濱が見へると思ふと舟は岩に當てこなみぢん船頭かけて十八九人魚の餌食と極りが付たハはんに思へバ可愛想己は板子に抱付て浮つ沈んずして居たうちに氣を失つて死んだやら生たやら知らなんだ所不圖目が開と見た事も無い海邊で物凄ハ砂原其處が彼伊良子の濱よそこで己が居る側にしやがんで居るをたれかと思へバ暹照丸が引間の町へ出張せておく醫者の洞仙後日で聞は折もよく彼邊に用が有て磯邊傳ひの歸り路なれハ波に打上られ息も絶て倒れて居たを親切に介抱し妙薬を飲せたゆゑ蘇生て躰もすこやか時刻も丁度今宵の刻限傍に見て居るものはなし難船を僥倖に京都へ還るとして路銀斗か差添の脇差さへおれに呉れる辞退も無益貰うておかうわ友邊とハいふもの親身も及ぬ命の親一生涯恩に被やう「そんならまめでかさねてと別るハ處にどや「と岩の間に潜れて居たか漁夫と見へて荒くれ男さしこのとてら着たるもあればツッば二つにこしみのでやすでをかついたものもあり二人を中に押取込め破船の舟木を拾ひに出でそれよりましの島抜を機よく見付たこりやうまひ打て縛れと口々にわめいて隙なく得物をふりあげうつてかくれば二人は笑止く己は島抜汝等ハ馬抜目を廻して居た中は打も縛もしをらいで些との舟木を取に來て大切の命を棄うとハ阿呆め馬鹿めと罵り返し相手ゑらばす投付踏みす中ても奇麗なとてらを剣奪り獄屋で汚れた古衣を着替二人で夜通し路を急ぎ細谷といふ處から一人になつて街道を乞食の姿で久し振津の國にこそ着にけれ茲で中入それからの話はまだ「澤山ある「わたしたとてお前の事氣の毒でならぬゆゑ無事でハ歸る此上ハ親達にも打明て女房になつて精一盃信實を盡さうと思ふに甲斐なきながしもの言出しては出來ぬ事と心で泣て居る中に「いやうまくいふやつさ己が寺の門前の塩大福よりおれにはまづ

「い、まア黙ッて聞て御居で最前も言ふ通りあの山がでも破船の噂の噂の大日の運の悪さ切角の
 慈悲で助つた命を魚に奉捨して此世の夢も覺まじと鯉口交りの人の咄しに笑止い處か落膽と
 力もおちて氣の重くさりとて泣て居てもつちらす盜賊のなぐさみものになつたと近所で言れ
 るのがなんばうにも耻かしく善い連が有たゆへ氣をぬきがてらの京参り大坂までも見物の其
 中に世話をやく人が有て此家へ奉公お前がまめで居るとい知らず意に染ね身の出世親の爲
 にもなる事と勤めする氣で頼固な老人の機嫌を取るそのせつなさ口にも言れず「苦勞氣兼
 をするせいが大分老たがどこやらにあとないやうで悪くない眉毛をつけて白齒で置と梅ヶ枝
 より若く看へよう「おやいやよ慮ばツバかりそんならお前の來る晩の引眉をして前髪に赤布
 でもかけませう「それこそほんにお化の開山音羽屋が薄雲の幽靈のやうなれどお化序で見
 せて置く今爲樂寺の住持となつたも目の前奇特を顯して人に信をば取らす故過去を察し
 未來を當る神變不思議も唯で出来ぬ其品の他でも無い是を見やれト袖口を擴ぐれば玉木
 のぞひて「あれ狐かト膽を消し「お前へまア飛んだ物を懐に入れて來て「是が手品の種だ
 ものを「いやもう浮々側へも寄れぬ疎しや」と氣味悪がれば打笑ひ「もう見度ても見へ
 せぬ「否々まだ台点がゆかぬト躰をさぐれば影もなし「眞に何處へか「それへ自由此の明神
 を使ふにも亦一の話しあり尤はじめ経讀に此家へ來て其方に逢ひ早其時から他心ある様子
 此の明神の告たのでとうに知り今宵態々來る程なれば何事も隠さず語り頼んで置度子細も
 有のささて是からが今の續かの時調仙に別れてから二泊目の日暮がた初雪がどつさり降り
 らぬ寒さも付元氣酒に紛れてすた／＼往くとの池といふ大池のある端に四五疋の大な犬に十
 五六の奇麗な娘が取捲れ聲を限りに泣て居るさても／＼可愛想「女といへば見ず知らずでも

直不憐なの酷のと「さう焼たくば梅田のひやのおんばうにでもなればい「縁喜でもない
 「どころで娘の追語られあわて、池へのめり込む己の十足を一足と駈寄て犬を追退けヤツと
 の事で引上て性根の付ぬをいろ／＼介抱おれも昨日の此の通り人の事では無いと思へばねん
 ころにいたはつて印籠の薬を與へかた／＼には枯草を集めたさびをして暖めやれば存外に丈
 夫になり涙をこぼしてうれしがり何をかくさう私へ人間ではござりませぬ攝津の國大仁村
 の爲樂寺といふ寺に久しく棲む古狐此國の豊川の友達に會ひに來て思ひもよらぬ此のさいな
 ん年も取れば神通も余程得たれど寒さもさむく持病にくるしむ其處へ所に名高き逸物のあの
 犬共に見込れて通力も失果て旅路の雪と消るばかりあやふき命をおんたすけ下された彦恩は
 海山お禮の致し様がないいとひさへなさらすばあなたのもとに潜れ棲みわが通力の及ぶ
 たけへ世人の過去未來人の心の善惡邪正仕合の善惡まで其時々告げさん之をもつてしゆ
 し得たる佛道の奇特と言ひ做し人に施し玉ひなばまた／＼問におん身の發達朝日の昇る如く
 ならんこれより爲樂寺へお供して彼處にてまづ不思議をあらはし住持に舌を捲すべしさらば
 彦身へ今より出家しかの寺へ在しませ是はしたりいつの間にか讀本を讀むやうな言葉つきに
 なつて來たかういふ處の此の方がうつりもよく分りもよい所でおれも驚き乍らまア何にしる
 甘い相談全体おれも大坂には道樂もして居たもの其爲樂寺へ遍照丸がしよけの時居たさうさ
 渡世の爲でもそこへ行き坊主になるのも變つた縁何れ姿は變ねばならず面白く／＼隨分出世
 をさせて呉りや承知をしたといふと其儘娘の狐の姿になり消たと思へば左のたもと少し重
 やうになる探りて見れば者は無しさうかと思へば時折節煙のやうに形も見へるさアそれから
 は何事も奇妙不思議に能く分るしめたものだと頭を圓め鼠衣に破れ袈裟古着を買て引張て

見れば尊きお寺さす諸國 修行の旅僧でござると彼爲樂寺へむぐり込み何か用にも立もの
 遍照丸におそはつて淨土宗一ト通りの經文の知て居るにつこらしう間に合せちよきく不
 議を見せ掛ると前の住持の正直の生佛の多來向とだんばうぢゆうへ觸れ歩くそりや有難い
 お拜度と來る程に來る程に十念お加持がはじまりて縁談待人世柄の善惡何でもござれと引受
 てそれくこなして居れば當らぬもまゝあれど其時は過去の因縁又信心の足らぬなごしを
 まかすのも骨は折れず流汗行り出しては流石は大坂持込程に盜賊よりも面白くまア氣の減ぬで
 ひとしは保養そのうちに住持の死ぬだんばう中が跡式は不足であらうが是非にといふすしよ
 うらしく辭退してぬくすわつた後住の上人人目もあれば人品を作つて滅多な行跡もなら
 す甘い物の喰飽てももう一味の生物を久しく食ぬは有財餓鬼「其餓鬼の爲お施餓飢を今宵私
 がするのかへそれもよいが明神を使ふと聞ては何もぶさびそして女の狐なら若や腹でも立れ
 ては「なんのく男狐女に化たの見バのよい爲遠慮は決して無用いやまだ話しの残れども
 此の續の明晩々々些とやすまふと戯れてしづらくうちふしやすらひしがたとへ妖狐の術あり
 て人の目を眩す共夜の明ては憚りあればや曉に及びて歸りしが中三日斗おきて大仁坊再來
 りぬ今宵の聊か酒打飲み最と興を催ふしつゝ寝物語にまたいふやう「前の夜かたらふ事あり
 と言ひしまゝにて未語らず是は我恩人誦訪洞仙にいさゝか齋をせんとてなり彼洞仙は其後に
 引間の老人佐々木源太左衛門といふを秋葉山の奥に誘ひ殺害して物のみならず殿の黒付印判
 なごまで奪ひて自佐々木と名乗り京へ登りてかけやをかたり浴にしバし逗留せしに佐々木の
 若蒸見付出し既に刀傷にも及びしかば此所にも足を留め難く丹波路へ立越へ野瀬の妙見山に
 隠れ此所に薬を喰ふんとせしに手下の中に變心するものありて事どくのすあまつさへ音川

家の打手に山を追出されて手下も大半打殺され猪名川の川上の屏風岩まで追詰められ己に危
 き折もよくわれ彼邊を修行の路早日も暮て薄暗き松の木蔭に大勢を相手に戦ふ洞九郎かすり
 きすにもみちを散らし緑の松を小楯に取り波の撃物閃かす太刀筋も稍乱れし有様見るに些と
 るためらはず群がる組子の横合より釋杖に仕込る鎗取のべて突懸るされども敵の大勢なり
 前後左右をわれも亦うちこまれて洞九郎救ひ出さん隙間もなくはどく難儀の折しもあれ
 顯れ出たる軟弱女さき乱れたる花の枝双の手に打振りて組子をしきりに撃惱す其度々に雪と
 散る花より清き未通女の姿に見惚て敵の浮々と勢ひ弱りて見ゆるを付込二人へ頻りに斬散ら
 すこへ叶へじといろめきて崩れ立たる組子等をかの女はかたきしより川へ投込なげこみて今
 は早心安し心の儘に落玉へといふかと思へば姿の消へ失せ彼方此方にひらめき見る許多の狐
 火宵闇を照して夜道も白晝の如しこれまたしかに明神の助とうれしく其由を洞九郎にも詳し
 く語りそれより密に爲樂寺に伴ひ歸りて忍ばせ置き我に信心淺からぬ爲樂寺の一旦那尼ヶ崎
 の城主荒木村之助殿へ推舉し東國にて盗み置る系圖を證據に某の家に仕へし浪人と披露し
 劍術柔術に醫道兼金創即治の奇方あり破傷風をも救ふべき靈薬もありなど言立て或時
 例の不思議見せて城主をたばかる上に彼奴元來懸河の辨舌またなきものと意に適ひ新地二百
 貫にありつきしなり山賊より骨こ折れまたひる日中鎗をふらせ城下を行列させるのも氣
 が變つてよいといふ尤佐々木悴あり現之助とてまた年若母と共に國を出で此邊に足を留め
 洞仙を尋る様子たとへめぐりあふたりども及は立ねどもしやつもしれもの手にあまつて騒ぎ
 に及べば蟻の穴から堤壊れ處には事なかれといへば去頃思わす有馬にて見掛たるハ彼等母子
 所願の早く成就するや否やと問しをさてはと思ひ急ぐな延せと戒め置きそののちに寒中の修

行の道にて現之助の今の有所も知つたれば再びまで忍び来りたまし打にせんとせしに故障出来て本意を達せず兎角する間に其家に現之助の住すなりよの人かうつりたれば外ながら行衛を問ふに西國へ旅立し様子なりとおぼるげなる應答のみにて探ね難く何なるをかやつら身の上斗へ明神の通力にも及ぬ由されれば長崎の長者の娘と親の言名付遂に頼りて来るをあらん其時にこそ兎も角も計ふべけれとたしかな論彼奴等たづね来りなば如何にもして留め置き尋害がして貰ひたしと小さき壺を玉木に渡し光妙山に居た時から逞し根性の女とよく知れり愈我に親切を尽すとならバ一骨折して見たまへ萬一事のやぶれなば此家の金銀寶の有丈持出して還る分又是等の事長者に告げ頼主へ訴へ出る様なきまづい意の兆しなばも此方で明神が知らせで筒振知るゆへ細び腕も麗しひ首もなますに切り剃みな多り殺しにするばかりと言ふに玉木も呆れながら頭こそ丸めたれ清げに大りてすくやかに悪氣のなき姿容に思ひ込て言ふとも道理のやうに聞なされ誓言立て承引けるの淺ましき心ながらまた通るべき勢ひにもあらず〇これよりは有馬の湯場の物語につゞき名塩村にて事のありし其由を書記さんされれば玉木と大仁坊の忍び逢ふの二月の事にて此處の其前年九月の末より十月に及び十三郎の伯母の手を引き櫻木お蔭の前後に立ち夜更湯山の町に歸り角の坊にて枕の結べと猶も尽せぬ物語に眠りもやらず秋の夜も程なく鳥の鳴に至りぬ十三郎は名塩にかへらずやがて浪花へ赴きて現之助のせをそこをうかひ渚もこゝに唯一人宿とりいるとも益なきと櫻木等に勧められ名塩村へ誘はれぬ松原前左衛門といへるの七十近き老人なり製し上たる名物の紙に玉子の光澤のあれどしわのされぬ老のなみ起居は今もすこやかにて秋の夜長く眠られぬ疾より起て近からぬ三田の町へ注文の日限のされし紙の荷を自背負ひ出行

し留主に一人の孫の與之吉両親の無き孤子の年齢より況ておとなしく年々わづかに九ツか十のねふりの寶舟三十日の書出取交たる反古を一に切裂も水に浸すもならふよりなれくすをおはぐろと見する子守の小娘がひなたばこりのでいのくち與のさん仕事ももう止て東都土産の錦繪をよいもの進う見せさんせと言ふに與之吉手を留め「よいもの欲うないが祖父さまが今にお歸りいろりのほだをよく燃るやうにして茶を温してお呉たらいくらも見せう仕事も今にさりになるト子守娘に火を燃せ仕事片よせ文庫から取出したる錦繪の今様源氏太平記唐の大和の武者尽くしそれよこれよと是るうちに茶釜のちいとたぎれども祖父の歸らで櫻木が伯母を伴ひ入来り「爺さんへ三田へ往て「そんなら一人で留守番か「それへまアおとなしい「もうおひるゆへお茶もわかした處と茶腕を取れば「構へしやんすなわたしが汲やけどさせての言譯なしト山茶を瀝にもてなして「與之さんこれの私のをばさま十三さん大坂へ急な用で往しやんした歸りのおみや何である「錦繪がいつち善い「錦繪の東の伯母さまこれをお覽じませ豊國の七十に近いとすすげ此の畫の若さだひでもいくさへ上手なしかなものでござります與之さんそちらを「此の畫かへこれの備後の三郎高徳の木に文字を書てト一字一字の綴り讀みも分ると見へて「時に勾踐なきにしもあらずとの何の事か私に分らぬこれの武松これの張飛笠をかむつた坊様が熊谷の次郎直實わしや熊谷が一番ひいさお嬢さまの力が強いで松坂で居る巴御前「私にそれはど力に無い備後三郎が側にある其櫻木ぢやと打笑ふ折しも門前がやくと人の音して歸り来る此の家の亭主前左衛門後に四五人村人が戸板に載たる人の死骸庭にかき入れ下に置ば皆の衆むたいぎくはいつて茶なと煙草なといやもう世話しひ收獲時「骨折賃のあちらですむ「此儘で歸りませう「引請人があつたのでこ

ちの村もやつかいのがれやれ、嬉ひや南無阿彌陀口々しやべつて歸り行く「ア、お嬢さま歸らしやつたか十三さま何所らにござるをしておの後家さま「あいはじめから咄さぬと分るまいが此方の遠州の私の伯母十三さま大坂へ今に何角の話しませうそれより其死骸まア何處の人ぢやへト氣味悪さうに額にしわ「とんだ物を引込んだと思わつしやうが是非がない兼てお咄しやました十年前以前うぶすなの祭禮に人と喧嘩して大勢に傷を付身を潜して其後の音信もせぬ養子息姉嬢おはたが夫與之吉の父親の朔五郎が身の成果あさましい物になりましたおはためは此の佛ど中のよいに嫁せて三年目に漸と懐妊あの與之吉を産たは朔五郎が家出の後生れぬ前の父を慕ふ利口すぎた與之吉が父と知たら泣ませう黙つておいて下さりませ「それはまア飛んだ事何處にどうして何ういふ譯で「まア聞て下さりませ三田の町から歸途塩田川の土橋を越す時大勢の人集り何かと見れば此死骸乱杭に掛つて居るゑんぎでもないものと思ひながらも盡さぬ縁虫が知らせて見たくてならずいこの端迄下て行きつゝく見ればどうも見た顔水にもふくれるさなくとも十年から離れて居ればどうも分らぬ筈なれど身に似合すこのぢいがつよいものは目角斗どう見ても朔五郎と思はるゝゆゑ兎もならず何んぞたしかな證據でもと襟に掛たる守袋拾ひて見れば村のうぶすな木の本の八幡さまのお札が一枚いろ／＼の中にまじつてあるからはもう疑ひはござりませぬ此川上へ有馬川無理に死だか落たのか又へ人に殺されたか何にもせい人並の吊はしてやりたくかくせて来たのでござります一根性ある奴だけ孝行にもして呉ました況て可愛娘の夫むどうて／＼なりませぬおはたも近來死んだも況か生て居て此のやうな死骸を見たらしたゝかに泣て矢張死にませうあゝ益もない縁言ばかりお客さまを免なさりませ與之吉善う留主をしたみやげには飛んだ物も

て来たかわりおのしの好なこわめしでもふかさにななるまひをしてみた寺へも鳥渡お庄屋さまへも同行へもいや一時に世話しうなつた朔左衛門へ起たり居たり與之吉は死骸をのぞきしいとして滅多にかなしうなつてこのやうに涙が出る「是はしたり父ではない「否々も聞きました泣が悪いで隠すのなら私も泣はせぬおとなしう編笠被て上下を着て施主にたつならうをなら生かへり與之吉とたつた一言いふて聞せて下さりませではなのいもで親はないと友達が緋名を付さげすむのが何より悔しい父さまのう父さまと絶るを櫻木抱き退け「子の泣く涙は火となつて死出の山に雨と降る泣は不孝ぢや賢い子ぢやちへおいでトすかしつゝ死骸を一目見てびつくり「をばさま私なんどせう此の死骸の源五平「御亭主の言葉の端有馬川が耳に掛りどうも合点がゆかなんだ「そんなら昨夕敵が池から「投込やつたのはやせをこし「流れよつたる塩田川「それが此家の由縁とハ顔見合せて居るゝ二入朔兵衛門の膝すりよせ「あなたがたにハ此死骸御案内でござりませうか「いやさもし存じてござりますかト推返されて櫻木は包むにも包まれず「知て居る段かいの而も私が殺したト言へばびつくり朔左衛門眼すわりてのけぞりかへり暫時の物も言ひやらす「大切のく父さまをお嬢さまが殺したとそんなら私には親の仇日那さまでも常日頃御不憐がつて下さつてもわしや勘忍をしませぬ程に御覺悟なされト紙断庖丁取て向へばあゝ「あぶない静にせいト隔る筋を突退け向ふ與之吉が小腕をつと押留め「武士も及ぬ健氣さに感じてわたしは自由になり殺されてやるハいな殺したといふからハ遁もせぬかくれもせぬ然し子細も語らいで此儘にも死なれまい元來此家の縁とハ夢にも知らうやうハなし殊に手詰のあの始末「さアこの濱が御事咄さうはさ

に朔左衛門其子もともく心を落付聞て恨みを晴してたべ此者はわが手下朔五郎というたるしらす人に傷つけ立退た等と言わねど上がたに居た者ど聞て居る勿論久しく召使ひ若黨の源五平とて今の世に珍しひと褒て居た忠義者それが魔にでも差されたか色にまよふて悪心を起したのでつひこのやうな事になつた細にありし次第を物語り死んだ物に口ひなし人の養子を殺して於て却りてしたゝかわるものと虚ついで身を遣れうとするのであらうと何處までも疑ひしやるならどのやうにもわたしの身をさりさいなみ老先長き蕾の櫻木まさかの時には世の中の爲にもなるべきあの大力母親譲で力の強ひ子を産までいむさくど殺さするへ惜いもの能う聞き分て下されと涙にくる落の實意櫻木は頭を振り「ころした私が助つて願ある身の伯母さまの身にさすを付させて見て居れるものかいな不忠不義の家來をば主筋のもの殺し仇を取る法は無れど只なかよしのこの坊が父の仇と力の強私を恐れずさり込だ心根が可愛さに死うと思ふ此の氣質かへりですむならわたしも死なぬ伯母さまも殺させぬと落をかこへ朔兵衛門「貴方がたのお物語何の虚言と思ひませうたとへがらか兩人が悪いにしても他ならぬ大切な御主人さまお恨みやすう道いなしやい坊や與之吉やお話を聞て居たかわりやしよくど泣て居るな尤じやく父は飛んだ悪物で御手討に遭たのぢや仇討どころぢやないお嬢さまへ父が悪事おのしが失禮すたもお詫すさにや濟ぬぞよ魔がさそうとも日頃の忠義忘れて死に耻かくやうな不所存者の落胤其與之吉は此の様に何故孝行に生れたト涙呑込み大息つけば「爺さまも泣しやりますな私もこれぎり泣させぬお恨みもすませぬがお嬢さまもぢいさまも平日のおはなしに親をころした仇とは俱に天を戴かぬとて一世界に住ぬのが孝行ものと仰しやればそれでは私が死なねばならず自分で死ぬのは痛けれを殺して賞

へばそれともよいが此の上私も死んだならお前が心細からうと死なぬ前から苦勞でならぬと言ひつゝはたと手を打てよい事かござります幾度も讀んで知て居る此錦繪は晋の豫讓お主の仇が打れぬゆゑ仇の衣服を刀でやぶり仇討をすましたげな豫讓のよの字と與之吉のよの字は變つて居ようとも晋の豫讓の真似をして備後の三郎高徳のそばに書たる錦繪の櫻は私ぢやとおつしやつたれば勿体なけれ此書をは斬こまざいて仇討をすませうと庖丁もて三ツ四ツ五ツにさりさきく是で心がすまましたお嬢さま父さんも私もたんと悪かつた御免なされていつまでも可愛がつて下さりませト頭を疊にすりつけつゝ猶目をすりつゝ泣顔を見るに落も櫻木もさてもかしこひ幼兒の心の裏の不憐やと言ひつゝ共に咽かへり「命を惜むにあらざれば十三さんも留主にあり伯母さまのお助太刀もして進ねばすまぬ故先當分錦繪の櫻木で意趣も散しておくれ打れる時節の來るならばト實盛の書を取りあげて「びんひげを墨に染めわかやいで義の爲に手塚に首を取らせれた試し「否々最早仇討のすんだ後では恨み遣らぬ一番ひいきな熊谷直實此通りに私しは坊さまになり親の爲出家が仕度トしをるれば「なんにもいふて下さんすな私は胸が張裂る「なせ此様に譯のよくかしこひも程がある不憐のものやと櫻木も落も互に引寄て撫つ擦りついたら「でかした與之吉ういやつちや涉兩人さまがそのやうに愛がつて下さるは冥加に叶ふといふものぢやト飽迄わけよき老人の意を汲ばいぢらしく落は殊に老人の涙もろくて我身の上の憂をもそへて幾世の歎き從來貧しき朔左衛門久敷二人の寄食人に物のいりめも多ければ今さしわたつて葬式の手當にさへも當惑の氣色を見て取り時の金を分ちて強て與へねんころに非りのわざもさせて其後は茲に暫く逗留しつ十三郎ハ次の日歸り來りて現之助の行衛かいくれ知れずといふに落ハ力も落れどもことにもあは

取沙汰あらん左も無は猶頼みありと強て心を慰めけりまた或日十三郎行者堂に詣でつゝ角
 の坊に立寄けるにお薦は顔も出さぬべいかにしつると問ひ聞に四五日前お客さまの使に出た
 る儘にして親里にもたしかに居す何處へ行しか行方知れず男なんどをこしらへて逃た様子は
 無れども矢張そんな事かも知れず又神秘しに遇ふたのか親方の運の悪さかつたが見へぬ四五
 日前尼ヶ崎の傍方ぢやとて石川芥膳様とかいふ御立派な殿様が一週の湯保湯湯おつたがきつ
 う傍氣に入り侍女に使ひ度とお金子も余程下さる様子それを彼女もいやがるのに家でも惜み
 てすけない挨拶石川様へ傍不機嫌あの時やつてしまつたら彼女も出世此家でも割の善い御物
 と今では悔んで居られますと語るを聞て十三郎我他にひそかに契る人はあらじと思ふも己惚
 まだ深く深い情夫の有て伴つて逃たか何にもせよ我とてもさすもつ足口數聞て疑をも受もや
 せんとそこへ名塩村に歸りしが櫻木が心を尽す親切に紛れつゝも折々おつたも戀しくな
 り若神秘しに遇たるか悪漢にかどはかされしかと思ふ時いとせめて物思ひしさりとして人に
 言へれもせず朔左衛門の手助と板に張掛乾し上る紙に思はぬ涙の落てすきむらならぬみづ玉
 をこしらへる日も多りけり事こそ變れ物案じに渚も兎角心地勝れず氣も晴るかど察明て見や
 る消もいつしかにこがれそめつゝあきはつるはつかの山の塞しさに有明の月の誰と見るらん
 と匡房郷の古歌をさへ想ひ出して憐れ添れば實に早冬の日もかさなりみぎりの菊も霜に染み
 二度の盛はものわびしたく櫻木のおもかげのみ雨にも霜にもかへらぬを貧しき生計を見兼て
 仕馴ぬ薪炊の真似とに指のあがり血をふくみつまべにと見ゆるもつらし去程或日の朝與
 之吉不思議の夢をみたりと朔左衛門にかたるやう平日のやうにおぢいさまが紙を漉く舟に向
 ひすを以て居やしやる所へ住吉へ奉公に出てござる伯父さんのさりとてはいつて來ておぢ

いさんを実倒すとおぢいさんの忽ちに紙に化て水の中に浮てござるをお願さまがすを以てす
 くひ揚て板に張り日にはさしやると正しく夢に見たが何ぢやいら氣に懸るでいないかへト語
 れべれ笑み朔左衛門「住吉のをちといふおんりふ町の薬師屋に三年以來奉公する朔兵衛の
 事であらう死んだ女房のあれは連子義理のある子とあまやかし手に余つて勘當に及ぶ所を人
 の世話で今度は不思議に足掛三年よいがよいにたつても無ければ苦勞の絶へぬ不孝者夢の逆
 夢己よりは彼奴がこんぶらと川へでも落て死ぬかいたより柱へ礎けられて仕舞ふたら決句安
 心氣の狭ひ夢なごを氣にかけるものでない「否々さうでもござるまい己に古く言ひ傳へ日
 本紀にもある通りつげの鹿の物語を鹿の脊中に霜が降りしと見たれば翌朝其鹿を狩人が射
 殺して躰に鹽を塗たとやら實しからぬ話なれど夢合といふと唐にも舊く大和にも大昔より
 往々あるを慎むに若いなし川端なごへの氣を付て寄しやらぬがようござるト十三郎のまめだ
 ちて言ひ聞せ居る所へ村長より使のもの駈來りて急用事其儘ござれ猶頼みならぬ早うくと
 連行しが口暮に及べど朔左衛門の歸らぬに各々如何なる事の起りたるかと心を痛る折柄に再
 使者入來り十三郎をも連行つ十三郎は村長の椽前にひさまづき何事ならんと伺へば尼ヶ崎
 の役人と名乗る者五六人晴ヶ間敷併び居て村長より取次て十三郎に由を傳ふ十三郎つゝしん
 で聞ば「住吉安龍町の薬師屋召使朔兵衛といふもの廣田の社の松原にて後家齋を殺害しそれ
 のみならず尼ヶ崎の走り使を劫し買物の金子五十兩奪ひ取たる罪科に依て神崎の遊所に於
 て組子を遣し召捕たり金子も己にかけごとし酒色にのこらす費したるよし其外すべて口づか
 ら白状いたす上からは主殺しの例に任せ刑罰すでに極り子の科親とて遁なければ朔左衛門
 も呼上て法の如く禁獄せりされども久敷遠くへだより萬事を知らぬといふも道理故に格別の

隠便をもて城主の用金五十兩親族の者よりわきまへて差出さば朔左衛門様で赦免あるべきなり其金の額ふまで水牢に入置べし片時も早く持参せよト横柄に言付られ十三郎は呆れかへり其儘歸りて人々に此の由を告知らせさせてもあやしく與之吉が昨夜の夢の合過て紙漣く舟と見たのハ水牢老人といひ此寒天二日と持まいと嘆けど賄ふ金もなし浴ハ兼て時への其程はなきにもあらず疾く持行て救へといふを櫻木は押し止め「伯母さまの時へを手拂しては此上に何を力に行先知れぬ長の旅をなさりますかそれぢやといふて悪物なれど源五平を殺した我々不足な面は些ともせず愈實意を尽す翁見殺しにせらるゝものか「それは此櫻木がをばさまよりは一倍切ない十三さんお前にも男なら思ひ断り私に暇を下さんせ傾城遊女に身を賣て「さうさせてハ石藏氏へ愈向る面がない「お葛さんは行方知れずお前も察しうあろければ世の義理は是非がない國元の親さまへたつたぬのみちだてがこゝへでるものかいな母上さまも元をいへハ鏡の驛のとめ女殿がりのお姉さまのおこんさまも茶汲女に賣れてはじめは賤ひ勤めたしたちはよくく宿世拙く女のみちの守られぬのでござりませうト打笑へども泣よりも悲しき色ハ目元に見ゆ十三郎も承引てさらばこやのり神崎が何れの遊里の善らんなど語合て居る程にも立替り入變り見舞に群來る近邊の人々中にもさかしき左平次が此事を洩聞て「否よい事がござりませぬ遊女になるより又一倍面をさらす悔しいやうなが身を汚ぬば一のとより昨日有馬へ商賣に往てよられた座敷の客ハ難波新地の見世物師大方の女があらが力持が出し度もの心當らないかといふも其時にお嬢様の事ハ心について居ても兎ても出来ぬ相談と黙つて歸つてきましたかござりやうなり力なり見世物にハ勿体なけれと出したら急度大金の利るハふくろのねすみ忠義と孝とで身を賣るハ世間ハ珍らしからず家來の爲に

お主の身賣これハ随分新らしいおやりなさるお心なら其容を連れて来て御相談させませうかと云ふに櫻木恩案を定め何なる賤き世渡も心に染ぬ仇枕夜毎に變る苦海にははるかに勝ると胸を括へられ實に道理と十三郎落も是非なく同心しそれより山師を呼寄て櫻木ハ庭石を蹴起しつゝてまりにつかひ又紙漣く舟を持出し細き腕に持擧れをたへたる水少しもこぼれず之を見る世物師ハ舌を捲ておそれいり二年を限りて五十兩すみやかに相談調ひ櫻木ハ大坂へ伴はれ朔左衛門ハ牢より出しがこのよしを聞泣悲しみ明日をも知れぬ老の身の助る爲に御主人さまに耻辱を與へておめく「と此世に存命へ居らるべきお情過ぎて恨めしいと水にも沈み梁にもかゝりて死なん体なりしが十三郎と落に叱られ孫にも心ひかされて辨び振れば身も弱り暫時の牢舎も老人の身にあたりてや病續け春まで枕も上ず佐々木現之助盛春ハ其はじめ源五平が出来心の偽りに欺かれて浪花に赴き自然に仇の手懸り得たれど運命未だ到らず箱助ハ捕遣し朝日丸を所持したる九べい次の後家お癪をば人に殺させ時刻後れ鞘のみ拾ひ得たれども其身は早く人手に渡りその折も折はのかに見し橋の中なる武士夜目とてたしかならぬと仇洞仙にいさうつし何人なるかと下部等に問んせし間に行過たりなまじひに手を出し草を分て蛇を遁す後悔もあるべきかと思見遣しやりしも遺感多く本意無さ言んかたもなし仇討を急ぐべからず時知らずと大仁が示したりしはみだりなる虚言なれど是亦天然自然に言當たるが如し現之助ハ曾根崎に歸りおこ箱助等の跡を追し甲斐なきよしを物語り今ハ猶豫すべきにあらず明なば遠近騒めぐりきびしく詮儀すべしといふに幾代ハといさをつきつゝいふやう尊き神の御利益にてわらハ病は名残もなくおちて御身すぐやかなれどあくせきと心をいらち身を疲らし寒氣を犯し復も病の發りなば他の見る目も堪難

よもあらぬ妾の苦勞察して萬事手都合のわはぬもさるべき定りと御意廣く神佛信じて時節を待給ひ先何事もうちやりて灸をすゑたり養生食身に丈夫を付玉へいつまで此家におわするとも御不自由のさせまじく又このやうに深くなり一日も他所へはやりたくないと色光澤もなき實意の言葉に現之助も心弱り實にそれも道理なりありやう足もふらめきて見れば腕も細りたり然あらば暫時身を休め飽まで氣力を調へてん然とていつがいつまでも手を束ねても居らるまじ初にも言ひし如く拙けれども淨瑠璃ぶし望む客のあらん時ハ物越しにて聞すべし保室にもなりいさゝかのあしやくも座して食ふにまさんと先一二段こゝろみに語りて人に聞するになま／＼の太夫といふ本職者よりは聲もよくふしも細に言葉つき言なけれハ聞人感じ幾代は殊更心を動し一層戀慕の思ひを増し故障なき客を見立て一兩度もかたらずるにたれもくめでけうじ物數多かつければ思ひの外の得を得ついとく拙なき仕業なれ少しハ幾代の我を賈ぐ苦勞の薄くもなるべしと耻かしさも忘れたるなりあるとき阿波の鳴戸の順歌の段をのぞまれかたり果て席を退き俄然に脚半甲掛よと旅装ひをする体に幾代ハおどろきいふかれば「それとこれとハ事異れど十歳やそこらの小娘さへ別れし面親戀ひ慕ひ阿波の國より百里もへだたゝる京浪花へも尋ね來るいふにいわれぬ譯ありて母人を有馬に置き我のみ此地のかりふし最早二週ハ月も見る程ハ雲井の他所にもあらず國もかへらで遠からぬ山中に捨置たるハ更に子たる道にあらずたとへハ母の吾を練み悪き者に思すともよそながらも有様伺ハぬハ不孝なりかくいへばさまづけれども切なる其方の情にはだされ浮々送る此の日頃未來のち／＼も現在の母上にも言譯なしといへハ方に別るハ心露斗もあらざれば悪くな思ひとり玉ひぞたゞ立歸りに湯山の町まで往て其儘歸るべし大切の品を納めたる包讓りの大小をも預

け置ハ安堵して待玉へトまめだちて暇を告るに幾世も強てハ止め得ず「善ハ急げといふをあり夜の嵐も頼れず疾往て疾歸り玉へト意に數々思ひても女々しく愚痴を言ぬ氣質にわろびれたる休も見せずさりとして暫時の別もつらく涙ながれて瀧編の小袖につながぬ玉ハ散せと差込む罪をいしかけ絞のしきでしめてかきでにハ笑顔つくるを見反る男もあじろ笠に泣目を隠せど張裂胸のこはせがけ雨は降ねど合羽ハ濡れつ猪名の笹原霜に枯れ四十八瀬もみづあせて面影かはる路途次母上如何にましまさん代らで居ませ千代までと見上る峯に色變へぬ松も馴染の有馬山其日の暮に到り着き住の坊に遠からぬ様に立寄り他事ながらかやう／＼の旅人の今も逗留ありや否と彼坊へ問せければ九月の下旬某日に涉立ありと答へたりさてこそと胸先さわぎやがて住の坊に行ば見知れる女の立出でハ久しやお客さまあなたハ何處におはしたるお母さまハそのみぎり涉親類とか涉縁者とか若い旦那と奇麗な娘で敷が瀧から涉同道夜更て一夜涉一所に涉泊ありしが曉の朝早々ひとつに涉歸りなつたハなにかの涉様子も委う存じて居る様子私共ハ碌々に涉挨拶もせざりしがお立の時にハ初からお附すたハ供のお方ハ大方見へぬ様なりし又おつたにも引續き欠落したか神かくしか何處へか往て在處知れず居りさへすれば何角の事も分りさうなものでハあり又兎も角も其許への涉傳言もあるべきにといふを聞ばはづみも振け愈こゝろ安からぬと陰様なれば此家に一夜泊りて夜明を待ち急ぎ浪花へ歸りけり現之助若來らば名蓋に居るといふを言遣さでは有まじけれども誰も其心つかず程を経てしもつきに及び其事を思ひ出し十三郎ハ行者堂に參詣の序をもちたちよりしか／＼いひおくに其涉方は某日にわざ／＼たづねておはしたり再び來た玉ふ事あらばたしかに涉傳へ申さんといふに十三郎も本意なく思ひ落も聞て悔みながら恙なき由は知られてはじめて心ハ

落居けり曾根崎には唯一夜も手夜と幾代の待籠で幾度もくく一代と二代をかけるく三四丁も出迎へさするに黄昏頃に歸り来る現之助こそ元氣も無れ二人の童女の雀躍し一代が先へ知らせに行ば二代の片手に笠を持ち片手へ袖に絶りつゝ引くに引かれて歩むほどに千鳥が許より幾代の駈出で「待たないな」まアちよいと寄らしやんせ誰も叱る者へ無しト己が部屋へと誘ひ行き「お秋さんがごもくめし炊たどて遣したのを影膳ごころで除て置たそれさへも未さめさらぬに五十年も暮す心地「邯鄲の夢ならば粟の飯といふところごもくとへ有難しさめさらぬも無理の無いさも睡むさうな目つきぢやの「昨晚のよつびて「情客か「嫌な事を悪らしひ容所か座敷も無く宵から寝ても九ツの鐘を聞ても寝られへせず種々と思ふほど苦勞でならぬ遣瀧のなさに汲置の水をわび濡浴衣で高足駄天神さまへお百度を上ると丁度鶏が鳴くふるへへ「おまへのかきを通ると怪しい姿の男堀に身をよせ伺う様子私が差出す提灯に驚きこそく逃て行く私もぞつと恐くなり駈出して歸て来て夜着にくるまり居ても居られず漸と朝湯の熱かけからそろくはひつて人心地その涉利益か健しやなお顔見て嬉いと語りつゝ箱助奴でいなければおれへ何でも敵の同類「忍び入て鬨打にせうとの巧に違へない「氣を付さんせ大切の肺「のみにも食せぬといふやつよ然し一夜も旅は旅観音さまが肌付にお宿りなされたかも知れぬ先平日衣に變て着て御馳走にもあづからう「そんならばまア一服ト吸付差出す煙管のついで一代をついで「うつかかりと顔を見て居る其手間で先へ往て火をこしらへ鐵瓶を掛ておきやト鍵投やれば起つ一代「一寸待たりそれお土産二代にも同じやうにとたれとより出す有馬の名物人形筆に引物細工「唐人笛かト吹ても鳴らす「そりや翠玉といふものよ斯して受て受得ぬ時酒を飲む断弄手前達には知らぬのかト幾代「うまくすくひわけ「これ

でいすきな酒の飲ぬをして私のおみやげへ「今雷ゆるく「それへへ「お添け氣散じなをれより肝心の御母さまへ「されば其事藏口へさいて居れど残念千萬有馬の疾に御出立誰かへ知らず御同道と聞た斗で一言の仰せ置さへないとのを仇にいづれ近くに居れば此邊りへ離れ難しざりとて母の御在所も尋ねずにも居られまい「いつやらもいふ通り兎角に頼む神佛私へこれから毎晩々々寒のあくまで水疑取て「此の現之助の猶更に母上と仇の行衛知るゝ上にも本望を達するやうにと信心を疑すより他へない夫と思へ女房の氣で「氣で丈がみづくさいはじめから女房ぢやものをさして相替らず陸ひ少し邪魔をしませうか「チャお秋さん最前へおいしひものを「いつかおとあうつりが立派すきてあれでへたとへのいばで鯛「なにこがかなでござんした是より兩人へ天満宮を日頃増して祈念せしに或夜二人の夢の裏に束帯したる貴人見へれ屢仇伺へば早く住所を轉すべし現之助も茲年へ厄年手を拱きて憤むこそ善けれ早りての過失あり春に至らば花と與に運も開け所願も充んゆめ疑ふ事勿れど正々しく告玉へば覺めて二人の有難さ次の日曾根崎の家を棄て千鳥屋の奥に在ける隠居所を借受浄瑠璃ふしをもかたりに出す書を讀み茶を煎て心を清し徒に月日を送りぬ彼大仁が彼家を伺ひけれども便を得ず又現之助の身上斗は狐神も察し得ぬ事の多くなりしと云ひしは全く神の涉加護厚く守らせ玉ふ故にしてこの隠居所にあるとなど彼方にては夢にも知らず他國へ行しと思ひますべし儲これよりは次の年に移り春もいまだ深からず時々雪も降れ月はおぼろに梅の梢もしるゝとうちかすむささらぎ頃になりけり長柄の長者濱名左門梅ヶ枝を連れ爲名寺の門前を見渡すに夢の様に露たがはねばうとましくも又おそろしくも思へば念佛を唱ふるのみ左門は數多の布施をおします茲にてもいかめしき大法會を行ふに如何なる思

體たりとて佛果を得べく思はれて佛の道のいよく尊く塵世の世にいとわしく梅ヶ枝のい
 つまでも心に籠て居べきにもあらねば兄十三郎を近江より呼返し妾をバ尼となしわづか斗の
 草菴をいとなみすませ玉へと強に請ども左門の承引す花を見れば顔よからん事を思ひ鳥の
 音を聞け聲よからんを思ひ若さ中物に従ひ志うつり易し近頃は佛事のついきはうじわ
 つかひ繁ければおのづから娑婆世界いとふ心の出るなり家誰にするとも其方へ一旦遠江
 の佐々木へ縁を組たる娘絶へて音信なき上へ縁役と覺へたり今はわざく人を遣し返事次第
 改めて他へ縁付てと思ひなりぬ我儘にさまをかへさせとのいまだ定らぬ前に佐々木より迎の
 者おこせたらば如何する言譯なきしぎに及べし不孝の子となりもぞするト言はれて梅ヶ枝泣
 出し「それを知らぬにいはねど何をかくさん夢の裡にかやうくの事ありて男に一生肌觸じ
 と誓言を立てたれば背き度ても背れず推量あれかして己に自缺もて島田のもといり切
 んとす左門は缺奪ひ取り問は道理の様なれと夢に思夢あり正夢ありまさゆめの様なれと思
 事を夢に見る思夢と云ふものなれと弱目に付込狐狸のまじこつて見せしこそ彼侍女むつでと
 やらん責殺されて非業に死すとも霜右衛門夫婦お大をこそ執も殺さめ其方に何の恨みかある
 さばかり執念くまつらんは靈ある者には最似氣なし冥途にもおきてあらんすぢなき崇をす
 る死靈を司人の他事目して我儘もさせたまはじ又上もなき佛事供養幾度もく執行ふ誰か
 爲一度そとバを見てさへも三惡道を永く遁れ佛果を得と經にも説り今猶むつでちゆうに迷ひ
 此世の人に祟るとならば佛の教へ偽りなり斯までも言ひ聞するをなほ疑はしく思ふとなら
 ば此の由をわりくささるはつに向ひ問ひ究めさても猶たゝるとならば此の左門と其方の夢に
 再びあらわれ返答せよとたしかにおしひきするこそよけれ斯て正しき夢を見ばいかにともな

りぬべし其沙汰なくバ世に謂所五臟の疾病取るに足らず事へ違へと唐土の魏の國郷の里に川
 の神に嫁入りをするると云ふ風俗あり年ごとに美き娘を川にしづめていけにゑとなし魚の世を
 肥すなり嫁入りのこしらへとて女の親は更なりひらうちより金銀を集め此事を取扱ふ村長だ
 つものみこかんなき集めたる金銀の中一分を供物の料に當ていかめしき祭のすれと残りの
 九分は掛の者かのれくが得分とす世に甚しき罪事なれと此事をせざる時は川の神たゝり
 をなし所のつぶれに及ぶとて是非なく惜き娘をすてあたらし金銀取るゝは歎はしきとならずや
 こゝに西門豹と云ふ賢人此所の代官となり此事を止んと其日に及び理を責め川の神に言ひ
 諭し斯てもいよくいけにへを與へずは此村に殃ひするか其返答汝等問ふて來れよとみこの
 弟子を川へしづめしばらくして又曰いまだ返事をせぬはいふかし今人の行くべしと又かんな
 ぎを投込つ後に村長だつものをも使に行けとひつかつかつがれ此祭りにかづらふもの共各
 大地にひれふし血の涙をながしあやまりいり此の嫁入りと云ふを其後堅く止めたれと其年
 も世がら善く川の神のたゝりもなし此事は史記に出で蒙求にも扱書したれバ其方も讀て知
 りつらんと言ひ諭されて梅ヶ枝も半は意の雲霧晴れ猶こゝろみにむつでの位牒に向ひておし
 ひきしたれども更に何の夢も見ざればはじめて重荷を下したる心地せられていつになき笑顔
 へ梅の初花よりしをらし左門も大きに喜びつゝ此里に三日留り池田伊丹の酒造りことごとくし
 き様をも看せ大物の浦の舟舳しも折よくあれば一見させ此所彼處の名所古跡尋ね廻りはいや
 はては大坂へ出て住吉よ天王寺よと拜み廻り歌舞技の芝居も二日見せさては天満の天神に參
 詣しせつしやまつしやを順拜するはと早かのづから春めきて梢々もかすみに香ひ天麗なるは
 なぐもり庭の木の芽もいじけ時田樂にあぶらのゝりせつかいも世話しき頃にて其修所言葉の

爲も軒に琴弾く聲にさそひれ三味線かついで花の下に遊びの爲ま欲く垂籠てのみ居り難き
 に物と思へど現之助幾代かまひしの與七等にそゝのかされてみあかりのいもとてをひく心に
 なるも望ある身の浮れ歩きあるまじきとなれど若き内に往々あるならひくじを引せて一代
 と二人二人に一人は伴行んと文屑さきて引結ぶ玉の二代の手に引バ一代の力も落様につふや
 きながらてまさぐり何をするぞとさしのぞけば拳玉の糸の断てそれを直して居たるなり「さ
 ても手置の善い子去年の冬のがまねあるかおれが直して遣て現之助の手に取りしが
 幾代と與七が急立るに心せかれて袖に入れ後ちまてによくして遣う留主をさする代に「お土
 産の澤山ちやト忍び出立の腰輕く刀差さぬがたのしみか敵に油断の虚飾かいざ白織の筑紫は
 に誂へ織のかひの口唐淺揃へも能く似る懐中鏡帯にさす幾代ハ羽織の襟折てわれもこづま
 を左に取れば與七ハかちく燧石鎌「座敷でハあるまいし「何れ歸りハ天神様身を清るに若
 へなく若と云へば毛氈でも一枚持て行ませうか「情死でもせよと云ふのか「縁喜でもない又
 一度かちく山をやらすハなるまい「花見に毛氈とハ時代過る憩所ハべた一面よすことく
 さやうならば裏口よりさゝめき立て立出つ寺々の花も未さかす思ひしよりハ風も寒しそこと
 こと歩くはとに與七ハしやんと立止り「酒なくハ何のおのれが櫻かなとハさて能く詠んだな
 ア行前になんでもあると毛氈どころかさゝるも持すかたやてのひまな代大分良れを催ふしま
 したやかましい與七殿下賤ばつて聞づらひ此處ハ天満あれが小山や久し振で出たからハ澤山
 ぬしにおさらせう「いくらでも構ハないお臺所ハたしかなるものト幾代の顔を見て笑へば與
 七に打笑み小山屋の庭を通りて「こゝもはしちか同じとならも些と與「ぐつと奥の方がよいよ
 「變に聞へておかしらしい「お耳に謗念の入ると云ふものもう此處が奥の留りトかこひめき

たる小座敷に座を占めしばらく休息し物調へさせ差交す盃のひまの空口ハ略きて書さ
 ず「奥々と云ふ家に三尺足らずのせまい庭煎餅のやうな薄板の圍の外ハ矢張往來「叛逆の相
 談しはせまいし奥でも外でもだいはない「叛逆は知らず日本國一に集るお催しでも時を聞
 せたる與七が忠義「あはうらしいこゝらへ来て「まア何にせい此の邊に用事もあれば二代
 への額堂の繪を見せがてらそこまで往て参ります「入らぬを、否々入りませうさアハ出で
 どこちよくの手を引き止むるを聞かず出で行きけり猶差向ひに酔ひ進み櫻色よりまだ赤き顔の
 紅葉を散さんと幾代ハ便所に起たりしがかへり來りてすまぬ顔「私ハさわりになつたれば天
 神様へハ参られぬ主一人で二人前ようく拜んで下さんせ「なるほど與七がいて居たゆゑ參
 詣が後に成た勿体ないハ待て居やれと現之助社頭の方へぞ出で行きける「小山屋の裏座敷
 彼の薄板の外に履物損れたるを繕ひて世渡として最も賤き身の上なれど年も若く清な
 るが煤けたる深笠にあざとハ見へても面ハ分らずいれこざるに肱をもたせすげかけの下駄も
 うちや前顔を眺め太呼吸をつぐ所へ同じ世渡する斑とか云ふか來懸りて「精が出るのと言
 ひ度が何だかすまぬ面色だこかすの足りない錢でも取たか「なアに其んなとでハねへ今しが
 た此所の前を通つて往たハ長柄の長者娘を伴ての天神参りあり己も此商賣人の腹から出たも
 のでもなくと前生を云ふた所がはじまらぬ譯なれど「手前も長者の子か孫か「なにさうでも
 ないけれど同じ人と生れながら千万人の足裏をなめて維ぐと思ふときは命さへ穢れたやうな
 直させると直すとの違ひハまだしもまア聞やれ長者の娘ハ乗物をかつがせながら手を引れ外
 珍らしいおひろだ何した機會か鼻緒が断れると直に同じ替草履おかめの様な侍女が跡にのこ
 つて断たのを直させようと云ひ居て朋輩に酷く叱られうちやつて往たのを拾つて置たこれ

見やれ娘の顔の美しさの錦繪でもありの書ねぬ己もあぢな心が發り此の草履をなめて見たり
 頬べたに當たりして物も言へねば笑ひもせず「願くば輕羅となりて細腰をまといん」六ヶ
 敷をを知て居るの「しんないのおきじやうるりさはきものかものをいふなら大金の取れる見
 世物おいらの又其草履に化て優しいか」とにくつゝかうと言た所かお庭の櫻「未あそこいら
 に居るであらう」目の正月も野暮でねへふちも歩けば棒のあたりで香ひなとかいで來やうそ
 んなら幼「ふちや行のかおいらも往うかいや」目の毒よすべい梅ヶ枝の最愛の鶯を
 籠より出しすいかささの五葉の松をつたひせて遊ばせ居たるにこうべいに枝うつりして聲
 うるのしう月日星を轉るも珍しからぬと例初音の心地しつゝ聞惚て餘念もなし斯る折しも惡
 さげなる鳥の一羽飛來りかの鶯を追廻す鶯のおぢおそれ逃歸る路をも忘れいと危きに梅ヶ
 枝の死ぬに憂く辛くあれ初草かと唯一言心のみ深く痛めてはしたなくは騒も得せねとお袖
 お留其余の女下男もども狂氣の如くあれよと呼叫び手を舉げ足も地に付す左門も娘
 が心を察し手に汗握りて白眼のみ術計果て見殺しにするより外無りなり現之助のはいせ
 んに稍久しく頼付居たるに人の駭げバ打驚き見反れば此有様事を好むやうなれと微醉機嫌に
 心も浮立ちいで此鳥を打退て鶯を助けやり花の如き女共の喜ぶ顔を見るべしと腰を探れと差
 添の脇差も扇もなしこの口惜と袖を探るに一代が糸を切らしたるけん玉の轉り出す是れ屈竟
 と右手に握り得免あれ其鶯我救ひ參らせんと云ひささつと前面を見詰めゑいと投たるけん
 玉に鳥の眼をうちつふされはたさして地に落しが暫く有て又起上り遠へ飛でぞ失果てける
 敵なれば鶯のつから籠に歸るをお袖の待取りいたればお留は藥を與へなごし介抱し
 つゝ現之助の手並を感じ一にはみやびて清き状態に心を動しみとれもしつゝ禮をいふのもそ

いろなり梅ヶ枝も此方をみをこせおもはゆげなるおもちして顔の赤むも言はん方なし左門
 もおどろき且喜び其手並の凡ならぬに感じ敬ひ現之助を自迎へて腰を下げ何國の人におは
 するか娘が秘藏の飼鳥の命の親の其許なれば百千の俵酬ひ進じたりとも多しとせねと折惡に
 旅の歸路萬事更に思ふに任せず隙だに厭ひ玉はすばこれより直に俵供してこゝろばかりの喜
 び邸に歸り述ま欲しく某の長柄の長濱名左門と申すものト名乗ればさてはど現之助さらば此
 娘こそ吾妻となすべきものあら美しや上なしと思ふ幾代も較ぶれば花の傍のみやまきなりと
 心も動き思わす知らずさては俵身が長柄の長者不思議な縁と言懸しが結納の刀もなく幾代の
 恨みも厭しと思ひ反して口籠れば左門のいふかり「不思議といひ其許さまに何左門に何か俵
 縁の「何として縁も由来もござらねどあゝいやかうでござります私に東國もの近頃登りて浪
 花江に假寝の芦の節籠人覺束なれば浄瑠璃が好きゆゑ長門の弟子となり後には長柄太夫と
 でも名乗と師匠の申し付今から長柄と呼せませ貴公さまなり私なり両方乍が長柄ゆゑつゝ不
 思議なとやた斗眼い藝のおはづかしやト赤面すれば「左にあらす身共も元來浄瑠璃好きさ
 ういふお方であるからのお禮の仕様に困たが大きな仕よと後に居る忠太夫といふ番頭にさ
 しやけバ手箱より幾何か知らず小判を一封長者の扇に載て差出し「ふしつけ乍當座の寸志い
 づれ長柄へ同道しお箱を語つて貰ひ度し三味線引もなくはならぬあひしを誘ふて來らるゝ
 間別當所にて待合せんと言はれて困る現之助「願ふてもなき藝の一徳直に俵供の致度けれど
 少し斗障りもあり追て俵呼下さりませさて此品は何かは知らずお酬を受ようとお飼鳥を助
 けいせず載いたも同様とて兩三度押し返し遂にはいたい受納め暇を告ればまアしばらくま
 づけれと持參の辨當着の無ともちかづきのしるしに盃斗でもと休息所に借置たる別當の房

中へ誘ふ折しも社内の人々上を下へと騒ぎ立ち喧嘩々々と罵りて人なだれをうちければお嬢さまを先お駕へ驚籠も一所にと侍女共のあわてさわぎ左門もそこへ驅出せば此の騒動を幸とし現之助は人立に混りて其儘形をかくし小山屋の方へ歸り行く喧嘩は誰と見たがるも人のくせにて忠太夫一足のこつて群る人々押除け見ればさかやきの跡ながくどのばしたる人相よくなき悪漢の古ついらを背負ひたるに六十に餘れる翁すがり付て打てども放さず人々翁を助け玉へ此奴は盜賊かさかしの葛籠に私が入れてござるといふを聞き任侠の有る忠太夫日頃好る兵法も柔術もかやうの時の爲と人々突除け悪漢の前に廻つて行道塞げば「なんの私かうろんなもの其老父めハ氣が觸れて何をいふやらたはいなし邪魔せずト放せやい」否放ぬト老人も身方を得たれば力強く足に組付き倒さんとすれば前に忠太夫こぶしを振り上げ眉間を打つ打れて悪漢よろめきながら翁を蹴飛ばし忠太の胸先一突突拮へ弱む間についらを棄置き悪漢ハ争ひ難しと思ひけん逸足出して逃げ行くを己れ逃とも逃さうかと跡を慕ふて追掛る翁ハついらの蓋はねのけ「可愛やとんだ目に逢ふた然し無事でと云ひながら身ハ疲れ心は弛み目くるめきてやせうと伏し生体なればついらより出るハ十か十一のいたいなこ娘が猿轡に物も言ハれず縛繩に手も利ねと轉び出でつゝ倒れたる翁に吾身をうちつけて唯涙にのみ呉れ居たり忠太夫ハ悪漢を見失ひて歸り來れば左門も道にて其由さし立戻りて様子を見るに痛し大方ならず小娘の縛解せ置き浪花薬を與へ坊に連行さいたハる程に身も健に心もたしかになりて喜ぶ翁と娘土に頭をすりつけて幾度も伏拜み其事の由を問れいやまう何をかくしませう此こめろハ男子わたくしが一人の孫父にお母にも死に別れ遺るは小供と此老人心細い二人の身の上わたくしは名植村の貧乏な紙職人朔左衛門と申す者奉公に出した悴めが

人を殺した連累に私も獄屋の苦み往時の主人のお嬢と譯有て私方に身を寄て御座つたのが見兼て傾城遊女より一倍面を洒す身に成て數多の金子調へ下されたので忽ち諦めハ科を償ハれ無難に家へ歸つた所嬉ひハうれしけれも其金筋を開てびつくりみやうがないやら勿体ないやら有う事か成う事か親の爲に子の身賣りお主の爲に賤き勤めするさへめつたに出來ぬものお主様が家來の爲に耻かしい奉公をさつしやる話しハ上代も聞ず何故に留ては下さらぬと跡のお方に大不足いふた斗で空手では取返さるハ法は無く切ては死んで申譯と騒ひでもつひ死に後れこれでは濟ぬそれではならぬと心遣の揚句に寝起も不自由な病氣となりいよハ人のお世話になりますハ貧苦に追れども因果と死なれずながハ病ひぬいて年を越しやつと此頃丈夫になりどうぞ金の工面してお嬢さまを取返さうと四方八方見まはしても一兩とつばめた金の取れさうなものもなく賣盡したるやさい家財唯此の孫の然目か知らず奇麗なが目に留りお嬢様を買取たは難波新地の見世物師何事も相談づく此孫をそれに渡しふたいこかげま寺小姓何になりと一生涯奉公させて娘を返しては下さるまいかぢいの切ない胸を汲分け不足であらうと慈悲と思ひ勘辨して下されとわりつ口説つ頼んだらうんど云ふまいものでもなしと自分に極めて假初に近くへ往く振これに伴れ道へ出てかうハと言ひ含むれば否ともいはずいぢらしやとは思へどもならぬ心を鬼にして長町のきちん宿に泊つて其家の姉女を頼み賣物には花といへば女子の姿に造つてもらひお嬢さまの召古し貰うておいた中はハの帯しめさせたらこの通りよい小娘になりました嫌であらうに顔差出しじつとして居て儘になり化粧をさせたとなしさ其甲斐もなく先方の主人は情を拂ふた挨拶ふたいこにするにもせい建物になつた上ハ澤山金の出手もあらう哉も仕付ぬ腕白小僧面がちつと奇麗なとて金だ

して買ふ阿呆はなしよしんば女にしてからが此の年頃ではようもして三両か五両が山あの娘と引替へなせしは分らぬも程がある死ても出来ぬ相談と口を揃へて泣付ても木で鼻こくる無得心小腹も立てばついと出て見た所がはじまらずせめてもの談合相手想ひ出した往時の友達此の天満の寺町邊りに一人あるをば力にてあくせきと来て見ればとくに何處へか店替と聞てはづみも振て落膽力も落れば精根も尽て足さへなれくぐたぐと邸町の横丁に倒れて歩く氣勢もなく休んで居るそのところへ來懸たのが前の漢懸かどわかしの夢にも知らで親切さうに物言はれ撫さすらるゝがうれしさに心をゆるしてとろく疲れて眠るを見澄してか此の孫に手拭ひはませ突倒して手足を縛りおどろき支へる此のおやぢを投出して此孫をつらに押し込みつ背負て遁るに痛も切なさも忘れて彼奴が腰にすがり足にからまり一生懸命此處までついて來たれども最早目も眩れ心も惑ひ危い所を後家來衆お助なされて下されたそれゆゑ孫も難に返りこんな嬉しい有難い仕合へござりませぬト有し次第を詳に語れば左門はさく胸を痛めをいり涙を催ふせ傍に有合人々も幼兒の心を汲取り朔左衛門の不仕合を憐みといさつかぬへなかりけり差懸りたる災難の幸に拂ひたれども第一に翁の心痛救はずんばあるべからず袖の振合せも他生の縁聞乘にへなるまじと左門へ黄金とりよせて「些少ながら初めの對面のしるしなれば受納めて主人の息女償ひ出し安堵すべしこれほどの黄金を與へなばよも否とは言ひもせじ仁ある主義ある家來一對の名譽たり吾些少の黄金を棄て兩人の妻を顯さんと望む所と小金百兩渡せば呆れて面打眺め傍じやうだんでござりませぬかほんとうならばおなさけすき欲いの山々なれど戴く譯がござりませぬトよそめをすれば一倍みあげ「なんのこれしき辞退の變屈然れど心に心よく思われずば其意我家に連歸り手許に置て

遣ひ度しそれだに承知あるならば主従かための歪せん肴料と思ふべし辞退の矢張主人へ不忠と言はれて悦ぶ朔左衛門與之吉を左門に渡し「そんなら傍意に従ひませうさて孫めは仕合せもの女になりと男になりと仰る通り儘になり大切に奉公せい澤山叱つてくださりませかげまになるに比べてはすつばんとお月さまいや月夜でも日の暮て用心もよくござらぬさやうならば暮ぬ中ま一度彼方へ参りませうとはたゞよるこび立出しが流石に後を振り反り水鼻すいりて別れ行く小山屋の小座敷に立歸りたる現之助の胸ぐら取て幾代が高聲「わたしが好で爲る世話の足にせいとこの端金うれしいと言ひ度が出所が氣に喰ぬ見てもむしやくしや腹が立歸りの邊にそつと出て人の後に見て居れば長者の娘の顔斗うつかりとして舌たる目付は余程北山時雨濡ぬささこを露をもいとへ云ふまいと定めたが愚痴も吝氣も云はねばならぬ親御の仇のをさへ打明していふはどで今日が日まで長柄の長者と縁組したと云ふ事言ひ出さしやんせぬ心いさ私は如何にも恨しい叱るなら叱らんせぶつならばふたしやせん在様か前が預けた包有馬の留守に開いて見たら紙に巻んだ証文一通「吾娘梅ヶ枝事貴殿の子息現之助へ縁組致す其証并の片方遣し度其許よりは結納として朝日丸の短刀追て差越る旨承知致度と書て有て宛名へ遠州引間の城佐々木源太左衛門殿攝州長柄濱名左門是れ書判まで書した証文中に包んで梅櫻ちらしに付たかたしの符こんな事有たもの私が實を盡しても嫌で有たの無理もない刀の詮議も長者の方へ持て行く主の心とおもへばこれまで人様の異見もきかず眞情を立通したが耻かしくおのれやれ此儘で置うものかと腹の立下から戀ひしさなつかしさ意で心が分りかね儘よ初に惚れたが粗忽人は兎もあれ此方ではいよく實を盡したらぬ遂には眞底の實が出ようと氣を取直しそれからかかの水行で天神様をせかんだ御利益今日まで交

よく暮したれど長者の娘の美ひ顔を見たので胸の焼けお前はお前でいそぐと笑談まじりの
 挨拶もまた名を秘して居た丈にかうしてお前を叱つて居れど名乗たものならお前を殺しわた
 しも直に死ぬわいなと酒の云ひするゝしたなき言葉をなだむる現之助「かくしたの重々過失
 其方も今いふ通り實名を名乗らぬのが梅ヶ枝に執心の無といふたしかな證據知て居ながら大
 きな聲で人が聞く靜に言や「聞ても大切はござんせぬお長者さまのお嬢さまのやうな優い口
 元には生が違うてなられませぬ彼方で氣があるさうでお前の顔を見るやうで見ぬやうであら
 な眼づかひ「あの目は定めて性來やぶにらめとどかいふのであらう「悪口いふのも矢張りい
 きはんの私へこゝろやすめ「かう云へばあゝ云ふと何となりと云ふがよいたへと聲入りした
 いにせよ此方へ嫁に貰ふにせよ朝日丸の短刀は鞘ばかりで何にもならず是れも一の具方の安
 心去年の十月廣田の社で殺れて居た薬屋の後家が腰に差たのが無の間に人手に渡り語る
 を塀の外にて聞耳立る幻「かうちうなづくと内には知らず「彼節刀が返つたら今頃はお長
 者さま「もうよいところに愚痴も止め吝氣も止たらよささうな未疑しく思ふならあの證文も弁
 もそなたに渡して置くほどに納めておきなと棄なりと意任せにするがよいと取出し渡せば爲
 と改め「ゑゝ嬉しいこれでこそにつはんがしがたやうな見度もない此弁と庭へひらりと投
 遣れば途端に板崩突破り貫き通りて幻「かうすぎの肩先ぐつさと刺す幻「はあはあはあ知らず
 あつと叫べばおどろく二人何事なるかと木戸口ひらけば幻肩先をおさへながらも手に持つ
 幾代は大方酔も醒め「とんだそさう思わぬ怪我宿しておくれと詫るにも相手の悪さに胸をさ
 く「お交のよすぎた痴話喧嘩そのなげうちの傍相伴乞食がして「旦那方の御耻辱にもなる
 やうな足を洗て町人になられるほどの傍手當をいたしき度と申す所をさう慾張も致しませぬ

是でも元の小脇差一本もきめたもの此身になつても小道具好き汚しい乞食の血しは付た
 兎ても癪りものいたしき申して膏藥の代は別には入りませぬがお心ざしがあるならば下か
 ら出られて猶氣の毒幾何か知らず長者より贈れる金を幾代に投遣り「こちにおくのいおかし
 くない厄おとしぢやござんせぬか「さうぢやなくと現之助何言はれても幾代任せ幻「金さへ
 得ておしいたいくを見も反らすさア交直りの納め酒ト勇んで幾代が立切る切戸帯に抜きし彼
 の書面外面に落しに心も付す手を叩きて下女「びよせおかんをあつくと云ふ折柄與七二代
 へ歸り來つ暫く盃めぐらしつゝ酔に乗じて曾根崎へ小歌謡ふて歸りけり
 濱名左門の娘梅ヶ枝天満の社頭にて初めて現之助と面を合せけるが父の言名付せし吾夫と
 は元よりしらす殊に去るむつきの頃夢の裏にてむつでに向ひ一生夫の持まじとほひ又猪名寺
 にて黒髪をも斬棄んとせしはどなりしが其折父に説諭され再び夢をも見ざりし故今春情の勵
 くをも探なしといふべくもあらぬと現之助の容貌優れて清く愛敬づき優形なれどしたる
 からす物打言ひたる氣色起居舉動しとやかなる総てあらまほしき性質に心動きて忘られず玉
 ごとをたすけられ父上にも喜び給ひ諸共に歩み行んとし玉ひし程なるにあやにくに騒動の起
 りて男の行衛の跡なくなり遺憾さへ限りも無れど色に出べきともあらず人知らずといきの
 みつかるゝもよしなしや昨日までも今朝までも覺へざりし者思ひこゝに初て兆しその強ちに
 此人に妻と呼れ身を任せ生死をも共にせんとたしかに思ひ定るにもあられぬと只管に其人のな
 つかしく戀しくて天満の社内を立出で乍野里へ歸り行く路の行手に侍女のよめなすみれの摘
 草もなに面白くて持て騒ぐかと戯れ遊ぶも厭しくおぼへ夢にも見ゆやと乗物にて睡らんとす
 れば耳近く玉ごとがさへづりて起すさへ悪し日の永き盛りなれば暮つ方に家に歸へり休息の

後父と共に地佛に向ひ禮拜しつゝ母の位牌を見るにつけむつでがと心に浮み世を棄て果んと
 誓ひしものをあやしくも男をしたふ心のつきしが罪ふかくかやうの思ひを止しめ玉へと本尊
 の地藏菩薩に祈り手に持玉へる玉を見れば彼男の鳥に投しけん玉の想ひ出され面影に立も
 たてしわが斯物を思ふにつけても今日父上の老人を助け玉ひたる與之吉はまだ十歳ばかり聞
 分よくとも西東知らぬ所に唯一人かしてはと案じ過し日暮の殊にさびしがり人戀しさも
 さぞかした人の愛をも身に積り膝ちかく呼する物食すれどものはぢして誓をも取すうつふき
 居れば氣詰りならんと菓子だんす與へて次へ退かしめ十二三より十五六の侍女に打交へ或
 鳥さしお茶出し小僧額の髪を唇にはさみて渡す白鬚にふさいだしたるむべ山風にうらを争
 ふ歌がるた百人首にのなしと云ふ梅ヶ枝さへも神に入り余念もなけにあそふはとに童ごゝろ
 に與之吉も折げや折ん初霜の解ての遠慮も夏の夜の未嘗ながら居睡るも晝の疲勞無理ならず
 誰ぞ抱腹をしてやりやと梅ヶ枝の言ひも果てぬに私かわしがとお袖にお留彼方此方へ引張れ
 ばまだ眠度へござりませぬと擦らんとする手を取られ見張る目付も亦愛らし「争はれてへこ
 の子も迷惑「そんならこゝでじやん奪で「しいくくくそれ勝た其方へ紙で私は鉄舌切
 雀のお宿へ決つたさア來やんせト與之吉をお袖と鬘房へ連行さぬ翌朝與之吉の人々と共に起
 出て朝飯を食て後もお袖お留へじめゆひき髪結化粧なとして相手にならねば端近く立出で昨
 日貰ひしらてんの提重大切さうに手に提つゝ外方を見出しはろくく涙をこぼすさ言へね
 ぞおほぢをこふる心の遺方なさなるべし元來男の子なる者を女すがたへ嫌しがらんさへわれ
 ぞ梅ヶ枝の手許にて遺んに二年三年は此狀にて置方も悪からじ與之吉の心任せ如何とす
 べしとて執が好と問ひければ「私へ去年まで竹刀で斬やつたりお馬に乘たり相撲をとるの

か一番好きでござりましたがお父さまをお鷹さまに殺されてから現在のわがやの仇で有年討に
 討れぬ御主人様其上にも父さんが悪ひから起つた事人に恨は無れども子で父の仇討ならぬと
 云ふ因果者修寺様になりたいたいと思ひ立て竹刀も相撲もさつぱり嫌になり柔和なのが坊様
 の身持には第一番と聞て居れば何事も人への善惡逆へすいふが儘になる了管ゆる貴方の
 意任せさうなりともして下さりませ其代り遣うはと使ひなされた其上でへお衣とおじろ笠
 調へて下さりませ何にも欲うのござりませぬといひくく泣出せば梅ヶ枝も涙を浮
 め「譯へ知らぬぞかなしいと言ひ出して泣せる子ぢや私もどうから尼になる願ひなりしが父
 さまの御免しなくてこのやうに作り飾るも一は孝行とは云ふもの言ふにも言はれぬ心の濁
 の耻しさ其方の話を聞に付さつぱりと思ひ断り私も尼になりませうをしてあのこわい者見た
 しとやら云ふ通りまだなきたらいで物好きながら父さんの殺されて仇の討れぬ其話し聞たい
 ものぢやと言ひければ與之吉は泣く目を拂ひ櫻木が心となく源五平を大石にて押殺したりし
 その死骸崩左衛門の引取りし始終を物語り其お嬢さまの旦那さまと申へ十三郎さまと申し長
 柄の長者と云ふ大金持の小旦那さまと申す事お苦衆の時家出をなされ近江のなにかいふ所
 に御奉公召れた時其家の御嬢さまと夫婦になり流浪の身の上おぢいさまはお嬢さまの家
 來筋の者なれば世話申て居ましたト此家が長柄の長者の家とも未知らざればよそこのや
 うに語るをさくくも梅ヶ枝の驚きなみくならず絶て知れざる兄の行衛聞て嬉しさ限りな
 く此由父に物語りいかで不興を修宥しありて妾には兎も角もといへば左門も驚きながら「又
 例の出家の願かそれはさしを十三郎而も同國遠らぬ名蓋に居るとい思ひも寄らぬ昨日今日
 彼邊りを通つてを更更知らず呼返す易けれと伴添ふ女もある由なり勘氣の詫もせぬ俸此方

よりさそひもなるまじ先どもかくも落着たりと玉木にも斯と告れば「それいゝ何よりも御
 目出度ござりませす條理の立て方へ如何様どもなりませう早々お呼なさりませ梅ヶ枝の山家の
 望些とくどいやうにもあれど悪ひ事せうでもなし兎も角も十三郎歸られたうへともいふに
 相談なさりませト口に云へど十三郎歸らば連添ふ櫻木とか云へる女も共に来て四邊に人目
 繁くなり大仁坊との忍び合ひさこそ障りの多からめと心のさらけに快まず幸福も悦ぶべからず
 福も憂ふべからず朔左衛門は孫を賣りはぐれてかどわかしの難に遭ふ此のわざわひの起ら
 ずは長柄の長者の憐れをうけ人を償ふ身代をや得べきさてその金子をいたいかすゝ水の底に
 沈むべき此の場に至りてハ幸反て災となりぬ其は千早ふる神にしあらぬ善や悪やを知
 る由も霞まじりに餘寒の夕風料にあたりて煩裂つ切るゝばかりの冷たさも厭いで老の心も急
 がれ灘波新地へ引返せば見世物師の珍五郎ハ薄暮にすかし見て「又浮座つたか老父殿兎て
 も出来ぬ相談ぢや」「否もう孫ハ伴ませぬ善い旦那に有付てお金を澤山いたゞきました五十兩
 宛二包これでハよもや浮相談が出来ぬ事ハ浮座るまいト嗣巻とつて打ち振るふを珍五郎ハ見
 ていふかり「此のせちがら世の中にさうしてそんな善い旦那がそして何んといふ浮方ぢや
 「ほんに私とした事が餘りの嬉しさに此方へハ心の急くわゝ有難うござりますと幾度もお禮
 ハ云ふたが何處の何といふお人か問なんだハさういそさう九天満のお寺で聞ばといふた所が
 數多も有りありや何といふお寺で有たか否樂大寺やゝ孫に逢ひ藤思ても何と云ふて尋うト
 うろくするも道理なり亭主の妻ハ夫の袖をつと扣へて耳に口「寺町裏の狐がさわぎ悪事を
 すると人の噂あの老人さまも時々付られたのか又矢張化て來たのか油断ハならぬ先をこら中
 明るくしてと行燈に火をうつし神棚にも浮燈を照し傍に目を注げにらむを見て夫も少し恐氣

立ち「うつかり玉を渡してハこんくわいさきにたちかたしいやのう老人百兩の金の木の葉で
 もあるまいから慾を離れて櫻木を渡して遣り度ものなれど其許が歸ると直跡へにわか旅の
 金主が付きあの鎌倉の見世物屋に春まで仕切て遣る相談先方も急ぎて早速極り金子を受取て
 もう立せた案じなさん金もうけが出来るとたいでも返して遣る遅くなつてハ路も物騒早う
 歸て行つしやいと急立てられて朔左衛門「そりやまア眞でござりますか出来ぬまでも跡追懸
 けお目に懸つて嘆いたら邪見の人ばかりもあるまい旅のお人もお嬢さまも何方の方へゆかし
 やりました「さればの鳥羽か伏見か淀武田芝居の方を北へ」「そんなら其方へちつとも早
 く「あゝ危ないつまづきやんな其様にして見する術まで老物らしく齒の入らぬあぶらげでも
 しやぶつてゐいでト立て切る戸口朔左衛門も何を云ふやら耳にも入らず駈出とせも日ハ暮れ
 つ所に馴ね道も覺へず此方彼方と聞つて行そ氣も取り上せて東西を失ひ田路の小路に差懸
 り「是ハ早飛んだ所だ來たと思へハ南へ來たのか南無三寶と引返し急ぐとすれと頭のみ先へ
 進みてせいし疾れ足ははかどらず辛じてあへぎく四五丁行けばしまのうちあたりと見
 へて善き町あり軒端に行燈二階に提灯星の如くに夜とも覺へずこの橋ハ何橋この辻は何
 町と心覺へに猶行先をかき往く駕に振袖のささの見ゆるは若や我が御主人さまかと走り寄れ
 ば籠に添たる旅人が「具方ハ何ぞ我等に「お尋ね申さにやならぬ事乗つて御座る御女中ハ櫻
 木さまとて大力の「老父殿ハ能く知つてぢやの浪花で名代の今巴一年極めで鎌倉へ「お伴な
 さると聞たゆる跡追掛たが存外に近ひ處で逢ひ申たまゝ其籠を下して下され「さてこなさん
 は此の太夫の親旅のものト云ふ様な「親族どころか私は浮家來申しゝお嬢さま朔左衛門が
 参りましたト云ふを聞より垂はねのけなつかしかつたと立ち出る櫻木「違ひないゝまア御

壯健で喜びますなれども申しお嬢さまお前さまも飛んだお人有り事か無らう事か家來の爲に
 主人の身賣有難過ぎて恨めしいお蔭で獄屋の苦の遣れたれども心の切なさ死ぬより十倍
 増生して居るそらもなくと云ふて無理に死なれどもせず獄屋の弱りと屈托でさんく病ふても
 此の世の縁の切れぬも因果やつと此の春全快して六ヶ敷からうと知りつゝも與之吉を一生涯
 役者にでもかけ馬にでも賣て貰ふてあなた様と引き替へに仕度願ひ今日親方へ掛合ひに參つ
 た所が取ても付ぬ挨拶に頼みの綱も断れてすごく歸りの路又かどわかしの災難を救れた上
 お長者さまにお金をいたゞき與之吉をお預け申て引返せばはや遠國へお旅立と聞てびつくり
 息もつがすといふを聞きく件の旅人「さてもく奇特な人一年の給金も半は拂ふた太夫な
 れど聞き棄て連ても往けまい見かけはけちな野郎だが玉川の水をうぶゆに浴てせうふんなが
 ら東之子だ其金こつちへ受取て灘波新地へ持ち歸り此の子の始末を付て進せう是から直に太
 夫をばぢいさん連れて行しやませ萬事私私が引き請たト切れ離れよきをときに朔左衛門はは
 たく喜び「流石の東の親方さま早速御承知被下上こゝから直に伴れ申て行とれ餘り有難す
 ぎてうれしなみだかこぼれます左様なれば肝じんのト胴巻より金取出すを受取り納めて櫻木
 を引き渡せば二人のよろこび旅人は櫻木を乗せ來りし籠にうつり「も一度籠の衆あつちらへ
 其んなら老父さん又會ふトすれたればつたり飛び行く籠屋朔左衛門の後伏し拜み「案するよ
 りは産が易むと此邊であなたに追付うと思ひ掛ぬぢいが仕合せさてもく去年からいかに
 惨苦勞掛ました悴めが不所存から飛んだ所へとばしりがかゝつて大切のお顔に泥を塗らせ申
 た不忠者慘宥されて下さりませ申しくお嬢さま何故物をおしやらぬさアく急いで參りま
 せうと手を執りつゝもつゝ見れば今まで正しく櫻木と見へしは石の地藏尊傍へに花筒因

果車ヤヤくく是は怪しからぬと邊りを見廻しきよろく目「しまのうちの色町の真中と
 思ふたは虚さびしい池の端真黒な森と見へる二階から軒つゞき星の様なと見たはかけは矢
 張天のお星さまはうじのもじも星の池そんなら此所へ今宮ぢやこりや唯事ではないはいのよ
 もやくお嬢さまがわるさに隠れもなさるまい是りや狐めが誑したのぢやな途方も無い目に
 逢せ居るト懐を探りく誑れたは是非もないがな金まで奪たのぢや思へばにくひ悪孤切て
 わのお金でも持て居ればお嬢さまは是非も無れど後家ごさま十三さまへお詫の足しにもなら
 うものよるにさはるにおればかりなせ此の様に間が悪く畜生までに誑されて憂目に遇ふと
 ぢややら悪態かわかず非道はせず正直正路に義理がたくしても神さま佛さまあちら向いてご
 ざるのかあいやくさうではない矢張おれが自業自得若し時作つた罪の罰が遅く當るのぢや
 彼の猪名寺の笹原殿に奉公をして居た時に侍女のむつでに惚れ嫌れたを根に以て奥様をたき
 つけたればあつうなつてむつでをば驚を逃したとて責めさいなんで果てハ雪責こゝろて死ん
 だ其死骸持ち出た時便所に起きそつと見たれば云ふなよと口應の小判三両云はぬ色なる山吹
 へ身にも付すにかけごととに費ひ棄ても矢張身に報ふと知らず無我むちゆう其女の執念の祟か
 侈家へ程なく死に絶へ荒邸となり化物が出るに聞て恐くなりそれから心を切り變て曲事
 たち物にしたれど一度も斯々と懺悔をせねば罪ハ滅びず去年からの不仕合せ人の念と神の伊
 弔ごめんなれく南無阿彌陀佛くと唱へて地藏をふしおがみ立ち上つてといきをつきつゝ
 惘然として居る折しも此方へ來懸る提灯ハ引筒に櫻の紋所男につら背負せたる若き女ハ立
 ち止り朔左衛門の面打ながめて「氣朔さん其提灯をと差寄せさせて打驚き「そなたハ名蓮の
 朔左衛門トいひれてびつくり見上げ見下し「櫻木さまぢやござりませぬか「朔左衛門「お嬢

悪狐め大切とも大切な金を残らず奪つてまた何が欲うてうせたかのれめたで置く
 ものかト杖振り上れば櫻木「そなたの氣でも違うて居るかそしてまた此邊を何をせうとて
 夜る夜中「何をせうとてもすさまじい誑されてもまだ此處に居るのあんまり口惜さに復
 來をつたなら打殺し皮でも剥で腹癒がしたさに待て居たのぢやト無二無三に打て掛るを櫻木
 へあやしみなながら利腕取て杖を奪ひ「本氣でないやうな何したのぢやと顔打まれば氣
 朔の手を打ち「しれたく此の頃噂のある狐がつまんだのでございませう太夫さまの親族な
 らお前さんに化をつてぢいさんを誑したといふやうな事であらう浮最負からの頼で舞臺で
 おひろめなされたお藥邪氣を受けてのばせた人にも能く効くでござりませいあれを飲せて篤
 りと落着せうではござりませぬが「眞にそれくわのお藥ト手早く取り出し立騒ぐ朔左衛門
 に含ませれば忽ち心もたしかになり「さて貴い丸藥はつきりとなりました又も狐が來
 たのかと立ち騒いだり矢張迷ひ主人様へお手向ひこりやまア何と致しませうそれでわな
 たへまだ矢張こゝとにござりましたか「なんの何處へも深いではなし大評判の大夫さん正
 月の中頃から住吉の邊境内で一月余りあたりついでけあちらにおやせいとつてなれど今宵はす
 こし親方に用があるとなかへり「そんなら遠くの國へ來年まで仕切られてお出でなさ
 ると聞たの「其の間違ひは是れ程にお金のおちる力持櫻井の「ななかとさんと金看板の大夫さ
 ん三番奥からゑい「たう「外へ遣らぬ此方の金箱「さぬ親方珍五郎殿へお嬢さまが
 惜いゆゑうをいいて追ひ出したのぢやそりや貪慾ぢや無体といふもの金が足すもういくら
 持て來いなら持つて來いと善惡掛け合ひ下さらば浮々出掛て畜生奴にしてやられはせぬは

のお嬢さま今日の始末まア聞て下さりませト最前處に差向ひし如くに又再び去年よりの心
 し今日の始末を具に語り遠くにもござるとか目の前に其御方を置きながら金なれば御
 をかくす事叶わす御長者様の御心ざし無にしてのけた申譯生て居られぬ老人が因果のはて
 先此の通りなむあみだぶと唱へつ「池へさんぶと飛び入りたり櫻木氣作の兩人へあわてふた
 めさ立ち騒ぎあれよ「と叫ぶのみ覺悟仕ても老人の水に溺れてくるしむ状目も當られず
 淺間敷とびいりて救んにも女の身とてさも得せず氣作へ元來臆病者水練とて習ねば見殺し
 にする外へなし櫻木はがみを爲し身をあせり「力が有ても此の様な時に何んの益にも立す
 人に恨みを云ふではないが朔左衛門が話しに聞け私と見たり石地藏と口惜さうに云ふたはな
 是れ何故わたしに化たのぢやなせ畜生の肩持たのぢやト地藏の腰に手を掛れば忽ちばつたり
 うち倒れ因果車に懸たる提灯をしにうたれて微塵になり消るとひとしく森陰にはつと燃え立
 つ孤火の中にからく「笑ふ聲櫻木さつと眼を注れば大木の梢に一つの狐此方を見下し嘲るさ
 まに櫻木いよ「口惜く誓も怨もあるまじきに何故老人を誑かし多くの黄金を奪りかくした
 疾く返さば命はたすけんさなく生て歸さじと口にいへど達かぬ梢白眼へたるのみ
 術もなし狐の人の聲をつかひ「力自慢止にせい實力の有るならば倒れし地藏を起して看せ
 よトいふに櫻木いよ「腹立ち「たかい四尺や五尺の石起すに何程力が入ると引起せども更
 に動かす狐の上より快げに打笑ふて見下し居る眼を目當に森陰よりはつしと打たる手裡劍の
 ねらひ外さす左の眼にぐつさと立てばぎやつと呼び堪りもあへず眞逆さま落るを見れば大犬
 より一倍稀なる老狐手負の猪に限るにあらす苦痛に堪へ兼ね荒れまはり氣作を目懸て嘴付を
 櫻木はやく断隔て丁と蹴付るやさしも強き力に狐はころく「得たりと櫻木走せ寄りてかの石

地蔵を引き起し狐の上にどつかと乗せさつきの口を忘れたか斯な石は重うないと一と揺り揺れば手足をもがき叫べど更に動れず次第々々に弱りつゝ復蘇生らんさまも見へず「さてもよ
い氣味朔左衛門の當の仇へ取つたれど金は何處へやつたるか四邊を捜せと頼には見へず櫻木
も氣を疲らしわたりを見廻しといきをつき「斯しても居られまい私が番をするほどにたいぎ
もたいぎ恐くもあらうが氣作さんは村の人を頼んで来て此のあらまし庄屋さんへ届けずは此
の儘には歸られまい「いかさま棄てても行れませぬ金は多分森の中にあらうと思へど眞闘
がり何が出ようかこはくはく一人や二人ぢやはいられぬ朔左衛門へどざるもんと名を變へ
られるこんくは澤庵漬のかうくとなつてどちらもぶきびな面相此所に残つて居るよりも
まだく村へ行くのが勝手さやうならば出掛せうと立ち上れども腰はぶるくゝゑゝもう生
根をつけさんせと背中をささりわいたしこもう大丈夫と踏みはだかる此の時森の間より常夜
燈の火袋たづさへしづゝ出る立派の武士燈を差寄せ死したる狐篤と見るさま櫻木はうちま
もりて肝を消し「あなたは父上おなつかしやと言ひ懸け我身を顧て側へも得寄らずさしうつ
むくを伴の武士はじろりと見て「近江國築作家の老臣石藏尉之助久秋とも云はるゝものが小
屋掛芝居に面を酒す女に由縁が有てすまうか父なんどいへばはしい尤力の優れたる娘一人
持たるが下人奴と密通し連立ちて邸を立退き此の年月行衛知れず後に聞け彼の下人奴も富め
る者の子とやらんそれも親の勸氣を受しものとあれは諸共に揃ひに揃ひし不孝もの不忠もの
に聊も心の還るやうなけれど今度主君友照君都在番の序を以て當國住吉へ参詣某も子供
いたし濱邊遊覽するほどに思はず見上げし芝居の看板若き女の力持虎の尾を引き留めたる看
板の勇しと書空言の知れてあれど少も力のあるものか吾娘も母親の血統を引いて男にまさ

る力の有しも持たぬものと悪い奴とは思ひながら此の看板を見るに付虫の知らせか若や又彼
奴等めが世を糊ぎ兼また悪漢にかせりかされ命を棄て得すをめぐゝと人に生耻さらしはせぬ
か家中の武士も徘徊すればもしちかづきの目に懸らば親にもあらず子にもあらず人の口へ
塞がれず築作家の老臣の娘が見世物芝居に出て居ると取沙汰をせらるゝ時へ主君までの汚
名折れいよく彼れに定らば其儘に棄て置れじと今日旅宿より唯一人出直して覆面に面を
かくし芝居に立寄り一見してより胸一杯満月も近頃病身手足痛みて氣力も衰へまさかの用に
も立難しおのが好める男も有らば其通り親に願ひ如何にもして養子となし分家せさせて國
に留め置き主君の傍用に立べきのみ親に暇を呉れたる不所存なにはど暮し兼るとて物貨ひ同
様な見世物芝居の群に入り耻かしくも思はずや知ぬうちには是非もなし最時片時も延されずと
只今の身の上をよそながら尋ね知り數多の黄金を費して身も償ひて手討にいたし人の口を
塞んと心を定め在所を聞き知り歸る後より見ぬがくれと語るを聞て櫻木はかなしつらさ
身も世もあられず「お腹が立うが父上さまお免しなされて下さりませ唯一言の言譯もならぬ
此の身の不孝の段々斬りなりと突なりとあなたの心の儘にして汚機嫌直して下さりませ親さ
まの手に懸りて死ぬがわしや本望じや嬉しいといひつゝわつと泣き伏せ「ゑゝ騒がしい落
着てわが云ふ事を篤とさしやれ最前よりも彼處にてうつゝもなげの老人に逢ふて互の物語り
逐一に聞きたるが賤業に面をさらすも義の爲にして是非なき次第且は初めの男めと是れ迄
も一つに暮し飽きも飽れもせざりし様子不所存者もそれはどの事分つて居るのかど少しは
不憚に思はれて猶伺へば心迫り老人は星の池へ入水して命を果すあら痛しやと思ふ程に惡
むべき其の畜生人を嘲弄するを見兼小柄を投て追はせしにやがて仕留し力量早業老人の堂

の仇うちとつたるけなげさと云ふを聞き果て櫻木のすこし心を慰めて頭をもたげ涙を拭ひ
 「おや、様には海山の惨苦勞かくる不孝者は叱りもなく惨害の語みやうがなや勿体なや此上
 の従前の様にと言はせも果てず打笑ひ「其方は櫻井花勝といふ賤しい身分の者で、ないか娘
 ならば勘當して宿さねやつに何一言交すところか隠しても隠されぬ世間の手前行状の善れ悪
 かれ打て棄てねば武士が立たぬ「それぢやに依りて些ともはや首打て下さんせ息ある中に
 もう一遍逢ひ度人もあるけれど思ひ切て未練の云はぬわしや殺されても父さまよ娘とも一度
 云はれ度きつて」と首差延べ身を差付れば尉之助といきをつき目をしべたき「不具子は
 可愛もなべて世間の親心をこまでも他人にして殺し度のない娘時候の故で逆せたかおれは
 いかう耳が聞こえずな言ひやるか聞き取り悪い時にあの花勝とやら共に力の強い同士若し
 我が娘にあやつたらよわうなつても母親も死ぬ様な氣遣ひなし父親は此の通り只兩人共よし
 ない苦勞心遣ふて居る程に女ながらも一つの功を建て、歸參を願ふて見よそれまで遠ざ
 かり國の者にのみすばらしい姿を見せて呉るなと傳言が仕て賞ひ度しト事を譯たる慈愛の語
 に又あらそはんやうもなくはいと返辞も涙聲縁もゆかりもなければ一度見ても最負の大夫
 これ此の金は當座の祝儀受納めて親方と云ふ者に渡しなば身儘にならぬともあらじト頸にか
 けたる金袋氣作に渡し立ち上れば「あゝ有難う座ります然し餘り勿体なうてわたくしに尉
 が當りませうそしてあなたはもう宿へ「そなたも余り後れぬうちに歸るが善からうさらば
 ぞト衣紋つくれば取付く櫻木「よう聞き分けては居りますれども別れ申て又いつか御目に懸
 るか知らぬと思へばお顔を見せて下さんせト寄るを拂ひて尉之助「武士の娘ぢやないかイヤ
 さ無事でござれト言ひ直しすげなく行しが忍び目に見反る横顔延び上る娘と思はず目を合せ

其儘眞向に石蔵は塚の庄の旅館をさして足早にこそ急ぎけれ氣作は睡い目をこすり「あくび
 の涙の耳から出る悲しい涙の眼から出ると分つて居らねば出ばえはせねと珍しう泣ました大
 夫さんの彼が親又實に親子の情愛の傍目から阿呆らしいがあゝしたものでござりませうい
 や殺さうのさア殺して下さんせのと途方も大切な千両箱をさゝにつるした縁喜のやうにさう
 手輕く我儘にさせまいとは思ふて居ても滅多に物言ひ出さればたゞはら〜と思ふ斗大
 夫の櫻井人の武士當座の祝儀が此の通り百兩から以上の重き矢張彼奴もこん〜ちきでお金
 の石ではないか知らぬ姓氏も大方石蔵と「阿呆言はんせ確な父さん若し石ならば従前の様に
 見世物に出りや濟むはいな是より二人は村長を尋ねて今宵の始末を告れば村長の二人を留め
 珍五郎を呼び寄せかた〜に名塩村へ人を馳て十三郎に朔左衛門の死骸を引き取らせんと
 する事よりして櫻木の身の方付書きさしるべきを多かれどもくた〜しくて興なけれ、事の
 序に譲りて略す池の堤の猪名墳の間よりそろ〜と立ち出る大仁坊頭巾具深に大廣袖をふら
 めかして懐手「不圖暮方に通る懸り見世物師と老父の話聞て俄に一仕事泥か伏見か竹田の芝
 居と云ふた臺詞で與一兵衛定九郎もどきて爺殿々々と遣うと思へば町中では勝手も悪るしよ
 い思案がありさうなと腕を組みと明神がおいらが誑して奪て見せう後で潜れて見て居ると云
 ふに任せて付て行けば此の今宮の裏門まで引張り出して此の通りうまく奪らせた二た包然し
 ながら思ひも奇らぬ邪魔がは入りて明神の可愛さうにぐつしやりとやられたはひよんなと此
 の意趣が〜しに何方なりとこつびこい目に逢はせうとは思ふて見たが一人の大力一人は老功
 何方も手強し例の雨なり風なりと起して眼を眩ませうと構つても効能なし明神が斯なつて
 の妙術も行はれぬ是ではさつぱり名僧智識の道徳もあがつたり折助の看板でだいなしにして

仕舞ふたへへさてながくとしやつらが繰り言しびれへされる寒くひなる酷い目に逢ふ晩だ
 然しさぶめもやつとどかへりばんをして居さうなあまが阿呆と一所に村へ往たへ天道人を殺さ
 すだ彼奴がじつとして居ると活佛の上人様やしやがみ往生なさる所又來られてはちゆう位長
 居へ恐れ此の百両せしめたを土産にして送りやそろくへと僧老同穴玉木が懷で暖まらうかい
 やまてへ明神が無くなつてへ長柄杓で一飛びの飛行自在も出來らばこそ用心さびしき左門
 が即忍び入るにも是までの様に手軽くやらぬのかいやはや詰らぬ者になつた弱目に崇り
 風までが馬鹿にするか滅法に寒いやつが降て來る腹へ北山時雨さうな空合ひになつて來たを
 いあの火へかんざけ屋よいのが通り懸つたなるほど天道人を殺さずだをいへへト呼び留
 めて「肴も酒も総揚だ熱燗でおでんへからの早うへ」と云へとも聞ずさつさと行を引き留
 むれば「此邊等へ例すぐ通り酒もおでんも賣りませぬ悪狐が騒ぎをつて此の葉の錢で折々
 やられもういへでござります」賣らぬへのかヨ「さうようれんかん酒」ごふさらしもろ
 こし團子が聞いて呆れる○返すくも云ふ事ながら悪しき事あれば善き事あり朔左右衛門の非
 業に死せるへ最不憐なるとなれを櫻木の爾に遇ひ身を償ふ黄金を得たるへ又喜ぶべき事にし
 て朔左衛門も落付てあの世の人となるるべしそれを嬉しいと云はんとすれば名蓋村にて又
 一つ大方ならぬ大厄損起りぬるこそうたてけれ朔左衛門が與之吉伴て出でたりしもかりそめ
 に近きわたりへ用ありて行きたりとのみ思ふほどに夕さがたまで歸り來ねば老人なり子供
 なり山中のとなれば谷へ落ち又獸の害にへ遇ひもせしやなと心元なさかざりもわらず十三郎
 へ心當りをもちこちと捜し見んと炬火なと取り出す折しも戸を開る人あれば朔左衛門歸へら
 れしかと問ひ懸るに應へぬも道理なり年も若く健なる武家の若黨めいたる男あへぎへ入ら

「此許に遠州の浪人佐々木現之助の母御の兼て身を寄せ居らるへ由さやうござらば早速に申
 入れ度火急の使ひ件の佐々木現之助殿母御に用事あるよしにて此邊りまで來られしにませ
 の山中にて急病おこり物當りにやさびしき苦痛生死の程心元なし身共へ音川の家中旋與曾右
 衛門の走り使ひ主人與曾右衛門へ主命に依り山新田開發の巡見多用にて後れし歸り路通り懸
 りて旅人の難澁見過し兼て介抱せさせ醫藥も與へられたれと更に効能の見へばこそ母に逢ふ
 て言ひ置度き一事ありとの事なれば我等と共に彼處まで急いでござれと聞き合へず渚へはつ
 と胸潰れ十三郎も驚天し「それへまア御親切そんなら叔母さまちつとも早く」云わしやるま
 でへござらぬへの跡を頼むと履物を穿く間も急かされて轉ぶが如くおあふなうござりますお
 頭巾お枝と十三郎渡すをつかんで渚へ駈出で使ひの男に手を引かれ物も覺へず出て行く跡に
 十三郎の氣もそゝる老人子供も捨て置かれぬと差し當る現之助の病氣も叔母に任せ置き二人
 をさがしに出られもせし矢張我身もなませの山へ駈行き様子を見るべしと門の戸引き立て近
 隣の佐平次に暫の問心をつけて玉へれと聲を掛つへ彼處へ行き見れば果して七八人つくバ
 ふもありたてるもありて何事か罵り居れば只今へ御親切にお知らせ下され添しと云ひつへ近
 づき能く見れば病人らしき者はなくて勝ひ行きし後家の渚を高手小手に縛めて主人とおぼし
 くさらびやかに出で立たる男の前に引き拵へて下人共打ち歐き責め居れば十三郎へ驚天し
 「何人なれば人を欺き此の山中へおびきいだし叔母を捉へて無体のちやうちやくしなによつ
 たら歴々の武家でも其儘差置まいと下人を突退け衝立てその由さかとん詰め寄れば妨げする
 などより棒にて十三郎をへだてさせ若黨とおぼしきすりさげ奴いろがましく腕を張り「めん
 らが不思議に思ふも道理吾君今では某といふ御大家のお客分元は落賊のそらはんざん佐々

木の奴等が仇とねらふ牡丹谷の洞九郎さまだの何と肝が潰れたか現之助なり落なり大玉のお目からへ出けらとも思召さぬが仇とねらふ奴原を活置て極りが悪いと彼所や此所を毎日々斯くいふ翻助まで人相書をいたいて日頃尋ねし二人の行衛先はアから見出た折ふし大王の御主人たる御大名の某殿極おしのびで大王さまに案内させて有馬へ御湯治「御逗留の折をさいわひ現之助奴が死かいつて居るといふてびつくりさせつりだして此の通り是からわれもひつちばり現之助が様家を白状さす此方の手筈斯く云ふ我を誰とか思ふ大王さまの股肱の臣後家奴には兼てちかづき大王さまが御醫者してござつた時からは御氣にいり薬箱をかついだゆゑ取も直さず下男箱助去年現之助に逢ふた時今の名をなのらずに引き退きしは何により残念今では無双太郎といふ豪傑さまだト踏張れば洞九郎へ打笑ひ「かしましい扣へて居ろいやなに十三とやら大仁坊といふ僧に兼て言ひ付置たれば現之助は彼方でもどうせ捜し出さうけれど一日でも早い勝手何處に居るか白状するか又証かしてわれが家へ伴て来て置てもしろそんならばアを人質にそれまで此方へ預らう勝手の方にするがよいト左も横揚なる顔色を見るに堪らず十三郎怒れる聲を振り立て「毛頭知らぬ現之助が行衛をよしや知つたりとも何んの明さう連ても來ぬ人の親の仇を害し其子に言譯けなければ手束ねては居られぬしぎ大悪人の洞九郎觀念せよと刀を抜き切りて懸るを引外し「者共此奴をふんじられまつたど押取巻き刀をおそれぬ棒すくめ斬り拂へんと働きつゝ心は矢竹に逸れども元來か細きうまれなち武術といへども未熟なれば敵には薄手も負せ遣らすあへなく刀も打落され數多の賊に組み伏せられもろくも繩に懸りつゝ齒がみをすれど其甲斐なし落は覺悟の聲振はし一時節到りて夫の仇おのれめに逢ひながら一刀刀向ふとも叶はず縛められし口惜然し我子が

ほんとうに十死一生なら此の上になんぼうかなしかるべきにおのれらにもまだ付ぬと聞ばまだくたのもしい兎ても知れぬあの子の行衛如何は責めても言はれねば責めるなら責めよかし殺すなら疾く殺せ死んで執付心の儘憂目を見せて仇を取らうとは云ふものゝ盜賊でも岩木でつくつた者でもあるまじものゝ憐れを知る者は盜賊かたりを仕ながらも義を立て人を憐みて弱きを助け強きを折き世の豪傑と慕はるゝそれに引き替へおのれめ何にも知らねばたのもしい友達と氣を免した夫を殺し物奪つて殿様をも偽り語るさぞその前後も非義非道十惡五逆かぎりもあらじほんにおのれへ鬼よ蛇よと聲を限りに泣き罵るやかましい死にはぐれめ死に度へ殺して遣うが此の世の業が滅せぬかまだく些と殺すに早い悴を釣り出す餌にして此の世の水をもう少し飲せて置ねば勝手が悪るい此の二才めも亦外にちと入用の有る奴だ一所に暗ひ所に居る惡義をみかく盜賊も草艸紙でも古い様なおりやとこまでも善人を苦しませるが大好物いや大分夜が更た箱助七手ばしこく口も足もひつちばり二人共是に、し入れ明日へ土産の荷の振で邸へ早く馬で遣れト腰を掛たる用意の空荷に二個のついで抗ふ二人猿轡にはだしをかけ押し入れ蓋を被せつ塵打拂ひ天うち眺め「南におさす北斗のけんささ丑の刻も過ぎたらん殿の目覺り正七ツ疾く旅宿へ歸らんとついでらをかつかせ手下を従へ有馬山へぞ急ぎける

「あゝうるさいつくなく」「いやつくなもよくできた」「めせきで面を覆しても紛れ無い幻奴いつの間に足を洗ひ一足飛の御武家様おいらの祝儀をいたいかねへなア斑六此奴が落着く所まで尾行てく尾行通し些と邪魔してやんべいか」「無九郎おいらもその心手の悪い此奴が性もう常式の配分ではおいらたちは不承知たさア」立派のお乞食武家さま何うなすつて下さ

りやす引つばさんだる二人の非人「秘したの重々悪く一言もなければおいらも些と仕掛
た狂言手に握つた様なれどいよ／＼足があらへるか急度は知れぬ仕事ゆゑ黙つてでたの悪か
つた無九は格別斑六は同商賈で交は善し兼て咄しておくのをバ欠違つて昨日から逢わぬゆゑ
に思はぬ手抜けはかでもない四五日前をつな物が手に入りてそれから急に案じを付て小山屋
のかきぐるで噂をしたこの長柄の長者の婿になる計よ何と肝が潰れたかうまくゆけばぬした
ちも此の商賈をさせて置かぬ些との間我慢して何處へ行たか知らぬ顔見遁して置て呉りや
「ても滅法なト膝ばつたり「あいたく／＼拍子にかゝつて肝よりかアねぶとを潰したト笑ふ無
九郎斑六が「手前は大方氣が狂れたな止ばよいのには無駄らしい「とは云ものゝ利口い奴運を
開けばおいらも仕合せ「落魄して居る故に運を開くやうなれどおいらも以前は長者ともいはれ
た人の實は種猪名寺の郷士笹原霜右衛門と云た人の兄息の霜四郎と名乗たはおいらが父親
よ新庄霜連謀叛の科で邸も家財も没収れそれから段々不仕合せついで遂に乞食も同然其子
はいよ／＼同前の二字にも離れて眞のお乞食生れた時は四郎松さまとて乳母日傘の御秘藏子
母叔ごのお松といふ人はおれが行くこの長者左門殿の先妻で梅ヶ枝とはおりやいとことどし
世が世なら欺さずともちん／＼かものいれくび曲つた事をするには及ばぬ「成程貴い糸圖
話しのうけちん兼帯前祝ひに乞食に相應こもかぶり二三十樽施行に逢はうか「圓い樽よりい
びつなりさだるで四五杯たつた今「そりやア如才もあるめへのさ「なるほど否とも云はれめ
へそんなちこれで二人の兄分まつ一杯宛ひつかけて今日無事に歸つてくんなど取出したる
三片の小差出せば受取りながら斑六へふしやう／＼「もう長者の積りになつてたいさう者に
配さざる「取ておけ／＼三両より三里をすゑあしをたつしやにしておいて折々彼所へいたぶ

りに「來ちやア堪らぬ沙汰する迄ハ 斑「其沙汰も後れると無九「かどにたちまち化の皮「無
九郎 斑六「首尾能くやりや「大丈夫よ両方左右へ別れけり〇源八渡しには近く淀川の堤に
沿ひ櫻の宮にて名斗も春をいゝるる社頭の賑ひ況んや花も半開き帆足ゆたけき屋形船小舟釣
舟遊山やら神信やらの神詣でさねハ鈴ふる柏手に返辞なまめく赤前垂れ出茶屋の軒の青籬か
すみを汲むや仙人にならで壽命をのべの蝶それも采種の光りなるべしされバ黄金の威を見せ
ぬ客ハ一倍能く廻る辨問末社が勝手車轄かくして歸りを惜む夕暮ちかき酒宴の席稍酔ひじれ
たる腹ふくれハ播州姫路あたりの商人とて名ハ秘せど浪花津逗留の徒然を慰めんとして此の程
ハしば／＼曾根崎新地なる寢覺屋の臺に登りいくたりも歌妓を集め客からぬ金遣ひに主人の
お秋もねんごろに待遇ひて小袖の紋に楓を付ればやがて紅葉のぬしと呼べり幾代も折ふし招
れけるを心ざまさへ人との此上なく立引ありて面白しと心に適ひいつの度もかならず招ばぬ
とハなし昨日ハ住吉天王寺けふハ又此の川舟に年若き歌妓舞妓例の幾代もお秋も伴て此處に
晝からつゞけ飲み顔もやしはの紅葉のぬしは席にもたへす打ち伏せばお鹿と云へるを一人盛
し意をさかせて傍への者共此所に彼處に打ち散りて遊び歩けるその中に幾代ハ圖らず見付け
たる屋根舟にハ現之助舟頭斗連もなし佐の宮一目堤を下り或ハ招き手を打つに船頭早く心得
てその儘此方へ漕ぎ寄すれど現之助ハヒスリと見た儘徳利押取り手酌のやけ飲み「を合ひを
せうかと飛び乗る幾代「いやもうお構ひ下さるな長々の浪人者女の世話で命ハ維げどお金持
の揚られた歌妓さんの横番とやらさるはどのひれつハないぞうかこちへ舟をだして
ハ未練で跡を追ふ様に積られるのは口惜いが此方は此方で櫻の宮花見は一人ハ風雅でよいそ
れから盛りは過ぎたれど長柄田甫の六片の梅一見と心ざしておあやまさんや歌妓さんは錢持

首のゑりに付きなめたよだれがうまからう。浮遊感なく召上りませ。此の酒の浮遊感。早う彼方へ行たり。うるさい女。押遣れば幾代は面を打ちまもり。「ほんとうに腹立てか。今日の出しなに急れて黙つて出たのも悪かつたぬし。おかしく思ふてなれど。何んば鼻負にせられても紅葉のぬしはお鹿と云ふ振袖さんが極つた相手。私は曇も霞もなし。氣を細すは餘り愚痴。今日に限つて此邊まで来るにも及ばぬではないか。顔を見ればわたしも亦しみ。座敷が嫌になる。それだから早う往や珍らしくもないそのしやつらいや。こてかすが餘計か。つて一倍てらつく。厚化粧彼奴に見せる爲ぢやと思へば腹を立つ。働さもないおれなれば。浮勝手次第。煙管でおれを打つたぞ。よ打つなら幾らも打ちをれと力任せ突飛す。「エ、口惜い此の様な邪見な男に惚たのか。わしや口惜いと喰り付折柄。お秋は堤を馳せ下り。「又よい交のこひさかひが家でも仕たらすはる。く」ところらへまで持出し餘り見度もござんせぬ酒が過るとやきもち。は些といぢがきたないやうな幾代さんは私証人。浮氣のうの字もさせませぬ紅葉のぬし。お鹿さんと疑かして置。バゆるくとなかよう彼方で中直り誰に遠慮は無いはいな。ト云へども此方は負惜み。「今も今云ふ通り客をせぐ働さ所か食せて貰ふて居る身の上。客は人の外に又情夫。こしらへても一言の不足は云れぬ。管なれどそんな理屈。淀川の水に流してまア鳥渡いや。く實に珍らしいとでもないのによしませう。「あれ見やしやんせあのじやうさ。」「を」とじやうよりかささけがたもとに出来る。トお秋に云はれ。「ほんにがんぎのいばらにか。つて「それ見い木でさへ留めたがる引手数。多の流行妓さま。ト笑へばお秋も打ち微笑み。「もう浮機嫌が直つたさうな。」「それとも何か氣に懸つて。「木に懸つたら又かきさけ。ト云ふ折堤の上よりして。お秋さん幾代さん旦那が尋ねてござるぞ。ト呼ばる聲に心ならず。「少し待て居やさんせ。「今に来るよ。と兩人

の女あわて堤を上るを見送り名残惜げに船頭に船を急がせ渡し場より向ふの堤に船着けさせなほ。く酒を飲み居るに酔出で思わす打伏しけるが稍久しくて眼を開き容を改め船頭に向ひ「われはのがれぬ用あれ。今より長柄に赴かん此の處より歸るべし。と酒代を呉れ船を歸し夕闇くらき堤傳ひ北をさしてぞたどりける。○濱名左門が立關の横手に當る中の口物申さんと音訪ふ聲應とこたへて出で迎ふる小使に對して幻の實しやかに陳べける様。「身共。遠州引間の浪人。佐々木源太左衛門。悴現之助。音信絶へし中なれど。今日態々御尋ね申す子細は長者の御目に懸れば明白に相分る取次ぎ頼む。ト云ひければ其由小使の云ひ入るれば。老役の忠太夫取次てやがて左門に告げられ。「遠州引間の現之助。それ。このちの娘の婿音信絶へて十年余り思ひ掛なや珍らしや。先小座敷へ通して置け。一成程聞た様な名と存じたは其筈。くかの湯治場。御約束のお婿様で有たものお婿しかろうと。忠太夫。騒出で。幻を奇麗なる小座敷に通して茶菓子待遇させ。又も忠太夫長者の前に來り。「旅やつれの状もなく身の廻りもしやんと。して天晴す。くれた人。品骨柄梅ヶ枝様も。嘸よろこび早うお面會なされませ。ト嬰むれば長者も落着て。「奇麗な生れと聞たれ。見ぬ程は案じたれ。とそれ。はい。よく。一安心。玉木も。おちやと夫婦連立ち出で。挨拶終り。「其後互ひに無沙汰。重り様子も知れぬ。娘の縁組も。はやたがひに年頃なり。如何せらる。承知したく己に使を立の際。此方へござつて先安堵。ト云ひつ。用意せさせたる酒に着に押しなら。べ他事なきさまに。幻は。早事成りぬと。悦びながら酒も過ぐさず。口敷云ば。すしと。やかにもてなして。差添と。懐中より取出したる小沙。沙。包。長者夫婦の前になら。べ。「此の短刀が。朝日丸契約違へぬ。たのみの証し。又親源太左衛門へ。預り申た。割り。符。其節の證文も。これに持參致したり。と云へば左門。能く見終り。刀。見分るよし。なけれ。と。及の。光り。眼を射て。實にも名にあふ

朝日丸作ども注文違はず此許へ受納する上へ千年万年動かぬ婿がね來訪の子細へ知らず親子の血縁幾久しくと喜ぶ長者の語に尾さ「私へ左門の後妻玉木己來へお世話になりませうさても身身の母とせの落さまへ有馬にて身身に別れ此の國の名塩といふ山里に家來筋の人とやら朔左衛門といふ紙職人に去る頃より身を寄せて其許を尋ねてござる様子として年月尋ねるゝ父親の仇須波洞仙にはまだく廻り遇へしやらぬかト不圖口バする問へず語り幼い夢にも知らぬ仇の名をもおしへられ是のうましと意にうなづき「姑ごに「某が尋ねる仇の姓名さへよく存存じてござりますな云トば左門もいぶかしく「母子の名塩に居らるゝの此頃備へた小僧の話して娘から聞たれを須波洞仙とか云ふ名さへ其方へ誰に聞きやつたかト云はれて玉本は行詰り大仁坊から聞きたりと云ふべくもあらざれば「是も矢張與之吉がよう覺へて居て咄したゆゑをそれなくていさうして「私が知らう様へなしそれよりいさづ婿がねのござつたを梅ヶ枝に早う知らせて喜ばさうと玉木何かこそバゆき尻をふりく奥へ入る幼心に思ふやう現之助の母と云ふもの遠からぬ所に居ると此處の家にて知るのみか仇の名さへ詳しき上は慢に物へ言ひ難し危き計の破れぬ中想ひを掛し梅ヶ枝と祝言急ぐが上分別一度枕を交した上へよし現之助が乗込で紛紜を云ひ募り黑白分明に分つたとして身を汚させたは血統の從第長者も世間の聞へを憚り何方か一方金でしきり内輪で事を済すへ必定うまいものへ宵に食へと俚言に云ふものをと心を定め長者に對ひ「姑ごのたまふ如く父を害せし須波洞仙討取らんと母諸共國を去て此の年月離業苦業も父への孝行言名付の縁をもてとく「富家に此の由告げ或は助勢を請へばやと存せしかども義強き母親言名付したばかりの娘の親御に厄介をかくるは卑劣の至りなり首尾よく本望遂し上長者を尋ね婚姻の義も果さんと云は

る「故近邊近くさよひながら今日が日まで立も寄らず有馬の湯山に湯治の折狼藉ものに騒がれて母人の行儀を失ひ其後諸國を尋ねれどかいくれに行儀知れず余りに母と仇の在所尋ね詫びて信心する天満宮に祈りしに或夜の夢に神体あらはれ此の年頃長者親子汝の訪へぬを恨みて待てり疾く「長者の婿にならば母の在所も仇の行儀も知らるべしとの御告を蒙りしより思ひ立ち逗留せし浪花津の旅宿屋より吉日良辰を参上致すと早や母の在所も相分り神徳のありがたきこと早已にあらはれたり神の告を疑ひ給へで御息女と内祝言取り結ばれたる其上は自名鹽に赴きて母と共に仇をば再び尋ねに出立せんト口に任せて欺れば「いかさま神の御引合せ親子とも天満神信するを人に越へたり祈れば必ず御利益あり御靈夢の告最と尊くたねく「なりし縁の糸結び合せて今宵へ直に盃ささて落付ん先湯にも入り髪をも結せ婿振つくとて休息あれとそれより奥の一間に入れいよく「厚く待遇しつゝ長者の娘の部屋にゆくに玉木ハ濟まぬ顔色にていやさんぐでござります婿殿の來られたを梅ヶ枝と大きに不承知どうでも尼になる了見男に肌は觸れぬと云ひ切りあの通り打伏して泣て居て我儘氣隨日影の豆も破け時滅多に外へも出さぬどももし「他に言ひ交した男でも有りはせぬかとお抽やお留を赫しつ嘘しつ問へども急度ないと云ふなななかの私なれば厳しくも叱られず合点のゆくやう篤りと貴方云ふて御覽じませ「是はしたりせうしたものでちや猪名寺でもあれほどに証據も取ての迷ひ晴したのを忘りやつたか齡よりあぢないおぼこそち男に想ひを懸るやうな春情ハ決してなく唯祝言は恐いもの耻かしい物と斗思ひ込んで居るで有う外に子細があるにしても言ひ約束をして置いて今更娘が嫌ふとて變改がなるものか年頃日頃の親孝行も此の一事で無になるぞやそれも又婿の顔が天王寺の舞樂の面の二の舞や龍玉の様なら嫌ふも道

理なれど鄙にまねな男つと云へばお袖が差出で、「ハイ」さうでございませ旅をなさる
 と仰しやれと深い笠でも一年中かぶり通してござるのかくつきりと色白で肌が凜と黒腫が
 ち愛敬あつてにやけぬ男「さても詳しいいつの間にお留さん、落着者お嬢さまの男ぢやも
 の早う見度ぢやあるまいかお次の間の歩障の上から最前こつそり見てお嬢さまのお嬉しいお
 顔を見ようと手折さうに申上ても返辭もなさらず「はんにさうか私も見度見ぬ商ひの出来ぬ
 とやらなア申し梅ヶ枝さまそつとあちらのお窓まで留がお供を致しませう「皆の親切両親
 の御意には背けども此の事ばかり何あつても御免しなされて下さりませお「嫌ならお嫌に
 せい先彼處まで往しやつて御覽じませと手を取るお袖を振袖かつぎてうちたさ「左程に好
 きな方なら其方の殿御にしたがよいと打腹立てば左門も怒りて「善くも悪しくも父母に従
 ふが女の道あまやかすればはうづもなし武士と契約した縁組しなによりては首にして渡さぬ
 ばならぬ場所用捨らせぬと詰寄すれば「殺してさへ給はらばそれこそ本望さア早うといひ
 やう通す娘の語に父もほどく持余し「親では角が立過るお袖お留ゆるくど彼が心の和々
 様に一骨折をつて呉や玉木は来やれ婿殿の馳走をせねばならぬぞと梅ヶ枝が部屋を出で婿の
 馳走に笑顔につくれと心は更におだやかならずお袖お留は梅ヶ枝に春の情を起させんと此頃
 見たりし芝居の咄しお嬢さまも上手ぢやとお譽めなされた大和山甚左衛門は今業平婿様のお
 もさしがあゝ誰やらに似て居ると思へは矢張大和山「よい殿振ならまだあるはいな天満の社
 内で玉事さんを助けた男は又格別よいのよいかとこやらに女好きの様な目元ちとけんんな
 と何気なくお袖の云も梅ヶ枝は色に出るまで心にこたへ其人をこそ想ひ染め慕ひ焦るゝ折も
 折はからず婿君おはしたれば一旦想ひをかけたなりとも思ひ棄るが道なれとさう自由にはなら

ぬが懸路去とて親に御苦勞を掛け参らするは不孝の至りこはわが死ぬべき時節なりと胸定ま
 れバ首を揚げ「今朝から心地の勝れぬ故まだ手水さへ用はねばお袖は髪を結うてたも湯の用
 意もさせてよと云に二人は顔見合せ口には確にのたまはねと心の内には得心の出来て俄のみ
 だしなびや大丈夫と喜びつゝお袖の髪あげ化粧の手傳ひお留へ此由左門に告れば手前達の
 全く骨柄でかした褒美の幾らも遣んど喜び勇みて座敷の飾布着の作法など人に言付け吾もと
 もく立走りて急ぎあるき再び娘の部屋に至り心のわざか例もより一倍奇麗に化粧も出来た
 それでこそ吾娘なれたと心にすす共親の語を立てるが孝行祝言をした上で何の様な
 無理もきくとお留に持せし廣蓋の綾の白無垢一と重ね帯も肌着も取添へて「初夜が鳴たら是
 に着替へ知らせに來るを待て居や仲人へ先假に忠太夫をさせる積りありと嬉しいト云顔を見上
 へ梅ヶ枝両手をつき「耻しいと恐いので最前の我儘氣儘篤りと考へて今では後悔いたします
 最早仰せのそむかぬ心お差圖次第になりませうさりながら此の通り身じまひまでもしたなれ
 どあやにく急に胸痛みめまひ強くのばせて居れば今宵一夜は盃を御延しなされて下さりま
 せ「まだ其難を言ひやるか「それでも氣あひの悪いのをどう辛抱して祝言がト云もあやなく
 泣き出せばさすがに父も強く得言す「明日もついで日柄は善し氣を鎮めたら持病のなほ
 るいは只た一夜の事いよく明日祝言をするならば何ともせうが其後に至りて故障を言は
 い其方を殺して己も死ぬ其方は死ぬを厭ふまいが親殺しの名は末世に残るよく分り決め
 て居やれ是非が無い如何様にも婿には虚言をついて置うそんなら明日は急度ぢやぞ「なんの
 否を申しませう明日迄にいなほりますよ「お袖随分氣を付けて徳菴老を呼び遣り藥をたてつ
 けなでさすり介抱頼むト心を残し出で行く跡にお留はすりより「婿様どの御祝言何もあす

みなされぬ御様子御嫌とばかり仰しやれど其方も子供やあるまいし何んぞ外に思召しが有つしやるまいものでなしと密に云へばお袖も氣が付「お留の實にさうじや私共はあなたの身方せんな事でも秘さずについ仰てもよさそなものそれなれり又其様に仕方の無いでござりませぬ「親切な兩人の言葉其許達になに隠さう譯が有ならとうに云兎角私ハ何時までも獨で居たい心の願ひされどもあれほど父上の仰るのを否と言へば不孝の罪の思しさに心よく婿様と祝言をするハいの今宵ハ實にさあひも思しく一旦誓ふた佛様へ謗訛事もゆるりとしたく延したもそれ故なればお醫者様を呼ぶにも及ばず最う「案じてくりやるまいト云に二人ハ強ても言はれず持薬など煎じて與へなにくれと物語りして肩腰を揉みなせするに今宵限り梅ヶ枝ハ思へハゆる「かたへに起きさて後佛間に赴きてねんごろに禮拜し初夜過る頃より睡みけり左門ハ梅ヶ枝持病にて痛く惱むと言做してお袖お留を座敷へ連行さ此の二人ハ娘の侍女今宵ハこれらを代と思ひ酌をさせ足をも打せ徒然慰め給へとて別に又珍らしき肴を調じ器物をゑらみ詫心に酒を強ひ左門ハ奥に退きつ櫻が下の山吹躑躅梅ヶ枝にこそ痛くも劣れ二人も尋常の花ならぬ色香に幻興を催ふし思はず酒をふかく過し三人の肩によろめさかり三更斗に闇に入りぬ「大變にお切なさうお櫻湯を上ませうと大きな白銀の湯呑にたぎる湯を汲てお袖ハ枕邊近くに置を幼ハ一口呑み其儘横に倒れ伏し前後生体無りけり梅ヶ枝更に目も合すつく「思へば罪ふかや實の母御の菩提の爲に尼とならんと立言してし言葉の末の遂げられず定る男の有る者がうかてや人を戀ひ染めて道に背けるわだ心有るべき事かと戒めてもそのおもかげハ去りがたく此の期に及びおや「のお心遣ひかけながら唯假初にはの見し人の思ひ切られぬ煩悩のさづなに狂ふハ人ながら犬畜生になり果てしか淺ましや猶むつて

とやらんの執念の身につきまとい斯る心の起るにや祝言したら何の様な無理をも聞くと仰ても彼人の事容されてよし尋ね出し吾願ひ叶ふにしてもそれはどのいたづら女になるもいや今更尼になるとても心の濁ハ清らすいろ「思ひ反しても死ぬより外の術もなしいざさらば人の目にかゝらぬ中に及に伏し未來の旅に急んと父の賜ひし婚禮の晴着の白無垢側に其儘あゝるのもしいはひとし圓くは行ぬ縁組の果は血しはに色直し死に装束にハ屈竟と手早く着替へ誦刀すらりと抜き持ち喉ふるゑに南無と唱へて當れども更に力の出でバこそ「われながら耻しや覺悟ハさめて居るけれど思ひ切つて突れぬさか兎てもこんな臆病でハ死に損ふて耻しや耻それよりいつそ庭の木で縊れて死ぬこそ一と思ひさうぢや「と雨戸を開き片手に巻帯飛石傳ひあの木この木と有明の月に枝振ゑらみ居る折しも時計は九ツ半柏子木打つて下男が夜廻り梅ヶ枝が姿を見るより二足三足跡じさりあれ幽霊がと叫ぶ聲に此方も驚きみのけだち「さういやるは痴助ぢやの何を見て恐たのぢやとしをり戸開ければひと縮み「あゝ惨免なれ南無阿彌陀佛に恨みを受る覺へはさら「ござりませぬ消へたり「阿彌陀佛と云も小聲に打伏せば一人の善い名代の痴助白無垢着た故見違へて恐がるのかト云顔を痴助の「さしのださ「なるはど「お嬢さまおぐしも乱れずおみわしもあるのを見れば亡者ぢやないしござりの帯はまッかなり胴切りになつた者の亡魂かと存じました延びたと聞いたが矢張今夜は祝言故その白無垢あつたら肝を潰しましたト胸をなづれば梅ヶ枝微笑み「なんのまだ「盃もせねども何うも寝られぬ故に逢ふか知らぬと来て見た斗と云ひ黒めても此者に又見付られ妨の入りしは死ぬにも死なれぬかひとの多い邸の内死なうとする故邪魔も入る同じくは家を出で繼れもし身をも殺ん此の痴助を救きて路次口より忍び出んと思ひ付たる出来思案「の

う痴助聞てたも私かこらにうろついで居るの今も云通り白無垢着て見て舞さじと
 二階の端へ出てお月さまに見て貰ふて居る中にまへさしのかんざしが軒へとんでとうした機
 かあの扉の外へばつたり落たゆへ取うと思ふて此所へ来て見れば戸口へ海老錠が下してある
 ゆへ誰なりと呼びてあの錠取寄うとおもつて歸て行く所來懸つたはそなたのふしやう人が知
 つてのうるさい故そつと錠を取て来て開てかんざし捜してたも褒美の澤山やる程にと云へば
 をこ助まうけにして「そりや片時も棄ておかれず人が拾へば最うそれぎりト云ひつゝ馳せ行
 き程もなく錠取り來りて錠を外し外の方へ立出でつゝ所々を見る間に錠に差したる錠取り懸
 し梅ヶ枝内より聲を掛け「ほんにわたした事がかんざし此の垣根のくろのおもとの間
 にあつたものを勘忍しやいかい伊世話さア」這入て錠下し下を廻りやと呼入れられ「あり
 さへすればなによりちやト戸を閉ぢ錠差し傍りを見廻しいや又錠が紛失したトさがすてはり
 の提灯の燭燭はづかに消へ残れば「いや情ない臨終きは薄暗くなつた所で白ひ御顔で白装束
 せう見てもぶさびく〜錠も亦垣根ぐるにもござりませうが聞て分らぬ外へ散る物でも無れ
 ば明日緩りと捜しませうお嬢さまぞんざいにしたとは云ふて下さりませう」なんの言はう早
 う行きやれ若い者が夜中若い女と一所に居て思はぬ浮名が立つていかへらす早う〜と
 追立て遣り其儘をつきはづし路次の戸やをら引開き恐さも忘れ騒いで人もや追んと思わ
 ず知らず四五丁斗田甫傳走れば己にわたしたゆく息もさるれば立休ひ月あかりに傍を眺め「あ
 の暗ふ茂つたのは此所の名木むつでの梅此頃も猪名寺で聞ば往時笹原の侍女が縊れて居た梅
 の木は其年から六片の花のさくも不思議珍らしいとて此の木のみばる其頃何とか云ふ人が持
 て往んで長柄の里の田甫に植へしが年を経て大きくなりて六片づゝ矢張花のさくとの事此の

猪名寺では誰も知ると御住持さまの物語りはじめて聞て恐氣立ち何の心も付ざりしがむつで
 の名におひ六辨の花みづゑにまでもさくのみか父上の甥うへこゝらに植られ元木にも劣らぬ
 大木と榮ゆるは私も首を此枝に縊れといはぬ斗の仕業あゝそれもこれも因縁つく死ぬなら矢
 張此の枝に懸らば執念さむつでの恨み残りて人を苦めし是に付ても此の儘に死なばいつぞや
 天満で逢ふた御方へ是れ程想ふたとも知らしやんすまいと思ふ時何よりも本意なければ不
 義なやつちや淫奔者とさげすまれるよりましならんむつでに靈のあるならば私とても同じ女
 子死んで魂ないとへ言はれぬ死んだら決句かのお方の影に付添ふ事もならうか斯して居る間
 に又人の來てへ死なれぬいざ早くト心を勵し件の梅の小蔭に馳寄り巻帯を枝にひらりと投掛
 つつつかねし木の根の捨石にこへ〜上りて帯の先手に取り後れ毛かさ上つゝ見苦しき死顔
 を見せまいために髪結はせ白粉も濃くつけたれど泣きあせつて居る中にいつの間にか髪も
 こはれ髪な涙で所剃げ顔直さうにも眉はけも鏡も持ねばそれ出れず私や肌かしいト鼻紙に
 て押し掛へとも湧き出る涙に化粧の損ねても生れ付ての顔よさは猶光る斗ぞ香はしき梅ヶ枝
 萬事を思ひ切り帯先結びて首にまといそなら私へ死にまする父上さま母上さま前さ立つ不
 孝の汚勘忍あゝ去り乍此の様な無理死にしたらどのやうに恨みつ嘆きつしたまふらん又死姿
 のうとましく若かの人の見給は愛想も戀も尽き果んとつゝくり立て泣き居たり〇幼ハ伏た
 る儘に寝返りもせぬ枕元忍び寄たる後妻の玉木ハ湯呑を持出し屈み差寄り大仁坊が預け置き
 たる鑿石の毒薬のみさしの白湯の中へ半を分て放ち入れ元の所に直し置き獨うなづき立去り
 つ暫くありて幻ハ大方酔の醒ければ思はずも不圖眼を開き口の乾きて堪へ難し人を呼びて
 汲するにも及ばず件の白湯の最と痛く冷て氷の如くなるを唯一口に飲干しつゝ「さてノ骨に

しむわたりつひに覺へぬ善い心地同じ事なら梅ヶ枝が側に寝て居て最う酔も醒たかへと撫で
 吳たらはんに命も保つまいそれも明日の暁と思へば今から最う氣が遠くなる様だと云ひつ
 夜着引破りイヤ絹裏に腫のあかり掛つてさらさら〜こりやならぬ新枕に旅の遣れぬどり
 や其割でと云ひつゝも大分虫がかぶりだしたいや〜胸が裂る様なこれの誰の事でもない
 云間もあらず廻り来る毒に劇しく幼の五臟六腑を裂る苦しみあな堪へ難やと叫ぶ聲のた
 打廻る物音のはるか此方へ聞ゆれば老の寢覺の耳に入る左門のこともし取るあへず馳行き見
 れば幻の血しほを吐く事夥多しく苦痛の顔色鬼畜に等しくあをち苦む有に愕き左門の介抱し
 ついで人を呼集へ醫師の元へ人を馳せ又貯への靈藥なと口に注げ効しもなく己に息さへ
 絶んとす出入り醫師の赤良井徳徳先馳せ来りて篤と見終りいふかしげに顔打守り人を退け左
 門にさしやき是は劇き毒藥を服したるに疑ひなし羊の血を服ましめて毒を解す法ありと雖最
 早手遅れ其甲斐なし容易ならぬ毒藥の御詮儀こそ肝要ならぬ猶申すべき事もあれと先づ家内
 に氣を注いで毒の相伴したまふなと密に告げばいよ〜驚き玉木並に忠太夫に斯と告て家内の
 者をそれとなく呼ひ集めこれにて家に有りど有らゆる男女の残らず揃へるかと云ひつゝ、自
 心づき梅ヶ枝は如何にせし未寝て居るやと怪めばはんにさうぢやと玉木の駈行き部屋を見れ
 ども影も無しくま〜捜せ居らざればこのそいかにと驚きながら是の思はぬ善い首尾と
 鏡入れよりさしやかなる紙包を手早く取出し梅ヶ枝が鼻紙臺の引出に納め置き娘の何處へ往
 きやつたやら見へぬ〜と呼ぶ程に人々も入来り尙又さがせどいかでか居らん此の時に
 へや幻の五体の總て紫の色に爛れ黒血に塗れ倒反かへりて息絶へぬ婿の救ふに由なけれ
 ば差指さ難き毒害の惡計本人の詮儀こそ肝要なれと有合ふ人を左門の近く呼ひ集め一層現之

助が異變の急死の毒害に極つたり初めて来る増に對し意趣あるものゝあるべきならぬと其子
 細無て叶わす殊に又私に所持の法度の毒石を蓄へたるの唯物ならず吾すでに推し得たれば即
 座に纏うち領主へ訴へ刑罰を蒙らせんとすさへあれと其罪を悔み計の子細白状せば其しぎに
 依り隱便の沙汰にも爲べきものなれば有体を申すべしと嘆して問へど何れの者も固より思ひ
 も掛ぬ事互ひに疑ひあふのみにて唯何事も知らずとのみ答ふる中に與之吉は恐す臆せず進み
 出で「秘して居てハ爺さまの様に縛られるが恐いから有様に申します最前に私が便所に行く
 とてお廊下の路を間違へ思ひも寄らずお客さまの寢てござる彼方の座敷の椽側へ行き當りて
 びつくりしなからのぞくと何か御しんぞさまが帯に挟んだ紙入から薬のような物を出し銀の
 茶碗へ半分ほどあけて其儘振足してついと帰りなされたがあの紙に包んだのが若毒樂と云
 物でござりましたかとつ〜云へば驚く左門其余の人々玉木はくわつとせきあげて與之吉
 の襟髪つかみ煙管振上げ滅多打ち「あのれ戸迷ひする程に寢とぼけた目で何を見付てだいそ
 れた此の玉木が婿殿を毒害したとは子供とて餘りの痴言誰に頼れこのごしんぞ罪に陥さん惡
 計云わせにや置ぬと無体の折檻與之吉は泣叫び「それでもそれに違ひなし且那樣ごしんぞ様
 に何ぞ詫して下さりませお留さんお袖さん痛いよ〜勘忍してあれよ〜と苦しむを見兼て
 止むる侍女共「此の小供をかばふからは手前達も同類ぢやのなア申し旦那様よもやと思へど
 梅ヶ枝は此の者共が取持で兼て情夫を捧らへ置き婿を嫌へと言ひじやうの立ぬに依りての出
 來思案毒藥を用ひたから別は仲間も無くてハ叶わぬ知らぬと云はせぬ袖と留此の子供諸共
 縛りあげ領主へ差出す迄でもなく先腹存分問ふのが近路梅ヶ枝も其男の方へ遣たに相違なし
 徳港を尻目にかけいよ〜猛れば敏からぬ左門は疑ふ心も起り「あの通り柔しい娘よし侍